兵庫県文化財調査報告　第314冊

宍粟市

川戸遺跡

－（主）宍粟香寺線県単独道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

２００７年３月

兵庫県教育委員会

宍粟市

川　戸　遺　跡

－（主）宍粟香寺線県単独道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

２００７年3月

兵　庫　県　教　育　委　員　会

例　　言

1．本書は兵庫県宍粟市山崎町川戸に所在する、川戸遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は（主）宍粟香寺線県単独道路改良事業に伴うもので、兵庫県竜野土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成12年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は兵庫県西播磨県民局長の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が、平成17年度と平成18年度に実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

5．出土品の分析は、土器の胎土分析を入札により、株式会社パレオ・ラボに依頼した。

6．執筆は、第４章を株式会社パレオ・ラボ（藤根　久・長友純子）が行い、
　　第５章第２節を大阪大学文学研究科大学院生酒井将史が行い、
　　それ以外は篠宮　正が行った。

7．編集は篠宮が行った。

8．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

9．発掘調査および報告書作成にあたり、
　宍粟市教育委員会・旧宍粟郡広域事務組合・旧宍粟郡山崎町教育委員会・
　垣内　章・片山昭悟・亀井義彦・酒井将史・高野陽子・田中元浩・
　田路正幸・友田知津子・長友朋子・村上紘揚・森岡秀人
　の各機関・各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

川　戸　遺　跡

（主）宍粟香寺線県単独道路改良事業に伴う発掘調査報告書

例　　言

目　　次

第１章　遺跡をとりまく環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　調査の契機と経過 …… 4

第１節　調査の契機 …… 4

第２節　川戸遺跡の既往の調査 …… 4

第３節　調査の経過および体制 …… 5

第３章　調査成果 …… 8

第１節　確認調査の成果 …… 8

第２節　本発掘調査の成果 …… 8

第３節　試掘調査の成果 …… 16

第４章　自然科学的調査の成果 …… 19

第１節　土器胎土の材料分析 …… 19

第５章　まとめ …… 36

第１節　弥生土器の分類 …… 36

第２節　川戸遺跡の後期弥生土器－統計的分析を中心として－ …… 40

第３節　総括 …… 50

別　表　1 …… 56～59

報告書抄録 …… 60

図　　版 …… 1～22

写真図版 …… 1～60

挿　図　目　次

第１図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1)(2)(3) …… 28～30
第２図　土器胎土の孔隙・砂粒・基質の割合 …… 30
第３図　土器胎土中の砂の粒径組成（1)(2)(3) …… 31～33
第４図　土器胎土中の微化石類および特徴的な粒子の顕微鏡写真 …… 35
第５図　弥生土器の分類（1)(2) …… 37・38
第６図　器種組成（1) …… 42
第７図　器種組成（2) …… 42
第８図　甕の口縁部分類 …… 45
第９図　甕の主要型式 …… 46
第10図　高坏の屈曲部分類 …… 47
第11図　高坏の主要型式 …… 48
第12図　川戸遺跡と土器の地域分類 …… 51
第13図　川戸遺跡の変遷 …… 53
第14図　川戸遺跡調査地点の現在（南東から） …… 55

表　目　次

第１表　胎土分析試料一覧および胎土分類 …… 19
第２表　薄片観察結果（1)(2)(3)(4)(5) …… 23～27
第３表　器種分類表 …… 41
第４表　甕の属性表 …… 45
第５表　高坏の属性表 …… 47

別　表　目　次

別表１　遺物一覧（1)(2)(3)(4) …… 57～60

図　版　目　次

図版１　１．兵庫県の位置　２．宍粟市の位置　３．川戸遺跡の位置
図版２　川戸遺跡の位置と周辺の主要遺跡一覧（1/35,000）
図版３　川戸遺跡周辺の微地形と調査位置（1/4,000）
図版４　第１面　遺構配置（1/100・1/200）　壁面土層
図版５　第２面　遺構配置（1/100・1/200）　壁面土層
図版６　各遺構（1/40）
図版７　第１面・竪穴住居ＳＨ05および包含層出土
図版８　溝ＳＤ04出土　壺
図版９　溝ＳＤ04出土　壺　他
図版10　溝ＳＤ04出土　甕
図版11　溝ＳＤ04出土　甕
図版12　溝ＳＤ04出土　甕
図版13　溝ＳＤ04出土　鉢
図版14　溝ＳＤ04出土　高坏
図版15　溝ＳＤ04出土　器台
図版16　溝ＳＤ04出土　器台
図版17　溝ＳＤ07出土　壺
図版18　溝ＳＤ07出土　甕
図版19　溝ＳＤ07出土　鉢
図版20　溝ＳＤ07出土　高坏・器台
図版21　試掘（1/50・1/100　1/1,500）
図版22　試掘

写真図版目次

写真図版１	遺跡	１ 川戸遺跡 遠景（南西から）
		２ 川戸遺跡 遠景（東から）
写真図版２	遺跡	３ 川戸遺跡 近景（南東から）
		４ 川戸遺跡 近景（北東から）
写真図版３	遺構	５ 第１面全景（南東から）
		６ 第２面全景（南東から）
写真図版４	遺物	溝ＳＤ04出土主要土器
		溝ＳＤ07出土主要土器
写真図版５	遺物	上：壺　中：甕　下：鉢
写真図版６	遺物	上：高坏　中：器台　下左：高坏２種の胎土　下右：同細部
写真図版７	分析	土器胎土の顕微鏡写真（1）
写真図版８	分析	土器胎土の顕微鏡写真（2）
写真図版９	分析	土器胎土の顕微鏡写真（3）
写真図版10	分析	土器胎土の顕微鏡写真（4）
写真図版11	分析	土器胎土の顕微鏡写真（5）
写真図版12	分析	川戸遺跡周辺の地質図
写真図版13	遺跡	７ 川戸遺跡 遠景（南から）
		８ 川戸遺跡 遠景（西から）
写真図版14	遺構	９ 第１面全景（南から）
		10 第１面全景（南から）
写真図版15	遺構	11 溝ＳＤ02（南西から）
		12 溝ＳＤ02断面（南西から）
		13 溝ＳＤ01断面（南西から）
写真図版16	遺構	14 ＳＸ06竈
		15 ＳＸ06竈断面
		16 ＳＸ06周辺土器出土状況
写真図版17	遺構	17 第２面全景（北東から）
		18 第２面全景（北東から）
写真図版18	遺構	19 第２面全景（南西から）
		20 第２面全景（南西から）
写真図版19	遺構	21 溝ＳＤ04断面（西から）
		22 溝ＳＤ04断面（南西から）
		23 溝ＳＤ04器台出土状況
写真図版20	遺構	24 土坑ＳＫ08・溝ＳＤ07全景（北から）
		25 土坑ＳＫ09・土坑ＳＫ08・溝ＳＤ07全景（西から）
		26 溝ＳＤ07断面（南から）
写真図版21	遺構	27 竪穴住居ＳＨ05全景（北西から）
		28 竪穴住居ＳＨ05断面（西から）
		29 竪穴住居ＳＨ05柱穴断面（北西から）
写真図版22	遺構	30 土坑ＳＫ08検出状況（南西から）
		31 土坑ＳＫ08断面（南西から）
		32 土坑ＳＫ08全景（北西から）
写真図版23	遺構	33 土坑ＳＫ09検出状況（南西から）
		34 土坑ＳＫ09断面（南西から）
		35 土坑ＳＫ09全景（北西から）
写真図版24	遺物	ＳＸ06遺物・第１面遺物
写真図版25	遺物	竪穴住居ＳＨ05土器・第２面包含層土器
写真図版26	遺物	溝ＳＤ04 壺
写真図版27	遺物	溝ＳＤ04 壺
写真図版28	遺物	溝ＳＤ04 壺・蓋
写真図版29	遺物	溝ＳＤ04 甕・蓋
写真図版30	遺物	溝ＳＤ04 甕
写真図版31	遺物	溝ＳＤ04 甕
写真図版32	遺物	溝ＳＤ04 甕・器台

写真図版33　遺物　溝ＳＤ04 甕
写真図版34　遺物　溝ＳＤ04 鉢
写真図版35　遺物　溝ＳＤ04 鉢・有孔鉢
写真図版36　遺物　溝ＳＤ04 高坏
写真図版37　遺物　溝ＳＤ04 器台
写真図版38　遺物　溝ＳＤ04 器台
写真図版39　遺物　溝ＳＤ04 器台
写真図版40　遺物　溝ＳＤ07 壺
写真図版41　遺物　溝ＳＤ07 壺
写真図版42　遺物　溝ＳＤ07 甕
写真図版43　遺物　溝ＳＤ07 甕
写真図版44　遺物　溝ＳＤ07 甕・鉢・高坏
写真図版45　遺物　溝ＳＤ07 鉢・有孔鉢
写真図版46　遺物　溝ＳＤ07 高坏
写真図版47　遺物　溝ＳＤ07 高坏・器台
写真図版48　遺物　壺・甕・鉢・高坏 外面調整
写真図版49　遺物　甕 外・内面調整
写真図版50　遺物　甕 外・内面調整
写真図版51　遺物　甕 外・内面調整
写真図版52　遺物　壺 外・内面調整　甕 内面調整
写真図版53　遺物　壺・甕・器台 口縁疑凹線文
写真図版54　遺物　甕・器台 疑凹線文、ヨコナデ
写真図版55　遺物　高坏 口縁部・脚部調整 坏部・脚部接合状況
写真図版56　遺物　器台・壺 文様、記号
写真図版57　遺物　鉢・壺 調整
写真図版58　遺物　壺・甕・鉢 底部 外面調整
写真図版59　遺構・遺物　36 確認第９区 溝
確認第９区 出土土器
写真図版60　遺物　確認第１区、第２区、第６区、第８区
確認第９区 出土土器

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境（図版1・2・3）

川戸遺跡は宍粟市の南端の宍粟市山崎町川戸に所在している。

宍粟市は兵庫県の中西部に位置しており、南はたつの市、南東は姫路市、東は神崎郡福崎町、北東は神崎郡神河町、北は養父市、北西は鳥取県、西は岡山県、南西は佐用郡佐用町と接している。市の中心部を揖保川が流れ、山崎町は中流に位置する。揖保川は兵庫県の最高峰氷ノ山の南東、宍粟市一宮町北部に源を発し、山谷の諸川を集め、山崎盆地で大きく本流をなし、播州平野を南流して姫路市網干区の播磨灘に注ぐ。山崎盆地をはじめ、上流では一宮、下流では新宮の盆地をひらき、その下流域に揖保の沖積平野をつくっている。川沿いは瀬戸内沿岸と日本海岸とを結ぶ要路となし、播磨と但馬、播磨と因幡に通じている。

この揖保川と交叉して、山崎断層帯がこの山崎盆地を横断する。この断層は東西に長く走り、東は市川流域の福崎町から、西は千種川流域を横切り、岡山県美作郡大原町から那岐山の北側に達し、延長60Km ある。この長い断層の谷間は西播の地を東は東播地域・畿内地域を、西は吉備地域・山陰地域を結ぶ交通路となっている。したがって、揖保川の川沿いは南北交通の基軸、山崎断層は東西交通の基軸となっており、宍粟市山崎町はその交点にあたる。

山崎町を東西に山崎断層に並行して近畿と九州を結ぶ中国縦貫自動車道が昭和 50 年に開通し、国道29 号との交点に山崎インターチェンジが設けられている。姫路から鳥取を結ぶ国道 29 号線が北上し、南に県道山崎・新宮線、東西に県道三木・山崎線、県道山崎・南光線が通る。山崎町は古代より但馬、因幡、美作、山陽へ通じる播磨内陸部の交通の要衝である。

川戸遺跡は揖保川が菅野川と合流した宍粟市山崎町御名の南側、揖保川左岸に位置している。東側は揖保川と林田川の間の山塊、北側は揖保川と林田川の間の山塊から派生する南西に張り出した尾根が伸びている。川戸遺跡の西側は揖保川が流れ、南側は揖保川右岸の山塊が張り出している。揖保川は東へ流れを変え、川戸を過ぎると両側の山塊に挟まれたたつの市新宮町香山との境の狭窄部を通り、再び南流している。川戸遺跡は東と北を山、西と南を川で囲まれ、緩やかに南に傾斜している。圃場整備前は条里地割の痕跡が残っていた。

図版 3 は圃場整備前の水田の標高を元に微地形を復原した図である。これを見ると現在の揖保川の堤防に沿った A-B 地点と E-F-G 地点に一段下がった微低地が存在し、揖保川の旧流路である。C-D 地点は一段高く微高地の様相を示すが、水田区画は乱れており、揖保川の旧流路中の中州であると考えられる。H-I-J-K 地点は一段高くなっており、ここから東側の集落が存在している山沿いの L-M-N-O-P 地点までは条里地割の痕跡が残っている。今回調査した地点はこの条里地割が存在している北西端の地形的に安定した一角であり、標高 78m 前後を測る。

第２節　歴史的環境（図版 2）

川戸遺跡は宍粟市南部の揖保川左岸に所在する。今回検出した遺構は弥生時代中期の溝、弥生時代後期の竪穴住居・流路、古墳時代中期の竪穴住居、中世の土坑・溝である。ここでは、川戸遺跡を中心に

揖保川中流域（宍粟市山崎町・たつの市新宮町北部）と林田川上流域（姫路市安富町）に所在する関係ある時代の遺跡を中心として時代ごとに概観する。

縄文時代は、宍粟市山崎町与位高尾遺跡・たつの市新宮町香山遺跡などで調査が行われている。与位高尾遺跡では中期末から後期初頭の竪穴住居が見つかっている。香山遺跡では後期から晩期の土器が多量に出土し、埋甕やピットを検出している。

弥生時代遺跡は、宍粟市山崎町鹿沢遺跡群・河東南遺跡・生谷西垣内遺跡・田井遺跡・川戸遺跡、たつの市新宮町新宮宮内遺跡、姫路市安富町谷山遺跡などで調査が行われている。弥生時代前期は新宮宮内遺跡で土器が出土しているのみで、弥生時代中期中頃以降から出現する遺跡がほとんどである。弥生時代中期は鹿沢遺跡群、田井遺跡、新宮宮内遺跡などで調査されている。鹿沢遺跡群は鹿沢松原町遺跡、鹿沢本多町遺跡、鹿沢六軒町遺跡などの鹿沢城下層の遺跡群である。竪穴住居、土坑、溝状などが調査されている。田井遺跡では、中期後半の綾杉文で飾る銅鐸形土製品が出土している。新宮宮内遺跡では中期中頃から後期前半にかけての竪穴住居や周溝墓などが調査されており拠点集落の様相を示している。

弥生時代後期は河東南遺跡、生谷西垣内遺跡、田井遺跡、上比地遺跡、川戸遺跡、新宮宮内遺跡、谷山遺跡などで竪穴住居が調査されている。谷山遺跡は高地性集落で、青銅製の垂飾と青銅の断片が出土している。後期の墓は調査が行われていないが、川戸遺跡の北側の尾根上に存在する川戸山古墳群や香山･北山墳丘墓にその可能性がある。

周辺での銅鐸出土には青木銅鐸と須賀沢銅鐸がある。山崎町青木で出土した青木銅鐸は、古段階（外縁付鈕２式）４区袈裟襷文銅鐸である。山崎町須賀沢山中出土の須賀沢銅鐸は、突線鈕３式の近畿Ⅱ式の袈裟襷文銅鐸で、江戸時代の寛政２年（1790）に出土し、『集古十種』や『弘仁暦運記考』の古記録に記載されている。

古墳時代は前期古墳ではたつの市新宮町吉島古墳があり、中期の古墳とされるのには宍粟市山崎町金谷山部古墳があり、前・中期古墳はきわめて少ない。後期の古墳は、宍粟市山崎町三津古墳群（５基）・加生古墳群（７基）・春安古墳群（５基）・金谷古墳群（４基）・宇原古墳群（14基）、たつの市新宮町香山古墳群（８基）・上笹古墳群（15基）などがあり、後半の横穴石室の群集墳がほとんどである。規模の大きい横穴式古墳は山崎盆地では知られておらず、下流域のたつの市新宮町やたつの市中心部とは様相が異なる。林田川流域では姫路市安富町塩野古墳・塩野六角墳が存在している。

古墳時代の集落遺跡は宍粟市山崎町川戸遺跡があるが、そのほかの遺跡は様相が明らかになっていない。

古代では唯一宍粟郡の千本屋（宍粟市山崎町）に古代寺院が建立されたが、集落や官衙の様相は明らかになっていない。

川戸遺跡周辺の宍粟市山崎町の条里地割は圃場整備や宅地化などの開発で失われた地区も多いが、川戸地区のほかに宇原地区、比地地区、中井地区、中地区に残っている。川戸地区は北から44°西に振り、宇原地区が北から６°西に振り、比地地区と中井地区が北から10°東に振り、中地区が北から２°東に振っている。地区により方位を違えており、地形の制約および開発時期、村の違いが考えられる。

『播磨国風土記』には宍粟郡は「宍禾郡」の文字が用いられており、難波長柄豊前天皇（孝徳天皇）の時代に「揖保郡を分ちて宍禾郡を作る」と記されており、宍禾郡は揖保郡から分かれたことがわかる。

宍禾郡には比地里、高屋里、柏野里、安師里、石作里、雲箇里、御方里の七里が記されており、川戸遺跡周辺は川音村の記載がある比地里に含まれていた。比地里の里長として山部比地の名が記されている。川音村の名称は川音村に天日槍命が宿り、川の音がはなはだ高いと言ったのでその名がついたとされている。平安時代の『和名類聚抄』には宍禾郡は八郷が記載され、川戸遺跡周辺は比地郷にあたる。

『延喜式』神名帳に記載のあるいわゆる式内社は宍粟郡に七座あり、川戸遺跡の近辺では雨祈神社があり千本屋廃寺に接して鎮座している。

中世には赤松則村の次男貞範が篠ノ丸城（宍粟市山崎町）、赤松則村の３男則祐が長水城（宍粟市山崎町）を、天文年間（1532～1555）には鹿沢（宍粟市山崎町）に尼子勢が砦を構えた。天正８年（1580）には神子田半左衛門、天正 12 年（1584）には黒田官兵衛、その後、龍野城主木下勝俊の所領となった。

江戸時代初期の元和元年（1615）に播磨国姫路城主池田輝政の４男池田輝澄は、宍粟藩３万 8000 石を分知され、鹿沢に城郭（鹿沢城）を築いた。寛永８年（1631）には佐用郡２万 5000 石を加封され、寛永 17 年（1640）にはお家騒動のため改易されている。この年に和泉国岸和田より松井（松平）康映が６万石で入部した。松井氏は慶安２年（1649）に石見国浜田へ転封し、その後、岡山藩池田家分家の池田恒元が３万石で入部したが、わずか３代で断絶した。延宝７年（1679）には大和国郡山から本多政貞が１万石で入部して明治維新まで続いた。

明治４年（1911）の廃藩置県により、山崎県となり、同年姫路県に統合された。その後、飾磨県と改称し、兵庫県となった。

明治22年の町村制施行により、川戸村は宇原村と下宇原村の3箇村が合併して、戸原村が成立した。昭和30年7月には川戸が所在する戸原村をはじめとする宍粟郡南部の6箇村が山崎町と合併し、山崎町になり、川戸は山崎町の大字になった。平成１7年（2005）には安富町を除く宍粟郡4町が合併し宍粟市となった。

参考文献

新宮町教育委員会『香山Ⅱ』新宮町文化財調査報告 14　1991 年
新宮町教育委員会『新宮宮内遺跡』新宮町文化財調査報告 30　2005 年
山崎町『山崎町史』　1977 年
山崎町教育委員会『播磨千本屋廃寺』　1982 年
山崎町教育委員会『御津群集墳』文化財シリーズ第３集　1987 年

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機（図版 3）

今回の川戸遺跡の発掘調査は、宍粟市（当時宍粟郡）山崎町川戸において兵庫県竜野土木事務所が計画した主要地方道山崎香寺線(平成 18 年 4 月 1 日に主要地方道宍粟香寺線と改称)県単独道路改良事業によるものである。この改良は車道 2 車線、片側歩道で、全線盛土である。

主要地方道宍粟香寺線は宍粟市（当時宍粟郡）山崎町御名と姫路市（当時神崎郡）香寺町広瀬とを結び、中国自動車道と山陽自動車道のほぼ中間を並行して走る幹線道路である。このうち西端に近い、宍粟市（当時宍粟郡）山崎町川戸地区内の道路の状況は、狭い集落内で大型車のすれ違いが困難であり、歩行者用歩道が設置されていないことから、近年の自動車社会に対応していない状況であった。

このような状況の中で、平成 9 年度から平成 11 年度にかけて、川戸地区において山崎町が耕地の区画整理を目的とした農村活性化住環境整備事業（川戸地区）を計画した。この計画と合わせて兵庫県竜野土木事務所では集落内の狭い県道を川戸集落と揖保川との間の水田地帯にバイパスを設置する計画を立てた。

事業は山崎町の農村活性化住環境整備事業（川戸地区）を先行して進めたため、主要地方道宍粟香寺線県単独道路改良事業用地は残地となった。道路工事着手は平成 14 年度からであるが、これに先立ち、用地内に建設残土を道路の盛土として搬入する計画があり、盛土を搬入するまでに調査を行う必要が生じた。このため平成 11 年度に 2 回に分けて確認調査を実施した。

周辺は川戸第 1～第 6 散布地や川戸条里の埋蔵文化財が存在しているため、山崎町教育委員会が農村活性化住環境整備事業（川戸地区）事業に先立ち平成 8 年度から平成 10 年度の 3 箇年にわたって確認調査を実施し、周辺の埋蔵文化財の概要を把握していた。

このため、道路用地内の確認調査を実施したうえで、山崎町教育委員会が調査を実施した周辺の確認調査の状況を考慮しつつ、埋蔵文化財の取り扱いを決めることとした。

第２節　川戸遺跡の既往の調査（図版 3）

川戸遺跡は昭和の分布調査において、条里遺構の遺存地として埋蔵文化財包蔵地分布地図に掲載されていた。

宍粟市（当時宍粟郡）山崎町では平成 9 年度以降に山崎町川戸地区において、農村活性化住環境整備事業（川戸地区）を計画した。これに伴い山崎町教育委員会では当該地に川戸第 1～第 6 散布地や川戸条里が存在しているため、事業に先立ち確認調査を実施し、保存措置を講ずることとなった。

確認調査は工事の進捗状況に合わせて平成 8 年度から平成 10 年度の 3 箇年にかけて 3 回の調査が行われた。

平成 8 年度

平成 8 年度は川戸地区の北西地域で 2m×2m の調査区を 25 箇所、合計 100 ㎡の調査を行った。調査の結果、ＧＩ-8・ＧＩ-10～ＧＩ-12・ＧＩ-15・ＧＩ-16・ＧＩ-19～ＧＩ-23 では遺物包含層を確認した。遺物の詳細はＧＩ-8・ＧＩ-10・ＧＩ-11・ＧＩ-15・ＧＩ-16・ＧＩ-19・ＧＩ-20 で弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土し、特にＧＩ-11 とＧＩ-16 の第 11 層でまとまって出土した。ＧＩ-12・ＧＩ-15・ＧＩ-21

は古墳時代後期の遺物が出土し、特にＧＩ-12 では 6 世紀の須恵器が多く出土している。図版 3 の A-B 地点と E-F 地点の一段下がった微低地に該当するＧＩ-1～ＧＩ-4・ＧＩ-13・ＧＩ-14・ＧＩ-24・ＧＩ-25 は耕土・床土直下で砂礫層となり、遺構・遺物包含層共に検出していない。

平成 9 年度

平成 9 年度は川戸地区南西部を中心に 2m×2m の調査区を 65 箇所と 1m×4m の調査区を 3 箇所、合計 68 箇所の 272 ㎡の調査を行った。

遺物包含層はＧⅡ-2・ＧⅡ-4・ＧⅡ-5・ＧⅡ-7・ＧⅡ-8・ＧⅡ-10・ＧⅡ-12～ＧⅡ-15・ＧⅡ-17・ＧⅡ-20・ＧⅡ-26・ＧⅡ-30・ＧⅡ-33～ＧⅡ-37・ＧⅡ-41・ＧⅡ-42・ＧⅡ-45～ＧⅡ-52・ＧⅡ-54・ＧⅡ-60～ＧⅡ-67 で存在した。

遺物の詳細は ＧⅡ-8・ＧⅡ-50 で弥生時代中期の遺物を検出し、特に ＧⅡ-8 からは土器がまとまって出土した。ＧⅡ-2・ＧⅡ-4・ＧⅡ-7・ＧⅡ-8・ＧⅡ-10・ＧⅡ-12・ＧⅡ-17・ＧⅡ-30・ＧⅡ-36・ＧⅡ-47・ＧⅡ-49・ＧⅡ-65 ・ＧⅡ-66 で弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物を検出し、特に ＧⅡ-2・ＧⅡ-4・ＧⅡ-8・ＧⅡ-17・ＧⅡ-65 ＧⅡ-66 からは土器がまとまって出土した。

ＧⅡ-33・ＧⅡ-35・ＧⅡ-41・ＧⅡ-51・ＧⅡ-52・ＧⅡ-61・ＧⅡ-62・ＧⅡ-64・ＧⅡ-67 からは古墳時代後期の遺物が出土した。ＧⅡ-8・ＧⅡ-26・ＧⅡ-33・ＧⅡ-34・ＧⅡ-42・ＧⅡ-47 で平安から中世の遺物を検出し、特に ＧⅡ-8・ＧⅡ-26 では土器がまとまって出土した。ＧⅡ-48 で近世の遺物が出土した。このほか ＧⅡ-1 と ＧⅡ-9 で詳細な時期が不明な弥生土器が出土した。

平成 10 年度

平成 10 年度は川戸地区の北東部を中心に 2m×2m の調査区を 86 箇所とトレンチ 4 箇所、合計 90 箇所の 435 ㎡の調査を行った。

ＧⅢ-9・ＴⅢ-76 で弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土した。

ＧⅢ-1・ＧⅢ-3・ＧⅢ-4・ＧⅢ-55・ＧⅢ-57・ＴⅢ-65・ＴⅢ-76・ＧⅢ-87・ＴⅢ-88 では古墳時代後期の遺物が出土し、特に ＴⅢ-76・ＴⅢ-88 では自然流路内から遺物が多量に出土している。ＴⅢ-76 では ＧⅢ-57 から延びる溝や土坑を検出した。ＧⅢ-4・ＧⅢ-87 では古墳時代後期の竪穴住居の可能性がある炭や焼土を含む面を検出した。

ＧⅢ-8・ＴⅢ-65・ＴⅢ-80・ＴⅢ-88 で平安時代から中世の遺物が出土し、ＴⅢ-65・ＴⅢ-80 では平安時代から中世にかけての土坑・ピットを検出した。

ＧⅢ-44・ＧⅢ-48・ＧⅢ-53～ＧⅢ-55・ＴⅢ-74・ＴⅢ-75 は東側の谷川からの氾濫による扇状地地形で高まっているが遺構は検出していない。ＧⅢ-30・ＧⅢ-44・ＧⅢ-45・ＧⅢ-47・ＧⅢ-49・ＧⅢ-57・ＧⅢ-77・ＴⅢ-85・ＴⅢ-86 は湿地の様相を呈している。

以上、宍粟郡山崎町教育委員会が実施した農村活性化住環境整備事業（川戸地区）にかかわる埋蔵文化財の確認調査において、弥生時代中期から近世までの遺物を検出し、特に弥生時代後期末から古墳時代初頭と古墳時代後期、平安時代から中世にかけての遺構と遺物を検出した。しかし、遺物包含層に達しない影響深度で工事を施工するため、本発掘調査は実施しなかった。ただし、水路などで、影響が生じる地点については、拡張してトレンチ調査（ＴⅢ-75～ＴⅢ-77・ＴⅢ-88）を実施した。

第３節　調査の経過および体制

主要地方道宍粟香寺線県単独道路改良事業による川戸遺跡の調査は、平成 11 年度と平成 12 年度に発

掘調査を実施し、出土品の整理は平成17年度と平成18年度に実施した。

１．発掘調査の経過

主要地方道宍粟香寺線県単独道路改良事業による川戸遺跡の発掘調査は、平成 11 年度に確認調査を実施し、この調査成果に基づき平成12年度に本発掘調査を実施した。

平成11年度

確認調査

確認調査地周辺は山崎町が実施している農村活性化住環境整備事業（川戸地区）の終了している現県道より西側については平成 11 年度秋以降の早期に調査することとし、県道より東側について農村活性化住環境整備事業（川戸地区）の進捗状況を見ながら調査時期を決めることとして平成 11 年度に 2 回に分けて実施した。

調査は、盛土および旧耕作土などの無遺物層は機械により掘削を行い、それ以下を人力により掘削を行った。調査区内の平面と断面を精査し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

なお、調査区は、調査終了後に埋め戻しを行った。

第１次調査　確認調査（調査番号 990275）

第１次確認調査は、平成11年9月10日に兵庫県竜野土木事務所から発掘調査の依頼を受け実施した。調査は現県道より西側の№1～№30 地点の 28 箇所（№9・№10 欠番）について行った。調査は、20m 間隔に設定している道路設計基準№付近に 2m×2m の調査区を設定し、行った。調査区の呼称は設計基準№をそのまま利用した。なお、№9 と№10 地点は宅地のため調査が出来なかったため、欠番である。期間は平成 11 年 12 月 6 日～12 月 10 日に実施し、調査面積は 112 ㎡である。

第２次調査　確認調査（調査番号 990323）

第２次確認調査は、平成 12 年 1 月 6 日に兵庫県竜野土木事務所からの発掘調査の依頼を受け実施した。調査は現県道より東側の№31～№45 地点の 15 箇所について行った。期間は平成 12 年 3 月 8 日・9 日に実施し、調査面積は 60 ㎡である。

平成12年度

本発掘調査（調査番号 200246）

平成 11 年度に兵庫県教育委員会が実施した川戸遺跡の確認調査の成果に基づき、本発掘調査が必要である旨の回答により、平成 12 年 4 月 3 日に兵庫県竜野土木事務所から発掘調査の依頼を受け、兵庫県教育委員会が本発掘調査を実施した。

調査は平成 12 年 9 月 26 日～平成 12 年 12 月 4 日に実施し、調査面積は 320 ㎡である。

調査は確認調査の成果に基づき、盛土および旧耕作土などの無遺物層は機械により掘削を行い、それ以下の遺物包含層の掘削や遺構検出、遺構掘削は人力により行った。記録は、遺構検出時および完掘時において、随時、写真撮影や遺物出土状況図・遺構図および断面図を作成した。また、完掘時に小型ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。調査終了後、調査区は深いため埋め戻しを行って安全を確保した。

試掘調査（調査番号 2000330）

本発掘調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の集落や旧河道を確認し、多量の土器が出土したことから、さらに南東方向に広がる可能性が高まった。このため、竜野土木事務所と協議を行い、文化財側の予算で発掘調査を行うこととなった。改めて、平成 12 年 11 月 30 日に兵庫県竜野土木事務所か

ら発掘調査の依頼を受け、試掘調査を実施した。

調査は平成 12 年 12 月 12 日～平成 12 年 12 月 15 日に実施し、調査面積は 114 ㎡である。

調査は、2m×5m を基本とする調査区を 11 箇所設定し、調査を進めた。北から南に向かって№1・・№11 と呼称した。調査区ごとに盛土および旧耕作土などの無遺物層は機械により掘削を行い、それ以下を人力により掘削を行った。調査区内の平面と断面を精査し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

調査の結果、全体に遺物包含層が存在した。№2 と№6 では溝もしくは旧河道の肩を、№5 では旧河道を、№9 では溝を検出した。このため、教育委員会では№9 の溝のみ調査が必要であると判断し、部分的に拡張し調査を実施した。なお、調査区は、調査終了後に埋め戻しを行った。

２．出土品整理の経過

出土品の整理は、発掘調査時の取り扱いの回答における協議に基づき実施した。兵庫県西播磨県民局長からの依頼により、平成 17 年度と平成 18 年度に実施することとなり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成 17 年度

平成 17 年度は、出土遺物の水洗・注記を行った後、接合・補強を行い、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、遺物実測を行い、土器の復原を行った後、金属器と合せて遺物の写真撮影を行った。また、金属器の保存処理を行った。

平成 18 年度

平成 18 年度は、昨年度に実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。合わせて、弥生土器の胎土分析を実施した。原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

３．調査の体制

発掘調査

平成 10 年度

確 認 調 査（調査番号 990275）　　調 査 担 当：　多賀茂治

確 認 調 査（調査番号 990323）　　調 査 担 当：　多賀茂治

平成 11 年度

本発掘調査（調査番号 2000246）　　調 査 担 当：　村上泰樹・篠宮　正

調査補助員：　小谷義男・池成夕子・松井利可子

試 掘 調 査（調査番号 2000330）　　調 査 担 当：　篠宮　正

出土品整理

平成 17 年度

担　　当：　篠宮　正

保存処理担当：　岡本一秀

嘱　託　員：　森本貴子・岡崎輝子・増田麻子・岸野奈津子・島田留里・長川加奈子・川村由紀・柏木明子・三島重美・眞子ふさ恵・島村順子・中田明美・木村淑子・小野潤子・奥野政子・又江立子・三好綾子・荒木由美子・藤池かづさ

平成 18 年度

担　　当：　篠宮　正

嘱　託　員：　島田留里

第３章　調査成果

第１節　確認調査の成果

１．概要（図版3）

確認調査は平成 11 年度に 2 回に分けて実施した。大きく土層の堆積状況など異なる 4 地区に分けて調査結果の概要を述べる。

№1G～№19G 地区の基本層序は耕作土・中世耕作土・弥生時代の遺物包含層・砂礫層の順である。各層の間には洪水砂が挟まれている。№3G～№7G の地点では砂・砂礫層より弥生時代末から古墳時代初頭の土器が出土し、旧河道の様相を示す。№7G からはコンテナ 1 箱の多量の土器が出土した。弥生時代の包含層を確認した地点では遺構は確認できなかったが、土器が多量に出土していることから周辺が居住域として利用されていたと想定した。

№20G～№30G 地区の基本層序は耕作土・中世水田土壌・古代以前の水田土壌・砂層・砂礫層の順である。弥生時代の遺物包含層は存在しないが、古代以前の水田土壌は複数面あり、弥生時代にさかのぼる可能性がある。ただし、畦畔や水路は検出していない。

№31G～№40G 地区の基本層序は耕作土・砂質土（1～3 層）・砂礫層の順である。№36G～№40G の地点は砂礫層の間に厚い洪水砂の堆積が存在する。耕作土直下や砂礫層上面では遺構は存在しなかった。また遺物も全く出土しなかった。

№41～№45 地区は東に行くに従い、砂礫層の深度が深くなり、その上にシルト・砂などの細粒の堆積物が存在する。№44G・№45G は堆積状況から、旧河道の中である可能性が高い。№45G は旧河道埋没後に水路として再掘削している。遺物は出土していない。

２．確認調査の成果

以上、確認調査の結果、西側部分にあたる№1G～№19G 地区では弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺物包含層が存在したが、遺構は検出できなかった。ただし、№7G からは多量の土器が出土し、居住域の縁辺であると考えた。このことから本発掘調査が必要であると判断した。

№20G～№30G 地区は古代以前の水田土壌が存在したが、水路や水田畦畔が検出できなかったことから調査は不可能であると判断した。№31G～№45G は遺構・遺物ともに検出できなかったことから調査は必要ないと判断した。

これらの結果から、埋蔵文化財調査事務所では№6G～№8G の地点を、本発掘調査が必要であると判断した。

第２節　本発掘調査の成果

１．概要

調査は確認調査の成果に基づき、盛土および旧耕作土などの無遺物層は機械により掘削を行い、それ以下の遺物包含層の掘削や遺構検出、遺構掘削は人力により行った。調査区は 40m×8m の範囲の面積 320 ㎡について行った。調査地北西部の旧農道の下には水路のヒューム管が埋設されており、この部分については調査ができなかった。

調査前の標高は 79m～77.7m であり、調査の結果、中世から古墳時代の第 1 面と弥生時代後期から古

墳時代初頭にかけての第２面の、合計２時期の遺構検出面を確認した。第１面の遺構検出面は標高 77.3m 前後、第２面の遺構検出面は標高 77.0m 前後である。

記録は、遺構検出時および完掘時において、随時、写真撮影や遺物出土状況図・遺構図および断面図を作成した。また、完掘時に小型ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

川戸遺跡は揖保川左岸の川戸山山麓の南側に広がる平坦地で、圃場整備以前は古代の条里地割りの痕跡が良好に残っていた。

なお、調査区は深いため、調査終了後に埋め戻しを行った。

２．遺構

(1)第１面（図版４・６）

第１面は床土直下で、中世の溝と古墳時代後期の溝を調査した。また第１面と第２面の間で SX06 を検出した。

SD01

調査区の南端に位置し、ほぼ調査区に並行する溝である。北から西に 43° 振る。幅は 1.4m～0.5m、検出面からの深さは 0.1m 前後で、北西から南東に僅かに傾斜している。

遺物の詳細な時期は不明であるが、中世の須恵器が出土した。

SD02

調査区のほぼ中央、溝 SD01 の北側に位置し、北から西に 51° 振る溝である。幅は 0.5m 前後、検出面からの深さは 0.1m 前後で、北西から南東に僅かに傾斜している。底面は円形の窪みが全体に存在しており、洪水砂で埋もれている。

遺物は古墳時代後期の須恵器が出土した。

SX06

SX06 は正確には第１面と第２面の間で検出した。第１面の土壌化により輪郭の検出は非常に難しかったが、焼土の検出と土器の出土によって、遺構の認識ができた。焼土は 1.0m×0.8m の範囲に広がり、中心に立石が存在していたため、竪穴住居の竈の可能性を考えた。焼土は粘土が焼けて炭が混じったものと、基盤層が火を受けて赤変したものとの２種類がある。焼土の状況から南西方向が壁面の可能性が高い。ただし、明瞭な壁面や床面、柱穴は検出できなかった。

遺物は古墳時代中期の土師器椀・甕・製塩土器が出土しており、周囲の掘削時には遊離した状態で古墳時代中期の須恵器坏が出土している。

(2)第２面（図版５・６）

第２面は礫層を基盤層として流路・溝・竪穴住居・土坑を検出した。調査区の東部半分が礫層を基盤とする微高地、西部半分が流路 SD04 である。微高地では、溝１条・竪穴住居１基・土坑２基を調査した。

SD04

流路 SD04 は北から南に流れている。東側の肩は微高地であるが西側の肩は調査区外に延びているため、幅は不明である。深さ最大 1.4m で、埋土は洪水砂で、溝 SD07 との分岐点より上流では最下層に焼土や炭を多量に含む層が存在した。

遺物は東側の微高地から廃棄された状態で土器が多量に出土した。時期は弥生時代後期前半から古墳時代初頭にかけての壺・甕・鉢・高坏・器台・土製品などが多量に出土した。

SD07

溝 SD07 は調査区のほぼ中央部で流路 SD04 から分岐して東方向に流れている。北から西に約 79°振る。幅 2.4m前後、深さ 0.6mを測り、断面形はＵ字形である。

埋土からは、弥生時代後期を中心とする壺・甕・鉢・高坏・器台・手づくね土器などが多量に出土した。

SH05

調査区の東端、流路 SD04 の東側で溝 SD07 の南側に位置する竪穴住居である。流路 SD04 からは 6m 離れている。北東側は調査区外に延びており、約 1／8 の調査を実施したことになる。

平面形は直径 7.5m 前後の円形である。壁の立ち上がりは 0.45m で、床面の標高は 76.1m である。床面積は復原推定 43 ㎡である。屋内施設は床面が礫層で検出しにくく、周壁溝は確認できなかった。主柱穴は１本のみ検出しているが、本数は復原できない。規模は直径 33cm、床面からの深さ 45cm である。埋土は壁際から床面にかけて黒色の砂礫層が堆積しており、上層は洪水砂が堆積していた。

遺物は弥生後期の土器壺・甕・鉢・器台が出土した。

SK08

調査区の北東端、流路 SD04 の東側で溝 SD07 の北側交点付近の肩に位置する土坑である。直径 1.2m の円形で、深さ最大 0.5mを測る。遺物は弥生時代後期の土器の小片が出土した。

SK09

調査区の北端、土坑 SK08 の北西側で流路 SD04 の肩に位置する土坑である。東西 1.2m、南北 1.7m の楕円形で、深さ 0.4m を測る。遺物は弥生時代後期の土器の小片が出土した。

３．遺物（図版 7～20　写真図版 24～58）

(1)第１面

SX06（1～3）

土師器椀・甕・製塩土器がある。土師器椀（1）は丸い底部で、外面をケズリで丁寧に調整している。内面はナデの後、暗文を施している。土師器甕（2）は外反する口縁部をヨコナデし、体部内面はケズリを行っている。製塩土器（3）はコップ形の口縁部の破片で、薄く作っている。

SD02（4）

土師器甕（4）は体部から外傾する口縁を付ける。体部内面は頸部直下まで横方向にケズリを行い、体部外面はハケ調整である。

包含層（5～9・M1）

遺構に伴わない遺物は須恵器坏Ｈ蓋・身、須恵器椀、鉄釘がある。

須恵器坏Ｈ蓋（5・7・8）は体部と天井部の境界に稜を持ち、口縁端部内面に段を作る。須恵器坏Ｈ身（6）は口縁端部に内傾する段を持つ。底部は丁寧な回転ケズリを施し、ヘラによるＶ字の記号が存在する。須恵器椀（9）は底部が糸切りである。

鉄釘（M1）は断面長方形で頭部は叩き伸ばしている。

(2)第２面

SH05（10～14）

弥生土器壺・甕・鉢・器台がある。壺は広口壺Ｂ（10）があり、体部上端に櫛描波状文が巡る。甕は甕Ｂ（11）があり、外面は口縁部から体部上半にかけてタタキで仕上げており、体部内面はケズリを行

っている。鉢は鉢Ｃ（12）があり、口縁部が短く外反する。器台は器台Ｂ（13）がある。完形品で口縁端部を上下に拡張し櫛描直線文が巡る。体部には３箇所の円形透かしを３段穿孔する。14は脚裾部で３条の凹線文を巡らす。

SD04（25～207）

SD04からは壺・甕・鉢・高坏・器台・土製品が出土している。

壺には広口壺・二重口縁壺・広口長頸壺・短頸壺・長頸壺・細頸壺・水差がある。

広口壺は広口壺Aa・Ab・B・C・Ea・Ebがある。広口壺Aa（31）は大きく外反する口頸部に、口縁端部を上下に拡張し、凹線文を施す。広口壺Ab1（30）は大きく外反する口頸部を持ち、口縁端部は面を作る。広口壺Ab2（37）は球形の体部に外反する口頸部を付ける。体部外面はタタキで仕上げる。広口壺B（26・36）は縦長の体部を持ち、直立し短く外傾する口頸部を付ける。26は体部をミガキで仕上げている。36は体部をタタキ後ナデで仕上げている。広口壺C（28）は直立する頸部に屈折して長く外傾する口縁部を付ける。広口壺Ea（35）は有段口縁で口縁部が外傾しながら大きく拡張し、擬凹線文を施す。口縁内面はミガキを行っている。広口壺Eb（33・34）は有段口縁で口縁端部は上方に短く拡張し、擬凹線文を施す。広口壺（25）は口縁端部と口縁内面に櫛描き波状文を施している。

広口長頸壺（27）は頸部が長く直立し、口縁部が外方に屈曲する。

壺体部（38）は大きく張った肩部を丁寧なミガキで仕上げている。壺底部（39～49）は49を除き平底で、体部下半をミガキで仕上げるもの（41～43・45・46・48）、タタキ後ハケ調整をするもの（39・44・47）、ハケ調整をするもの（40）がある。45の底部には木葉痕が残る。49はドーナツ底で、体部の調整は不明である。

二重口縁壺（61）は口縁部に外反する二次口縁を持つ。口頸部外面は横方向のミガキを施している。

短頸壺は短頸壺A・Bがある。短頸壺A（55・56）は、小形縦長の体部に屈曲せずに短い口頸部を付ける。頸部外面は縦方向のハケを行い、頸部内面は横方向のハケを行っている。56は体部外面をタタキ後ハケで仕上げ、内面は頸部直下までケズリを行っている。体部最大径部に黒斑が存在する。短頸壺B（50～54）は肩の張った体部に屈曲して広く短い口頸部を付ける。50～52は小形で、53・54は大形である。51は粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。52は口頸部内面に横方向のミガキを行う。54は体部外面タタキ後ミガキで仕上げ、内面は頸部直下までケズリを行っている。

長頸壺（57・58）は長く直立する口頸部を持つ壺で頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を行っている。口縁端部はヨコナデで仕上げている。

細頸壺は細頸壺A・Bがある。細頸壺A（63）は砂粒の少ない細かい胎土で作っている。扁平な体部に小さな平底を作る。頸部は欠く。内面は横方向のケズリを行っている。細頸壺B（62）は口縁部が拡張し、擬凹線文を施す。口縁端部と頸部以下は欠く。

水差（59）は把手の付く直口壺で、本来把手が付いていたが剥離している。外面はハケ調整、内面は爪の痕跡が目立つ。壺体部（60）は縦長の体部の外面にハケ後ミガキを行い、内面はケズリを行っている。外面に煤が付着している。

蓋（64～67）は摘み部上面が平らな64と摘み部上面が窪み突出する65～67がある。64は内弯気味に口縁部が伸びる。ハケで仕上げている。65・66はミガキで仕上げている。67はタタキ後ナデで仕上げている。

甕は甕Aa・Ab・B・C・D・Ea・Eb・F・G・I・Jがある。甕Aa（69・71・72・74・76）は球形の

体部にく字に外反する口縁部が付き、口縁端部は丸く納めている。体部外面はタタキを行い、体部内面はハケ調整を行っている。74 は体部下半に接地黒斑が、対する内面に熾溜黒斑が存在する。甕 Ab（70・73・75・80）はく字に外反する口縁部が付く。体部外面はタタキ後ハケ調整を行い、体部内面はハケ調整を行っている。球形の体部で口縁端部を丸く作るもの（70・73・75）と縦長の体部で口縁端部に面を作るもの（80）とがある。70・73・75 は粘土紐接合痕が目立つ。73 は肩部に覆接触黒斑が存在する。甕 B（82・86～89）は球形の体部にく字に外反する口縁部を付ける。体部外面はタタキ後ハケ調整、内面は頸部直下までケズリを行っている。87 の底部はタタキで小さな平底を作っており、内面下部に熾溜黒斑が存在する。88 は体部下半と口縁部外面に煤が付着している。甕 C（81・83～85）は外反口縁で、口縁端部を上方に摘み上げ擬凹線文を施している。体部外面はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整を行っている。84 は内面が焼成不良であり、外面下半に煤が付着している。甕底部（90～92）は平底で、体部外面はタタキを行い、体部内面はハケ調整を行っている。90・91 は縦長、92 は球形で底部を叩いている。90 は体部下半側面に、92 底部に接地黒斑が存在する。甕（77～79）は口縁部がく字に外反する。調整は不明である。

甕 D（106・111～114・124・125）は外反口縁で、口縁端部を上方に摘み上げ、体部内外面ともハケ調整を行っている。106 の肩部と 112 の体部最大径部には覆接触黒斑が残る。124・125 は大形品である。甕 Ea（121～123）は有段口縁で口縁端部は上方に外傾して拡張し擬凹線文を施す。体部外面はハケ調整、内面は頸部直下までケズリを行っている。121 は肩の一部にタタキ痕跡が残る。甕 Eb（107・115～120）は有段口縁で口縁端部は上方に外傾して拡張しナデで仕上げている。体部外面はハケ調整、内面は頸部直下までケズリを行っている。119・120 は肩の一部にタタキ痕跡が残る。116・119 は体部下半に、117 は口縁部外面に煤が付着している。甕 E 底部（126～128）は縦長の体部に小さい平底を作る。体部外面はハケ調整、内面はケズリを行っている。118 は外面下半に煤が付着している。126 は底部横に接地黒斑が、対する内面に熾溜黒斑が存在する。甕 F（108）は口縁部がく字に外反し、口縁端部に面を作り、凹線文を施す。体部外面はハケ調整、内面は頸部直下までケズリを行っている。甕 G（93～100・102～105）は口縁部がく字に外反し、口縁端部に面を作る。体部外面はハケ調整、内面は頸部直下までケズリを行っている。底部（104・105）はハケ調整で仕上げている。105 は底面に接地黒斑が存在する。甕 I（110）は外傾する複合口縁の甕である。外面は煤が付着している。胎土が在地とは異なる。甕 J（109）は短く直立する口縁端部を作る甕である。胎土が在地とは異なる。甕（101）は口縁部がく字に外反する。調整は不明である。

鉢は鉢 Ba・Bb・C・D・E・F・G・有孔鉢がある。鉢 Ba（131・134）は口縁部が外反する大形の鉢で、口縁部に面を作る。134 は口縁部に擬凹線文を施し、体部上半に逆 U 字形の把手が付いていたが、剥離しており、貼り付け場所の目印のヘラの痕跡が残る。他にも乾燥時にヒビ割れと剥離した部分を修正した粘土の焼成後剥離の破片が存在する。鉢 Bb（129・132・133）は口縁部が外反する鉢で、口縁端部は丸く作る。129 は小形、132・133 は大形である。132・133 の外面はタタキ後ハケで仕上げている。133 は外面に接地黒斑が存在している。鉢 C（130・135）は口縁部が短く外反し、端部は面を作る。外面は 130 がタタキで仕上げ、135 はハケで仕上げる。鉢 D（138～140）は口縁部が直線的に開く。体部はタタキで仕上げ、平底である。鉢 E（136・137）は有段口縁で口縁端部は上方に拡張し、擬凹線文を施す。底部は低い脚台が付く。136 はタタキ後ミガキを行い、137 は丁寧なミガキを行っている。鉢 F（146）は体部をタタキで仕上げており、低い脚台が付く。鉢 G（147～152）は尖底の小形品（147

～149）と扁平な丸底（150～152）とがある。147 は内面に熾溜黒斑が存在するが、外面に接地黒斑は存在しない。150 はタタキで仕上げている。鉢底部（141～145）はドーナツ底のもの（141・142）と木葉底痕が残るもの（143）と突出する張り出しの底部（144・145）とがある。有孔鉢（153～157）は小さな平底の底部に孔を穿つもの（154・155・157）と尖底に孔を穿つもの（153・156）とがある。157 は接地黒斑と覆接触黒斑が存在する。

高坏は高坏 Aa・Ab・Ad・B・Da・Db・Dc がある。高坏 Aa（158～161）は坏部の形態が有稜で口縁部が外反する。158 は口縁部の内外に、159～161 は口縁部外面に暗文を施す。高坏 Ab（162）は坏部の形態が有稜で口縁部が強く外反し、口縁端部内面に凹線文を巡らす。高坏 Ad（163）は坏部の形態が有稜で口縁端部を摘み上げる。口縁部の内外を横方向にミガキを行う。高坏 B（164）は坏部の形態が小振りの有稜で、屈曲部に凹線を巡らす。高坏 Da（167）は有段口縁で口縁端部は上方に直立して拡張し、擬凹線文を施す。高坏 Db（168）は有段口縁で口縁端部は上方に外傾して拡張し、擬凹線文を施す。坏部はミガキを行っている。脚部と坏部の接合は挿入付加法である。高坏脚部と坏部の接合部に下から直径 2mm の刺突痕跡が残る。脚部は緩やかに外反してハケ調整で仕上げる。透かし孔は存在しない。断面の状況を確認すると赤色系の泥土を塗布している。高坏 Dc（169）は有段口縁で口縁端部は上方に外傾して拡張し、ナデで仕上げている。坏部はミガキを行っている。脚部は緩やかに外反してハケ調整で仕上げる。透かし孔は存在しない。脚柱上部は中空ではないが粘土を詰めて成形しており、円板充填法の名残を留めている。高坏脚部（165）は小形の脚部である。高坏脚部（166）は脚柱から裾部が屈折しており、円形透かしを 3 箇所穿孔する。高坏（171・172）は小形の椀形高坏である。高坏脚裾部（170）は有段高坏の脚部で円形透かしを体部に 3 箇所、裾部に 6 箇所穿孔する。

器台は器台 A・B・Da・Db・Dc・D・E・F がある。器台 A（173・174・178～183）は大形品で体部から屈曲する口縁部が付く。口縁端部は拡張して凹線文を巡らすもの（173・174・179）、上下に拡張して凹線文を巡らし、浮文を貼り付けるもの（180・181）、上方に拡張して波状文を施すもの（182）、面を作るもの（178・183）がある。174 の体部内面は粘土紐の接合痕跡が著しく残る。180 はボタン状の円形浮文、181 は S 字渦巻の円形浮文である。器台 B（175～177）は口縁端部が垂下するもので、凹線文を巡らすもの（175・176）、と波状文を施すもの（176）とがある。176 は口縁内面に凹線文を施している。177 は口縁端部、口縁内面、脚裾部に櫛描波状文を施している。器台 184・185 は細身の体部であり、184 は 4 箇所の円形透かしを 1 列穿孔し、185 は 3 箇所の円形透かしを 2 列穿孔している。

器台裾部（186～189）は脚裾端部に面を作るもの（186～188）、端部を丸く作るもの（189）がある。器台 Da（190）は有段口縁で口縁端部は上方に直立して拡張し擬凹線文を施す。体部は外反している。器台 Db（191～193）は有段口縁で口縁端部は上方に外傾して拡張し擬凹線文を施す。192 の体部は屈曲しており、脚裾に 3 箇所の透かしを穿孔する。脚部は赤色系の胎土で、受け部は白色系の胎土で、製作工程が分かる土器である。脚裾部の赤色系の胎土部分のヒビ割れを白色系の胎土で補修している。器台 Dc（194・195）は有段口縁で口縁端部は上方に外傾して拡張しナデで仕上げる。195 の体部は屈曲しており、脚裾に 3 箇所の円形透かしを穿孔する。器台 D 脚部（196～199）は有段口縁の脚部で太めの体部から弯曲する裾部が付く。円形透かしを 196 は 4 箇所、197 は 3 箇所穿孔する。198 は裾部が赤色系の胎土で、受け部は白色系の胎土で、製作工程が分かる土器である。裾部に透かし孔は存在しない。器台 E（200）は体部が括れており、口縁部や裾部が外反する。口縁内面を肥厚させ僅かに稜を作る。脚裾部には凹線文を巡らす。外面はタタキ後ミガキを行っている。器台 F（201・202）は小型器台であ

る。器台（203・204）は全体像が不明であるが同一個体である。沈線とキザミを施文している。器台（205）は櫛描の直線文と組紐文を施文する破片である。器台（206・207）は擬凹線文と山形のスタンプ文を施文している。

土製品（68）は土製円板で、タタキ後ハケ調整の甕の破片を利用し、丸く打ち欠いている。甕として使用していた時の煤が外面に付着する。

SD07（208～290）

SD07からは壺・甕・鉢・高坏・器台・手づくね土器が出土している。

壺には広口壺・広口長頸壺・短頸壺がある。広口壺は広口壺Aa・Ab１がある。広口壺Aa（209・210・217・218）は口頸部が外反し、口縁端部を209・210は上方に、217・218は上下に拡張し凹線文を施す。体部外面を209は縦方向のハケ調整で、210はタタキ後ハケで仕上げている。広口壺Ab1（208・211・212・214・215）は口頸部が外反するもので、208は口縁端部に面を作る。211・212は口縁端部に強くナデを行い内面に段を、外面に面を作る。214・215は口縁端部を摘み上げている。214・215は球形の体部外面をミガキで仕上げている。広口壺（213）は頸部以上を欠くが、球形の体部に厚い平底を作る。体部外面はタタキ後ミガキを行っている。体部下半に接地黒斑が存在する。216は扁平な体部外面を丁寧なミガキで仕上げている。

広口長頸壺（219）は扁平な体部に直立する長い頸部を持ち、屈曲して外傾する口縁部が付く。体部外面はタタキ後ミガキ、体部内面および頸部はハケ調整である。口縁部はヨコナデし、内面にヘラによる縦線の記号文がある。体部下半に接地黒斑、最大径部に覆接触黒斑が存在し、体部下半は煤が付着している。

短頸壺は短頸壺B（220）がある。口頸部は短く直立し、体部外面はハケ調整である。

壺底部（221～224）は小形のもの（221）と大形のもの（222～224）があり、221は内面には絞りの痕跡が残る平底で、体部はハケで仕上げている。細頸壺の可能性が高い。222・223は内面ハケ調整を行い、外面はタタキで整形しており、223はタタキの上からミガキで仕上げている。広口壺Ab2の可能性が高い。224は外面をハケ調整している。

蓋（225）は摘み頂部が窪んでおり、体部は直線的に開き、ハケ調整である。

甕は甕Aa・Ab・B・C・Fがある。甕Aa（226～229）は口縁部がく字に外反し、体部内面はハケ調整を行っている。体部外面はタタキで仕上げている。いずれも粘土紐接合の痕跡が残っている。226・228は口縁外面に、229は体部下半に煤が付着している。甕Ab（230・231・233・234）は口縁部がく字に外反し、体部内面はハケ調整を行っている。体部外面はタタキ後ハケ調整を行っている。230は体部下半に、231は口縁外面と体部下半に、233は外面に煤が付着している。甕（232）は残りが悪いが甕Abの可能性が高い。甕B（235～237）は口縁部がく字に外反し、口縁端部は摘み上げている。体部外面はタタキ後ハケ調整、内面はケズリを行っている。235の底部は僅かに窪んでいるが丸く作っている。体部下半外面には接地黒斑が、内面には熾溜黒斑が残っている。体部下半と口縁部外面は煤が付着している。甕C（238）は外反口縁で、口縁端部を上方に摘み上げ体部外面はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整を行っている。体部下半と口縁部外面に煤が付着している。甕（239）は口縁端部を上方に拡張させ、体部外面はタタキ、内面はケズリを行っている。甕F（240）はく字に外反する口縁部の口縁端部に面を作り、凹線文を施す。体部外面はハケ調整、内面は頸部直下まで横方向のケズリを行っている。甕底部（241～248）は外面がタタキのもの（241）、外面がタタキ後ハケ調整を行い、内面がナデのもの

（242・243）、外面がタタキ後ハケ調整を行い、内面がケズリもの（244～247）、外面がタタキ後ケズリを行い、内面もケズリのもの（248）がある。241・243・247は平底である。244はタタキにより平底を作っている。242・245・246・248は上げ底である。245は外面に煤が付着している。

鉢は鉢A・Bb・D・E・F・有孔鉢がある。鉢A（249）は口縁部が外反する中形の鉢で口縁部外面にハケが残るが、体部は内外とも丁寧にミガキを行っている。鉢Bb（250～253）は口縁部が外反する鉢で、口縁部は単純である。250・251・253は大形で体部をハケで仕上げるもの（250・251）とタタキの後ハケで仕上げるもの（253）とがある。252は中形で体部をタタキで仕上げている。鉢D（254・255）は口縁部が直線的に開き、254は外面をタタキで仕上げている。255はナデを行い仕上げているが、成形時のヒビが残る。鉢E（256）は有段口縁で口縁端部は上方に拡張し、擬凹線文を施す。体部外面はハケで仕上げる。鉢F（263）は体部をタタキで仕上げており、低い脚台が付く。やや荒い作りである。鉢底部（257～262）は大形で平底のもの（257・258）と小形で突出する上げ底のもの（259～262）とがある。258は外面をタタキで仕上げており、259は内面を丁寧なミガキで仕上げている。260は内外ともミガキを行い、内面は黒色化している。261は外面をミガキで仕上げている。有孔鉢（264）は平底の中央に1孔穿孔する鉢で、体部は大きく開き、タタキで仕上げる。手づくね土器（265・266）は脚台を指オサエで作り出しており、265は短く立ち上る体部を持つ完形品で成形時のヒビが存在する。

高坏は高坏Ac・B・C・Da・Dbがある。高坏Ac（267・268）は坏部の形態が皿形を呈し、口縁部に稜を作り、口縁部が大きく外傾する。口縁部外面は縦方向にミガキを行う。高坏B（269～273）は坏部が小振りで、屈曲部と口縁端部に凹線を巡らす。口縁部の内外面は縦方向にミガキを行い、口縁端部は横方向にミガキを行う。脚部と坏部の接合は挿入付加法である。脚部は大きく開き、円形透かしを4箇所穿孔する。高坏C（274～276）は坏部が浅い椀形を呈するもので、274・275は口縁端部を丸く作り、276は口縁直下に凹線文を巡らす。274はタタキ後ミガキで仕上げており、275はハケ後ミガキで仕上げている。276は横・縦方向のミガキが丁寧である。脚部は275が中実でやや長く、274・276は短く屈曲している。脚部と坏部の接合は挿入付加法である。276は高坏脚部と坏部の接合部に下から直径2mmの刺突痕跡が残る。脚部は屈曲して開き、円形透かしを3箇所穿孔する。完存している276の脚端部は凹線文を巡らす。高坏Da（277）は坏部が浅く、口縁部は有段口縁である。口縁端部は上方に直立して拡張し、擬凹線文を施す。高坏Db（278）は坏部が深く、口縁部は有段口縁である。口縁端部は上方に外傾して拡張し、擬凹線文を施す。外面はタタキ後ハケで仕上げる。高坏脚部（279～287）は坏部から脚部のもの（279）、脚部のもの（280・284・285・287）、脚裾部のもの（281～283・286）がある。279は椀形の坏部に直線的に屈曲する脚部が付く。脚裾部はハケ調整である。円形透かしを3箇所穿孔する。280の脚部は中実でやや長く275に似ている。281は小振りの脚裾部で、ハケで仕上げている。円形透かしを4箇所穿孔する。282はミガキで仕上げており、円形の透かしを4箇所穿孔する。283は脚端部に凹線文を巡らす。284は緩やかに開く脚部で、端部に面を作る。285はミガキで仕上げており、円形透かしを5箇所穿孔する。286はミガキで仕上げており、円形透かしを3箇所穿孔する。287は脚部が屈曲して大きく開き、円形透かしを5箇所穿孔する。脚柱部内面には粘土紐接合の痕跡が残る。高坏脚裾部（288）は脚柱部から裾部は屈曲し、端部は屈曲し面を作り擬凹線文が巡る。

器台は器台Cがある。器台C（289）は大形で口縁端部が垂下し、擬凹線文を施す。器台体部（290）は器台Aの一部と考えられ、体部から口縁部が屈曲している。体部に円形透かしを5箇所穿孔する。

包含層（15～24）

遺構に伴わない遺物には弥生土器から土師器壺・甕・高坏がある。

15 は広口壺の口縁部で端部は垂下し面を作り、竹管文を施文する。生駒西麓の胎土である。16 は壺の体部上半で、細かい横方向のミガキを行っている。17 は壺底部で突出する平底である。18 は広口壺 Ea の口縁部で口縁端部に擬凹線文を施す。19 は甕 D の大形品の口縁部である。20 は高坏 D の脚部である。裾部は弯曲しており透かし孔は存在しない。21 は高坏の脚部で中実である。22 は高坏で細かいミガキで仕上げている。脚柱部は縦、後に横方向にミガキを行っている。23 は甕 I 頸部である。24 は内弯する鉢の口縁部である。

４．小結

調査面積 320 ㎡の調査の結果、中世・古墳時代後期・弥生時代後期の遺構と遺物を検出した。

第１面では床土直下で、中世の溝１条と古墳時代後期の溝１条を検出した。また第１面と第２面の間で古墳時代中期の竪穴住居の竈 SX06 を検出した。第２面では礫層を基盤層として弥生時代後期から古墳時代初頭の自然流路１本、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝１条・竪穴住居１棟・土坑２基を検出した。

弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構は、集落域となる微高地とその縁辺の流路を検出した。集落域は砂礫層が基盤となっており、竪穴住居・土坑・溝を検出した。自然流路からは集落域から廃棄されたと考えられる多量の土器が出土した。遺物は弥生時代後期前半から古墳時代初頭にかけてのものが出土している。竪穴住居は１棟を調査したのみであったが、遺物の時間幅や出土量から考えると、周囲に居住域は広がり、竪穴住居が存在している可能性が高い。

古墳時代中期から古墳時代後期にかけては竪穴住居の竈と溝を検出しており、古墳時代初頭以降に自然流路が埋没し、微高地になり居住域の条件が整っていたことが判明した。

中世の溝は、北から西に 43° 振っており、圃場整備前の地図と比較すると川戸条里の坪境溝と一致することが判明した。中世の遺物が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。また、川戸条里施工時期を特定できる遺物は出土していない。遺構の上下関係から古墳時代後期以降であることは確かである。

第３節　試掘調査の成果

１．概要（図版21）

兵庫県竜野土木事務所が事業を進めている（主）宍粟香寺線県単独道路改良事業に伴い、山崎町川戸に位置する川戸遺跡の確認調査を平成 11 年度に実施し、その結果に基づき平成 12 年 9 月から 12 月にかけて本発掘調査を実施した。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭の集落や河道を確認し、多量の土器が出土し、さらに南東方向に広がる可能性が高まった。

これにより、平成 12 年 11 月 30 日に兵庫県竜野土木事務所から発掘調査の依頼を受け、試掘調査を実施した。

調査は、2m×5m を基本とする調査区を 11 箇所設定し、調査をすすめた。西から東に向かって№1・・№11 と呼称した。調査区ごとに盛土および旧耕作土などの無遺物層は機械により掘削を行い、それ以下を人力により掘削を行った。調査区内の平面と断面を精査し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

なお、調査区は、調査終了後に埋め戻しを行った。

№1～№4 は、地表下、約 0.9m の標高 77.0m 前後の円礫を基盤とする面が存在し、その直上で多量の弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が出土し、№2 では流路の肩を検出した。

№5 は、地表下、約 1.9m の標高 75.5m を底とする旧河道を検出した。上層からは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が、下層からは弥生時代中期の土器が僅かに出土した。

№6～№9 は、地表下、約 0.6m の標高 76.4 m～76.6m の円礫を基盤とする面が存在し、その直上で弥生時代中期の土器が出土した。また№6 の西端では流路の肩を検出し、№9 では溝を検出したため、拡張して調査を行った。

№10・№11 は、地表下、約 1.1m の標高 75.8m 前後の円礫を基盤とする面が存在したが、遺構は検出できなかった。遺物は弥生土器が少量出土した。

２．遺構と遺物（図版21・22　写真図版59・60）

試掘調査において、主要な遺構を検出した地区と主要な遺物が出土した調査区について記述する。

№1

遺構

遺構は検出できなかったが包含層から弥生時代後期の甕が出土した。

遺物（302）

弥生土器甕（302）は小形の甕で、口縁部がく字に外反し口縁端部に面を作る。体部内面は頸部直下まで横方向にケズリを行う。

№2

遺構

№2 では地表下、0.4m の円礫を基盤とする面が存在し、北端で流路の肩を検出した。調査区外に延びているため、詳細は不明である。幅 0.9m 以上、深さ 0.9m 以上である。遺物は上層で須恵器椀を、流路からは弥生土器・土師器が出土した。

遺物（291～301）

遺物は広口壺・甕・鉢・須恵器稜椀がある。広口壺 Ab2（291）は球形の体部に外反する口頸部が付く。体部外面はタタキ後ハケで仕上げる。内面は頸部直下まで横方向のケズリを行っている。広口壷（292）は大形の受口口縁の壺である。甕（293）は球形の体部に短く外傾する口縁部が付く。内面はケズリを行っており、パッチ状のおこげが付着している。甕 F（294）は口縁部がく字に外反し、口縁端部は拡張して面を作る。体部外面はハケ調整、内面は頸部直下まで横方向のケズリを行っている。蓋（295）は摘み部から屈曲して体部を作る。鉢（296）は有段口縁で口縁端部が外傾しナデで仕上げている。鉢 Bb（297）は口縁部が外反する大形の鉢で、口縁部を丸く作る。内面はケズリを行っている。器台（298）は体部から屈曲して口縁部が付く。緩やかに開く体部の上端に推定 5 箇所の円形の透かし孔を穿孔する。内面は粘土紐の接合痕が残る。広口壺（299）は肩の張る体部に外反する短い口頸部が付く。口縁端部は面を作る。体部外面と口頸部内面はミガキを行う。体部内面は横方向にケズリを行う。鉢（300）は高台上に突出する上げ底の鉢である。

須恵器稜椀（301）は体部中央に稜を作り、口縁端部は外反する。

№6

遺構

№6 では地表下、1.3m の円礫を基盤とする面が存在し、西端では流路の肩を検出した。調査区外に延びているため、詳細は不明である。幅 1.2m 以上、深さ 1.1m 以上である。遺物は流路の上層からは弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が、下層からは弥生時代中期の土器が出土した。

遺物（303～308）

弥生土器壺（303）は広口壺の体部で上半に櫛描の直線文と波状文を施文し、最下端に列点文を巡らす。内面は最大径部分までケズリを行っている。無頸壺（304）は屈曲する口縁部の破片で凹線を巡らす。脚台（305）は裾が広がり、底から円板充填で蓋をする。外面は縦ミガキの後、細いヘラ描沈線文を 3 帯施し、間をヘラによる斜格子文と縦線文を交互に施す。焼成後あるいは焼成中の剥離が著しい。脚台（306）は外面を縦ミガキの後、細いヘラ描沈線文を 2 帯施し、裾部にヘラによる縦線文を施す。内面は横方向のケズリを行っている。甕底部（307・308）は外面に縦方向のミガキを行っている。

№8

遺構

遺構は検出できなかったが、包含層から弥生時代中期後半の甕が出土した。

遺物（309）

弥生土器甕（309）は小形の甕で、口縁部がく字に外反し口縁端部は上方に拡張し、1 条の凹線文を巡らす。

№9

遺構

№9 では地表下、1.0m の円礫を基盤とする面が存在し、調査区にほぼ直交する溝を検出した。溝は幅 0.8m、深さ 0.2m で、北から南に僅かに傾斜している。北から西に 6° 振り直線的に走る。埋土には多量の炭と弥生時代中期の土器が存在していた。土器は剥離しているものが多い。

遺物（310～312）

遺物は壺が出土した。壺は広口壺と大形受口壺がある。広口壺（310）は口縁端部が斜下し、6 条の凹線文を巡らし、剥離しているが複数本の棒状浮文を貼り付ける。口縁内面は凹線文を 2 条巡らす。大形受口壺（311・312）は同一個体の可能性が高い。311 は口縁部で外面の上端、下端に凹線文を巡らし、間に櫛描波状文を巡らす。312 は頸部から肩部までの破片で、頸部下端に指頭による凹圧突帯文を貼り付ける。焼成後あるいは焼成中の剥離が著しい。

３．小結

調査の結果、№5 の旧河道より西側では遺構が検出できなかったが、出土した遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の時期に限定できる。遺物の出土状況から調査を行った周辺に住居が存在していた可能性が考えられる。このことから本発掘調査で一部検出した弥生時代後期の居住域の範囲がこの周辺まで広がっていることが確認できた。

№5 から№9 の範囲は弥生時代中期の遺物が出土し、№6 と№9 では溝や流路などの遺構を検出した。住居などの直接生活にかかわる遺構の検出はできなかったが、多量に炭が入った溝の存在から、付近に居住していることが想定できた。このことは山崎町が行った農村活性化住環境整備事業（川戸地区）で実施した確認調査とも整合するものである。これにより川戸遺跡は弥生時代中期から形成が始まった事が新たに判明した。

第４章　自然科学的調査の成果

第１節　土器胎土の材料分析

藤根　久・長友純子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村、2001）。

一方、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが予想される。東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが、これら3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根、1998）、これら火山ガラスは、粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層と予想される。このように、胎土中の混和材は、砂層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

土器胎土については、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

川戸遺跡は、兵庫県宍粟市山崎町川戸地内に所在する遺跡であるが、調査では中世～古墳時代および弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構が検出された。ここでは、川戸遺跡から出土した弥生後期～古墳初頭の土器について、その胎土の材料を検討した。

第１表　分析資料一覧表および胎土分類（計数結果による）

A類：堆積岩類主体　B類：火山ガラス主体　C類：凝灰岩主体　D類：角閃石およびはんれい岩主体

cp：細礫　vc：極粗粒砂　c：粗粒砂　m：中粒砂　f：細粒砂　vf：極細粒砂　cs：粗粒シルト　ms：中粒シルト

No.	報告No.	実測No.	種別	器種	時期	遺構	A類								B類								C類								D類								粘土の特徴
							cp	vc	c	m	f	vf	cs	ms	cp	vc	c	m	f	vf	cs	ms	cp	vc	c	m	f	vf	cs	ms	cp	vc	c	m	f	vf	cs	ms	
01	087	088	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04					■		■																										
02	097	124	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04							■	■																									水成粘土
03	100	121	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04															■	■																	
04	110	286	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04																							■										水成粘土
05	117	140	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04							■	■																									
06	116	060	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04																							■										水成粘土
07	125	092	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04															■																		水成粘土
08	128	049	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04						■	■	■																									淡水成粘土
09	137	084	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD04						■																											
10	160	080	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD04																																	
11	162	104	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD04						■																											
12	164	113	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD04							■	■																									
13	170	073	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD04														■	■	■																	淡水成粘土
14	192	076	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD04																							■										
15	200	075	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD04						■	■																										
16	230	244	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD04						■	■																										
17	238	059	弥生土器	甕	弥生後期～古墳初頭	SD07						■	■																										
18	256	036	弥生土器	鉢	弥生後期～古墳初頭	SD07						■	■																										
19	268	031	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD07						■	■																										
20	273	243	弥生土器	高坏	弥生後期～古墳初頭	SD07							■																										
21	15	283	弥生土器	壺	弥生後期～古墳初頭	包含層																													■	■			断層粘土
22	38	278	弥生土器	壺	弥生後期～古墳初頭	SD04																						■	■										

２．試料と方法

試料は、川戸遺跡から出土した弥生土器22試料である（第1表）。なお、第1表は、計測結果に基づいた胎土分類（最頻粒度分布に基づく）と粘土の特徴も示した。

これら試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成し、偏光顕微鏡による粒子毎の岩石・鉱物組成を調べた。（1）試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。（2）さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。（3）その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。なお、試料№14は外側部分が赤味のある胎土、内側部分が白味の胎土を呈していたことから土器断面の薄片を作成した。

土器胎土中の岩石・鉱物組成は、松田ほか（1999）による粒子ポイント法に従った。計数および同定は、顕微鏡下300倍の倍率において100μ間隔でおこなった。なお、試料は、薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石）や計数外の岩石片の特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

［植物珪酸体］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

［胞子化石］

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多い。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同

心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などのSiO_2%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのSiO_2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2%が少ない深成岩、SiO_2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO_2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO_2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

［火山ガラス］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考えるが、凝灰岩中にも含まれる。

［安山岩］

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるものである。ここでは、斑晶質の岩石を安山岩とした。

［凝灰岩］

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

［石英多結晶］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。

［砂岩および粘土岩］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

３．結果

以下に、土器胎土について計数結果および計数以外の特徴について述べる。

No.1：粒度組成は、細礫から中粒シルトからなり、砂岩が最も多く含まれ、火山ガラスや花崗岩類または片岩を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体がやや多く含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

No.2：粒度組成は、極粗粒砂から中粒シルトからなり、砂岩や火山ガラスが比較的多く含まれ、花崗岩類や片岩を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。なお、不明種珪藻化石が含まれていたことから、粘土材料は水成粘土と考えられる。

No.3：粒度組成は、極粗粒砂から中粒シルトからなり、火山ガラスが最も多く含まれ、砂岩や花崗岩類または片岩を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

No.4：粒度組成は、極粗粒砂から中粒シルトからなり、凝灰岩や火山ガラスが多く含まれ、火山岩や花崗岩類または片岩などを伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。なお、骨針化石が含まれていたことから、粘土材料は水成粘土と考えられる。

No.5：粒度組成は、粗粒砂から中粒シルトからなり、砂岩またはチャートが含まれ、花崗岩類や片岩（計数外）を伴う。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかったが、砂粒表面に多量の陸域指標種群の*Pinnularia borealis*が付着していた（第4図）。

No.6：粒度組成は、極粗粒砂から中粒シルトからなり、砂岩や凝灰岩が比較的多く含まれ、花崗岩類や火山ガラスを伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少し含まれていた。なお、骨針化石が少量含まれていたことから、粘土材料は水成粘土と考えられる。

No.7：粒度組成は、極粗粒砂から中粒シルトからなり、火山ガラスや凝灰岩が比較的多く含まれ、花崗岩類や砂岩あるいは変質火山岩類（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が多く含まれていた。なお、骨針化石が少量含まれていたことから、粘土材料は水成粘土と考えられる。

No.8：粒度組成は、細礫から中粒シルトからなり、砂岩が比較的多く含まれ、花崗岩類や片岩または火山ガラス（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、不明種珪藻化石が含まれていたことから、粘土材料は水成粘土と考えられる。

No.9：粒度組成は、粗粒砂から中粒シルトからなり、砂岩が比較的多く含まれ、花崗岩類あるいははんれい岩を伴う。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

No.10：粒度組成は、粗粒砂から中粒シルトからなり、砂岩が比較的多く含まれ、火山ガラスを伴う。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

No.11：粒度組成は、極粗粒砂から中粒シルトからなり、砂岩または粘土岩が比較的多く含まれ、花崗岩類や火山ガラスあるいは火山岩を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、不明種珪藻化石が含まれていたことから、粘土材料は水成粘土と考えられる。

No.12：粒度組成は、中粒砂から中粒シルトからなり細粒質であり、砂岩が含まれ、火山ガラスや花崗岩類（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、不明種珪藻化石が含まれていたことから、粘土材料は水成粘土と考えられる。

No.13：粒度組成は、中粒砂から中粒シルトからなり細粒質であり、火山ガラスが多く含まれ、砂岩や花

第２表（1）薄片観察結果

資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計	備考
			鉱物片									岩石片											その他			
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	ジルコン	黒雲母	不透明鉱物	チャート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	火山ガラス	植物珪酸体		
01	砂	細礫											2												2	
		極粗粒砂											2												2	
		粗粒砂											1					1			1		1		4	
		中粒砂										1	1	1			3	3			1		4		14	
		細粒砂	8	1	1			1					5				8						5		29	
		極細粒砂	4	2	1			1					2				7						7		24	
		粗粒シルト	22	6	2			3					1				13						4	29	80	
		中粒シルト	32	4		1				4	4						1								46	
	合計		66	13	4	1		5		4	4	1	14	1			32	4			2		21	29	201	
	基質		237																						237	
	孔隙		13																						13	
02	砂	細礫																							0	不明種
		極粗粒砂	1	1																					2	珪藻化石
		粗粒砂	2																						2	
		中粒砂	2	1													1								4	
		細粒砂	7	3									1	1			2	2							16	
		極細粒砂	12	6			3						2				6				1		3		33	
		粗粒シルト	26	6	1						4	1	2				14						4	2	60	
		中粒シルト	34	15													19						6	9	83	
	合計		84	32	1						4	1	5	1			42	2			1		13	11	200	
	基質		552																						552	
	孔隙		27																						27	
03	砂	細礫																							0	
		極粗粒砂											1												1	
		粗粒砂						1					2												3	
		中粒砂		2	4			1		1			1	1							1		4		15	
		細粒砂	11	1	5	1	1	4									3	2				2	8		38	
		極細粒砂	14	5	2		1	2		3	1			3			4					1	13		49	
		粗粒シルト	7	1	1	6	2	3		4	9						6						11	13	63	
		中粒シルト	29	4																					33	
	合計		61	13	12	7		11		8	10		4	4			13	2			1	3	36	13	202	
	基質		507																						507	
	孔隙		6																						6	
04	砂	細礫																							0	骨針化石
		極粗粒砂														1									1	胞子化石
		粗粒砂	1	2										2		1		4				1			11	
		中粒砂	4	2	6			1						3		2	4		1		1	2			26	
		細粒砂	8	2	3	1		4		1	2		1	3			4						1		30	
		極細粒砂	18	3	4		1	6			1			4			6						1		44	
		粗粒シルト	21	1		4	1	5		2	13			4			2						10	9	72	
		中粒シルト	21	2						13															36	
	合計		73	12	13	5		16		16	16		1	16		4	16	4	1		1	3	12	9	220	
	基質		831																						831	
	孔隙		24																						24	
05	砂	細礫																							0	砂表面に
		極粗粒砂																							0	陸生珪藻化石
		粗粒砂										1						1							2	密集付着
		中粒砂											2				2								4	片岩含む
		細粒砂	10	4	1					2			4				11								32	
		極細粒砂	12	5	3							2	3				19								44	
		粗粒シルト	30	1	4	4		1	1	7	3	1	2				4								58	
		中粒シルト	44	1						15															60	
	合計		96	11	8	4		1	1	24	3	4	11				36	1							200	
	基質		653																						653	
	孔隙		8																						8	

第２表（2）薄片観察結果

資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																					合計	備考
			鉱物片									岩石片										その他			
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	ジルコン	黒雲母	不透明鉱物	チャート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	火山ガラス	植物珪酸体		
06	砂	細礫																							0	骨針化石少量含む
		極粗粒砂												1											1	
		粗粒砂	1											5				1							7	
		中粒砂	7	1									3	4	1		7	2							25	
		細粒砂	9	3	3					2			3	4			10						1		35	
		極細粒砂	35	13	1	2				3	1		1	3			11					1			71	
		粗粒シルト	17	1		3				9	4		1		1		5					1		2	44	
		中粒シルト	17							15															32	
	合計		86	18	4	5				29	5		8	17	2		33	3				2	1	2	215	
	基質		720																						720	
	孔隙		19																						19	
07	砂	細礫																							0	不明種 珪藻化石 変質火山岩含む
		極粗粒砂											1	2											3	
		粗粒砂	1										1	1				2							5	
		中粒砂												3								1	6		10	
		細粒砂	2	1									1	1			1	1				2	19	1	29	
		極細粒砂	6	5	1								1		2		6		1			1	21	1	45	
		粗粒シルト	10	1	2	4	1	4	1	4	3		1				4						18	31	84	
		中粒シルト	26																						26	
	合計		45	7	3	4		4	1	4	3		5	7	2		11	3	1			4	64	33	202	
	基質		809																						809	
	孔隙		19																						19	
08	砂	細礫																1							1	淡水種 珪藻化石 火山ガラス少量含む
		極粗粒砂											1								1				2	
		粗粒砂											2					3				1			6	
		中粒砂	1							1			3				5	2			1	2			15	
		細粒砂	13	1							1		4				5					3			27	
		極細粒砂	24	8	4								5				10					3			54	
		粗粒シルト	19	4	1					16	1		1				5					2		3	52	
		中粒シルト	29	3		3				12	1						1							1	50	
	合計		86	16	5	3				29	3		16				26	6			2	11		4	207	
	基質		591																						591	
	孔隙		72																						72	
09	砂	細礫																							0	花崗岩類含む
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂											1												1	
		中粒砂		1	1								3				2		1						8	
		細粒砂	8	7	1	1				1			8				7					3			36	
		極細粒砂	14	21	1					9	1		8				2					6			62	
		粗粒シルト	13	25	1	3				17	4						5								68	
		中粒シルト	12	11		2				6															31	
	合計		47	65	4	6				33	5		20				16		1			9			206	
	基質		472																						472	
	孔隙		8																						8	
10	砂	細礫																							0	
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂											6												6	
		中粒砂	1										3				1								5	
		細粒砂	1	1									5				2					1	1		11	
		極細粒砂	10	4	1	1		1		1			3				19					2	1	1	44	
		粗粒シルト	40	18	1	1		1		10	5						13					3		5	97	
		中粒シルト	27	8						4	4						1							2	46	
	合計		79	31	2	2	0	2	0	15	9	0	17	0	0	0	36	0	0	0	0	6	2	8	209	
	基質		602																						602	
	孔隙		19																						19	

第２表（3）薄片観察結果

第	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計	備考
			鉱物片									岩石片											その他			
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	ジルコン	黒雲母	不透明鉱物	チャート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	火山ガラス	植物珪酸体		
11	砂	細礫																							0	
		極粗粒砂														1		1							2	
		粗粒砂											1												1	
		中粒砂											1				1	1				1			4	
		細粒砂	3	2				1					2				9					4	1		22	
		極細粒砂	19	9	1		1	1		3			2				13	1				5	1		56	
		粗粒シルト	26	24		1	2			11	3		1				6					4	1	4	83	
		中粒シルト	14	8		1				3	2						1							5	34	
	合計		62	43	1	2	3	2		17	5		7			1	30	3				14	3	9	202	
	基質		611																						611	
	孔隙		7																						7	
12	砂	細礫																							0	花崗岩類含む
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂																							0	
		中粒砂	2					1															2		5	
		細粒砂	3	1				1					2				4						3		14	
		極細粒砂	15	8	2	1								2			16					1			45	
		粗粒シルト	28	17		5	1			5	2						6						1	2	67	
		中粒シルト	46	10		4			1	3	4						1						1	1	71	
	合計		94	36	2	10		2	1	8	6		2	2			27					1	7	3	202	
	基質		399																						399	
	孔隙		14																						14	
13	砂	細礫																							0	淡水種珪藻化石多い
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂																							0	花崗岩類含む
		中粒砂	4										3				1						7		15	
		細粒砂	3	1				2					3	1			2						14		26	
		極細粒砂	6	3		1		2					4				7						21	10	54	
		粗粒シルト	9	3	1	1		1		1							4						15	23	58	
		中粒シルト	11	2		3				1	4												15	13	49	
	合計		33	9	1	5		5		2	4		10	1			14						72	46	202	
	基質		460																						460	
	孔隙		15																						15	
14	砂	細礫																							0	砂表面に陸生珪藻化石密集付着
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂																							0	
		中粒砂	2		1								1												4	花崗岩類および変質火山岩含む
		細粒砂	4	2									1	5			8								20	
		極細粒砂	19	12		1		1					1	2			20					3			59	
		粗粒シルト	39	31		4	1			2	2			1			12							3	95	
		中粒シルト	11	10						1	1														23	
	合計		75	55	1	5		1		3	3		3	8			40					3		3	201	
	基質		267																						267	
	孔隙		12																						12	
15	砂	細礫																							0	花崗岩類含む
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂																							0	
		中粒砂	4							1			6				1					1			13	
		細粒砂	5	5									10				5					1			26	
		極細粒砂	11	8	3					5			18				11					2			58	
		粗粒シルト	17	25	1				2	16	1	2	3				5								72	
		中粒シルト	16	8		1				4	3													1	33	
	合計		53	46	4	1	0	0	2	26	4	2	37	0	0	0	22	0	0	0	0	4	0	1	202	
	基質		522																						522	
	孔隙		25																						25	

第２表（4）薄片観察結果

資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計	備考
			鉱物片									岩石片											その他			
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	ジルコン	黒雲母	不透明鉱物	チャート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	火山ガラス	植物珪酸体		
16	砂	細礫											1												1	花崗岩類含む
		極粗粒砂											3												3	
		粗粒砂											5	1											6	
		中粒砂			1								5									2	1		9	
		細粒砂	3	5		2		1				1	15	2			4					4			37	
		極細粒砂	10	2		1		1		10	1		10				11					6	1		53	
		粗粒シルト	22	14		6		1		19			1	1			6					6		1	77	
		中粒シルト	9	7		4				6	2													2	30	
	合計		44	28	1	13		3		35	3	1	40	4			21					18	2	3	216	
	基質		427																						427	
	孔隙		27																						27	
17	砂	細礫											1												1	
		極粗粒砂																1							1	
		粗粒砂											1												1	
		中粒砂	1										5				3				1				10	
		細粒砂	3	2									6				5					1			17	
		極細粒砂	22	10	2	1				6			1	1			19					1			63	
		粗粒シルト	42	14		3			1	16	2		1				8						1	1	89	
		中粒シルト	10	12						1	3												1		27	
	合計		78	38	2	4			1	23	5		15	1			35	1			1	2	2	1	209	
	基質		723																						723	
	孔隙		30																						30	
18	砂	細礫																							0	凝灰質粘土
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂																					3		3	
		中粒砂			1			1					2									2	7		13	
		細粒砂	3	2						1							1					4	11		22	
		極細粒砂	5	10		1				1			3				7					2	34		63	
		粗粒シルト	9	11	1	4	1	7	1	7	1						8						24	14	88	
		中粒シルト	8	3	1	2		1			3												1	5	24	
	合計		25	26	3	7		9	1	9	4		5				16					8	80	19	213	
	基質		519																						519	
	孔隙		15																						15	
19	砂	細礫											1												1	花崗岩類含む
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂											4												4	
		中粒砂						1					8	2											11	
		細粒砂	3										12	1			2					1			19	
		極細粒砂	11			5	1			2	3		15	3			9					11	5		65	
		粗粒シルト	23	9		6		1		18	2		5				9					5	1	1	80	
		中粒シルト	12	10	1					3														2	28	
	合計		49	19	1	11		2		23	5		45	6			20					17	6	3	208	
	基質		469																						469	
	孔隙		50																						50	
20	砂	細礫											1												1	花崗岩類および変質火山岩含む
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂											3	1											4	
		中粒砂											1												1	
		細粒砂	1								1		2				2								6	
		極細粒砂	4	3						3	1		4				12					3			30	
		粗粒シルト	23	36	1	7	1	1		24	5		3				15					2	1		119	
		中粒シルト	19	19	1	1				3	8														51	
	合計		47	58	2	8	1	1	0	30	15	0	14	1	0	0	29	0	0	0	0	5	1	0	212	
	基質		1106																						1106	
	孔隙		10																						10	

第２表（5）薄片観察結果

資料	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計	備考
			鉱物片									岩石片											その他			
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	ジルコン	黒雲母	不透明鉱物	チャート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	はんれい岩	ホルンフェルス	結晶片岩	粘土岩	火山ガラス	植物珪酸体		
21	砂	細礫																							0	破片状を呈す粒子多い
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂	2					1									1		1						5	
		中粒砂	3		6			2									2		1						14	
		細粒砂	9		17			4											2						32	
		極細粒砂	17	3	19	1		15		1							1								57	
		粗粒シルト	18	5	5			29		2							1							2	62	
		中粒シルト	5	4				17		1														3	30	
	合計		54	12	47	1		68		4							5		4					5	200	
	基質		202																						202	
	孔隙		6																						6	
22	砂	細礫												1											1	
		極粗粒砂																							0	
		粗粒砂											1												1	
		中粒砂	1	3	2	1							2	1				1							11	
		細粒砂	12	17						1	2		1	2						1		1			37	
		極細粒砂	32	10	3		1	4		6	1			3			6								66	
		粗粒シルト	17	14	3	2				9				4			6							1	56	
		中粒シルト	16	5		5				3															29	
	合計		78	49	8	8		4		19	3		4	11			12	1		1		1		1	201	
	基質		601																						601	
	孔隙		13																						13	

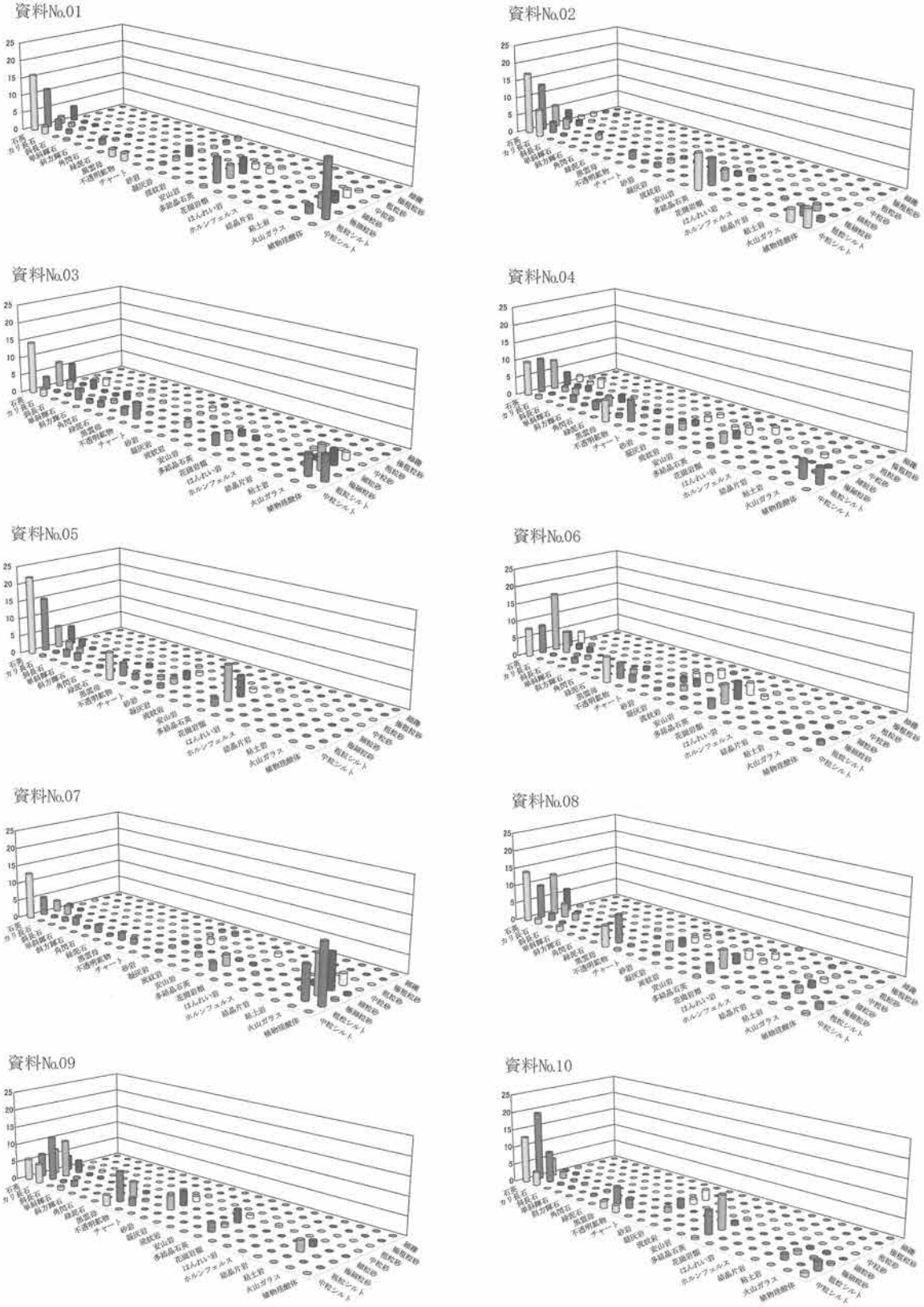
崗岩類（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が多く含まれていた。なお、淡水種珪藻化石（*Pinnularia*属、*Eunotia*属、*Cymbell*比較的多く含まれていたことから、粘土材料は淡水成粘土と考えられる（第4図）。

№14：粒度組成は、中粒砂から中粒シルトからなり細粒質であり、凝灰岩や砂岩が含まれ、花崗岩類や変質火山岩（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかったが、砂粒表面に多量の陸域指標種群の*Hantzschia amphioxys*が付着していた（第4図）。また、断面において外側部分が赤味の胎土、内側部分が白味の胎土を呈していたが、材料としての砂粒組成や粘土中の粒子に違いは見られなかった。これらの違いは焼成時の温度の伝わり方の違いなどが考えられるが明らかでない。

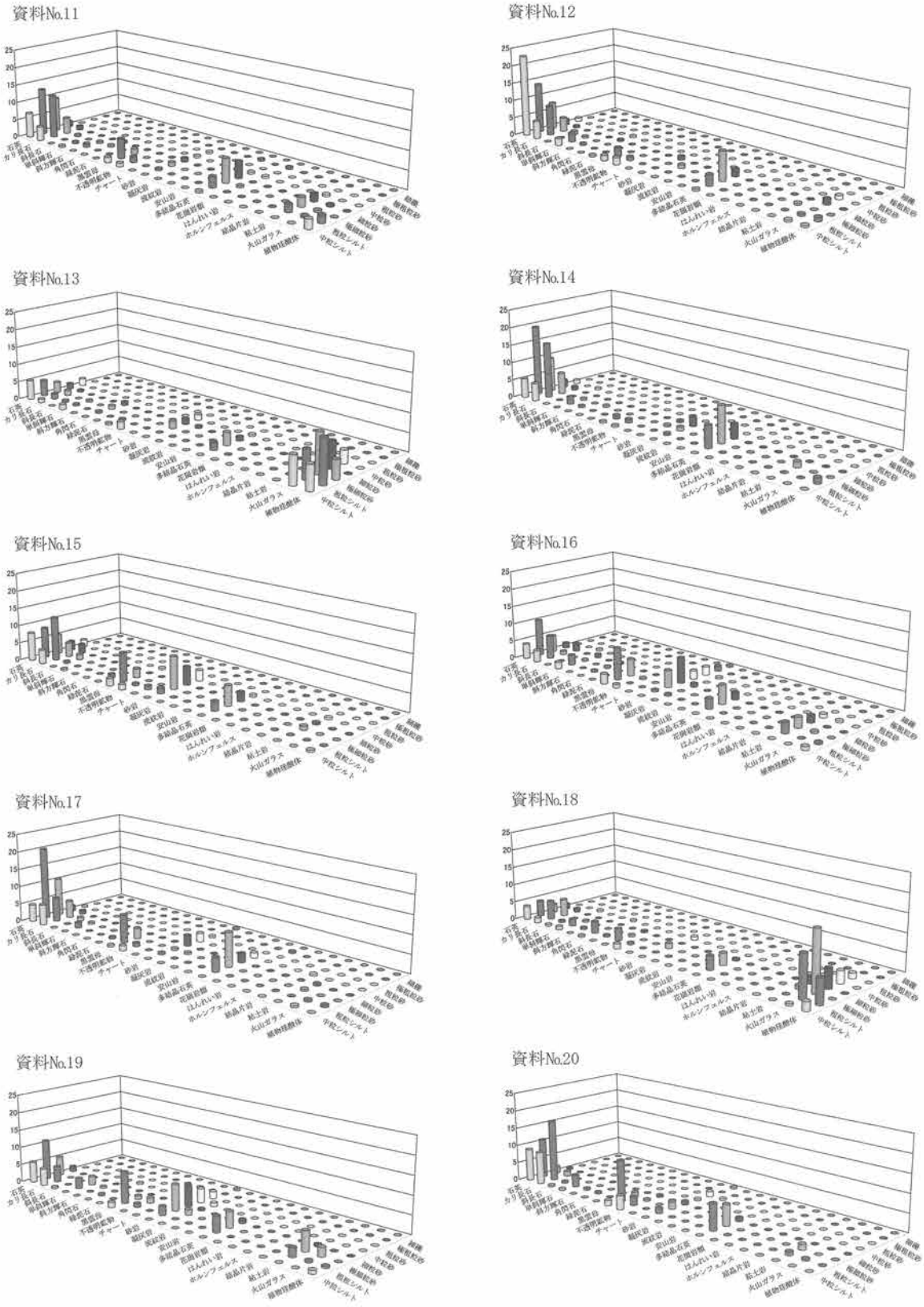
№15：粒度組成は、中粒砂から中粒シルトからなり細粒質であり、砂岩が比較的多く含まれ、花崗岩類（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

№16：粒度組成は、細礫から中粒シルトからなり、砂岩が最も多く含まれ、凝灰岩や火山ガラスあるいは花崗岩類（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

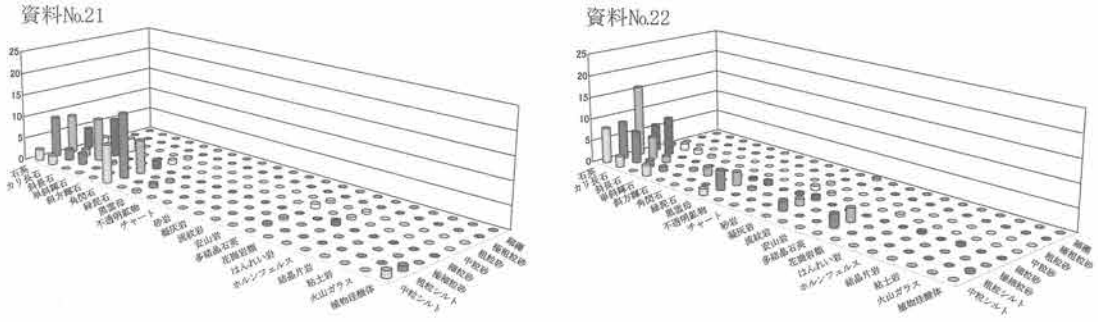
№17：粒度組成は、細礫から中粒シルトからなり、砂岩が最も多く含まれ、凝灰岩や火山ガラスあるいは花崗岩類を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。



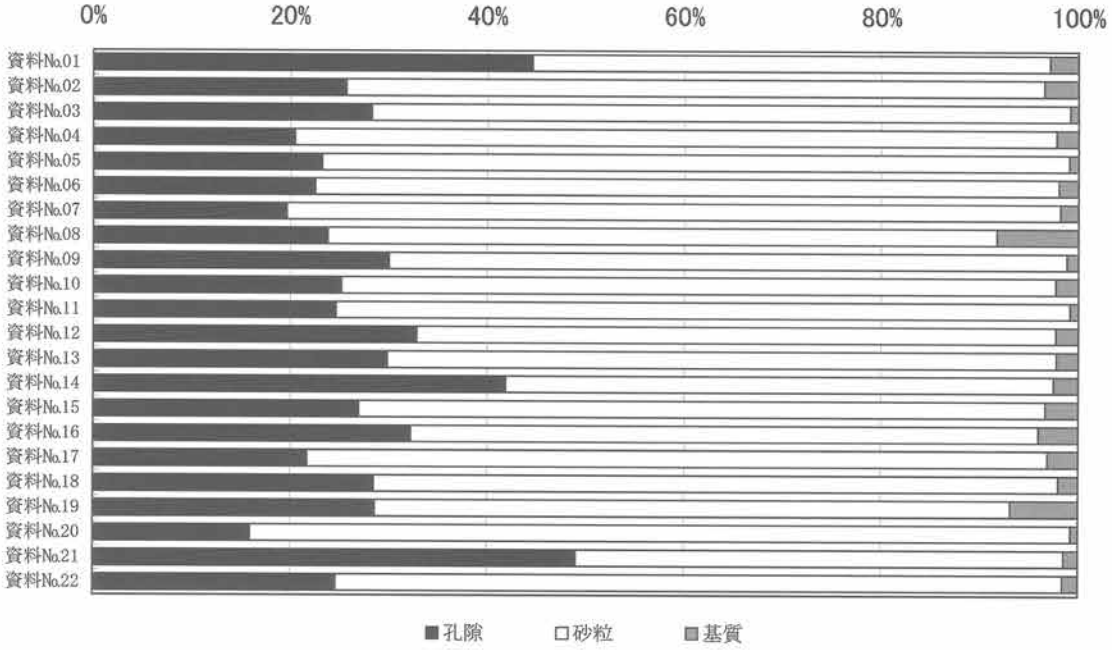
第１図（1）各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（縦軸：個数%）



第１図（2）各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（縦軸：個数%）



第１図（3）各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（縦軸：個数%）



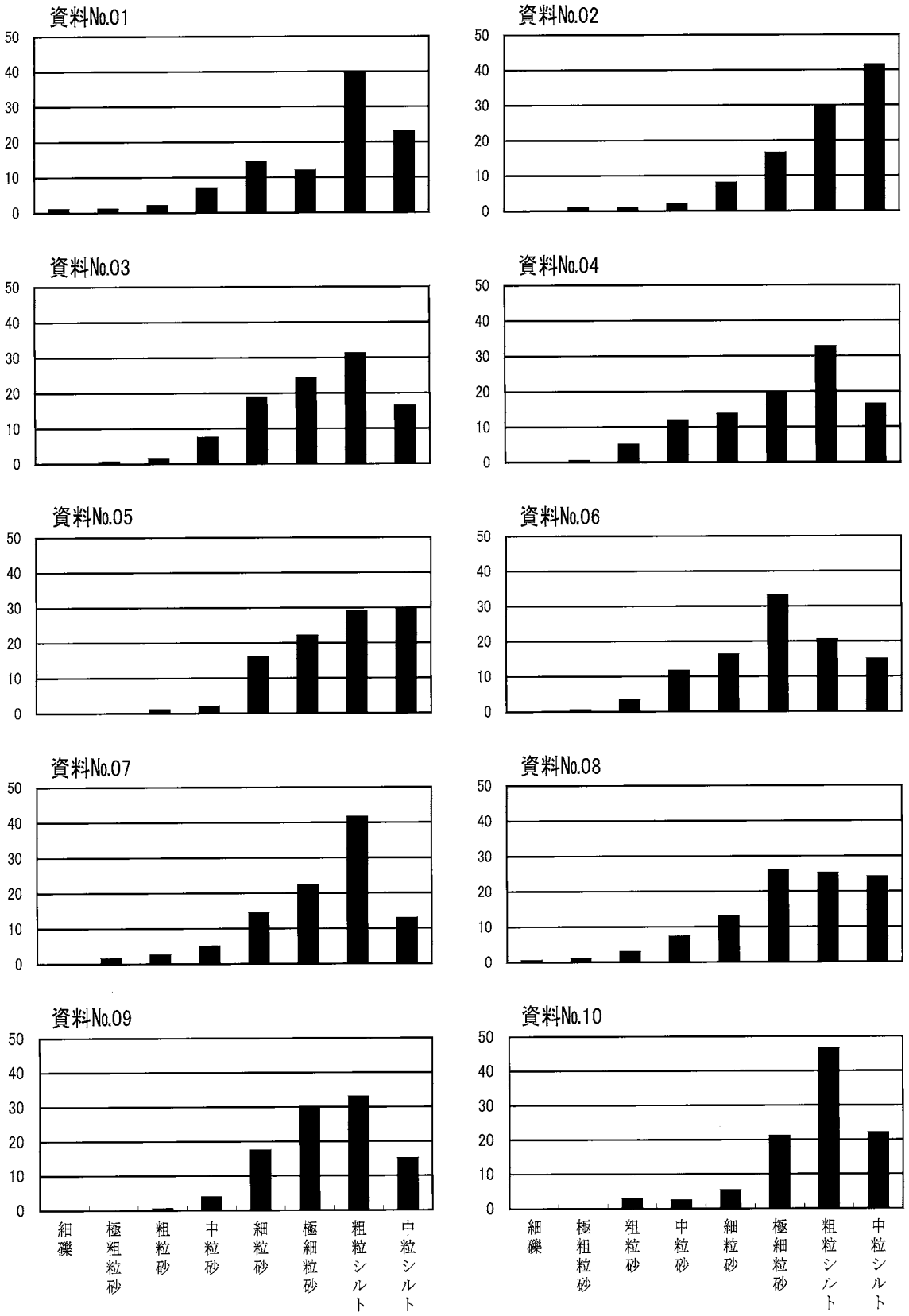
第２図　土器胎土の孔隙・砂粒・基質の割合

No.18：粒度組成は、粗粒砂から中粒シルトからなり、火山ガラスが多く含まれ、砂岩や粘土岩を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

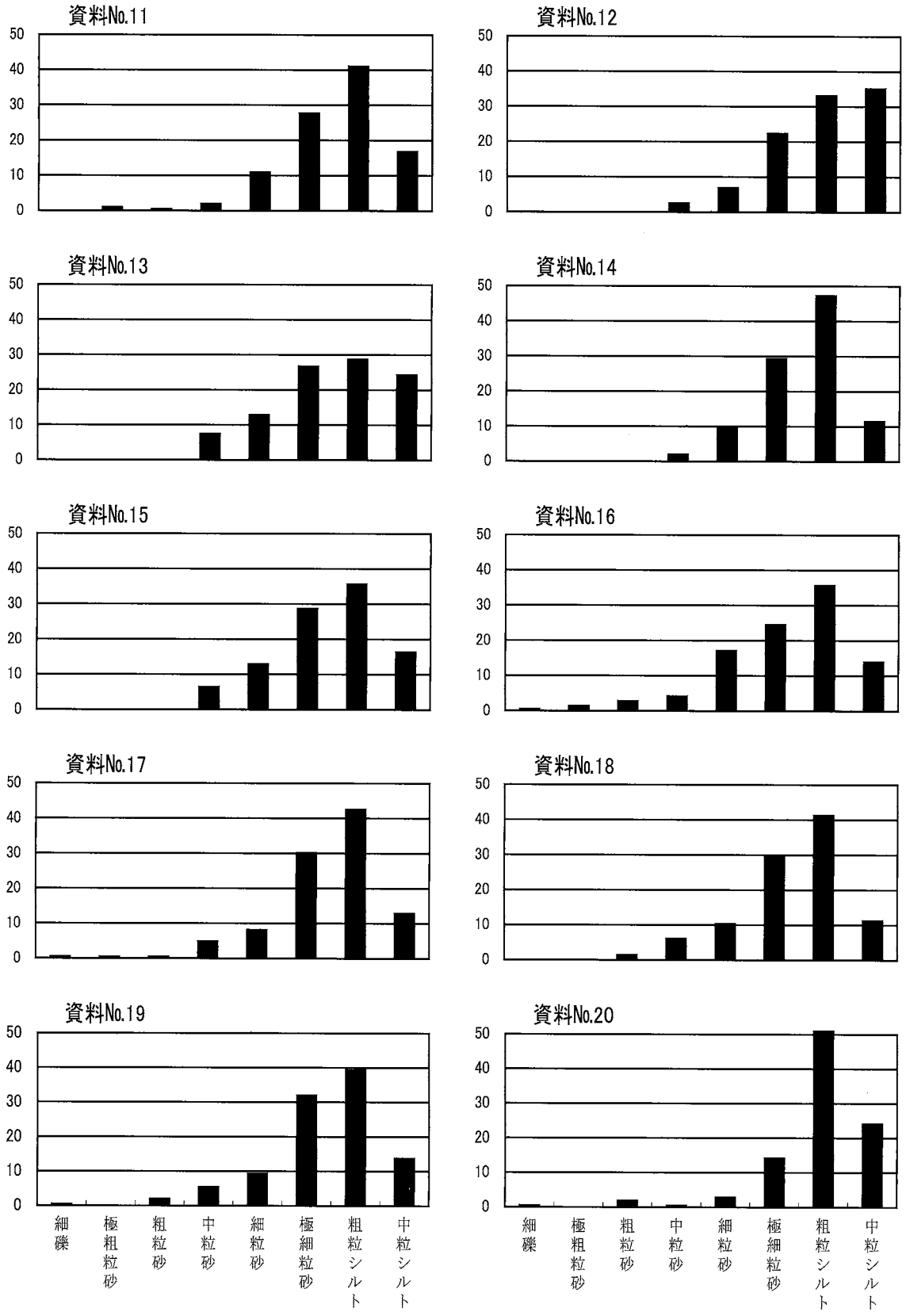
No.19：粒度組成は、細礫から中粒シルトからなり、砂岩が多く含まれ、凝灰岩や火山ガラスを伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

No.20：粒度組成は、細礫から中粒シルトからなり、砂岩が比較的多く含まれ、凝灰岩や火山ガラスあるいは花崗岩類や変質火山岩（計数外）を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

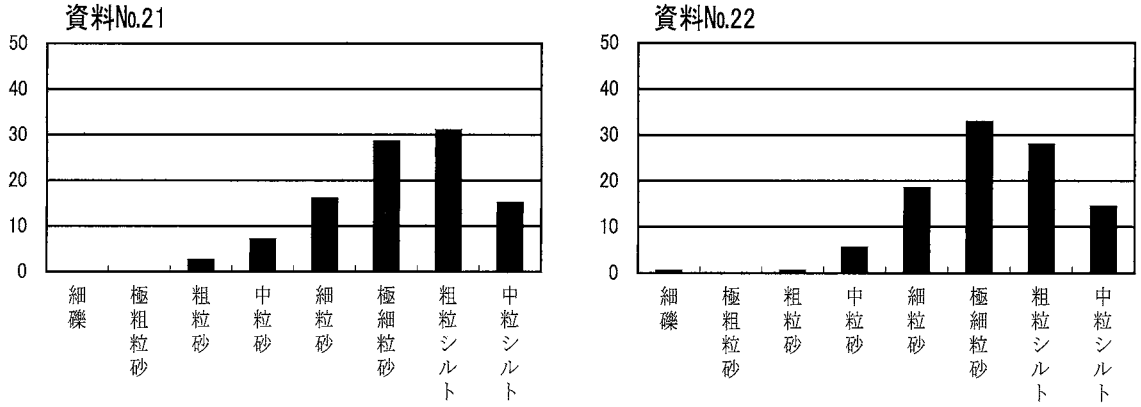
No.21：粒度組成は、粗粒砂から中粒シルトからなり、角閃石が多く含まれ、はんれい岩を伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。断層岩特有の尖った破片状粒子が多く、斜長石



第３図（1）土器胎土中の砂の粒径組成



第３図（2）土器胎土中の砂の粒径組成



第３図（3）土器胎土中の砂の粒径組成

の縞状部分には破断構造が特徴的に見られた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

No.22：粒度組成は、細礫から中粒シルトからなり細粒質であり、凝灰岩が含まれ、砂岩や花崗岩類やホルンフェルスを伴う。イネ科植物の葉身に含まれる植物珪酸体が少量含まれていた。なお、粘土の起源を指標する珪藻化石は含まれていなかった。

４．考察

(1)胎土材料の特徴

検討した弥生土器胎土は、砂粒組成の特徴から大きくA類、B類、C類、D類に分類される。

A類は、堆積岩類を主体として花崗岩類や片岩類および火山ガラスを伴う組成である。22資料中最も多く14資料検出された。なお、資料01および資料02では火山ガラスは比較的多く含まれている。

B類は、火山ガラスを主体として堆積岩類や凝灰岩あるいは花崗岩類を伴う組成である。22資料中3資料検出された。なお、資料03や資料18では角閃石が特徴的に多く含まれている。また、資料13では、淡水種珪藻化石が多く検出され、粘土材料は淡水成粘土を使用している。

C類は、凝灰岩類を主体として砂岩などの堆積岩類や花崗岩類あるいは火山ガラスを伴う組成である。22資料中4資料検出された。なお、資料04では角閃石を特徴的に多く含み、資料06と資料22では黒雲母を特徴的に多く含む。また、資料04および資料06では、少ないものの不明種珪藻化石あるいは骨針化石を含んでいることから、粘土材料として水成粘土を使用している。

D類は、角閃石およびはんれい岩を主体とした組成であり、1資料のみである。ここの胎土は、角閃石やはんれい岩を含むほか、斜長石内の微小断層が見られるものが多く、その他の石英などの粒子も尖った形状を呈するなど断層岩特有の粒子が見られた（第4図および写真図版11）。このことから、これらは生駒西麓産土器（河内の土器）と呼ばれる土器群の特徴と一致する（藤根・小坂、1997）。藤根・小坂（前出）が検討した土器では、5μm未満の粒子の占める割合が37体積％と低く、断層内物質の特徴と共通することから、これら土器群が断層内物質をそのまま利用して作られた土器と考えられている。また、生駒山西麓には、生駒はんれい岩類が分布し、長さ21kmに及ぶ生駒断層が存在するが、かつてこの断層により生成した断層粘土が採取でき、同質の土器ができたことから、この断層粘土が利用されたものと考えられている（藤根・小坂、前出）。なお、こうした特徴をもつ土器群は、同様の地質学的条件が他地域においても存在することから、必ずしも生駒西麓産を指標するものではない。

なお、器種による胎土材料の違いはないが、資料No.04と資料No.06は材料として類似した胎土である。

(2) 遺跡周辺の地質と胎土組成の比較

土器胎土の材料は、生駒西麓産土器のように本来砂粒物を含んだ粘土を使用した場合もあるが、一般的には粘土と砂粒などの混和材からなる人工物と理解される。このうち、粘土は、段丘堆積物としての粘土層のほか、山間部谷部において基盤岩石が風化して堆積した粘土堆積物も考えられる。

一方、混和材は、周辺岩石が主に河川などにより細粒化した段丘堆積物中の砂や火山灰など利用されたことが考えられる。このうち、段丘堆積物中の砂は、周辺域あるいは上流域の地質を反映した組成を示すと思われる。

遺跡が所在する地域は、古生代の砂岩などの堆積岩類、中生代の流紋岩や溶岩などが分布する地域であるが、その他揖保川上流域には花崗岩類やはんれい岩も分布する(写真図版 12)。

ここで検討した土器のうち、堆積岩類を主体としたA類の土器群は、こうした周辺域の特徴を反映した組成と思われる。

一方、火山ガラスを主体としたB類の土器群は、段丘堆積物中に火山灰が挟在することが多いことから、揖保川沿いに分布する段丘堆積物の組成と考えることもできる。ここで分類したB群の土器は、いずれも砂岩や花崗岩類の砂粒を伴うことから支持される。

凝灰岩を主体としたC群の土器群は、凝灰岩そのものは分布しないものの流紋岩や火砕岩など古い時代の火山岩類が分布する地域であることから、これらに付随した凝灰岩的な砂粒と考えられる。ここで分類したC群の土器は、砂岩や流紋岩あるいは安山岩や花崗岩類の砂粒を伴うことから支持される。

角閃石およびはんれい岩を主体としたD群の土器は、その特徴から角閃石はんれい岩などが母材と推定されるが、相当する岩石は、西側のたつの市新宮町以西、北側の宍粟市一宮町以北などに分布する(写真図版 12 の Yb)。なお、これらのはんれい岩体には無数の断層が走ることから、断層粘土が分布する可能性が高い。

５．おわりに

ここでは、川戸遺跡から出土した弥生後期～古墳初頭の土器について、その胎土の材料を検討した。その結果、多くの土器が在地または周辺域の材料である可能性が示された。今後は、遺跡周辺において段丘堆積物などの材料に関する地質調査を行うことにより、より精緻な検討ができるものと考えている。

引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 2, 73-88.

地質調査所 (1981) 20万分の１地質図幅「姫路」. 地質調査所

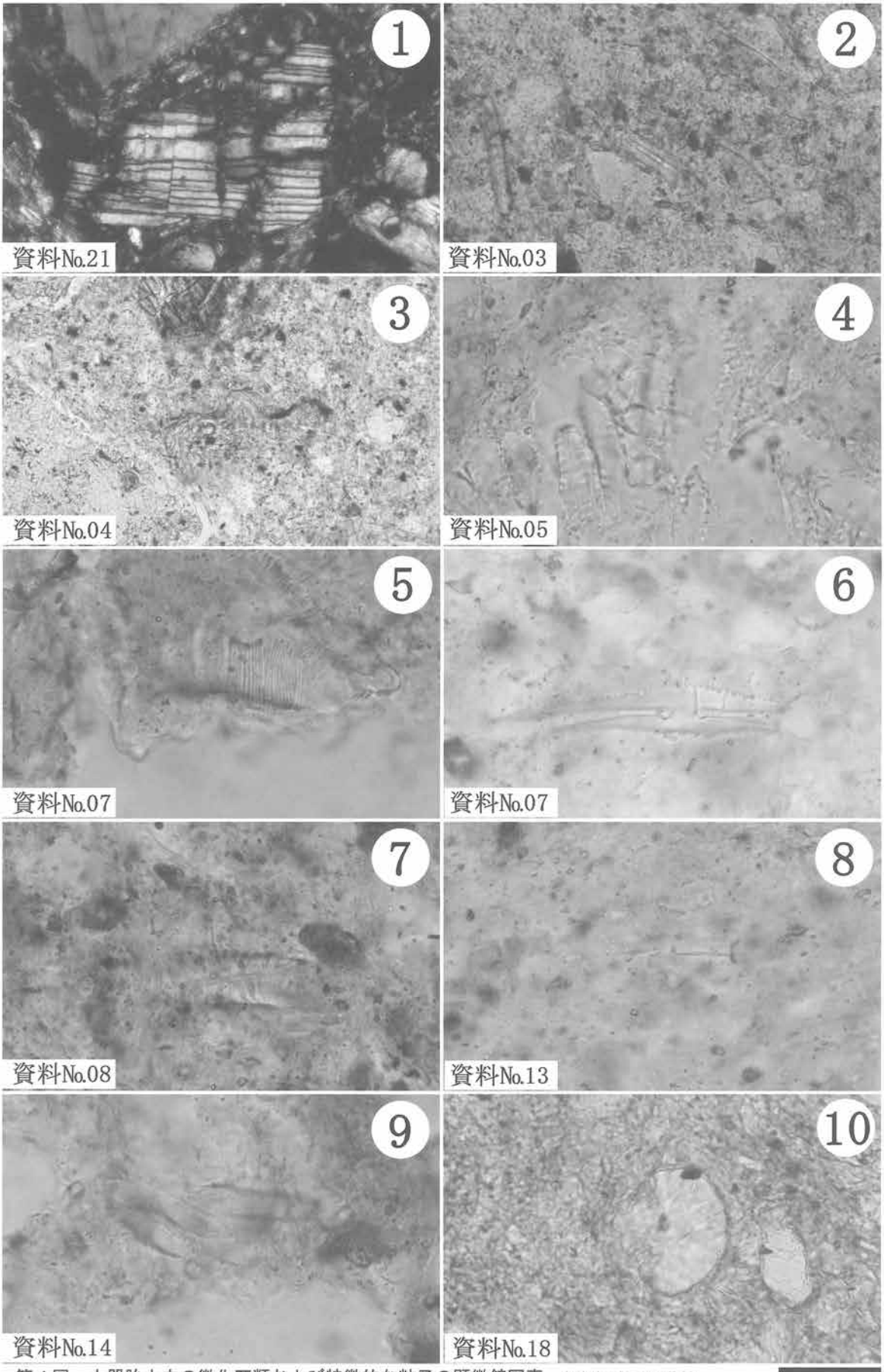
藤根 久・小坂和夫 (1997) 生駒西麓 (東大阪市) 産の縄文土器の胎土材料　－断層内物質の可能性－. 第四紀研究, 36 : 55-62.

藤根　久 (1998) 東海地域 (伊勢－三河湾周辺) の弥生および古墳土器の材料. 第６回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108-117.

藤根　久・今村美智子 (2001) 第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴. 「波志江中宿遺跡」、日本道路公団・伊勢崎市・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、p. 262-277.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

松田順一郎・三輪若菜・別所秀高 (1999) 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集、120-121.



第４図　土器胎土中の微化石類および特徴的な粒子の顕微鏡写真　（（）内スケールの長さ）

1. 斜長石内の微小断層　(50μm)　2. 骨針化石　(50μm)　3. イネ頴珪酸体　(100μm)　4. 砂粒表面付着珪藻化石　(20μm)　5. 淡水種珪藻化石　(Eunotia 属；20μm)
6. 淡水種珪藻化石　(Eunotia 属；20μm)　7. 淡水種珪藻化石　(Pinnularia borealis;20μm)　8. 淡水種珪藻化石　(Pinnularia 属；20μm)
9. 砂粒表面付着珪藻化石　(20μm)　10. ヨシ属の植物珪酸体　(50μm)

第５章　まとめ

川戸遺跡の調査では弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代中期、中世の遺構と遺物が出土した。遺物は、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が中心を占めている。遺跡の評価と関係があるので、弥生土器の分類を行うとともに、破片の統計的分析を行い、弥生土器の位置づけを行う。また、これを元に川戸遺跡の分析および川戸遺跡の位置づけを行う。

第１節　弥生土器の分類（第５図）

今回、川戸遺跡から出土した弥生時代後期から古墳時代初頭の土器について分類を行う。土器の器種は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器などが出土している。以下、これらの器種名のうち「形土器」を略称して記述する。なお、前後するが、第３章本文中の記述も本分類による。

壺

壺は形態を重視して、分類を行った。特に口縁部の形態・全体の形態を中心に、広口壺、二重口縁壺、広口長頸壺、長頸壺、短頸壺、細頸壺に分類した。

広口壺は口頸部が大きく広がる壺で、形態および施文によりＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅに分類した。

広口壺Ａは外反する口頸部に、口縁端部を拡張し、凹線文を施すものをAa、口縁部が単純なものをAbとし、さらに体部をミガキで仕上げるものをAb1、体部をタタキで仕上げるものをAb2と細分した。広口壺Ｂは直立する頸部に短く外傾する口縁部を付ける。広口壺Ｃは直立する頸部に長く外傾する口縁部を付ける。広口壺Ｄは直立する頸部に短く外反する口縁部を付ける。広口壺Ｅは有段口縁で口縁端部は上方に拡張し、擬凹線文を施す。口縁部が外傾するものをEa、口縁部が直立するものをEbと細分した。

広口長頸壺は、頸部が長く口縁部が外方に屈曲する壺である。

二重口縁壺は口縁部に外反する二次口縁を持つ壺である。

長頸壺は、長く直立する口頸部を持つ壺である。

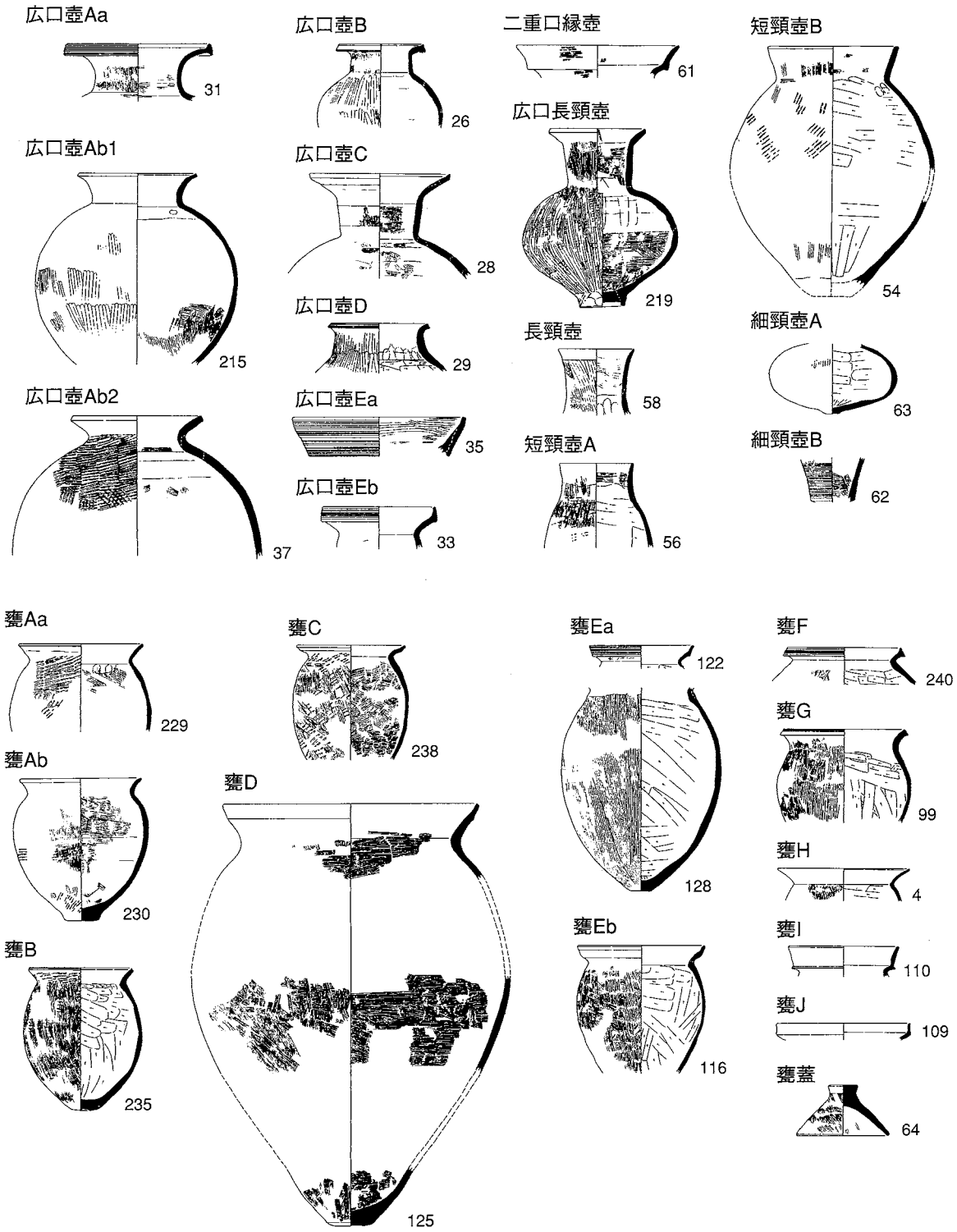
短頸壺は、口頸部が短い壺で口頸部の形態により、Ａ・Ｂに分類した。短頸壺Ａは小形の縦長の体部に外反して短い口頸部をつける壺である。短頸壺Ｂは肩の張った体部に屈折して短い口頸部をつける壺である。

細頸壺は、直立する細い口頸部を持つ壺で、口頸部の形態により、Ａ・Ｂに分類した。細頸壺Ａは口頸部が出土していないが、扁平な体部に直線的な口頸部を持つと考えられる。細頸壺Ｂは口縁部が拡張し、擬凹線文を施すものである。

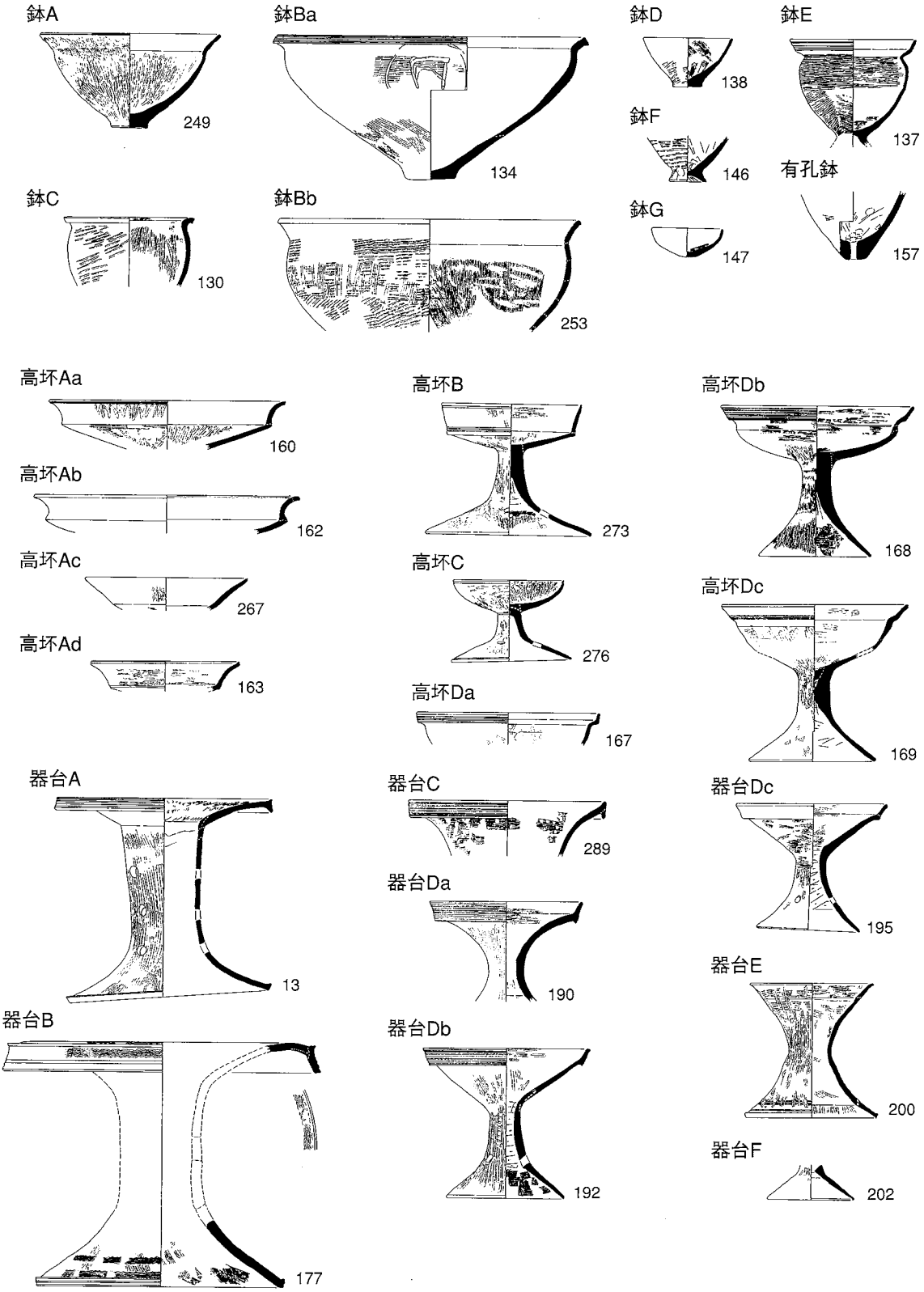
甕

甕は形態および調整を重視して、分類を行った。特に口縁部の形態・全体の形態、体部の調整を中心にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊに大分類した。

甕Ａは口縁部がく字に外反し、口縁端部は単純である。体部内面はハケ調整を行っている。体部外面はタタキのみのものをAa、タタキ後ハケ調整を行っているものをAbと細分した。甕Ｂは口縁部がく字に外反し、口縁端部は摘み上げている。体部外面はタタキ後ハケ調整、内面はケズリを行っている。甕Ｃは外反口縁で、口縁端部を上方に摘み上げ体部外面はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整を行っている。甕Ｄは外反口縁で、口縁端部を上方に摘み上げ、体部内外面ともハケ調整を行っている。小形の



第５図　弥生土器の分類（1）



第５図　弥生土器の分類（2）

ものが中心で、僅かに大形のものがある。甕Ｅは有段口縁で口縁端部は上方に拡張するもので、体部外面はハケ調整、内面はケズリを行っている。口縁端部が外傾し擬凹線文を施すものを Ea、口縁端部が外傾しナデで仕上げるものを Eb と細分した。

甕Ｆは口縁部がく字に外反し、口縁端部に面を作り、凹線文を施す。体部外面はハケ調整、内面はケズリを行っている。甕Ｇは口縁部がく字に外反し、口縁端部に面を作る。体部外面はハケ調整、内面はケズリを行っている。甕Ｈは口縁部がく字に外反し、口縁端部は単純である。体部外面はハケ調整、内面はケズリを行っている。甕Ｉは外傾する複合口縁の甕である。甕Ｊは短く直立する口縁端部を作る甕である。

甕蓋は笠形を呈する。摘みの形状は多様である。

鉢

鉢は形態により、分類を行った。特に口縁部の形態により、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ、有孔鉢に分類した。

鉢Ａは口縁部が外反する中形の鉢である。鉢Ｂは口縁部が外反する大形の鉢で、口縁部に面を作るものを Ba、口縁部が単純なものを Bb と細分した。鉢Ｃは口縁部が短く外反する鉢で、タタキにより成形している。鉢Ｄは口縁部が直線的に開くもので、タタキにより成形している。鉢Ｅは有段口縁で口縁端部は上方に拡張し、擬凹線文を施す。底部は低い脚台が付く。鉢Ｆは体部をタタキで仕上げており、低い脚台が付く。製塩土器の可能性がある。鉢Ｇは小型丸底鉢である。有孔鉢は直口鉢の底部に穿孔のあるものである。

高坏

高坏は形態により、分類を行った。特に口縁部の形態により、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄに分類した。

高坏Ａは坏部の形態が皿形を呈し、口縁部に稜を作るもので、口縁部が外反し端部が単純なものを Aa、口縁端部内面に凹線文を巡らすものを Ab、口縁部が大きく外傾するものを Ac、口縁端部を摘み上げるものを Ad とした。高坏 Aa はミガキによる波状の暗文が付けられるものが多い。高坏 Ac の口縁部は縦方向のミガキ、高坏 Ad の口縁部は横方向のミガキで仕上げている。高坏Ｂは坏部が小振りで、屈曲部に凹線を巡らすものである。口縁部は内外とも縦方向のミガキを施している。高坏Ｃは坏部が浅い椀形を呈するものである。高坏Ｄは有段口縁で口縁端部は上方に拡張するもので、口縁端部が直立し擬凹線文を施すものを Da、口縁端部が外傾し擬凹線文を施すものを Db、口縁端部が外傾しヨコナデで仕上げるものを Dc と細分した。

器台

器台は形態により、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆに分類した。

器台Ａは大形品で体部から屈曲する口縁部が付き、口縁端部は拡張して凹線文を巡らす。器台Ｂは大形品で口縁端部が垂下し、口縁部や脚裾部を櫛描文などで飾るものである。器台Ｃは大形で口縁端部が垂下し、擬凹線文を施すものである。器台Ｄは有段口縁で口縁端部は上方に拡張するもので、口縁端部が直立し擬凹線文を施すものを Da、口縁端部が外傾し擬凹線文を施すものを Db、口縁端部が外傾しヨコナデで仕上げるものを Dc と細分した。器台Ｅは体部が括れており、口縁部や裾部が外反しており、口縁内面は僅かに稜を作る。器台Ｆは小型器台である。

第２節　川戸遺跡の後期弥生土器—統計的分析を中心として—

川戸遺跡からは、報告書に掲載した以外にも小破片を含めて一定量の土器が出土している。ここでは、それらの破片資料を含めて統計的な分析・報告を行う。なお、ここでは川戸遺跡の中心的な時期を占める弥生時代後期を対象とし[1)]、弥生時代中期の土器や土師器・須恵器など明らかに時期が異なる資料は除外した。また、ミニチュア土器や製塩土器などの特殊な土器についても対象から外している。

１．器種組成

（１）作業方法

土器の器種組成を示すためには、様々な方法が用いられる。最も一般的な方法は、器種が同定できる比較的残存状態のよい資料をカウントし、それらの比率を算出するというものであろう。この方法は残りのよい一括資料や、多量の土器を対象とする場合には有効である。しかし、川戸遺跡のように土器の絶対量が多いとはいえず、遺存状態も必ずしも良好ではない資料を対象とする場合には、実態とは離れた器種組成になりかねない。そこで当遺跡資料では、比較的データが安定するとされる「口縁部計測法」を「底部計測法」と併用して計測を行い、器種組成を復元した[2)]。対象とする資料は口縁部および底部・脚部[3)]をもつ資料とした。計測には径を計測するための多重円周（5mm 間隔）と、残存率を測るための放射状の線群（円を 16 分割したもの）が刻まれる口縁部計測シートを使用した。残存率は、1／6 以下になると精度が落ちるとされているが[4)]、1／6 以下の資料であっても経験的に径を類推できるものも存在する。したがって、今回は残存率が 1／6 以下（1／16、2／16）の破片についても計測可能な資料については径と残存率を計測した。このようにして、径が計測できた資料については残存率と破片数を、径が計測できない資料については破片数のみをカウントし、復元個体数と破片数を表に示した（第３表）。第３表の「破片数／復元個体数」は、径の計測できない資料を含めた口縁部、底部・脚部の破片数と復元できた個体数との比を示しており、値が小さいほど残存状態がよく、また割れにくいことを表している。

器種分類については、本報告の分類基準（第５章第１節）に従っている。すなわち、壺形土器・甕形土器・高坏形土器・器台形土器・鉢形土器・有孔鉢形土器・蓋形土器（以下、「壺」「甕」「高坏」「器台」「鉢」「有孔鉢」「蓋」と略称する）に大別し、壺については、広口壺、長頸壺、直口壺、短頸壺、二重口縁壺に細分している。分類に際して、頸部まで残存しない破片資料や底部のみの資料などは器種を一つに同定できないことが多い。その場合は可能性のある器種を全て列挙して表に掲載している。なお、器台の口縁部または脚部の破片資料の場合、両者を区別することが困難であった。そのため便宜的ではあるが、復元個体数や破片数を二等分して口縁部と脚部にそれぞれ配分した。器種を限定できない不明資料の場合も同様の方法を採っている。

「口縁部計測法」や「底部計測法」は、本来は遺構や層位ごとに行うことが望ましい。同一の客観的方法で計測でき、各遺構や各層位の比較・検討が行いやすいためである。川戸遺跡では、住居址、土坑、流路などの遺構が検出されているものの、SD04 と SD07 以外の遺構や包含層からの出土土器は非常に少ない。したがって、SD04 と SD07 のみをそれぞれ遺構別に取り扱い、その他の遺構等については両流路を含めた全体資料の中に含めている。

第３表　器種分類表

ＳＤ04	復元個体数（個）		破片数（片）		破片数／復元個体数（片／個）	
	口縁部[A]	底部・脚部[B]	口縁部[C]	底部・脚部[D]	口縁部[C/A]	底部・脚部[D/B]
広口壺	5.06		48		9.49	
長頸壺	0.38		4		10.52	
直口壺	1.56		9		5.77	
短頸壺						
二重口縁壺	0.06		1		16.67	
広口壺・長頸壺	0.69		10		14.49	
壺（形式不明）	0.44	12.31	5	25	11.36	2.03
甕	15.75	10.56	169	26	10.73	2.46
高坏	1.88	3.7	44	53	23.4	14.32
器台	3.53	3	54.5	40.5	15.44	13.5
鉢	3.25	10.13	57	21	17.54	2.07
有孔鉢		5.94		9		1.52
蓋	0.19	4	1	4	5.26	1
壺・甕	0.56	2.88	6	5	10.71	1.74
壺・鉢	0.13	5.13	7	10	53.85	1.95
壺・高坏			3			—
壺・器台	0.06		4		66.67	
甕・鉢	3.5	6.88	69	13	19.71	1.89
高坏・鉢	0.5		10		20	
高坏・器台		3.43		79		23.03
壺・甕・鉢	2.25	22.38	74	56	32.89	2.5
不明	0.35	0.35	21	21	60	60
計	40.14	90.69	596.5	362.5	14.86	4

ＳＤ07	復元個体数（個）		破片数（片）		破片数／復元個体数（片／個）	
	口縁部[A]	底部・脚部[B]	口縁部[C]	底部・脚部[D]	口縁部[C/A]	底部・脚部[D/B]
広口壺	3.06		25		8.17	
長頸壺	0.56	0.7	4	1	7.14	1.43
直口壺	0.13		1		7.69	
短頸壺	0.63		3		4.76	
二重口縁壺						
広口壺・長頸壺						
壺（形式不明）		6.93		15		2.16
甕	3.56	7.69	54	12	15.17	1.56
高坏	2.31	3.44	43	52	15.12	15.12
器台	0.31	0.38	7	8	22.58	21.05
鉢	1.94	7.75	38	14	19.59	1.81
有孔鉢		1		1		1
蓋						
壺・甕	0.25	1	8	2	32	2
壺・鉢		1.38		2		1.45
壺・高坏						
壺・器台	0.25		1		4	
甕・鉢	0.88	1.5	22	3	25	2
高坏・鉢	0.13		4		30.77	
高坏・器台		0.5		13		26
壺・甕・鉢	0.19	6.5	16	20	84.21	3.08
不明	0.03	0.03	8.5	8.5	283.33	283.33
計	14.23	38.8	234.5	151.5	16.48	3.9

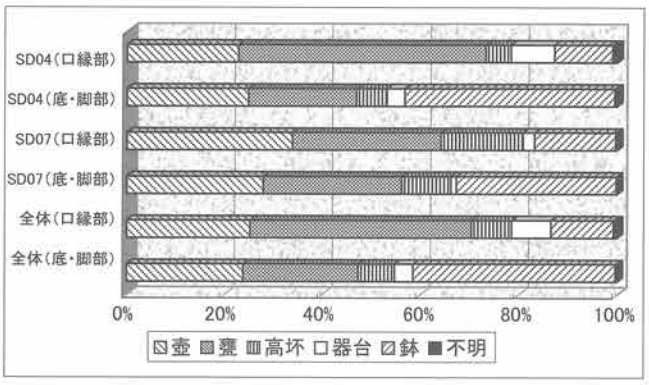
全体	復元個体数（個）		破片数（片）		破片数／復元個体数（片／個）	
	口縁部[A]	底部・脚部[B]	口縁部[C]	底部・脚部[D]	口縁部[C/A]	底部・脚部[D/B]
広口壺	8.43		83		9.85	
長頸壺	0.94	0.7	8	1	8.51	1.43
直口壺	1.69		9		5.33	
短頸壺	0.94		9		9.57	
二重口縁壺	0.12		3		25	
広口壺・長頸壺	0.69		10		14.49	
壺（形式不明）	0.76	19.87	10	42	13.16	2.11
甕	21.69	20.56	256	45	11.8	2.19
高坏	4.63	7.7	99	91	21.38	11.82
器台	4.72	3.88	78.5	59.5	16.63	15.34
鉢	5.69	22.76	112	46	19.68	2.02
有孔鉢		7.25		11		1.52
蓋	0.19	4.56	1	5	5.26	1.1
壺・甕	0.81	4.63	15	9	18.52	1.94
壺・鉢	0.13	9.7	10	19	76.92	1.96
壺・高坏	0.13		4		30.77	
壺・器台	0.44		8		18.18	
甕・鉢	4.63	8.38	101	16	21.81	1.91
高坏・鉢	0.63		14		22.22	
高坏・器台		5.31	2	123	—	23.16
壺・甕・鉢	2.57	35.94	110	93	42.8	1.19
不明	0.41	0.41	43.5	43.5	106.1	106.1
計	60.24	151.65	986	604	16.37	3.98

（２）組成の復元

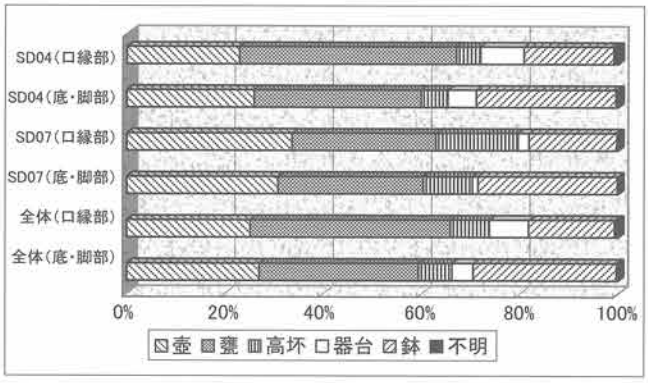
第３表をもとに、口縁部の残存率から復元した個体数（以下、口縁部復元個体数）と底部・脚部の残存率から復元した個体数（以下、底部・脚部復元個体数）の比率から器種組成を示したものが第６図・第７図である。壺の各形式については広口壺以外の母数が少ないため、壺に一括して含めた。また、有孔鉢、蓋については、用途は異なるものの形態的類似性より鉢に含めている。器種が特定できない土器に関しては、特定できた器種の比率を出してそれぞれ配分した。この配分には２通りの方法を用いた（第６図・第７図）。

第６図では、一つの器種に特定できない口縁部（底部）の復元個体数を、特定できた口縁部（底部）の復元個体数の比率で配分する方法を用いている。例えば、甕か鉢か特定できなかった「底部―甕・鉢」は、特定できた「底部―甕」と「底部―鉢」の割合で振り分けている。さて、第６図では甕や鉢の口縁部復元個体数の組成と底部・脚部復元個体数の組成に占める割合が大きく異なっている。これは上記のような配分方法を用いたためと考えられる。鉢には摘み出して外に広がる特徴的な底部を有する一群が存在するため、器種の特定が容易である[5]。それに対して、甕の底部は分割成形技法[6]を用いているものが多く存在するために、底部付近の破片だけでは使用痕跡が認められない場合などを除いて、甕と特定することが困難である。そのため「底部―甕・鉢」は、実際には甕の底部を多く含んでいるが、鉢の底部により多く配分されていると思われる。このような非特定器種を配分する時に生じる偏差は、他の器種でも起こりうると考えられる。

この偏りを考慮して配分を行ったものが第７図である。これは、口縁部で特定できなかった器種を底部で特定できた器種相互の比率で配分し、逆に底部で特定できなかった器種を口縁部での比率で配分する方法を用いている。例えば、「底部―甕・鉢」は、「口縁部―甕」と「口縁部―鉢」の比率で配分し、「口縁部―壺・甕・鉢」は「底部―壺」「底部―甕」「底部―鉢」の比率で配分している。このように、非特定器種を別の属性から割り出した比率で配分することによって、非特定器種の配分にともなう偏りは少なくなると思われる。なお、第７図の比率も鉢の底部が若干多く、この理由については、①径が復元できない破片資料を除外していること、②器種認定時の誤認、③実際に採集した鉢が口縁部よりも底部の方が多い、など複数の要因が考えられる。しかし、これらの誤差は許容の範囲と判断し、第７図の値を川戸遺跡の後期弥生土器の組成を表すものとしたい[7]。口縁部復元個体数と底部・脚部復元個体数の平均を出すと、川戸遺跡全体では壺が 26%、甕が 37%、高坏が 8%、



第６図　器種組成（1）



第７図　器種組成（2）

器台が6%、鉢類が23%となる。遺構別に見ると、SD04では、壺25%、甕40%、高坏5%であるのに対し、SD07は、壺33%、甕30%、高坏14%となり、SD07では壺と高坏の比率が高く、SD04では甕の比率が高いことが指摘できる。

註

1．壺・甕などの器壁が厚くなり、内面ヘラケズリが体部上半から頸部付近まで及ぶ段階を後期の始まりと考え、庄内式段階を後期の終末とする。

2．宇野隆夫　1981「遺物の考察」『白河北殿北辺の調査』京都大学埋蔵文化財研究センター
宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集　国立歴史民俗博物館

3．壺・甕・鉢・有孔鉢などの底部を「底部」と表し、高坏・器台の底部を「脚部」と表現した。なお、蓋は、便宜的に摘み部を「底部」とし、そこから「ハ」の字状に広がった端部を「口縁部」とした。

4．註2と同じ

5．摘み出して広がる底部は甕にも存在するものの稀であり、煮沸痕跡等も観察されなかったため、すべて鉢の底部に分類している。

6．都出比呂志　1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号　考古学研究会

7．ただし、口縁部や脚部の方が底部よりも多くの破片になりやすく径が復元できる資料が少ないため（第3表「破片数／復元個体数」）、底部を有する壺・甕・鉢類の方が高坏・器台よりも相対的に多くカウントされていると推測される。したがって、ここで提示する値よりも高坏・器台の値は若干大きくなることが予想される。

2．後期土器の様相

川戸遺跡から出土した後期弥生土器は、時期差と地域差・系統差を含む複数の型式が存在する。ここでは、それらのうち細部の形状や内外面調整が強く相関する土器群を型式として認定し、それらの型式を周辺地域の中で位置づけていくことにより川戸遺跡の土器の様相について見ていくこととする。なお、対象とする器種は型式の時間的・系統的な位置づけが行いやすい甕と高坏に限定し、器種が特定できないものを除いた上で、口縁部の破片数でカウントしている。これらの資料の中には、在地で製作されたものと他地域から搬入されたものを含んでいるが、一括して扱っている。また遺構については、「SD04」・「SD07」・「その他」の3つに分類している。

（1）型式設定とその位置づけ

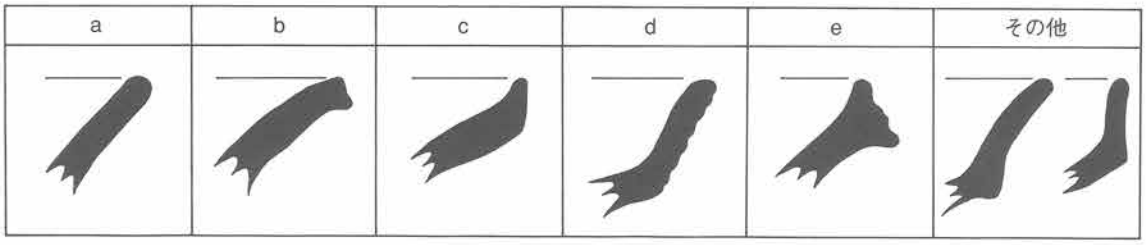
＜甕＞

甕は口縁端部の形状と文様、頸部・底部の形状、内外面調整などにバラエティがあり、それらの諸属性の組み合わせの結果、様々な種類が存在している。そこで、それらの属性のうち口縁端部の形状、外面調整、内面調整の3つを取り上げ、三者の相関関係について見ていく。

口縁部の形状、内外面調整は以下の通り分類した。

［甕の口縁部分類］（第8図）

a類：口縁端部を丸くおさめるもの。



第８図　甕の口縁部分類

第４表　甕の属性表

				外面調整															計（内面調整）
				タタキ			タタキ→ナデ			タタキ→ハケ			ハケ			不明			
				SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	
口縁部分類	a	内面調整	ケズリ	4							2		7		3	1			17
			ケズリ→ナデ																
			ケズリ→ハケ																
			ハケ	7	5					8	2								22
			ハケ→ナデ	2									1						3
			ナデ					1		7	1		1				1		11
			不明	4	1	1							1	2		5	2	1	17
		計（外面調整）		24			1			20			15			10			総計 70
	b	内面調整	ケズリ	11									18			5		2	36
			ケズリ→ナデ																
			ケズリ→ハケ																
			ハケ					3											3
			ハケ→ナデ	4															4
			ナデ	3															3
			不明	3	2											3	1		9
		計（外面調整）		23			3						18			11			総計 55
	c	内面調整	ケズリ		3	1		1		4	5	1	2						17
			ケズリ→ナデ	1															1
			ケズリ→ハケ																
			ハケ	6	6	1				2	5		5		1				26
			ハケ→ナデ																
			ナデ							2			1						3
			不明	1	1											4	3	3	12
		計（外面調整）		20			1			19			9			10			総計 59
	d	内面調整	ケズリ	2						1			9		3	3		12	30
			ケズリ→ナデ										4						4
			ケズリ→ハケ							1									1
			ハケ				1				3		1						5
			ハケ→ナデ																
			ナデ																
			不明	5						1						8	2		16
		計（外面調整）		7			1			6			17			25			総計 56
	e	内面調整	ケズリ										2	1		3	1		7
			ケズリ→ナデ																
			ケズリ→ハケ													1			1
			ハケ																
			ハケ→ナデ																
			ナデ																
			不明													2		1	3
		計（外面調整）											3			8			総計 11
	その他	内面調整	ケズリ															3	3
			ケズリ→ナデ																
			ケズリ→ハケ																
			ハケ																
			ハケ→ナデ																
			ナデ																
			不明													2			2
		計（外面調整）														5			総計 5

※網かけ部分は、各遺構の合計が12片以上となるもの（不明は除く）

b類：口縁端部を上下、もしくは下方にのみわずかに肥厚させ、明瞭な面をもつもの。下方にのみ突出するものが多い。

c類：口縁端部を上方に摘み上げるもの。口縁部外面に沈線文や擬凹線文を施すものが多い。

d類：口縁部を上方に大きく拡張させ、二重口縁状を呈するもの。擬凹線文を施すものが多い。

e類：口縁部を上下に拡張させ、面をもつもの。拡張した面に凹線文や擬凹線文を施すものが多い。

その他：口縁部を大きく外反させ、二重口縁を呈するものや、上方にまっすぐ拡張させるもの。前者は山陰系、後者は吉備系の二重口縁である。

[内面調整]

ケズリ：内面を縦および横方向に削って仕上げるもの。体部上半から頸部にかけては、実測図面上で左方向に削るものが大半である。

ケズリ→ナデ：内面を削った後に、一部をナデ消して仕上げるもの。

ケズリ→ハケ：内面を削った後に、一部をハケで仕上げるもの。

ハケ：内面をハケ調整で仕上げるもの。

ハケ→ナデ：内面をハケ調整した後に、一部をナデ消すもの。

ナデ：内面の一部もしくは全面をナデ調整によって仕上げるもの。粘土の輪積み痕、巻き上げ痕が帯状に残るものも多い。

不明：器面が磨耗して観察できないものや、口縁部のみの破片で頸部以下の調整が不明なもの。

[外面調整]

タタキ：タタキ技法により成形し、外面にタタキ目を残すもの。タタキ目は、実測図面上で右上がりとなるものが大半である。

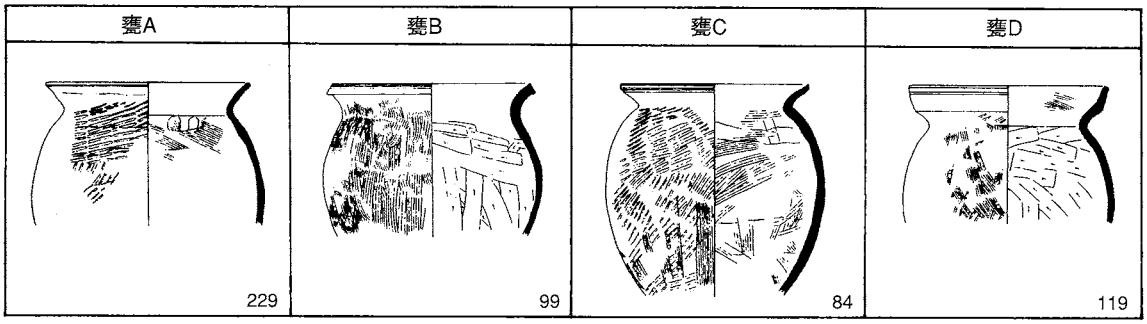
タタキ→ナデ：タタキ技法により成形した後に、一部のタタキ目をナデ消して仕上げるもの。

タタキ→ハケ：タタキ技法により成形した後に、ハケ調整を行って仕上げるもの。

ハケ：外面をハケ調整によって仕上げるもの。

不明：器面が磨耗して観察できないものや、口縁部のみの破片で頸部以下の調整が不明なもの。

以上の分類を行った結果、諸属性が強く相関するまとまりが認められた（第4表）。口縁部分類a類は、口縁部形態にあまり特徴がないためか、特定の内外面調整と強い相関性は示さない。外面調整はタタキ・タタキ→ハケ・ハケが、内面調整はケズリ・ハケのものが多い。最も多いのは、外面タタキ、内面ハケの甕である。b類は、外面調整はタタキとハケに二分されるが、内面はケズリ調整と強く相関する。c類は多様な属性の組み合わせが存在するものの、外面調整がタタキ・タタキ→ハケのものが多く、タタキ技法との関係が見られる。全形が判明している資料では、タタキが肩部付近まで及ばない個体もあるため、外面調整をタタキとしたものの中には実際にはタタキ→ハケのものが一定量含まれていると考えられる。内面調整はハケで仕上げるものが多い。d類は外面ハケ調整、内面ケズリ調整のものと強い相関性を示すことを特徴とする。e類は母数の少なさから相関性を読み取ることは困難ではあるが、外面はハケ調整で仕上げ、内面はケズリ調整のものがある。外面にタタキ痕を持つものは確認できない。その他については点数が少なく傾向は読み取れない。しかし、ここに含まれる山陰系甕・吉備系甕は胎土が特異であり搬入品と考えてよければ、おそらく外面はハケ、内面はケズリ調整を行っていたと推測される。



第９図　甕の主要型式

さて、ここで抽出できた相関性の強いまとまりを型式として設定しなおすと以下の４型式に分類できる（第９図）。

甕Ａ：口縁部を丸くおさめ（ａ類）、外面タタキ、内面ハケ調整の甕。

甕Ｂ：口縁端部を僅かに肥厚させて面をもち（ｂ類）、外面ハケ、内面ケズリ調整の甕。頸部から口縁部にかけて外反するものが多い。

甕Ｃ：口縁端部を上方に摘み上げ（ｃ類）、外面タタキ又はタタキ→ハケ、内面ハケ調整の甕。

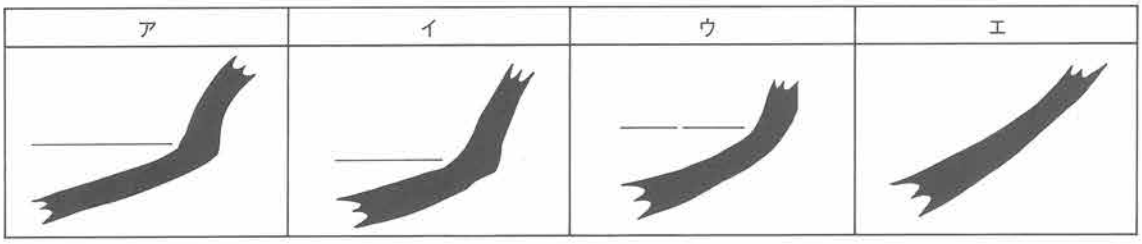
甕Ｄ：口縁部を二重口縁状に上方に拡張させ（ｄ類）、外面ハケ、内面ケズリ調整の甕。

これらの型式の甕は、流路という出土遺構の性格から時期差を含んでいることが予想され、一方で地域差・系統差も内包している可能性がある。そこで、次にこれらの各型式の甕を周辺地域の土器の中で位置づけていきたい[1]。

甕Ａは口縁部に際立った特徴はないものの、外面にタタキを施すことから播磨南部地域との関係が強いと考えられ、また内面をハケで調整していることから後期後半以降[2]の土器である可能性が高い。甕Ｂの口縁端部は、後期の中でも古い段階に一般的に認められるものである。外面ハケ、内面ケズリを用いていることから播磨南部地域や北近畿地域で後期前半を中心とする時期に見られる土器であると考えられる。甕Ｃの口縁部を摘み上げる手法は、播磨南部地域でも北近畿地域でも一定量認められるが、タタキ技法と強く相関することから播磨南部地域との関係が想定される。西播磨地域では後期後半（西播磨Ⅱ新相）以降に出現する型式である[3]。甕Ｄは、北近畿地域に系譜を持つことが知られている土器である。丹後地域では大山２式以降見られる型式であるが、ここでｄ類と分類した口縁形態は口縁部の拡張が大きく外反するものであり、西谷式以降盛行する型式である[4]。なお、型式の設定は行わなかったが、口縁部を上下に肥厚させ（ｅ類）、端面には凹線文・擬凹線文を施す甕は、中期の瀬戸内地域に系譜をもつ後期前葉の甕であると考えられる。以上のように各型式の甕を位置づけることができるならば、後期前半を中心とした時期の瀬戸内地域に淵源のある甕Ｂと、後期後半に播磨南部地域で普遍的な甕Ａ・甕Ｃ、後期後葉～庄内式期に北近畿地域で盛行する甕Ｄという整理が可能であろう。

＜高坏＞

高坏は、壺・甕・鉢などと異なり、基本的には内外面ともミガキ調整で統一されている。したがって、内外面調整を属性の指標に用いることは適切ではない。一方で、口縁端部の形状と坏部の形状にはいくつかのバリエーションが見られたため、高坏に関しては口縁部と坏部の形状をもとに分類し、型式の設定を試みる。口縁端部の分類は甕の場合と同様とし（第８図）、坏部の形状は坏部から口縁部に続く屈曲



第10図　高坏の屈曲部分類

第５表　高坏の属性表

		坏屈曲部分類															計（口縁部分類）
		ア			イ			ウ			エ			不明			
		SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	SD4	SD7	他	
口縁部分類	a	21	8	2	4	16						5					56
	b			1									2				3
	c	1						1	2			5		1	1		11
	d							14	3	7	1	1		1	2		29
計（坏屈曲部形態）		33			20			27			14			5			99

※網かけ部分は、各遺構の合計が20片以上となるもの（不明は除く）

部の形態によって以下の４つに分類する（第 10 図）。

［高坏の屈曲部分類］

ア類：直線的にのびる坏下半部から大きく外反するもの。

イ類：直線的にのびる坏下半部から屈曲して直線的に外傾するもの。

ウ類：内弯する坏部から肩をもって屈曲するもの。

エ類：屈曲部に稜を持たず、内彎して口縁部にいたるもの。椀形の高坏。

不明：口縁部のみの破片であり、坏屈曲部の形状が不明なもの。

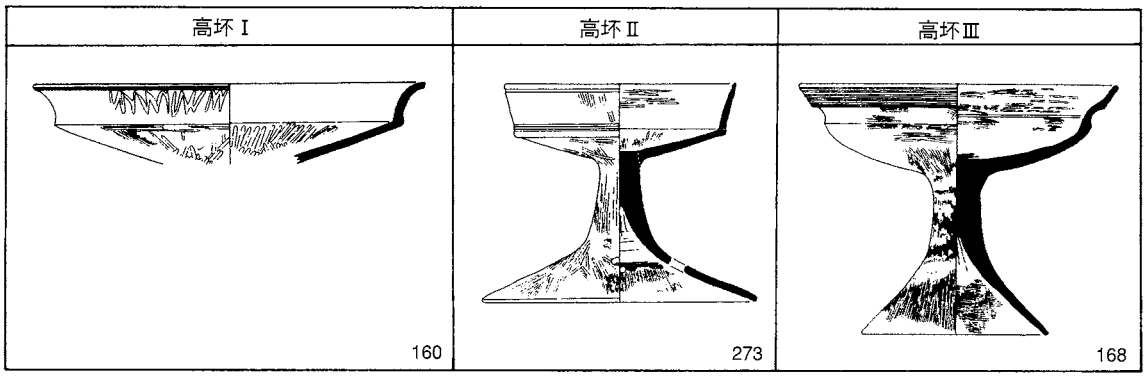
このようにして口縁部と坏屈曲部の形状を組み合わせたところ、様々なバリエーションと組み合わせの集中が見られた。口縁部分類 a 類は坏屈曲部分類ア類・イ類と強い相関性を持つ。b 類・c 類は、特定の坏屈曲部形態と相関しない。d 類はウ類との組み合わさることが多い。このような組み合わせをもとに、甕と同様に以下の通り型式を設定した（第 11 図）。

高坏Ⅰ：直線的にのびる坏下半部から大きく屈曲・外反して、丸くおさめる口縁部にいたる高坏。口縁部外面には、波状の暗文を施すものが多い。

高坏Ⅱ：直線的にのびる坏下半部から屈曲・外傾して、丸くおさめる口縁部にいたる高坏。口縁部外面の上端・下端には擬凹線文や沈線文が施されるものが多い。

高坏Ⅲ：内弯する口縁から肩を持って立ち上り、そこから外反・外傾する二重口縁を持つ高坏。口縁部外面には擬凹線を施すものが多い。

次に、型式の位置づけを行う。高坏Ⅰは、播磨南部地域では後期中葉（西播磨後期Ⅱ）以降一般的に見られる型式である。高坏Ⅰは口径が大きく坏部も浅いため、内外面に明瞭な稜をもつ高坏の中では古く位置づけられる。高坏Ⅱは、高坏Ⅰに比べて口径が小さい小形の高坏である。高坏の小形化という点では、高坏Ⅰよりも新しい傾向がありそうだが、必ずしも時期差を示しているとはいえない。この高坏Ⅱ



第11図　高坏の主要型式

は播磨地域でも北近畿地域でも普遍的に出土する器種ではない。西播磨地域では、周世入相遺跡で土壙22、土壙20で出土しており、後期中葉（周世Ⅰ式・Ⅱ式）に位置づけられている[5]。その他には、たつの市養久山墳墓群32号墓22地点[6]や、播磨町大中遺跡第1土器群[7]などに類例がある。擬凹線文を口縁部外面に施すことから北近畿地域との影響関係も想定できる器種である。高坏Ⅲは、北近畿地域において特徴的に見られ、西谷式（後期後葉～庄内式期）以降に盛行する型式である。播磨南部地域や北近畿地域において後期前葉に位置づけられる坏部が強く屈曲して上方に立ち上り、口縁端部を肥厚させて面を持つ高坏は出土していない。また、北近畿地域の大山式に特徴的な半環状把手付の高坏も認められない。これらのことから、大局的には高坏が盛行するのは後期中葉以降であり、後期中葉段階では高坏Ⅰと高坏Ⅱが使用され、後期後葉～庄内式期にかけて北近畿地域の高坏Ⅲが使用されたと考えられる。

（２）遺構の評価

甕と高坏の各型式についてSD04とSD07を比較する。甕は、SD04では4つの型式すべてが認められるのに対し、SD07ではタタキを施すA類・C類のみが見られる。SD07で古相を呈する甕Bが認められずにより新しい甕A・甕Cが見られることは、後期の中でも新しい傾向を示していると考えられるが、後期後葉～庄内式期の北近畿系の甕Dは認められない。高坏では、高坏Ⅰと高坏ⅢはSD04で多く見られるのに対し、高坏ⅡはSD07に多い。

このように、SD04は、後期前葉～庄内式期までの長い時間幅の土器を含んでいるのに対し、SD07は、甕A・甕Cや高坏Ⅱという後期中葉～後葉を中心とした土器を多く含んでいる。SD04の資料の母数には差があり、また両遺構資料とも複数型式にわたる時間幅をもっている。そのため、一括性は高く無いものの、SD07はSD04に比べれば比較的まとまった時期の資料群であるといえる。

（３）後期弥生土器の様相

甕と高坏について主要型式を設定して、それらの土器の位置づけについて見てきた。最後に川戸遺跡の弥生時代後期の土器についてまとめておく。

川戸遺跡の後期弥生土器の中で最も古く位置づけられる土器は、口縁部を肥厚・内傾させ（e類）、内面ケズリ技法を多用し、外面はハケ調整を行う甕であろう。これは、瀬戸内地域に源流を持つものと考えられるが、数量は少ない。この種の甕が少ないことは、口縁部を肥厚させて面をもつ後期前葉の高坏が確認されていないこととも整合的である。後期中葉以降になると土器が増え始める。甕では、口縁部形態に古い様相が見て取れる甕Bや、内外面調整に相対的に新しい様相が見られる甕A・甕Cが製作される。これらの後期中葉以降の甕と時期的に併行すると考えられるのは高坏Ⅰ・Ⅱである。一方で、北近畿系の甕（甕D）や高坏（高坏Ⅲ）も一定量見られたが、ほとんどは西谷式段階以降のものと判断さ

れる。このように、川戸遺跡の弥生後期の土器は、後期前半から後期後葉にかけて播磨南部地域との類似性が認められる一方で、後期後葉以降、主に庄内式併行期を中心とする時期に北近畿地域の土器様式圏に含まれていくという時期的変遷が想定できる。

以上、川戸遺跡の後期弥生土器の様相について、周辺地域の土器編年に照らすかたちで概観してきた。播磨地域と北近畿地域は後期初頭には共通した技法を用いた甕などが製作されるものの、後期を通じて次第に地域色が明確となっていく。地理的に両地域の中間に位置する川戸遺跡では、畿内地域と歩調を合わせる播磨地域と、北陸地域や山陰地域など日本海沿岸地域と親縁性をもつ北近畿地域の土器が製作された。しかし、一律に両地域の影響を受けていたのではなく、強く影響を受ける地域は時期によって変化していることが考えられる。もちろん、川戸遺跡の土器が播磨南部地域や北近畿地域の土器の変化と必ずしも一致するとは限らない。概して土器様式圏の周辺部では古い様相が新しい時期まで残存したり、折衷土器が製作される傾向が強い。しかし、川戸遺跡では口縁部形態と内外面調整の組み合わせなどに多様性が認められるものの、形態上の折衷土器などは一部の高坏などを除いて顕著には認められなかった。このことは、時期によって強い影響をもつ地域が異なっていることを示しているともいえる。今後、川戸遺跡周辺の遺跡における良好な一括資料を用いて、当地域の土器の変化についてさらに検討していく必要があろう。

註

1．周辺地域としては、大きく播磨沿岸部を中心とした「播磨南部」と但馬・丹後・丹波地域を中心とした「北近畿」をそれぞれ別々の土器様式圏として想定する。なお、「播磨南部」は後期中葉以降、河内・大和・摂津といったいわゆる「畿内」地域との類似性が認められるため、広義の「畿内系」に含めることができるが、ここでは「播磨南部系」としておく。

2．川戸遺跡出土の土器は一定の時間幅を含んでいるため、細かな時期比定は難しい。そのため、土器の時期に関しては、弥生時代後期を二分して前半・後半、もしくは三分して前葉・中葉・後葉という大きな区分に留めておく。そして後続する時期を庄内式期や庄内式併行期として使用する。

3．岸本道昭　1998「播磨弥生後期前半土器の実態と編年」『小神辻の堂遺跡』　龍野市教育委員会

4．高野陽子　2006「丹後地域―擬凹線文系土器の様式と変遷―」『古式土師器の年代学』　大阪府文化財センター

5．甲斐昭光　1990「遺物の検討」『周世入相遺跡』兵庫県教育委員会

6．近藤義郎編　1985『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会

7．山本三郎・田井恭一編　1990『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会

第３節　総括

１．川戸遺跡の弥生土器（第 12 図）

川戸遺跡の弥生土器について器種分類あるいは統計的な分析を通じて特徴を見てきた。これらを簡単にまとめると以下のようになる。

（１）土器の時期

後期前半の土器は広口壺 Aa・甕 F・甕 G・高坏 Aa・高坏 Ab がある。

後期後半の土器は広口壺 Ab・甕 Aa・甕 Ab・甕 C・甕 D・広口壺 B・広口壺 E・広口長頸壺がある。

古墳時代初頭の土器は甕 Ab・鉢 F・鉢 G・高坏 Ac・高坏 Ad・高坏 D c ・器台 Dc・器台 F がある。

（２）土器の地域性

西播磨南部地域の様相を持つ土器

広口壺 Aa・広口壺 Ab・広口壺 B・二重口縁壺・広口長頸壺・長頸壺・短頸壺 A・短頸壺 B・甕 Aa・甕 Ab・甕 B・甕 G・鉢 A・鉢 Ba・鉢 Bb・鉢 D・高坏 Aa・高坏 Ac・高坏 Ad・高坏 B・高坏 C・器台 A・器台 B・器台 F などタタキを行うものやミガキで仕上げるものが中心であり、弥生時代後期前半から古墳時代初頭に位置づけられる。

北近畿地域の様相を持つ土器[1)]

広口壺 E・細頸壺 B・甕 E・鉢 E・高坏 D・器台 D に分類した土器が該当する。甕は体部外面をハケ調整し、内面はケズリを行っている。鉢・高坏・器台はミガキで仕上げている。口縁部の特徴は有段口縁であり、口縁端部が直立し擬凹線文を施すもの（高坏 Da・器台 Da)、口縁端部が外傾し擬凹線文を施すもの（広口壺 Ea・甕 Ea・鉢 E・高坏 Db・器台 Db)、口縁端部に擬凹線文を施さないもの（広口壺 Eb・甕 Eb・高坏 Dc・器台 Dc）とがある。広口壺 E・細頸壺 B・鉢 E は少ないものの、甕 E・高坏 D・器台 D は比較的まとまって出土している。以上、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の西谷 2 式を中心とした時期に位置づけられる。

このような北近畿地域の特徴を持つ土器も細部を見ると、高坏 168 は脚部が短く、高坏 169 の脚部は内弯していないなど、西丹波地域の様相を示している。器台 192・195 は受部が直線的であり、受部と脚部の境が屈折しており但馬地域の様相を示している。器台 190・193 受部と脚部の境が屈曲しており北丹波地域の様相を示している。細頸壺 62 は南丹波の京都府八木町野条遺跡[2)] で出土しており、報告書では北陸地域の土器と考えている。

因幡地域の様相をもつ土器

甕 I に分類した 110 は、因幡地域を中心とした日本海地域の古墳時代初頭に位置づけられる。

スタンプ文を施す土器 206・207 は、因幡地域の土器である。

吉備地域の様相を持つ土器

甕 J に分類した 109 は、古墳時代初頭に位置づけられる。

河内地域の様相を持つ土器

実測し、掲載した土器は 15 の 1 点であるが、複数個体の大形の広口壺の頸部や体部の破片が出土している。形態や特徴から弥生時代後期前半の生駒西麓産に位置づけられる。胎土分析でも D 類に分類されており、他とは異なる。ただし胎土分析では断層粘土との位置づけを行った結果、川戸遺跡付近の可能性が考えられる。

第12図　川戸遺跡と土器の地域分類

（３）土器の動態

以上、弥生時代後期前半は畿内Ⅴ様式を構成する西播磨南部地域の土器様相であり、生駒西麓産の土器が僅かに搬入されている。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては畿内Ⅴ様式を構成する西播磨南部地域の様相と北近畿地域擬凹線文土器様式[3]の、主として２系統の土器により構成されていることが判明した。古墳時代初頭以降は西播磨南部地域の土器様相であり、擬凹線文土器様式の影響を受けた土器様式が生まれることはなかった。この時期は吉備地域や日本海地域から僅かに搬入されている。

弥生時代後期末を中心とする北近畿地域の擬凹線文土器様式は高野陽子が明らかにしたように、丹後地域を中心に但馬地域、若狭地域、北丹波地域、西丹波地域に分布圏を持つ。この分布圏外の西側の鳥取市西大路土居遺跡などでは、点的にまとまった擬凹線文土器が出土している。このあり方は、川戸遺跡を考える上で参考になる。つまり、川戸遺跡は擬凹線文土器様式圏の南西部周縁での点的なあり方を示しているといえよう。

２．川戸遺跡の変遷（第 13 図）

今回の主要地方道宍粟香寺線県単独道路改良事業における川戸遺跡の発掘調査の成果と山崎町の農村活性化住環境整備事業（川戸地区）による川戸遺跡の発掘調査の成果[4]を合わせて、川戸地区における遺跡の変遷を考えてみる。主要地方道宍粟香寺線県単独道路改良事業における川戸遺跡の発掘調査の成果は第３章で述べたとおりであり、山崎町の農村活性化住環境整備事業（川戸地区）による川戸遺跡の発掘調査の成果は第２章で述べたとおりである。

対象とする川戸地区は東側と北側を山、西側と南側を揖保川で囲まれた、地形的にまとまった地域である。緩やかに南に傾斜しており、圃場整備前は条里地割の痕跡が残っていた。

川戸地区の面積は約 600,000 ㎡を測り、兵庫県教育委員会が発掘調査した 506 ㎡と、山崎町教育委員会が発掘調査した 807 ㎡を合せた 1,313 ㎡の調査しており、全体の約 0.2%の調査を実施したことになる。0.2%と少ない割合であるが、大まかな遺跡の変遷をまとめることとする。

（１）弥生時代中期

弥生時代中期の遺跡の範囲は川戸地区のほぼ中央部に位置するＡ地域である。水田域の範囲は不明であるが、Ａ地域に隣接する弥生時代後期～古墳時代初頭遺構の水田であるＧ地域の一部が弥生時代中期の水田域であった可能性が高い。

（２）弥生時代後期から古墳時代初頭

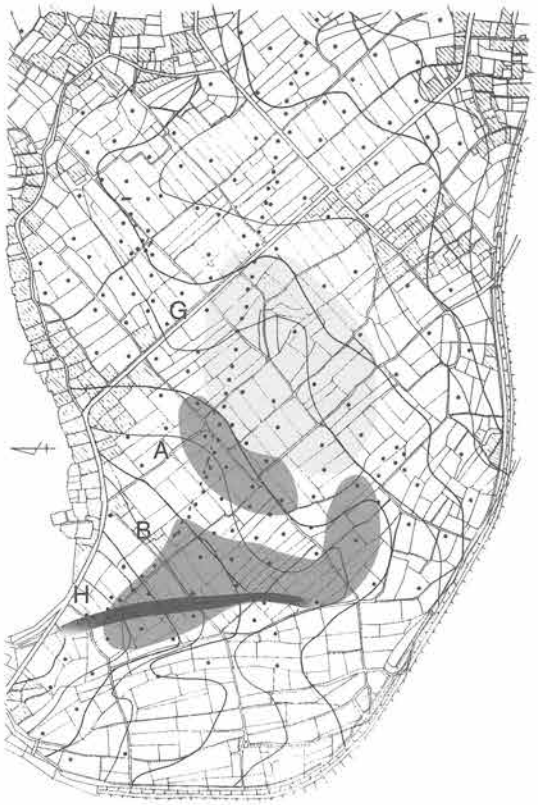
弥生時代後期から古墳時代初頭の川戸遺跡は居住域と水田域が想定できる。居住域の範囲は弥生時代中期のＡ地域が南北に拡大すると共に、Ａ地域西側の微高地縁辺のＢ地域に範囲を拡げる。Ａ地域とＢ地域との間に僅かに空間が存在するが、同一の範囲となる可能性が高い。居住域の中には自然流路Ｈが北から南に向かって流れている。水田域の範囲はＧ地域であり居住域の東側に接している。

（３）古墳時代後期

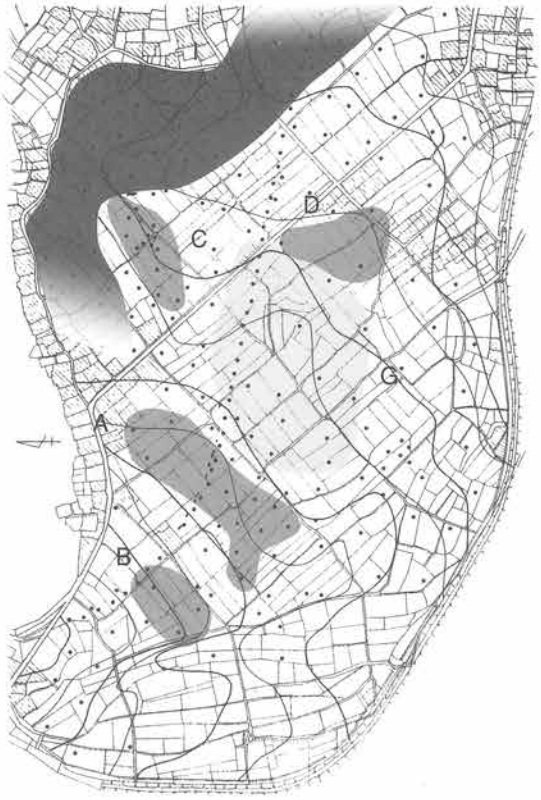
古墳時代後期の川戸遺跡は居住域と水田域が想定できる。居住域の範囲はＡ地域が北側と西側に拡大し、Ｂ地区は範囲が狭くなる。新たに、水田地域Ｇの北西側のＣ地域と東側のＤ地域に居住域が出現した。Ａ地域、Ｂ地域、Ｃ地域、それぞれで竪穴住居を検出していることから居住域の空間が繋がる可能性がある。水田域の範囲はＧ地域であり、弥生時代後期から古墳時代初頭までの時期と、ほとんど変わらない。居住域Ｃ地域の北側から東側にかけては自然流路Ｉが流れている。

（４）平安時代から中世

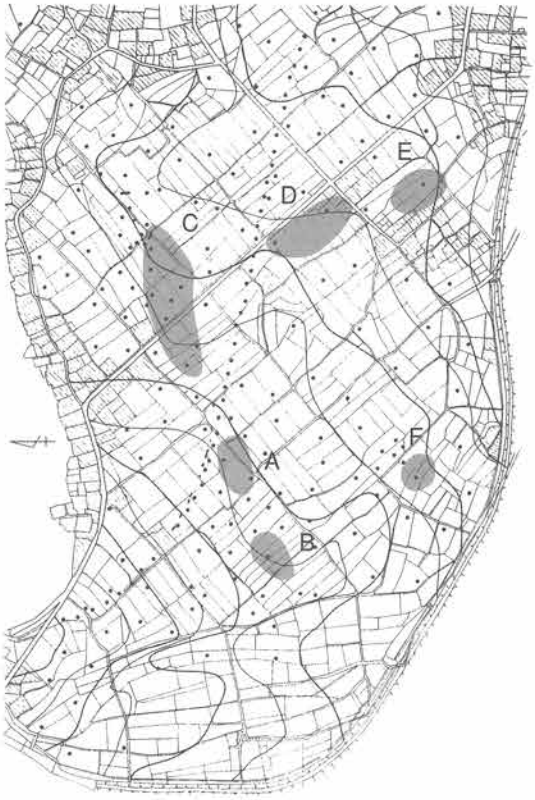
1　弥生時代中期



2　弥生時代後期～古墳時代初頭



3　古墳時代後期



4　平安時代～中世

第13図　川戸遺跡の変遷

古墳時代後期以降、平安時代までの間に、川戸地区の条里を施工したと考えられる。古墳時代後期に存在した自然流路Ｉは埋められ、条里遺構が存在している。平坦化が行われ、現在に近い揖保川の流れと水路を設置したと考えられる。A・B・C・D・E の各地域で遺物が出土しているが、弥生時代後期から古墳時代初頭や古墳時代後期の広い範囲のまとまりと異なって、比較的規模の狭い範囲のまとまりとなっている。C 地域では土坑やピットを検出しており、散村の景観が復原できる。

中世以降は比較的安定し、現在の集落と重複して現在に至っている可能性がある。

以上、川戸遺跡の変遷をまとめてみた。川戸遺跡の始まりは弥生時代中期後半からである。弥生時代後期から古墳時代初頭になると居住域の範囲は拡大し、水田の範囲も居住域 A に隣接する水田域 G が出現する。古墳時代後期になると新たに居住域は水田 G の北東側と東側に拡大する。ここから平安時代の間に条里が施工され、揖保川の現在の姿になったことが考えられる。平安時代から中世にかけては散村の景観が復元できる。

３．川戸遺跡のまとめ

川戸遺跡の発掘調査で、弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代後期、中世の遺構と遺物を検出した。特に弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構と遺物が中心である。この中で、SD04 と SD07 から出土した弥生時代後半から古墳時代初頭における土器が多数を占めた。

特に、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては、北近畿地域の擬凹線文土器様式の土器が多く出土した。この時期、東播磨北部地域においても北近畿地域の土器様相の影響が大きい。川戸遺跡で出土している擬凹線文土器様式は西谷２式を中心とした時期である。この時期は丹後半島の王墓である峰山町赤坂今井墳丘墓が作られた時期であり、北近畿地域の勢力が最も優勢であった時期である。

川戸遺跡で出土している北近畿系土器から交流ルートを考える必要がある。北近畿地域のうち、播磨北部地域に隣接している地域には但馬地域と丹波地域がある。川戸遺跡と但馬地域を結ぶルートは揖保川を遡り、宍粟市一宮町笠杉峠を越え朝来市朝来町の円山川に出るルートと富士野峠を越え養父市大屋町の大屋川に出るルート、宍粟市波賀町若杉峠を越え養父市大屋町の大屋川に出るルートがある。また、山崎断層沿いに東へ進み、福崎町から市川を遡り、朝来市生野町の円山川に出るルートがある。

川戸遺跡と丹波地域を結ぶルートは山崎断層沿いに東へ進み、加東市から加古川を遡り、丹波市の竹田川に出るルートがある。

以上、いくつかのルートを考えたが、擬凹線文土器様式圏までの距離は 35Km 以上あり、遠い上に、これらのルート上に多くの遺跡が存在する可能性がある。これらの遺跡で擬凹線文土器が出土するのか、しないかは、川戸遺跡を評価する上で大きく変わってくる。川戸遺跡周辺の西播磨北部地域および、川戸遺跡から擬凹線文土器様式圏へのルート上にある遺跡のうち発掘調査が実施された遺跡はまだ数少なく、様相が明らかになっていない部分が多い。今後、これらの調査の進展を待って再考したい。

註

１．北近畿地域の土器については、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの高野陽子氏にご教示を頂いた。

２．財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「野条遺跡第 7 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 110 冊

３．高野陽子「近畿地方北部の土器」『考古資料大観 2』弥生・古墳時代土器Ⅱ　小学館　2002

高野陽子「丹後地域－擬凹線文土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財調査研究センター　2006

4．山崎町教育委員会の発掘調査成果については県道の本発掘調査の際に山崎町（当時）の亀井義彦氏に調査成果の概要説明と出土遺物見学の配慮を頂いた。

第14図　川戸遺跡調査地点の現在（南東から）

別表１（1）

報告No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	出土地区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
1	7	24	土師器	椀	口縁部～底部	2W	SX06	11.8	4.2+	－		2000246	298
2	7	24	土師器	甕	口縁部	2W	SX06	(17.5)	6.4+	－		2000246	288
3	7	24	土師器	製塩土器	口縁部	2W	SX06	(6.0)	2.9+	－		2000246	289
4	7	24	土師器	甕H	口縁部	3W	SD02	(16.8)	4.2+	－		2000246	290
5	7	24	須恵器	坏H蓋	口縁部	1W	包含層	14.0	3.2+	－		2000246	294
6	7	24	須恵器	坏H身	口縁部～底部	1E	包含層	11.6	4.7	－		2000246	296
7	7	24	須恵器	坏H蓋	口縁部	1W	包含層	11.4	3.8+	－		2000246	293
8	7	24	須恵器	坏H蓋	口縁部	1W	包含層	14.2	3.8+	－		2000246	295
9	7	24	須恵器	椀	底部	1W	包含層	－	1.7+	6.6		2000246	297
10	7	25	弥生土器	広口壺B	口縁部～体部	1E	SH05	(12.0)	5.3+	－		2000246	171
11	7	25	弥生土器	甕B	口縁部	1E	SH05	(16.7)	4.3+	－		2000246	131
12	7	25	弥生土器	鉢C	口縁部	1E	SH05	(18.8)	2.8+	－		2000246	101
13	7	6・25・54	弥生土器	器台B	口縁部～裾部	1E	SH05	27.7	27.1	(26.9)		2000246	011
14	7	25	弥生土器	器台	裾部	1E	SH05	－	1.7+	(27.0)		2000246	168
15	7	25・56	弥生土器	広口壺	口縁部	2E	包含層	(23.2)	2.5+	－	21	2000246	283
16	7	25・52	弥生土器	壺	体部	1E	包含層	－	5.3+	－		2000246	279
17	7	25	弥生土器	鉢	底部	1W	包含層	－	3.5+	5.0		2000246	152
18	7	25・53	弥生土器	広口壺Ea	口縁部	2E	包含層	(15.2)	3.4+	－		2000246	173
19	7		弥生土器	甕D	口縁部	3W	包含層	(34.6)	4.8+	－		2000246	303
20	7	25	弥生土器	高坏D	脚部	3W	包含層	－	9.0+	12.8		2000246	107
21	7	25	弥生土器	高坏	脚部	2E	包含層	－	7.0+	11.1		2000246	081
22	7		弥生土器	高坏	脚柱部	5W	包含層	－	8.2+	－		2000246	310
23	7	25	弥生土器	甕I	頸部	1W/1E	包含層	－	3.2+	－		2000246	287
24	7	25	弥生土器	鉢	口縁部	2W	包含層	(13.7)	2.9+	－		2000246	207
25	8	27	弥生土器	広口壺	口縁部	4E	SD04	(13.7)	1.0+	－		2000246	118
26	8	4・5・26・48	弥生土器	広口壺B	口縁部～体部	4E	SD04	10.9	10.8+	－		2000246	181
27	8	27	弥生土器	広口長頸壺	口頸部	4W	SD04	(13.2)	6.2+	－		2000246	184
28	8	27	弥生土器	広口壺C	口縁部～頸部	1W	SD04	18.0	13.4+	－		2000246	157
29	8	4・5・26	弥生土器	広口壺	口縁部～肩部	3W	SD04	12.3	6.4+	－		2000246	179
30	8	27	弥生土器	広口壺Ab	口頸部	5E	SD04	(18.3)	5.8+	－		2000246	187
31	8	27・54	弥生土器	広口壺Aa	口頸部	5E	SD04	18.3	7.3+	－		2000246	183
32	8	4・5・26	弥生土器	広口壺	頸部～底部	2E/5E/5区北半	SD04	－	25.4+	8.3		2000246	153
33	8	27	弥生土器	広口壺Eb	口頸部	5W	SD04	(14.2)	5.5+	－		2000246	188
34	8	27	弥生土器	広口壺Eb	口頸部	3W	SD04	15.5	4.7+	－		2000246	178
35	8	38・53	弥生土器	広口壺Ea	口縁部	3W/4W	SD04	(22.0)	5.0+	－		2000246	066
36	8	26	弥生土器	広口壺B	口縁部	5区北半/5E	SD04	13.2	25.6+	－		2000246	154
37	8	4・5・26・48	弥生土器	広口壺Ab2	口縁部	5E/5W	SD04	16.3	17.9+	－		2000246	053
38	8	27	弥生土器	広口壺	体部	3W/4E	SD04	－	7.4+	－	22	2000246	278
39	8	27	弥生土器	壺	体部～底部	1W	SD04	－	8.0+	3.2		2000246	177
40	8	26	弥生土器	壺	体部～底部	1W/3E/4W/5E	SD04	－	10.3+	(5.3)		2000246	176
41	8	27	弥生土器	壺	底部	4E	SD04	－	7.2+	8.4		2000246	231
42	8	27	弥生土器	壺	底部	4W	SD04	－	3.3+	3.1		2000246	224
43	8	27	弥生土器	壺	底部	4E	SD04	－	4.4+	4.1		2000246	220
44	8	27	弥生土器	壺	底部	4W	SD04	－	3.4+	3.4		2000246	229
45	8	27・58	弥生土器	壺	底部	4W	SD04	－	4.5+	4.4		2000246	198
46	8	27	弥生土器	壺	底部	1W	SD04	－	3.4+	3.9		2000246	230
47	8	27	弥生土器	壺	底部	4E	SD04	－	2.9+	4.4		2000246	221
48	8	27	弥生土器	壺	底部	5W	SD04	－	2.5+	4.3		2000246	223
49	8	27	弥生土器	壺	底部	5W	SD04	－	3.5+	3.2		2000246	232
50	9	28	弥生土器	短頸壺B	口頸部～体部	4E	SD04	9.7	4.7+	－		2000246	180
51	9		弥生土器	短頸壺B	口頸部	5E	SD04	(9.9)	3.7+	－		2000246	306
52	9	28	弥生土器	短頸壺B	口頸部	3W	SD04	12.5	4.4+	－		2000246	175
53	9		弥生土器	短頸壺B	口頸部	3W	SD04	(16.8)	4.9+	－		2000246	305
54	9	28	弥生土器	短頸壺B	口頸部	3E/3W/4W	SD04	16.0	31.3+	－		2000246	155
55	9	28	弥生土器	短頸壺A	口頸部	4E	SD04	(11.0)	4.9+	－		2000246	182
56	9	4・5・28・48	弥生土器	短頸壺A	口頸部～体部	5W	SD04	9.3	10.9+	－		2000246	172
57	9	28	弥生土器	長頸壺	口頸部	5E	SD04	9.8	6.7+	－		2000246	186
58	9	28	弥生土器	長頸壺	口頸部	5E	SD04	9.7	8.5+	－		2000246	185
59	9	28	弥生土器	水差	体部～底部		SD04	－	10.4+	3.1		2000246	206
60	9	28	弥生土器	壺	体部～底部	4W/3W	SD04	－	19.4+	3.2		2000246	200
61	9		弥生土器	二重口縁壺	口縁部	2W	SD04	(20.6)	4.2+	－		2000246	304
62	9	39	弥生土器	細頸壺B	口縁部	3W/5W	SD04	－	5.7+	－		2000246	069
63	9	4・5・28・58	弥生土器	細頸壺A	体部～底部	4E	SD04	－	8.9+	1.3		2000246	190
64	9	4・5・28	弥生土器	蓋	摘部～口縁部	3W	SD04	13.7	6.6+	－		2000246	216
65	9	29	弥生土器	蓋	摘部～体部	3W	SD04	－	5.6+	－		2000246	217
66	9	29	弥生土器	蓋	摘部～体部	4W	SD04	－	4.9+	－		2000246	219
67	9	29	弥生土器	蓋	摘部～体部	3W	SD04	－	4.9+	－		2000246	218
68	9	29	弥生土器	土製円板	完存	4W	SD04	縦4.7	横4.7	厚0.65		2000246	280
69	10	31	弥生土器	甕Aa	口縁部～体部	5E	SD04	12.2	7.2+	－		2000246	145
70	10	31	弥生土器	甕Ab	口縁部～体部	5E	SD04	12.3	9.8+	－		2000246	089
71	10	31	弥生土器	甕Aa	口縁部～体部	5E	SD04	(13.9)	6.9+	－		2000246	146
72	10	31	弥生土器	甕Aa	口縁部～体部	4E	SD04	13.8	5.8+	－		2000246	126
73	10	5・30	弥生土器	甕Ab	口縁部～体部	5E/5区北半	SD04	14.7	9.9+	－		2000246	086
74	10	31	弥生土器	甕Aa	口縁部～体部	4W	SD04	(10.5)	8.5+	－		2000246	087
75	10	4・5・30	弥生土器	甕Ab	口縁部～体部	5E/5区北半	SD04	12.4	12.6+	－		2000246	091
76	10	31	弥生土器	甕Aa	口縁部～体部	4W	SD04	(15.8)	3.7+	－		2000246	142
77	10	26	弥生土器	甕	口縁部～体部	5区北半/5E/2W	SD04	14.4	7.0+	－		2000246	189
78	10	31	弥生土器	甕	口縁部～体部	5W	SD04	(20.5)	3.4+	－		2000246	148
79	10	31	弥生土器	甕	口縁部～体部	4E/4W	SD04	(17.4)	12.7+	－		2000246	127

別表１（2）

報告No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	出土地区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
80	10	31・49	弥生土器	甕Ab	口縁部～体部	4W/3W	SD04	(12.9)	18.2+	－		2000246	125
81	10	31	弥生土器	甕C	口縁部～体部	5E/5区北半	SD04	(13.0)	9.5+	－		2000246	129
82	10	31	弥生土器	甕B	口縁部～体部	4E	SD04	15.4	4.5+	－		2000246	139
83	10	33	弥生土器	甕C	口縁部～体部	5区北半/5E	SD04	14.0	4.0+	－		2000246	130
84	10	31	弥生土器	甕C	口縁部～体部	5E/5区北半	SD04	(14.7)	16.6+	－		2000246	090
85	10	33	弥生土器	甕C	口縁部～体部	3W	SD04	15.6	5.8+	－		2000246	138
86	10	31	弥生土器	甕B	口縁部～体部	5E	SD04	13.2	4.4+	－		2000246	144
87	10	4・5・30・49	弥生土器	甕B	口縁～底部	4W/4E	SD04	14.1	5.8+	1.9	1	2000246	088
88	10	4・5・30・49	弥生土器	甕B	口縁部～体部	4W	SD04	16.7	19.0+	－		2000246	050
89	10	4・5・32・52	弥生土器	甕B	口縁部～体部	4W	SD04	12.6	12.8+	－		2000246	056
90	10	31・57	弥生土器	甕	底部	4W	SD04	－	6.9+	4.5		2000246	195
91	10	31	弥生土器	甕	体部～底部	4E	SD04	－	11.7+	4.9		2000246	158
92	10	31	弥生土器	甕	底部	2W	SD04	－	3.6+	3.1		2000246	191
93	11	29	弥生土器	甕G	口縁部～体部	5区	SD04	10.3	6.0+	－		2000246	143
94	11	29	弥生土器	甕G	口縁部～体部	5E	SD04	(15.0)	6.3+	－		2000246	147
95	11	29	弥生土器	甕G	口縁部～体部		SD04	(12.9)	4.8+	－		2000246	149
96	11	29	弥生土器	甕G	口縁部～体部		SD04	(14.1)	3.7+	－		2000246	150
97	11	29	弥生土器	甕G	口縁部～体部	1W	SD04	16.1	5.6+	－	2	2000246	124
98	11	29・50	弥生土器	甕G	口縁部～体部	1W/2W	SD04	15.2	13.7+	－		2000246	123
99	11	29・50	弥生土器	甕G	口縁部～体部	3W	SD04	15.6	12.0+	－		2000246	120
100	11	29・50	弥生土器	甕G	口縁部～体部	3W	SD04	14.0	7.6+	－	3	2000246	121
101	11	29	弥生土器	甕	口縁部～体部	3W	SD04	(11.5)	6.8+	－		2000246	235
102	11	4・5・30	弥生土器	甕G	口縁部～体部	2W	SD04	12.3	10.9+	－		2000246	122
103	11	29	弥生土器	甕G	底部	2W	SD04	－	6.4+	4.4		2000246	192
104	11	29	弥生土器	甕G	底部	5E	SD04	－	4.3+	6.0		2000246	226
105	11	29・57・58	弥生土器	甕G	底部	5E	SD04	－	6.8+	4.6		2000246	193
106	11	4・5・30	弥生土器	甕D	口縁部～体部	3E/3W/4W	SD04	15.6	14.8+	－		2000246	063
107	11	29	弥生土器	甕Eb	口縁部～体部	4E/4W	SD04	14.2	5.5+	－		2000246	128
108	11	29	弥生土器	甕F	口頸部	5E	SD04	(17.6)	3.0+	－		2000246	281
109	11	29	弥生土器	甕J	口頸部	4E	SD04	(17.0)	2.2+	－		2000246	284
110	11	29	弥生土器	甕I	口頸部	3W	SD04	14.0	4.0+	－	4	2000246	286
111	12	4・5・32・48	弥生土器	甕D	口縁部～体部	4W	SD04	12.5	12.5	3.0		2000246	057
112	12	33	弥生土器	甕D	口縁部	4W	SD04	10.7	5.9+	－		2000246	141
113	12	33	弥生土器	甕D	口縁部～体部	3W	SD04	14.2	8.9+	－		2000246	058
114	12		弥生土器	甕D	口頸部	5W	SD04	(18.8)	4.2+	－		2000246	308
115	12	33	弥生土器	甕Eb	口縁部～体部	3W/4W	SD04	14.3	6.8+	－		2000246	062
116	12	33	弥生土器	甕Eb	口縁部～体部	3W/4W	SD04	(16.2)	16.4+	－	6	2000246	060
117	12	33・48	弥生土器	甕Eb	口縁部～体部	3W	SD04	19.6	7.0+	－	5	2000246	140
118	12	33	弥生土器	甕Eb	口頸部	3W	SD04	(19.2)	4.2+	－		2000246	137
119	12	33	弥生土器	甕Eb	口縁部～体部	4W	SD04	15.3	10.8+	－		2000246	061
120	12	33	弥生土器	甕Eb	口縁部～体部	3W	SD04	(15.1)	4.6+	－		2000246	135
121	12	33	弥生土器	甕Ea	口縁部～体部	1W	SD04	(11.7)	4.9+	－		2000246	132
122	12	33・54	弥生土器	甕Ea	口頸部	3W	SD04	(13.2)	3.1+	－		2000246	133
123	12	33・53	弥生土器	甕Ea	口頸部	3W	SD04	(17.7)	3.5+	－		2000246	134
124	12		弥生土器	甕D	口縁部	5W	SD04	(31.8)	3.1+	－		2000246	302
125	12	33	弥生土器	甕D	口縁部～底部	3E/4W	SD04	(32.6)	54.5+	6.0	7	2000246	092
126	12	33・51	弥生土器	甕E	底部	4W/4E	SD04	－	7.4+	3.1		2000246	194
127	12	33・51	弥生土器	甕E	体部～底部	4W	SD04	－	10.6+	3.0		2000246	199
128	12	4・5・32	弥生土器	甕E	頸部～底部	4W	SD04	－	26.1+	－	8	2000246	049
129	13	35	弥生土器	鉢Bb	口縁部～体部	3W	SD04	(10.1)	5.8+	－		2000246	240
130	13	35	弥生土器	鉢C	口縁部～体部	5E/5W/4W	SD04	(16.2)	9.0+	－		2000246	208
131	13	35	弥生土器	鉢Ba	口縁部～体部	4E	SD04	(24.5)	5.4+	－		2000246	238
132	13	35	弥生土器	鉢Bb	口縁部～体部	5E	SD04	(29.3)	5.5+	－		2000246	209
133	13	4・5・34	弥生土器	鉢Bb	口縁部～体部	5E/5区北半/5W	SD04	32.5	10.0+	－		2000246	051
134	13	4・5・34	弥生土器	鉢Ba	口縁部～底部	1W	SD04	(40.0)	18.7	6.5		2000246	052
135	13		弥生土器	鉢C	口縁部	5区北半	SD04	(15.0)	4.2+	－		2000246	307
136	13	35・48	弥生土器	鉢E	口縁部～体部	1W	SD04	(20.0)	7.7+	－		2000246	239
137	13	4・5・34・53	弥生土器	鉢E	口縁部～体部	4W/3W	SD04	16.2	13.9+	－	9	2000246	084
138	13	4・5・34・58	弥生土器	鉢D	口縁部～脚部	4W	SD04	12.6	6.5	3.8		2000246	236
139	13	35	弥生土器	鉢D	底部	4W	SD04	－	4.5+	3.6		2000246	233
140	13	35	弥生土器	鉢D	底部	3W	SD04	－	4.7+	3.6		2000246	227
141	13	35	弥生土器	鉢	底部	5W	SD04	－	3.2+	4.5		2000246	225
142	13	35	弥生土器	鉢	底部	5W/5E	SD04	－	4.5+	3.1		2000246	222
143	13	35・58	弥生土器	鉢	底部	3W	SD04	－	2.4+	5.5		2000246	197
144	13	35	弥生土器	鉢	底部	5W	SD04	－	5.4+	6.2		2000246	228
145	13	35	弥生土器	鉢	底部	4E/4W	SD04	－	4.4+	4.5		2000246	214
146	13	35	弥生土器	鉢F	体部～底部	3W	SD04	－	6.0+	4.9		2000246	213
147	13	4・5・34	弥生土器	鉢G	口縁部～底部	5E	SD04	9.0	3.9	2.2		2000246	234
148	13	36	弥生土器	鉢G	口縁部～体部	4W	SD04	(10.5)	5.0+	－		2000246	085
149	13		弥生土器	鉢G	底部	4w	SD04	－	(4.8)	－		2000246	300
150	13	35	弥生土器	鉢G	口縁部～体部	4E/4W	SD04	10.5	3.9+	－		2000246	237
151	13		弥生土器	鉢G	底部	3W.4E	SD04	－	(3.1)	－		2000246	301
152	13		弥生土器	鉢G	底部	4W	SD04	－	(2.2)	－		2000246	311
153	13	35	弥生土器	有孔鉢	底部	3W	SD04	－	4.9+	1.5		2000246	201
154	13	35	弥生土器	有孔鉢	底部	4W	SD04	－	6.0+	3.7		2000246	203
155	13	35	弥生土器	有孔鉢	底部	5W	SD04	－	3.3+	3.4		2000246	204
156	13	35	弥生土器	有孔鉢	底部	2W	SD04	－	6.4+	2.8		2000246	205
157	13	35	弥生土器	有孔鉢	底部	3W	SD04	－	8.9+	2.8		2000246	202
158	14	36・55	弥生土器	高坏Aa	口縁部	3W	SD04	(23.8)	2.9+	－		2000246	112

別表１（3）

報告No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	出土地区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
159	14	36	弥生土器	高坏Aa	口縁部	5区/5E	SD04	(24.4)	4.4+	−		2000246	108
160	14	36・55	弥生土器	高坏Aa	口縁部～体部	1W/2W	SD04	30.6	6.4+	−	10	2000246	080
161	14	36・55	弥生土器	高坏Aa	口縁部	5E	SD04	33.2	4.3+	−		2000246	100
162	14	36	弥生土器	高坏Ab	口縁部～体部	2E/1W	SD04	(34.4)	4.9+	−	11	2000246	104
163	14	36	弥生土器	高坏Ad	口縁部	3W	SD04	(19.2)	3.9+	−		2000246	115
164	14	36	弥生土器	高坏B	口縁部	5E/5W	SD04	(17.8)	4.7+	−	12	2000246	113
165	14	36	弥生土器	高坏	脚部	4W	SD04	−	4.6+	−		2000246	106
166	14	36	弥生土器	高坏	脚部	4E/5E南半	SD04	−	8.4+	13.1		2000246	109
167	14	36	弥生土器	高坏Da	口縁部～体部	4W	SD04	(23.6)	4.2+	−		2000246	099
168	14	4・6・36・53	弥生土器	高坏Db	口縁部～底部	4W	SD04	(24.8)	19.7+	(14.5)		2000246	093
169	14	4・6・36・54・55	弥生土器	高坏Dc	口縁部～底部	3W/4E	SD04	23.9	20.5+	(16.6)		2000246	097
170	14	36	弥生土器	高坏	脚裾部	3W/2EW	SD04	−	8.2+	31.4	13	2000246	073
171	14	36	弥生土器	高坏	口縁部	4E	SD04	(11.8)	3.8+	−		2000246	114
172	14	36	弥生土器	高坏	口縁部	3W	SD04	12.7	4.2+	−		2000246	111
173	15	39・54	弥生土器	器台A	口縁部～裾部	5E	SD04	24.7	11.1+	31.0		2000246	078
174	15	39・52・54	弥生土器	器台A	口縁部～裾部	4E	SD04	(33.4)	22.0+	29.3		2000246	055
175	15	38・54	弥生土器	器台B	口縁部	2W	SD04	(23.8)	3.0+	−		2000246	162
176	15	38・54	弥生土器	器台B	口縁部	4E	SD04	(39.7)	2.7+	−		2000246	161
177	15	39・56	弥生土器	器台B	口縁部～裾部	2W/3W/2EW/2E	SD04	33.2	13.9+	32.6		2000246	079
178	15	39	弥生土器	器台A	口縁部～裾部	1W/2W/(7G)	SD04	(24.0)	18.7+	(22.8)		(990275)/2000246	159
179	15	38	弥生土器	器台A	口縁部	2W	SD04	18.7	3.2+	−		2000246	077
180	15	38	弥生土器	器台A	口縁部	2W	SD04	(24.3)	2.7+	−		2000246	167
181	15	38・56	弥生土器	器台A	口縁部	4E	SD04	(22.0)	2.9+	−		2000246	170
182	15	38・56	弥生土器	器台A	口縁部	4E	SD04	(25.0)	2.4+	−		2000246	163
183	15	38	弥生土器	器台A	口縁部	5W	SD04	(29.5)	3.8+	−		2000246	166
184	15	38	弥生土器	器台	体部	3W	SD04	−	18.8+	−		2000246	072
185	15	4・6・38	弥生土器	器台	体部～裾部	3W	SD04	−	13.5+	21.2		2000246	065
186	16	38	弥生土器	器台	裾部	1W	SD04	−	1.5+	(19.6)		2000246	117
187	16	38・54	弥生土器	器台	裾部	4E	SD04	(24.8)	2.1+	−		2000246	169
188	16	38・54	弥生土器	器台	裾部	不明	SD04	(28.2)	2.6+	−		2000246	164
189	16	38	弥生土器	器台	裾部	2W	SD04	−	4.4+	(24.8)		2000246	165
190	16	4・6・37・53	弥生土器	器台Da	口縁部～脚部	4W	SD04	19.8	13.1+	−		2000246	067
191	16	38・53	弥生土器	器台Db	口縁部	4W	SD04	(24.0)	5.0+	−		2000246	064
192	16	4・6・37	弥生土器	器台Db	口縁部～裾部	4W	SD04	21.5	19.5	15.4	14	2000246	076
193	16	38	弥生土器	器台Db	口縁部	3W/4W	SD04	18.8	4.2+	−		2000246	095
194	16	38	弥生土器	器台Dc	口縁部	4W	SD04	(17.0)	4.3+	−		2000246	105
195	16	4・6・37・54	弥生土器	器台Dc	口縁部～裾部	4W	SD04	19.4	16.8	13.5		2000246	074
196	16	6・37	弥生土器	器台D	体部～裾部	4W/4E	SD04	−	8.9+	14.6		2000246	070
197	16	6・37	弥生土器	器台D	体部～裾部	3E/4E	SD04	−	10.5+	(14.8)		2000246	160
198	16	6・37	弥生土器	器台D	体部～裾部	3E/4E	SD04	−	9.3+	13.1		2000246	110
199	16	38	弥生土器	器台D	脚部	3W	SD04	−	3.1+	(16.3)		2000246	292
200	16	4・6・32・55	弥生土器	器台E	口縁部～裾部	3W/4W	SD04	16.9	17.6	16.0	15	2000246	075
201	16	32	弥生土器	器台F	脚部	4W	SD04	−	4.3+	7.9		2000246	068
202	16	36	弥生土器	器台F	脚部	4W	SD04	−	4.6+	(11.0)		2000246	299
203	16	39	弥生土器	器台	体部	5区北半	SD04	−	2.0+	−		2000246	119
204	16	39	弥生土器	器台	裾部	5E	SD04	−	2.0+	(15.8)		2000246	116
205	16	39	弥生土器	器台	体部	2W	SD04	−	3.9+	−		2000246	291
206	16	39・56	弥生土器	器台	口縁部	1W	SD04	(21.4)	4.2+	−		2000246	285-1
207	16	39・56	弥生土器	器台	体部	1W	SD04		2.1+	−		2000246	285-2
208	17	41	弥生土器	広口壺Ab1	口縁部	3E	SD07	(12.9)	4.5+	−		2000246	019
209	17	4・5・40	弥生土器	広口壺Aa	口縁部～肩部	3E	SD07	11.6	8.0+	−		2000246	024
210	17	4・5・40	弥生土器	広口壺Aa	口縁部～肩部	3E	SD07	12.4	5.9+	−		2000246	023
211	17	41	弥生土器	広口壺Ab1	底部	7G	SD07	(11.9)	3.2+	−		990275	267
212	17	41	弥生土器	広口壺Ab1	口縁部	3E	SD07	11.9	4.3+	−		2000246	020
213	17	41	弥生土器	広口壺	体部～底部	3E	SD07	−	16.9+	(4.8)		2000246	014
214	17	41	弥生土器	広口壺Ab1	口頸部	3E/3W	SD07	15.0	9.2+	−		2000246	156
215	17	4・5・40	弥生土器	広口壺Ab1	口頸部	3E	SD07	15.0	24.6+	−		2000246	013
216	17	40	弥生土器	広口壺	体部～底部	3E	SD07	−	22.0+	5.3		2000246	010
217	17	41	弥生土器	広口壺Aa	口縁部	3E	SD07	14.1	3.7+	−		2000246	016
218	17	41	弥生土器	広口壺Aa	口縁部	3E	SD07	18.1	3.7+	−		2000246	174
219	17	4・5・40・56	弥生土器	広口長頸壺	口縁部～底部	7G	SD07	12.1	22.9	6.0		990275	245
220	17	5・40	弥生土器	短頸壺B	口頸部	3E	SD07	10.0	4.1+	−		2000246	018
221	17	41・57	弥生土器	壺	底部	3E	SD07	−	2.4+	3.5		2000246	015
222	17	26・57	弥生土器	壺	底部	3E/3W	SD07	−	5.4+	6.5		2000246	045
223	17	41・58	弥生土器	壺	底部	3E/3W	SD07	−	10.0+	6.5		2000246	046
224	17	41	弥生土器	壺	底部	3E	SD07	−	6.2+	5.8		2000246	034
225	17	41	弥生土器	蓋	摘部～体部	3E	SD07	−	4.3+	−		2000246	215
226	18	43	弥生土器	甕Aa	口縁部	7G	SD07	14.0	6.2+	−		990275	269
227	18	43	弥生土器	甕Aa	口縁～体部	3E	SD07	(14.6)	6.8+	−		2000246	039
228	18	43	弥生土器	甕Aa	口縁～体部	3E	SD07	(14.2)	5.6+	−		2000246	041
229	18	43	弥生土器	甕Aa	口縁部	7G	SD07	15.8	11.2+	−		990275	270
230	18	4・5・42	弥生土器	甕Ab	口縁～底部	7G	SD07	15.5	18.3	4.6	16	990275	244
231	18	4・5・42	弥生土器	甕Ab	口縁～底部	3E	SD07	(11.5)	15.2	3.5		2000246	009
232	18	43	弥生土器	甕	口縁～底部	3E	SD07	14.4	18.9+	−		2000246	044
233	18	42・52	弥生土器	甕Ab	口縁～体部	(7G)/3E	SD07	15.8	7.1+	−		(990275)/2000246	151
234	18	42・52	弥生土器	甕Ab	口縁部	(7G)/3E	SD07	(15.3)	12.1+	−		(990275)/2000246	262
235	18	4・5・44	弥生土器	甕B	口縁～底部	3E	SD07	13.0	18.3	3.4		2000246	008
236	18	43	弥生土器	甕B	口縁～体部	3E	SD07	16.0	5.5+	−		2000246	042

別表１（4）

報告No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	出土地区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
237	18	43	弥生土器	甕B	口縁部	3E	SD07	14.7	3.6+	−		2000246	038
238	18	42・48	弥生土器	甕C	口縁部	3E	SD07	13.9	14.7+	−	17	2000246	059
239	18	42	弥生土器	甕	口縁部	7G	SD07	14.2	5.7+	−		990275	268
240	18	42	弥生土器	甕F	口縁部	3E	SD07	(14.4)	4.8+	−		2000246	136
241	18	43	弥生土器	甕	底部	3E	SD07	−	4.9+	3.8		2000246	040
242	18	43	弥生土器	甕	底部	3E	SD07	−	3.3+	4.2		2000246	037
243	18	43	弥生土器	甕	底部	3E	SD07	−	4.5+	4.0		2000246	022
244	18	43	弥生土器	甕	底部	7G	SD07	−	3.3+	4.0		990275	265
245	18	43	弥生土器	甕	底部	3E	SD07	−	4.3+	3.1		2000246	196
246	18	45	弥生土器	甕	体部～底部	3E	SD07	−	5.2+	3.5		2000246	212
247	18	43・51	弥生土器	甕	底部	7G	SD07	−	9.8+	3.2		990275	242
248	18	43	弥生土器	甕	底部	3E	SD07	−	3.7+	4.7		2000246	043
249	19	4・5・44・58	弥生土器	鉢A	口縁部～底部	3E	SD07	23.2	12.3	4.8		2000246	007
250	19	45	弥生土器	鉢Bb	口縁部～体部	7G	SD07	(32.0)	7.6+	−		990275	263
251	19	45	弥生土器	鉢Bb	口縁部～体部	3E	SD07	(34.5)	16.8+	−		2000246	048
252	19	45	弥生土器	鉢Bb	口縁部～体部	3E	SD07	(19.8)	3.7+	−		2000246	054
253	19	45・49	弥生土器	鉢Bb	口縁部～体部	3E	SD07	(38.7)	14.7+	−		2000246	047
254	19	4・5・44・57・58	弥生土器	鉢D	口縁部～底部	3E	SD07	11.6	6.9	4.2		2000246	033
255	19	45	弥生土器	鉢D	口縁部～体部	3E	SD07	(15.4)	8.7+	−		2000246	032
256	19	4・5・44・53	弥生土器	鉢E	口縁部～体部	3E	SD07	17.6	9.1+	−	18	2000246	036
257	19	45	弥生土器	鉢	底部	7G	SD07	−	4.3+	4.8		990275	264
258	19	45	弥生土器	鉢	底部	3E	SD07	−	5.0+	4.7		2000246	021
259	19	45	弥生土器	鉢	底部	3E	SD07	−	3.1+	3.3		2000246	210
260	19	45	弥生土器	鉢	底部	3E	SD07	−	4.0+	4.6		2000246	017
261	19	45	弥生土器	鉢	底部	7G	SD07	−	2.8+	3.8		990275	266
262	19	45	弥生土器	鉢	体部～底部	3E	SD07	−	4.2+	2.3		2000246	211
263	19	45	弥生土器	鉢F	体部～底部	3E	SD07	−	5.4+	5.0		2000246	241
264	19	45	弥生土器	有孔鉢	底部	3E	SD07	−	4.5+	3.3		2000246	035
265	19	4・5・57	弥生土器	手づくね	口縁部～底部	3E	SD07	7.6	5.1	4.3		2000246	282
266	19	45	弥生土器	手づくね	底部	3E	SD07	−	2.7+	2.6		2000246	028
267	20		弥生土器	高坏Ac	口縁部	3E	SD07	(21.0)	4.2+	−		2000246	309
268	20	47	弥生土器	高坏Ac	口縁部	3E	SD07	18.1	4.7+	−	19	2000246	031
269	20	47	弥生土器	高坏B	口縁部～体部	3E	SD07	(19.0)	3.9+	−		2000246	029
270	20	47	弥生土器	高坏B	口縁部～坏部	3E	SD07	(14.2)	3.6+	−		2000246	098
271	20	4・6・46	弥生土器	高坏B	口縁部	(7G)/3E	SD07	(19.4)	12.8+	−		(990275)/2000246	094
272	20	4・6・46・55	弥生土器	高坏B	口縁部～脚部	3E	SD07	19.0	13.0+	−		2000246	083
273	20	4・6・46	弥生土器	高坏B	口縁部～底部	7G	SD07	(18.0)	17.2	21.1	20	990275	243
274	20	4・6・46	弥生土器	高坏C	口縁部～体部	3E	SD07	(15.7)	9.5+	−		2000246	005
275	20	4・6・46	弥生土器	高坏C	口縁部～体部	3E	SD07	17.8	11.9+	−		2000246	006
276	20	4・6・46・48	弥生土器	高坏C	口縁部～底部	3E	SD07	14.3	10.5	15.7		2000246	003
277	20	47	弥生土器	高坏Da	坏部	3E	SD07	17.3	4.7+	−		2000246	001
278	20	47・53	弥生土器	高坏Db	口縁部	3E	SD07	(22.8)	6.7+	−		2000246	030
279	20	44	弥生土器	高坏	脚裾部	3E	SD07	−	15.4+	15.8		2000246	025
280	20	47	弥生土器	高坏	脚裾部	3E	SD07	−	9.0+	−		2000246	027
281	20	47	弥生土器	高坏	脚裾部	3E	SD07	−	2.3+	11.4		2000246	103
282	20	47	弥生土器	高坏	脚裾部	3E	SD07	−	3.4+	15.4		2000246	102
283	20	47	弥生土器	高坏	脚裾部	3E	SD07	13.8	2.2+	−		2000246	002
284	20	47	弥生土器	高坏	裾部	3E	SD07	−	12.1+	19.2		2000246	096
285	20	44	弥生土器	高坏	裾部	3E	SD07	−	11.3+	17.5		2000246	004
286	20	47	弥生土器	高坏	脚裾部	(7G)/3E	SD07	−	4.0+	18.5		(990275)/2000246	082
287	20	47	弥生土器	高坏	脚部	3E	SD07	−	7.3+	−		2000246	026
288	20	44・54	弥生土器	高坏	脚裾部	3E	SD07	−	5.9+	26.7		2000246	012
289	20	47・53	弥生土器	器台C	口縁部	7G	SD07	25.3	7.3+	−		990275	261
290	20	47	弥生土器	器台	体部	3E/3W	SD07	−	12.2+	−		2000246	071
291	22	60	弥生土器	広口壺Ab2	口縁部～体部	No.2北	試掘	13.2	10.4+	−		2000330	259
292	22	60	弥生土器	広口壺	口頸部	No.2北	試掘	29.8	6.7+	−		2000330	258
293	22	60	弥生土器	甕	口縁部～底部	No.2北	試掘	9.7	9.5	2.2		2000330	253
294	22	52・60	弥生土器	甕F	口縁部～体部	No.2北	試掘	15.0	6.8+	−		2000330	254
295	22	60	弥生土器	蓋	摘部～体部	No.2北	試掘	−	4.9+	−		2000330	246
296	22	60	弥生土器	鉢	口縁部～体部	No.2北	試掘	(15.5)	4.0+	−		2000330	257
297	22	60	弥生土器	鉢Bb	口縁部～頸部	No.2北	試掘	24.2	7.6+	−		2000330	256
298	22	60	弥生土器	器台	体部	No.2北	試掘	−	14.3+	−		2000330	250
299	22	60	弥生土器	広口壺	口縁部～体部	No.2	試掘	(24.4)	8.1+	−		2000330	247
300	22	60	弥生土器	鉢	体部～底部	No.2	試掘	−	5.1+	3.8		2000330	248
301	22	60	須恵器	稜椀	口縁部	No.2北	試掘	(16.1)	4.3+	−		2000330	260
302	22	59	弥生	甕	口縁部	No.8	試掘	(16.2)	3.6+	−		2000330	272
303	22	59	弥生	広口壺	体部	No.6	試掘	−	9.8+	−		2000330	252
304	22	59	弥生	無頸壺	口縁部	No.6	試掘	(15.8)	3.4+	−		2000330	271
305	22	60	弥生		脚部	No.6	試掘	−	7.1+	9.6		2000330	251
306	22	59	弥生		脚部	No.6	試掘	−	7.1+	(10.8)		2000330	249
307	22	59	弥生	甕	底部	No.6	試掘	−	3.7+	5.5		2000330	275
308	22	59	弥生	甕	底部	No.6	試掘	−	5.1+	(8.0)		2000330	274
309	22	60	弥生	甕	口縁部～頸部	No.1	試掘	(14.6)	4.4+	−		2000330	255
310	22	59	弥生	広口壺	口縁部	No.9/No.9西拡	試掘	(28.9)	2.0+	−		2000330	277
311	22	59	弥生	大形受口壺	口縁部	No.9西拡/No.9	試掘	(33.0)	3.7+	−		2000330	273
312	22	59	弥生	大形受口壺	頸部	No.9/No.9西拡	試掘	−	7.6+	−		2000330	276
M1	7	24	鉄器	釘		5E南半	包含層	長4.5	幅0.8	厚0.4		2000246	T1

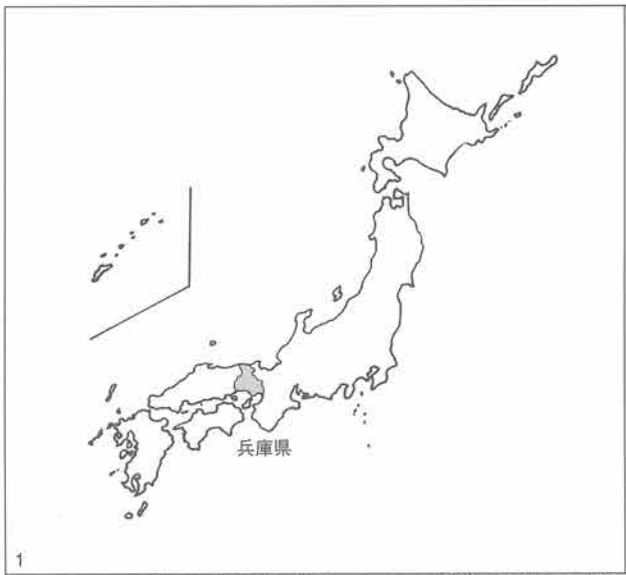
報告書抄録

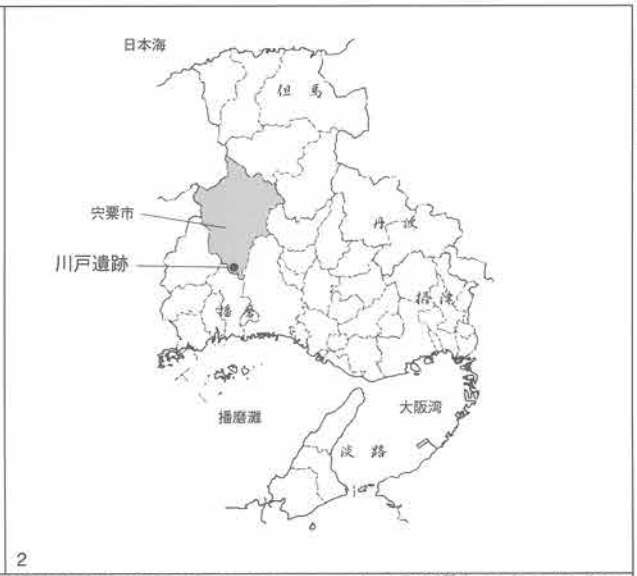
ふりがな	かわと
書　　名	川　戸　遺　跡
副 書 名	（主）宍粟香寺線県単独道路改良事業に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第314冊
編著者名	篠宮　正・酒井将史・株式会社パレオ・ラボ（藤根　久・長友純子）
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所 在 地	〒652-0032　兵庫県神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL. 078-531-7011
発行年月日	西暦2007年（平成19年）3月20日

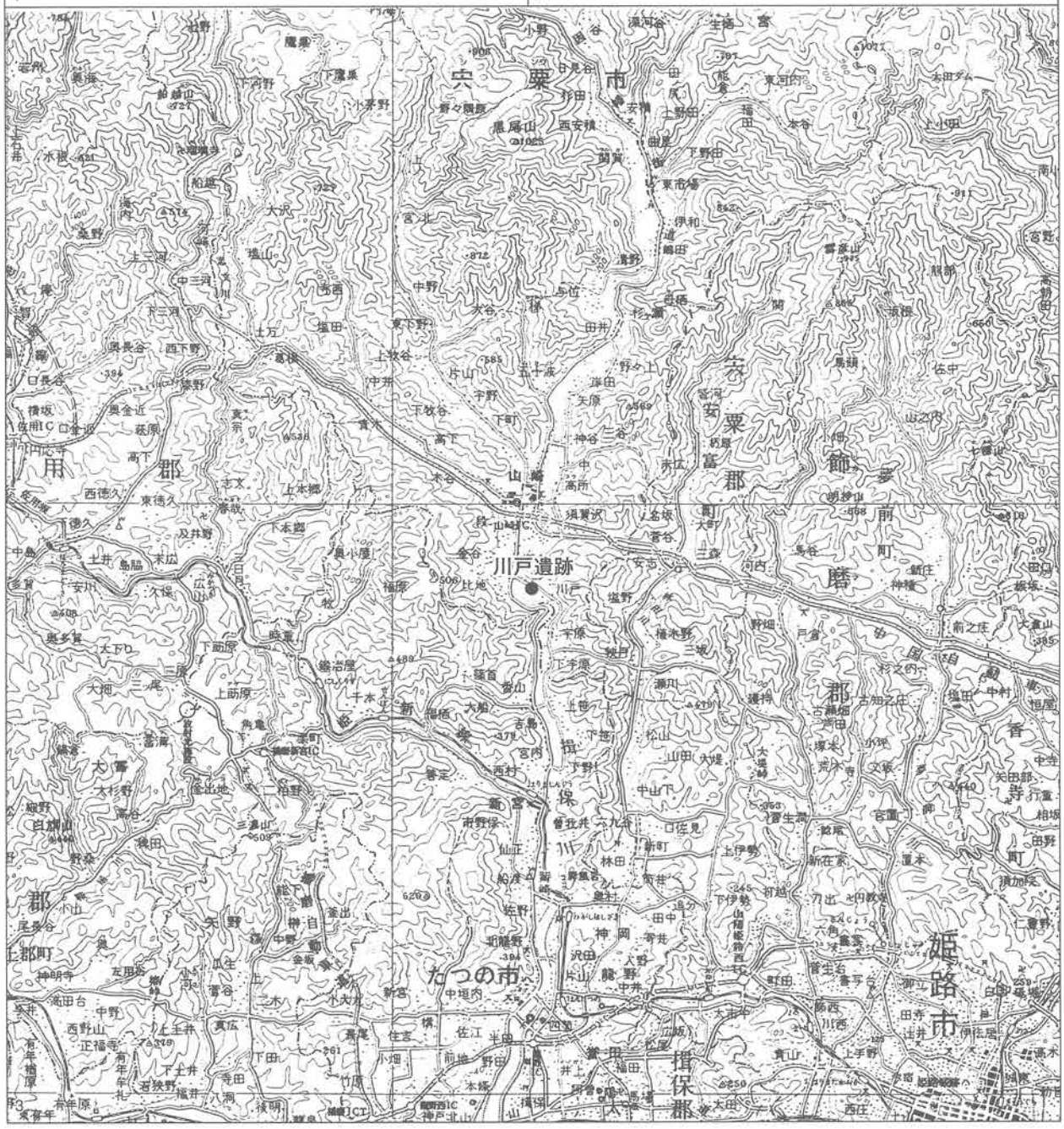
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かわと 川戸遺跡	ひょうごけん 兵庫県 しそうし 宍粟市 やまさきちょう 山崎町 かわと 川戸	282278	530210	３４度 ５８分 ４８秒	１３４度 ３２分 ３９秒	19991206～ 19991210 20000308～ 20000309 20000926・ 20001204 20001212～ 20001215	112㎡ 60㎡ 320㎡ 114㎡	(主) 宍粟香寺線 県単独道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川戸遺跡	集落遺跡	弥生時代		弥生土器	
		中期	溝		
		後期	竪穴住居・土坑		
			溝・流路		
		古墳時代			
		初頭			
		中期	竪穴住居	土師器・須恵器・製塩土器	
		中　世	溝	土師器・須恵器	

図版

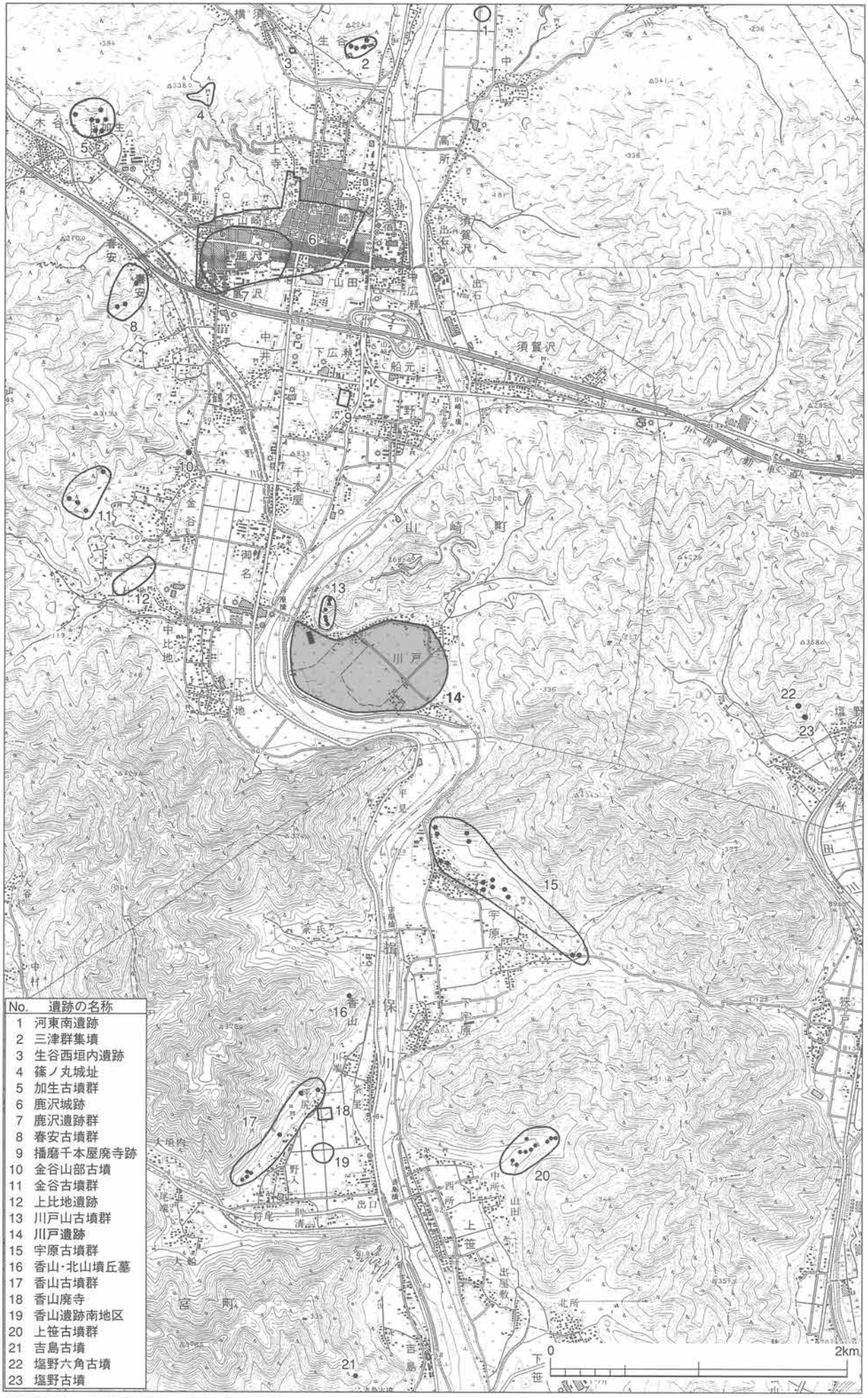




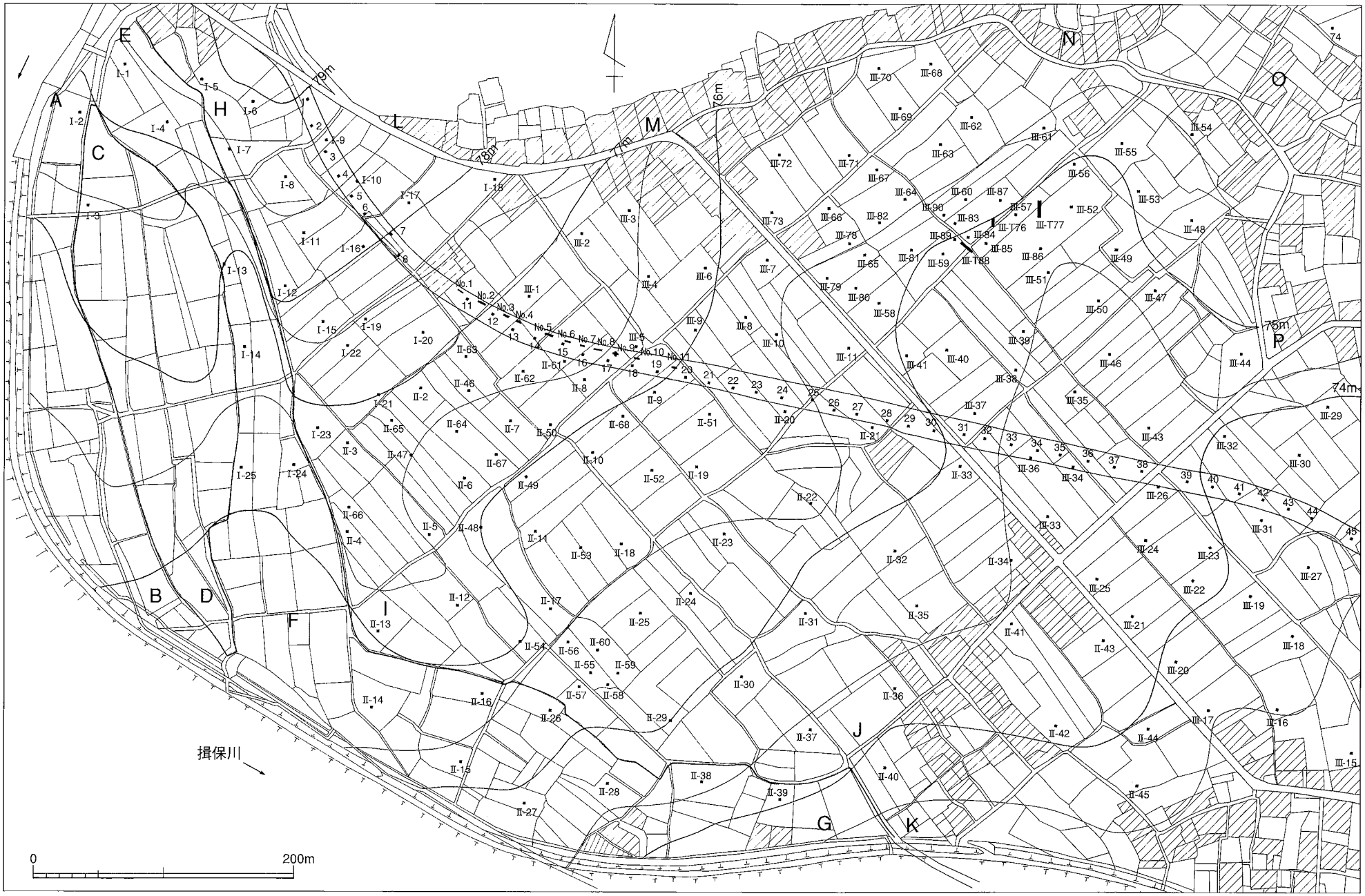


1　兵庫県の位置
2　宍粟市の位置
3　川戸遺跡の位置

図版2　遺跡



川戸遺跡の位置と周辺の主要遺跡一覧

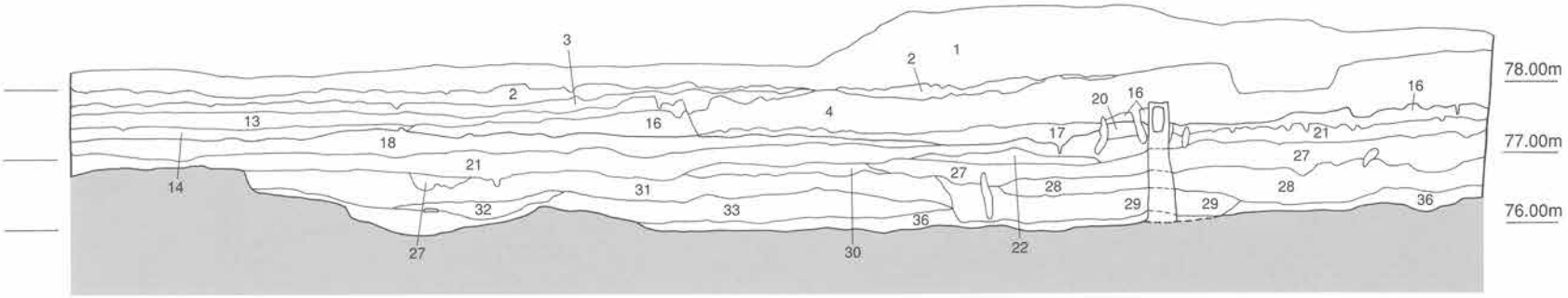


川戸遺跡周辺の微地形と調査位置

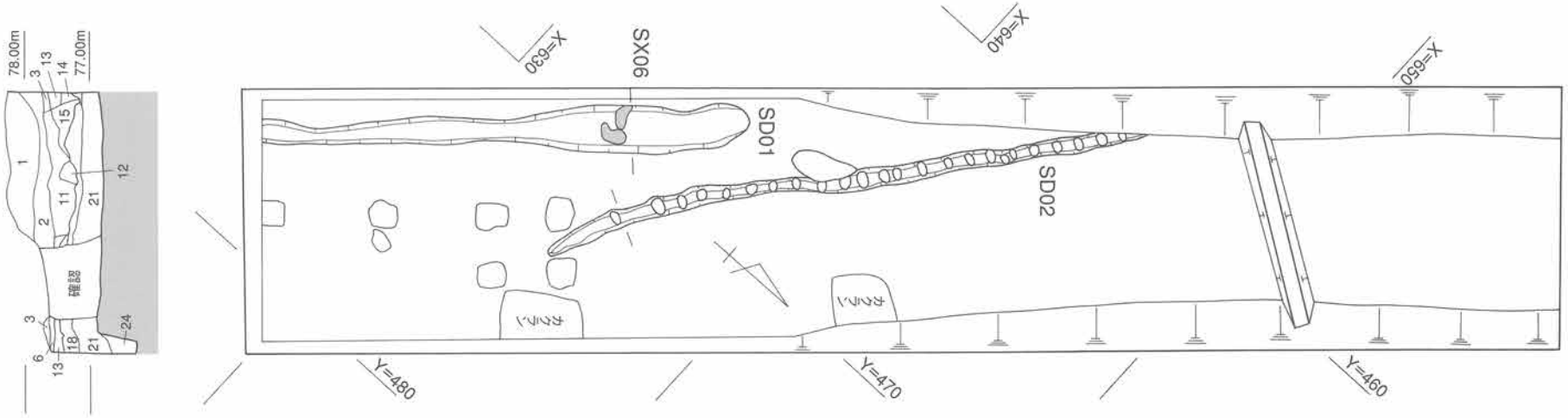
図版3 遺跡

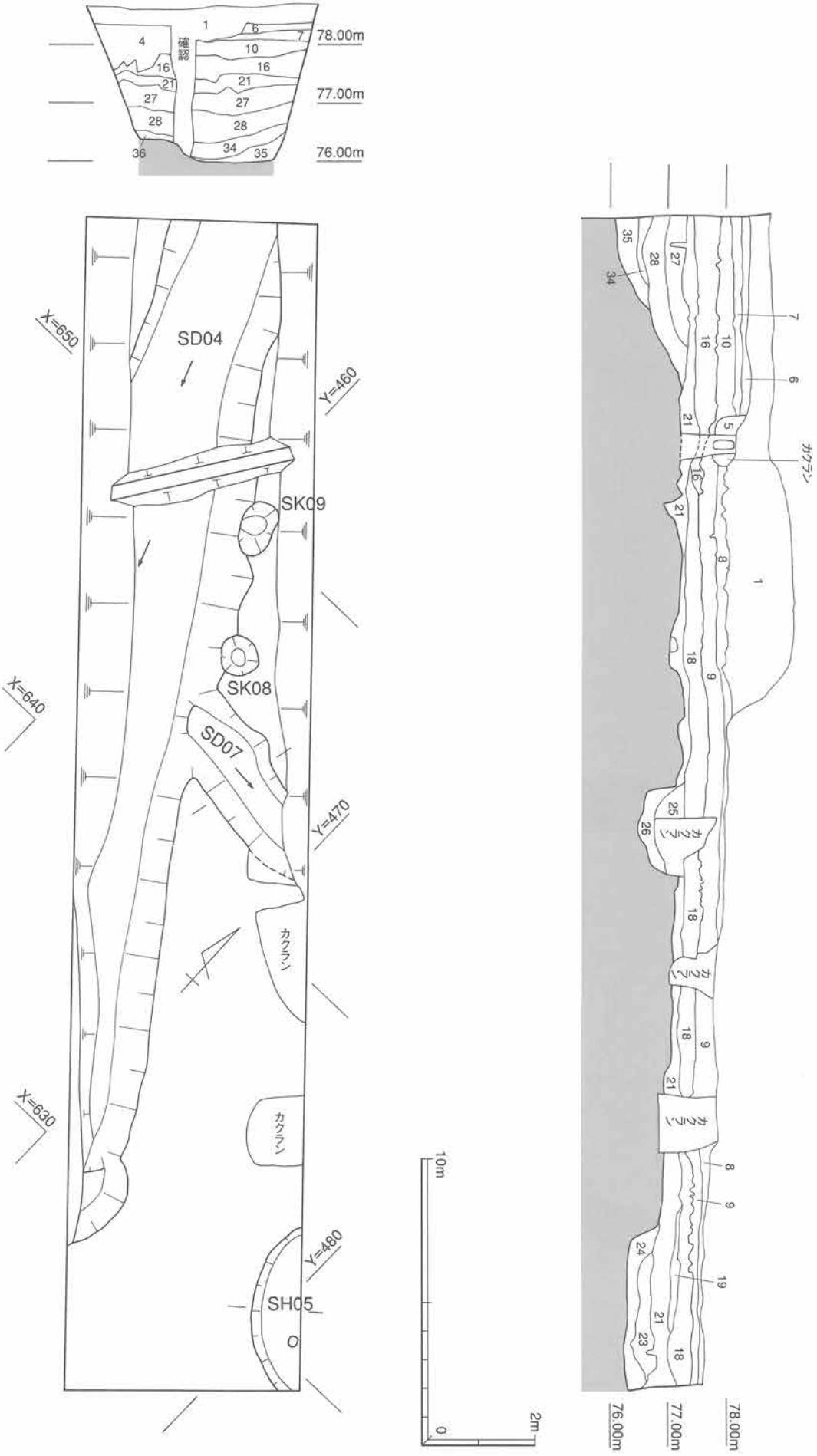
図版4 遺構

第1面遺構配置・壁面土層



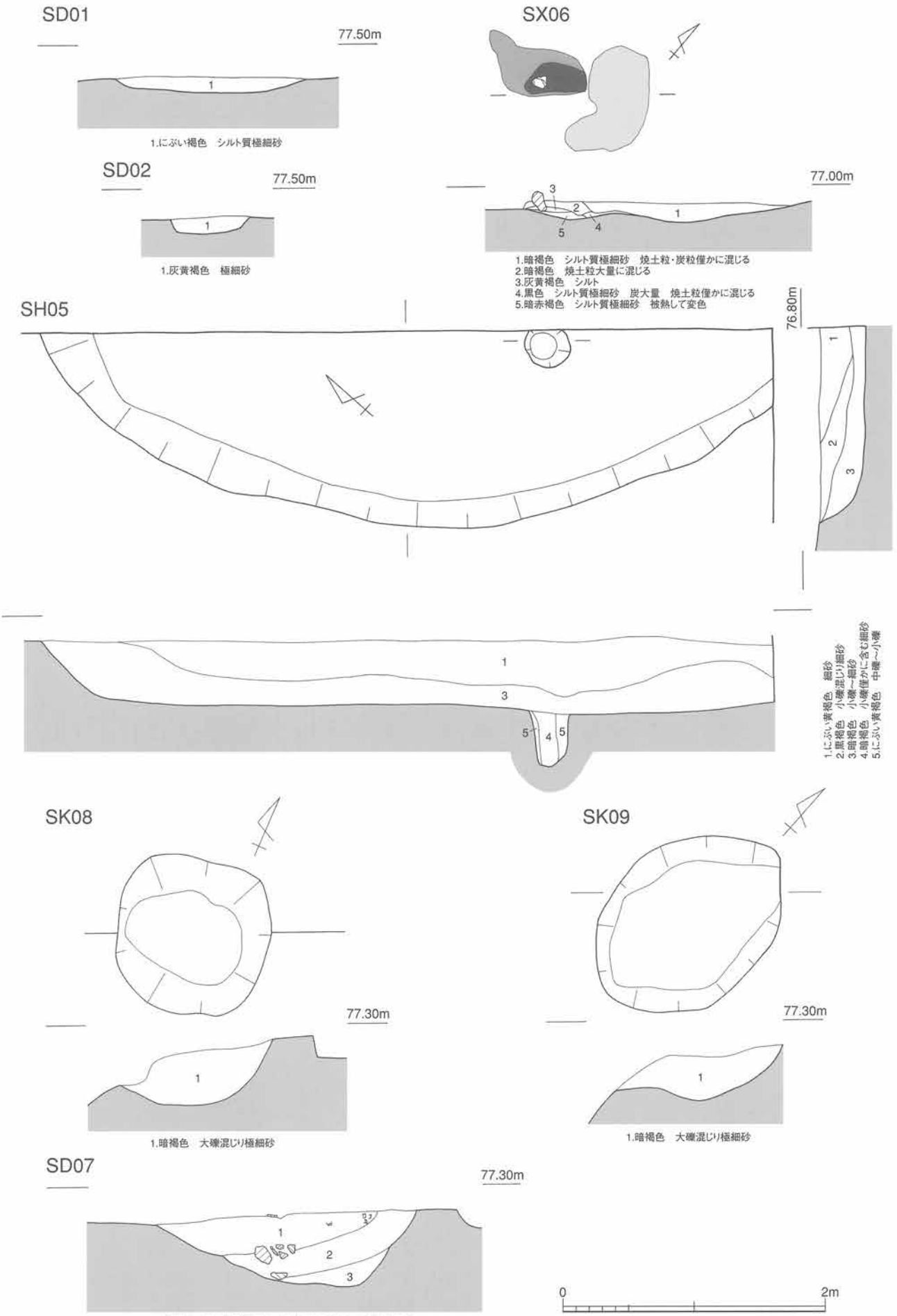
1.盛土
2.灰黄褐色　シルト質極細砂　Fe_2O_3含む
3.灰褐色　極細砂［旧耕作土］
4.旧水路
5.褐灰色　シルト質極細砂［水路］
6.褐灰色　シルト質極細砂［旧耕作土］
7.にぶい黄褐色　シルト質極細砂　Fe_2O_3含む［旧床土］
8.黒褐色　シルト質極細砂［旧耕作土］
9.にぶい黄褐色　極細砂　小礫僅か含む　Fe_2O_3含む［旧床土］
10.褐色　極細砂　Fe_2O_3・Mn含む
11.大礫混じる［旧耕作土］
12.大礫混じる［旧床土］・［旧耕作土］
13.にぶい黄褐色　極細砂　Fe_2O_3含む　小礫僅か含む［旧床土］
14.黄褐色　極細砂　Fe_2O_3・Mn［旧床土］
15.にぶい黄褐色　細砂～大礫［水路］内堆積か
16.にぶい黄褐色　極細砂　Fe_2O_3含む
17.にぶい黄褐色　極細砂　Fe_2O_3含む［SD01］
18.黒褐色　シルト質極細砂　Mn含む
19.灰黄褐色　小礫～中砂
20.灰黄褐色　極細砂［SD02］
21.灰黄褐色　極細砂
22.黒褐色　小礫～細砂
23.褐色　極細砂（洪水砂か）［SH05］
24.暗褐色　小礫～細砂［SH05］
25.暗褐色　シルト質極細砂［SD07］
26.褐色　極細砂［SD07］
27.暗褐色　シルト質極細砂
28.褐色　シルト質極細砂　炭少量混じる
29.暗褐色　極細砂　炭・焼土多量含む
30.暗褐色　極細砂　小礫僅か含む
31.にぶい黄褐色　中砂・炭僅か含む
32.灰黄褐色　シルト質極細砂　小礫僅か含む
33.にぶい黄褐色　小礫～中礫
34.暗褐色　極細砂　炭・焼土多量含む
35.暗褐色　細砂　大礫混じる
36.暗褐色　シルト質極細砂



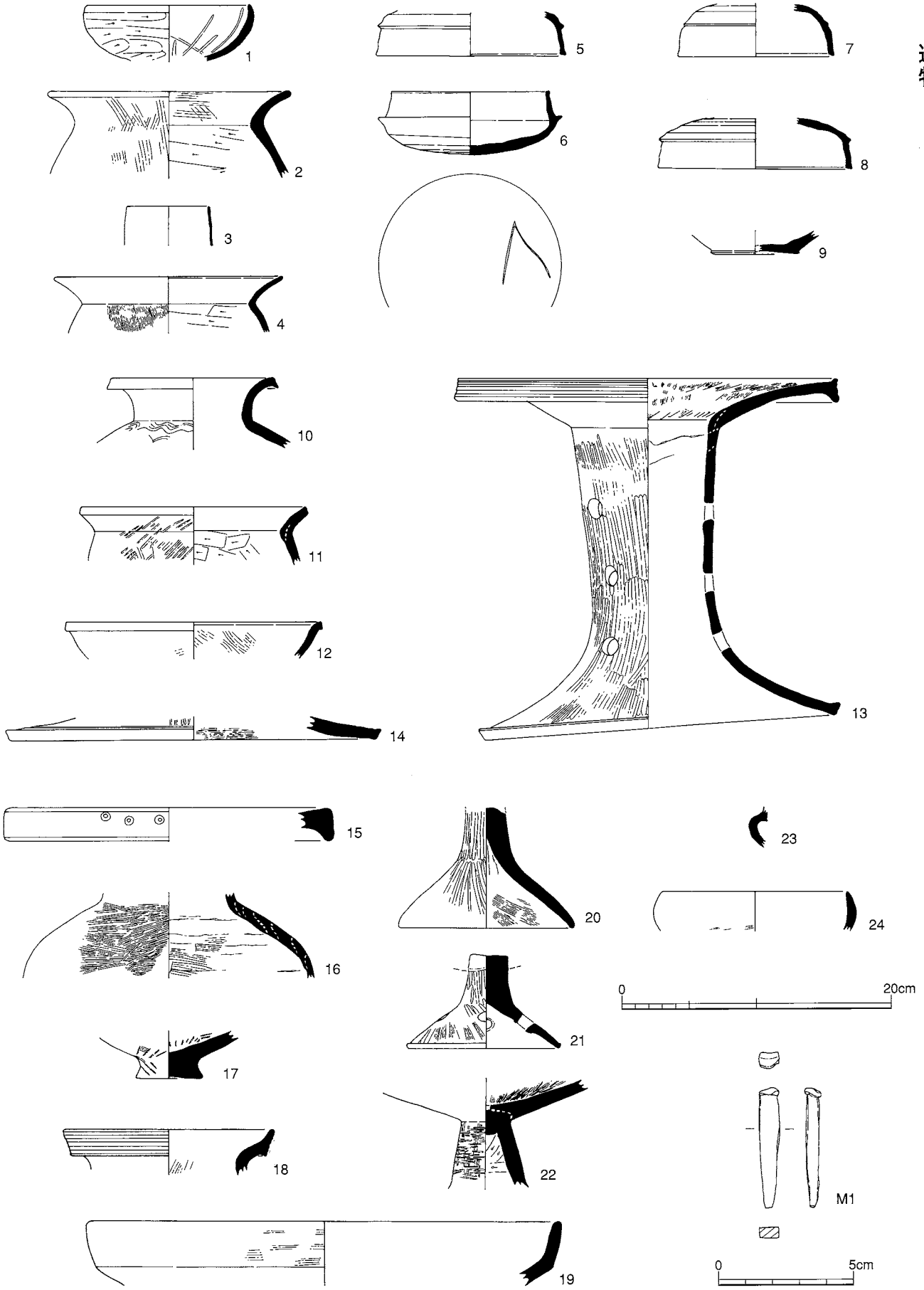


第2面 遺構配置・壁面土層

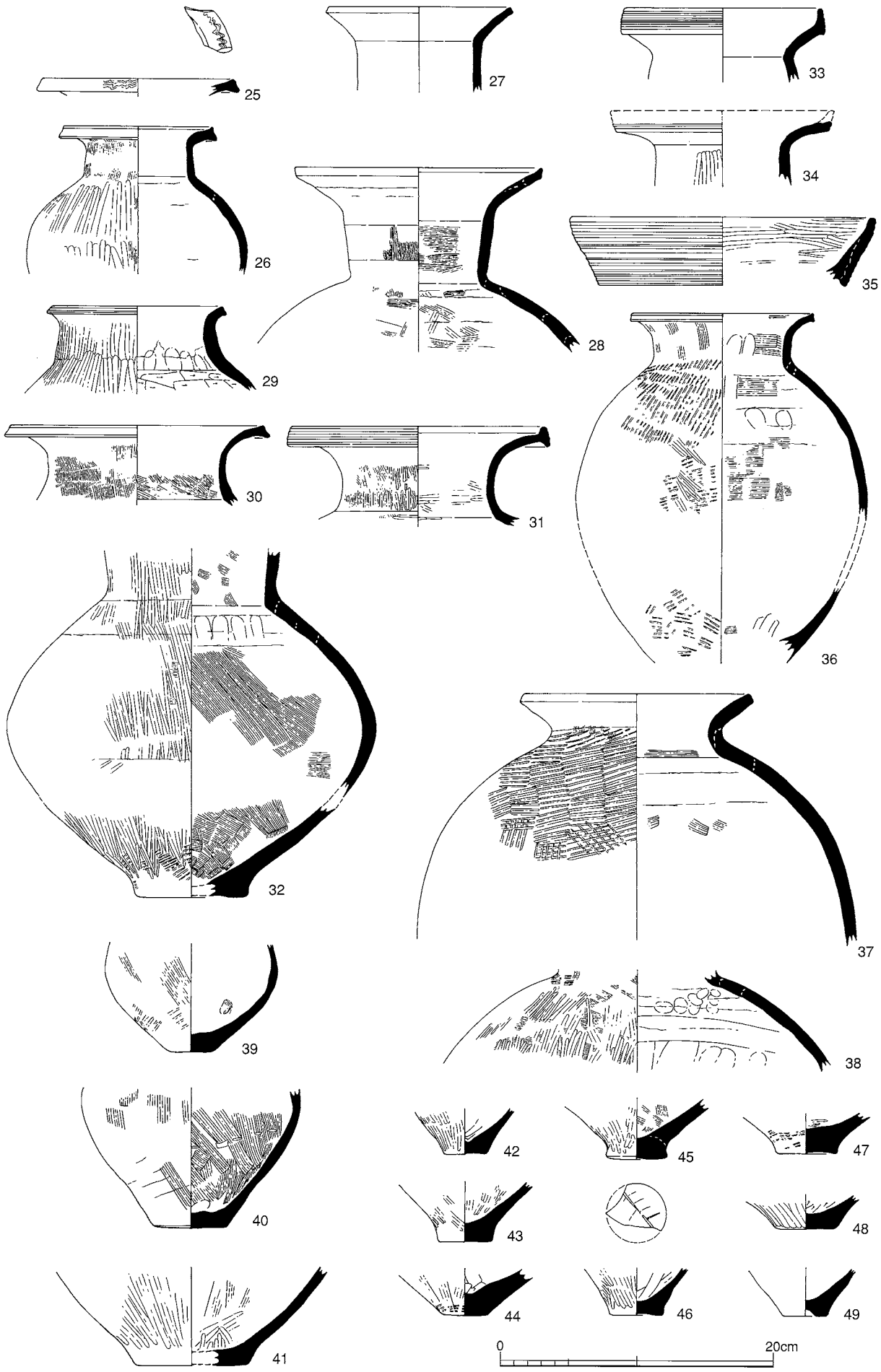
図版6 遺構


SD01
77.50m
1
1.にぶい褐色　シルト質極細砂
SX06
SD02
77.50m
1
1.灰黄褐色　極細砂
77.00m
3
2
1
5
4
1.暗褐色　シルト質極細砂　焼土粒・炭粒僅かに混じる
2.暗褐色　焼土粒大量に混じる
3.灰黄褐色　シルト
4.黒色　シルト質極細砂　炭大量　焼土粒僅かに混じる
5.暗赤褐色　シルト質極細砂　被熱して変色
SH05
76.80m
1
2
3
1
3
5
4
5
1.にぶい黄褐色　細砂
2.黒褐色　小礫混じり細砂
3.暗褐色　小礫～細砂
4.暗褐色　小礫僅かに含む細砂
5.にぶい黄褐色　中礫～小礫
SK08
77.30m
1
1.暗褐色　大礫混じり極細砂
SK09
77.30m
1
1.暗褐色　大礫混じり極細砂
SD07
77.30m
1
2
3
1.暗褐色　シルト質極細砂　土器・大礫多量　炭少量混じる
2.褐色　極細砂　炭少量混じる
3.にぶい黄褐色　極細砂　小礫混じる
0
2m

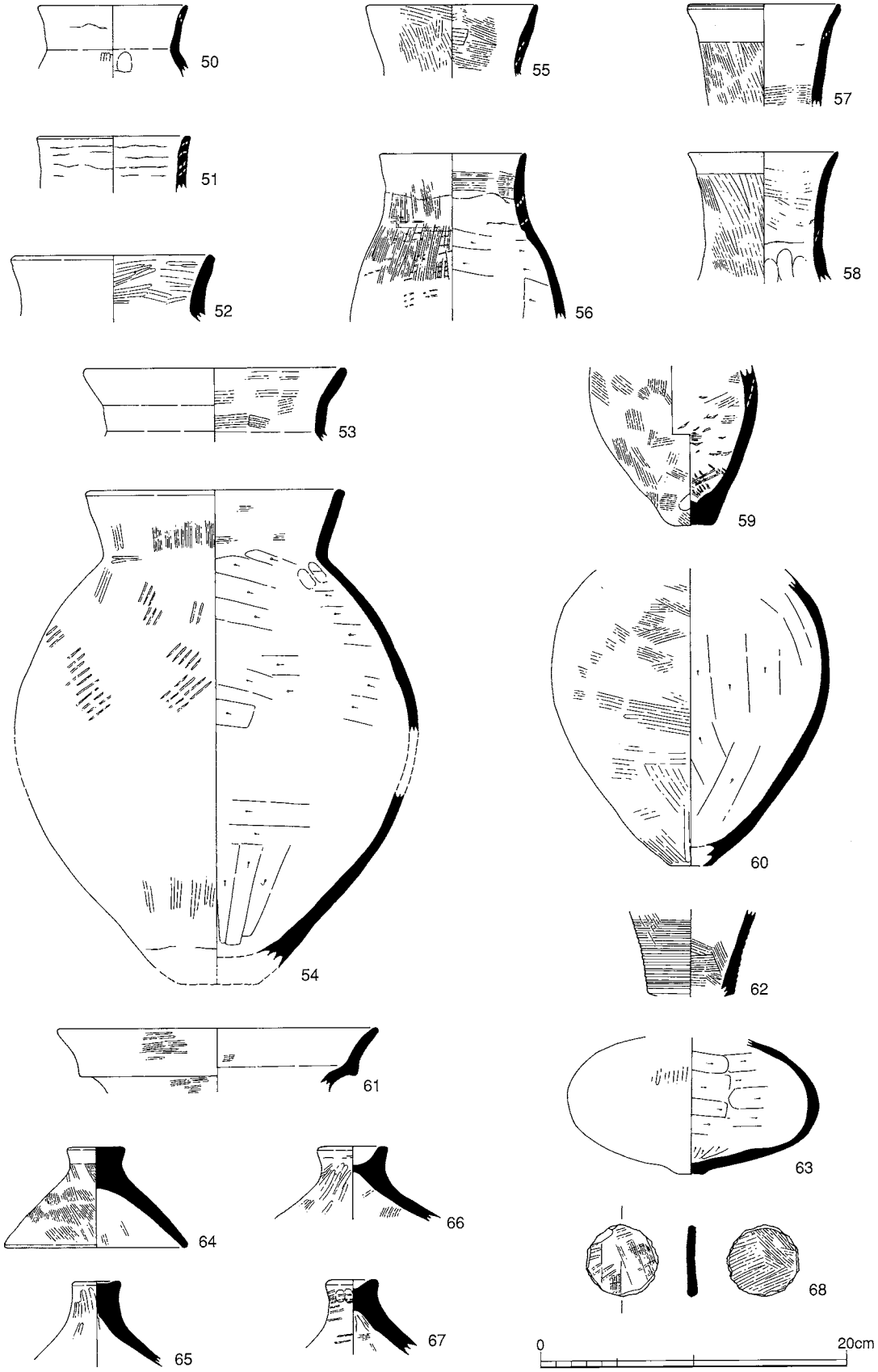
各遺構



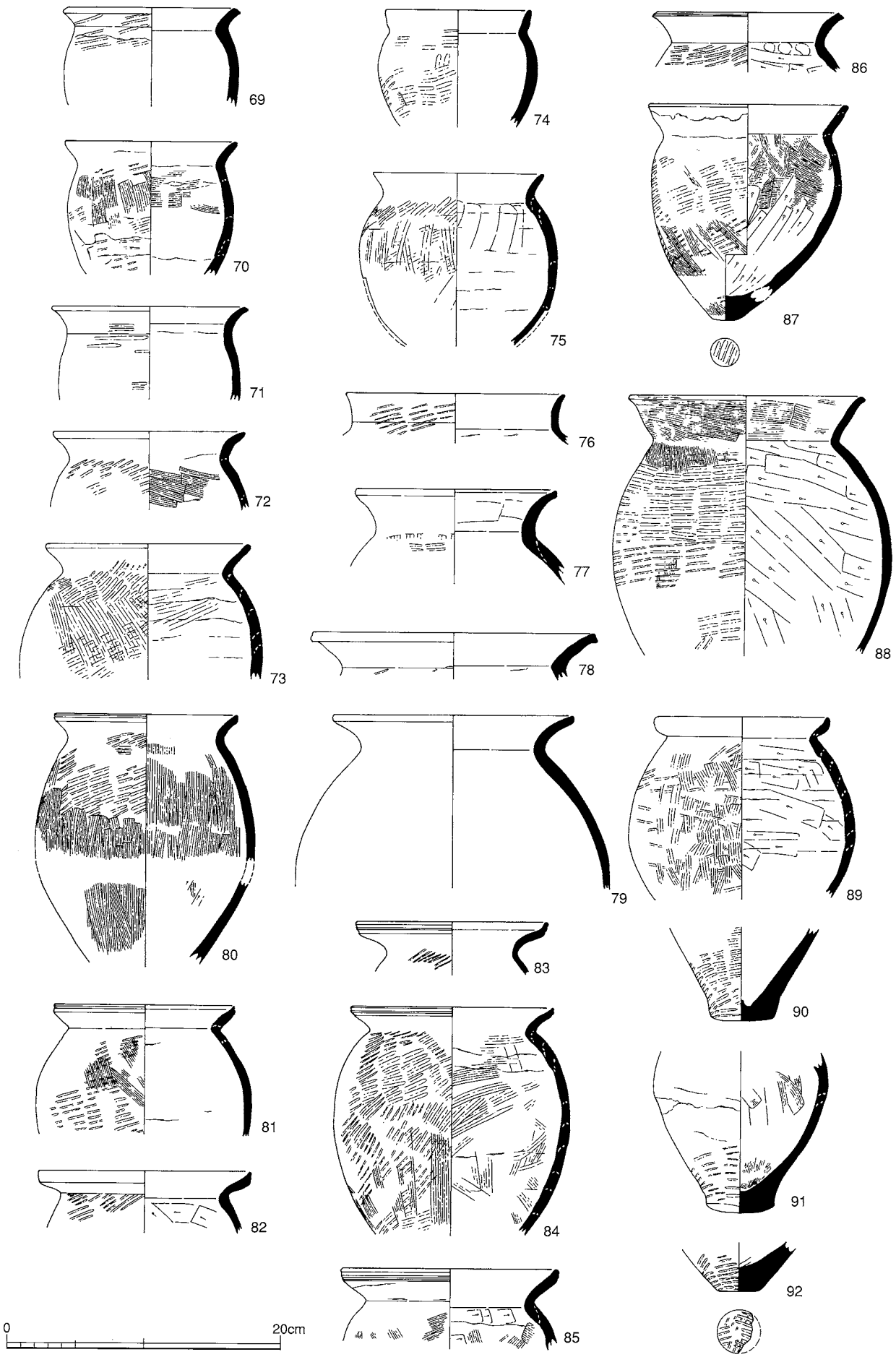
第1面・竪穴住居SH05および包含層出土


25
27
33
26
34
28
35
29
36
30
31
32
37
39
38
40
42
45
47
43
48
41
44
46
49
0
20cm

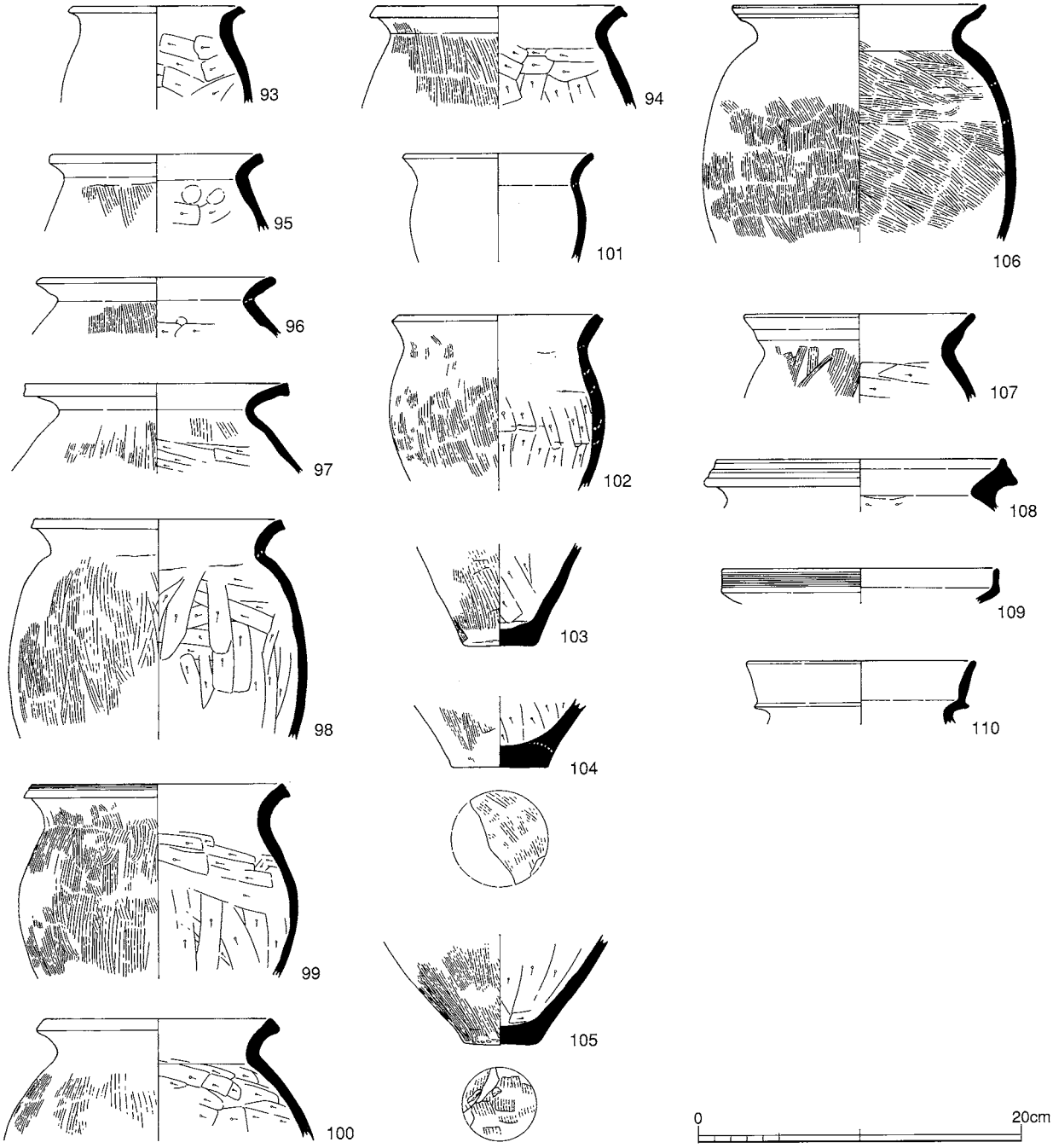
溝SD04出土　壺



溝SD04出土　壺 他

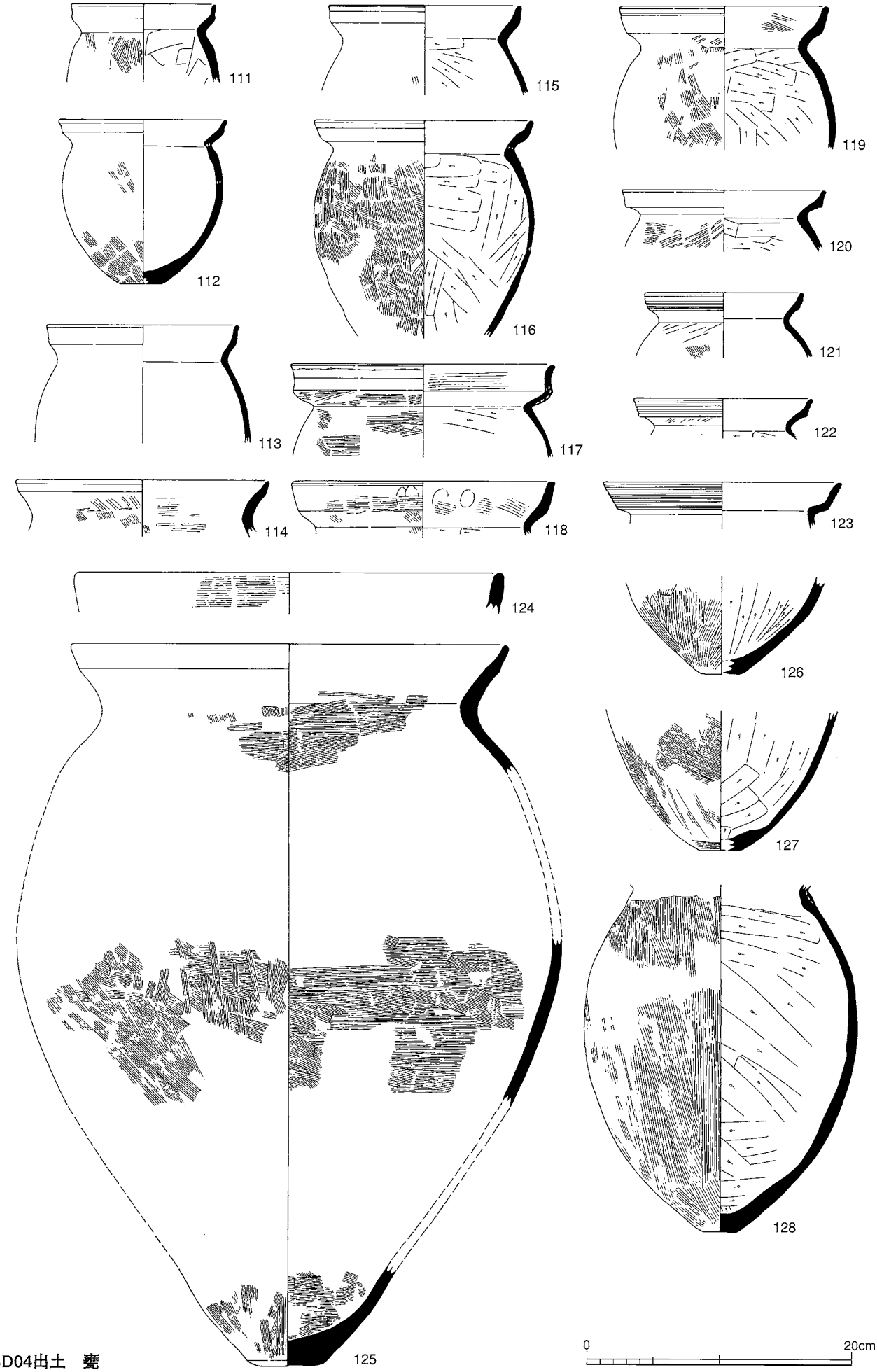

69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
0
20cm

溝SD04出土　甕

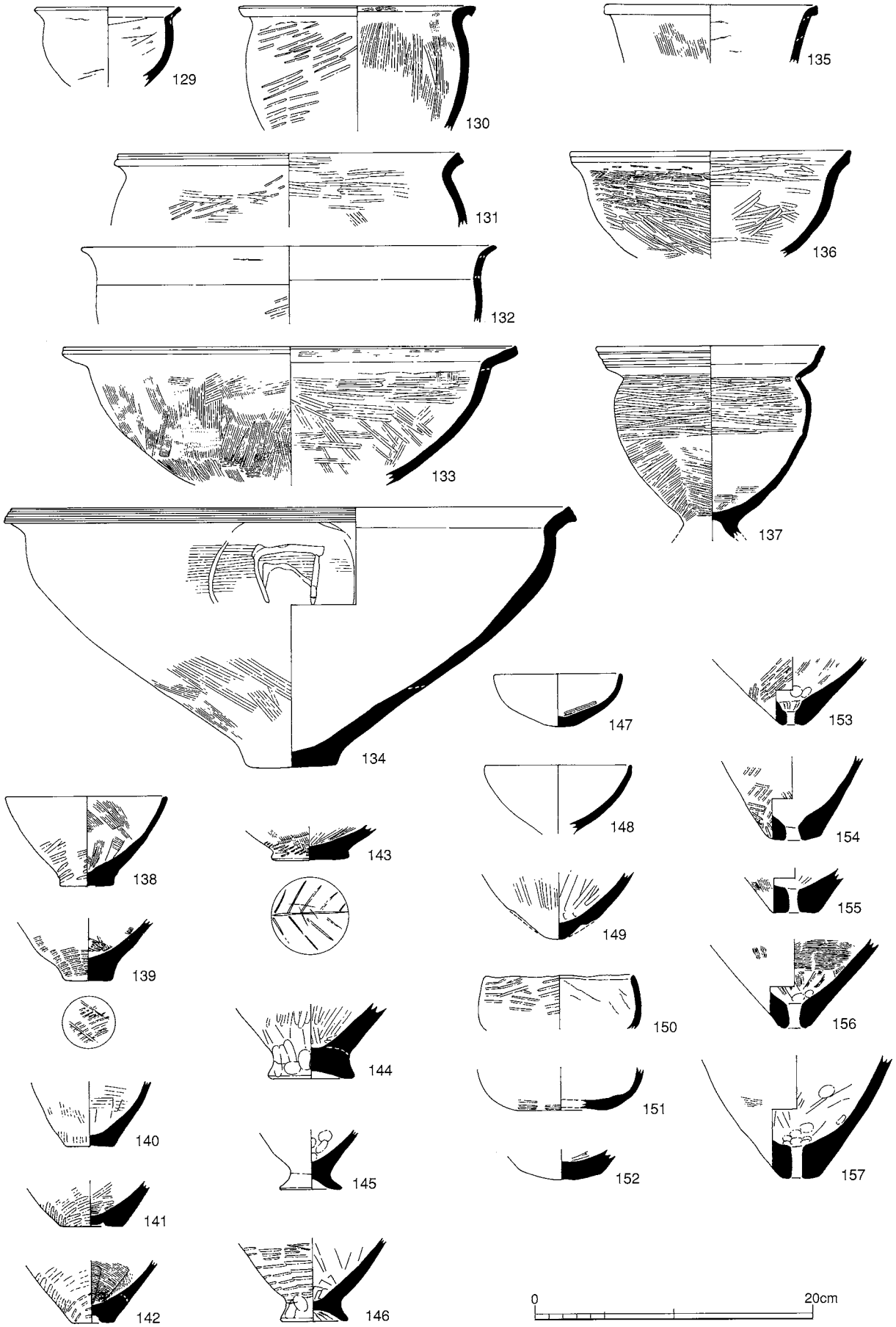

93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
0
20cm

溝SD04出土　甕

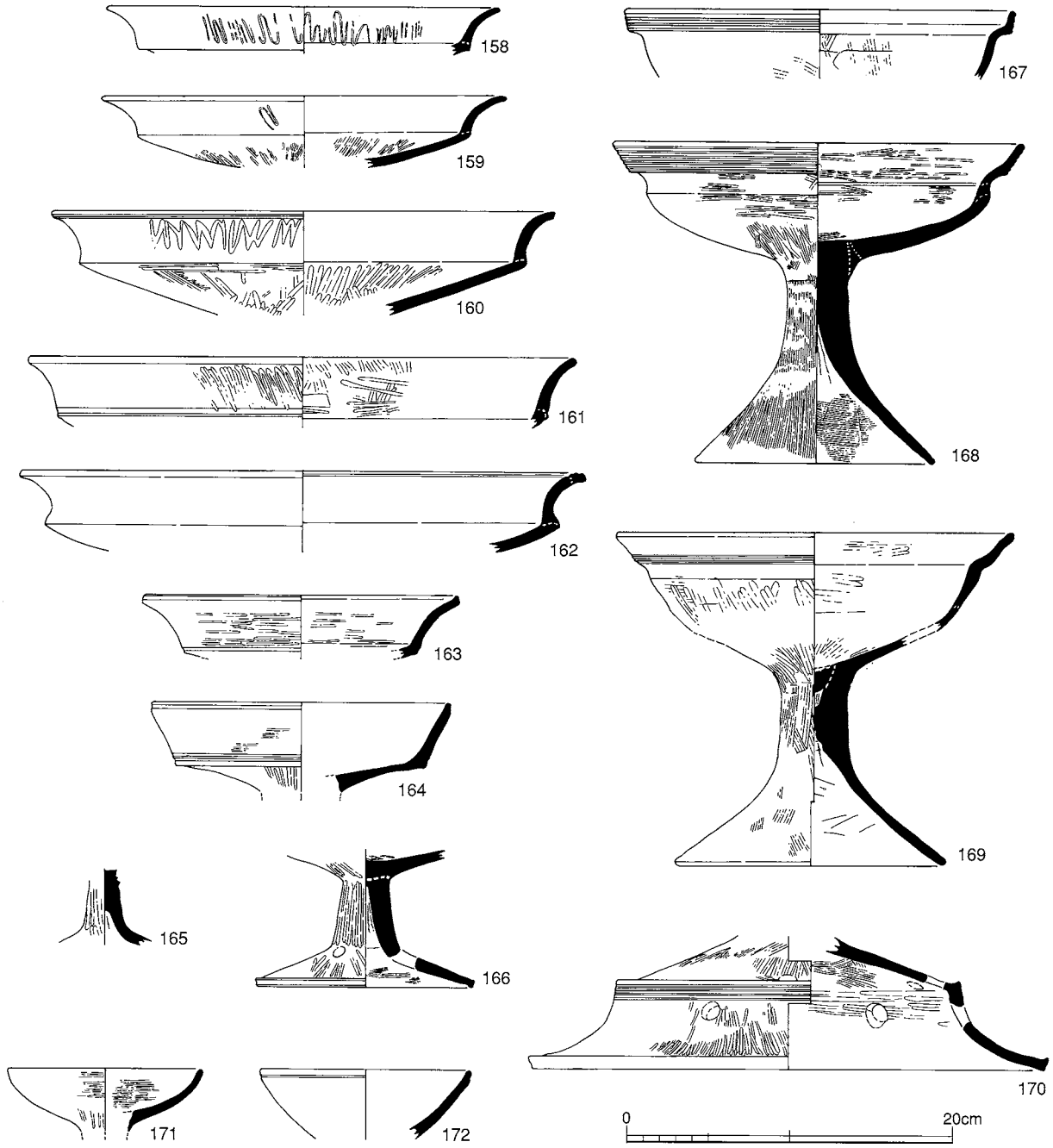
図版12　遺物



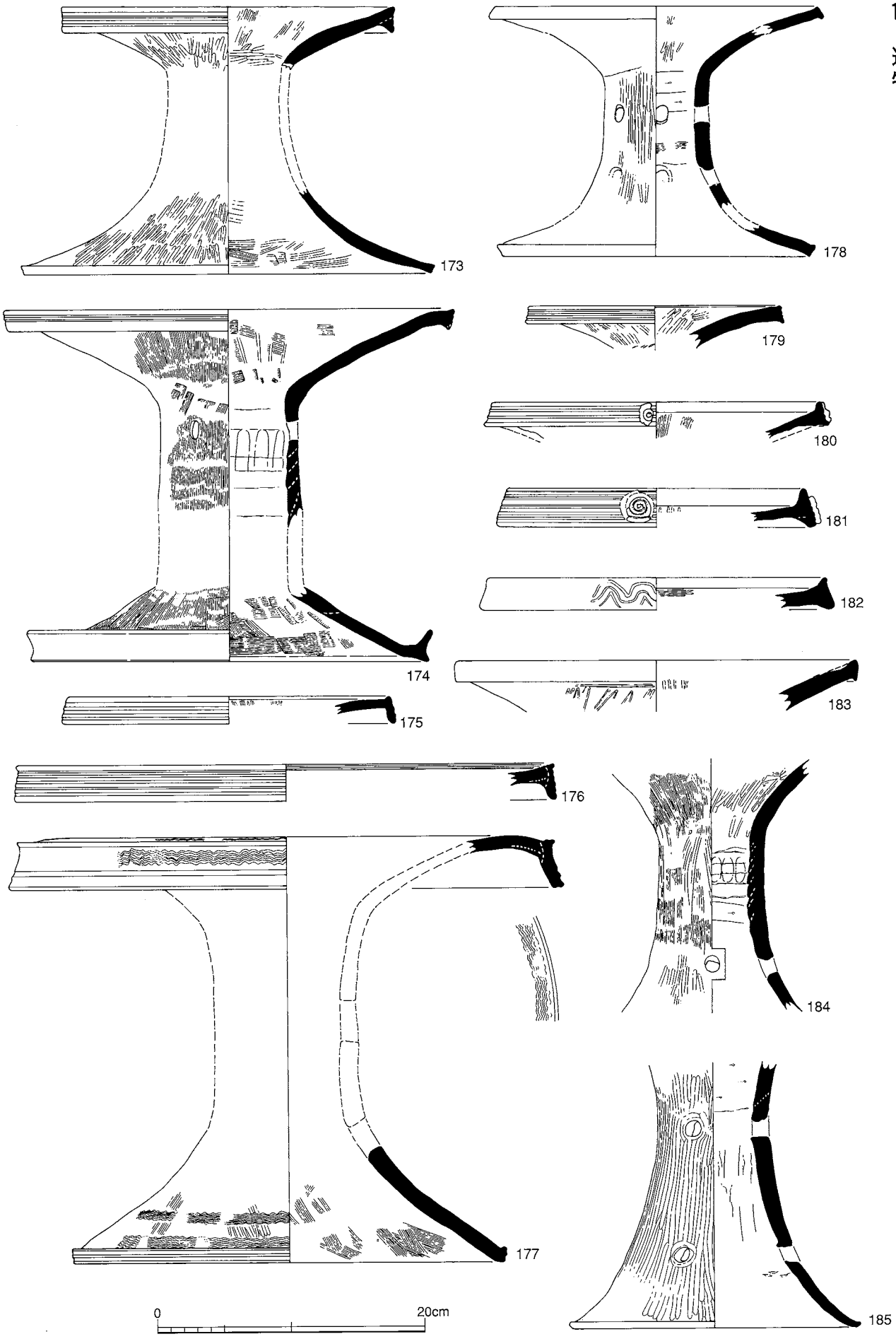
溝SD04出土　甕


129
130
135
131
136
132
133
137
134
147
153
148
154
138
143
155
149
139
150
156
144
151
140
157
145
152
141
142
146
0
20cm

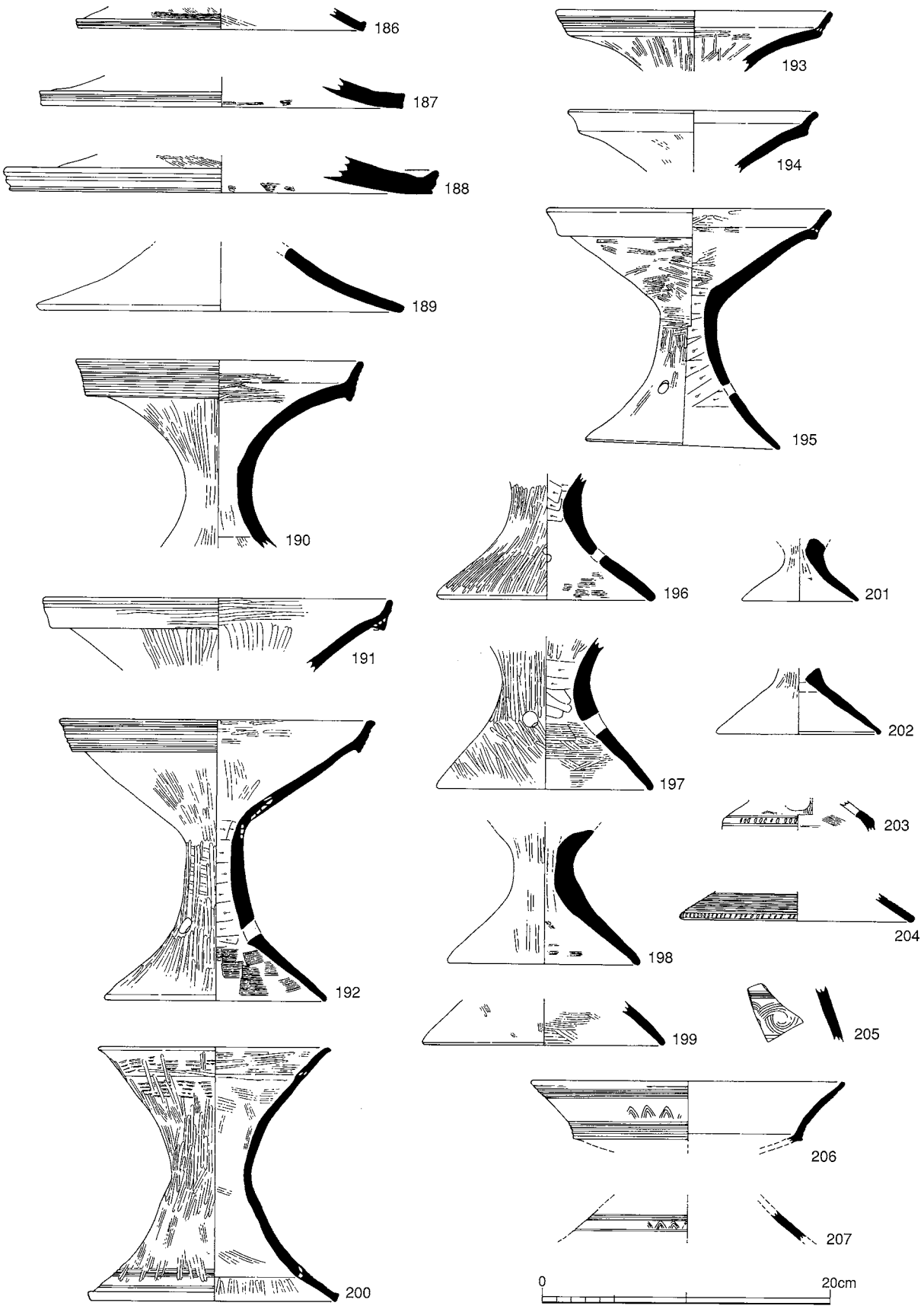
溝SD04出土　鉢


158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
0
20cm

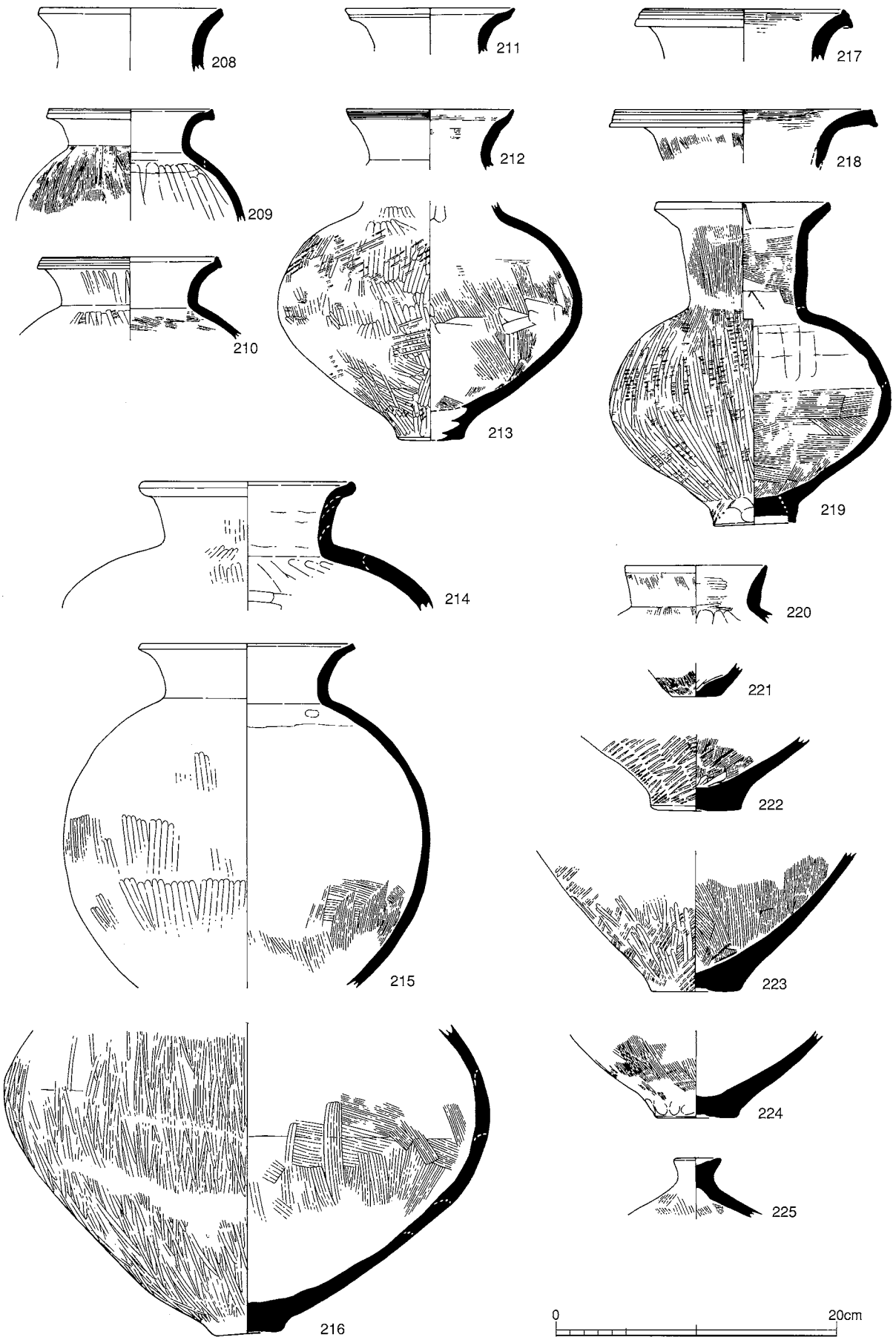
溝SD04出土　高坏



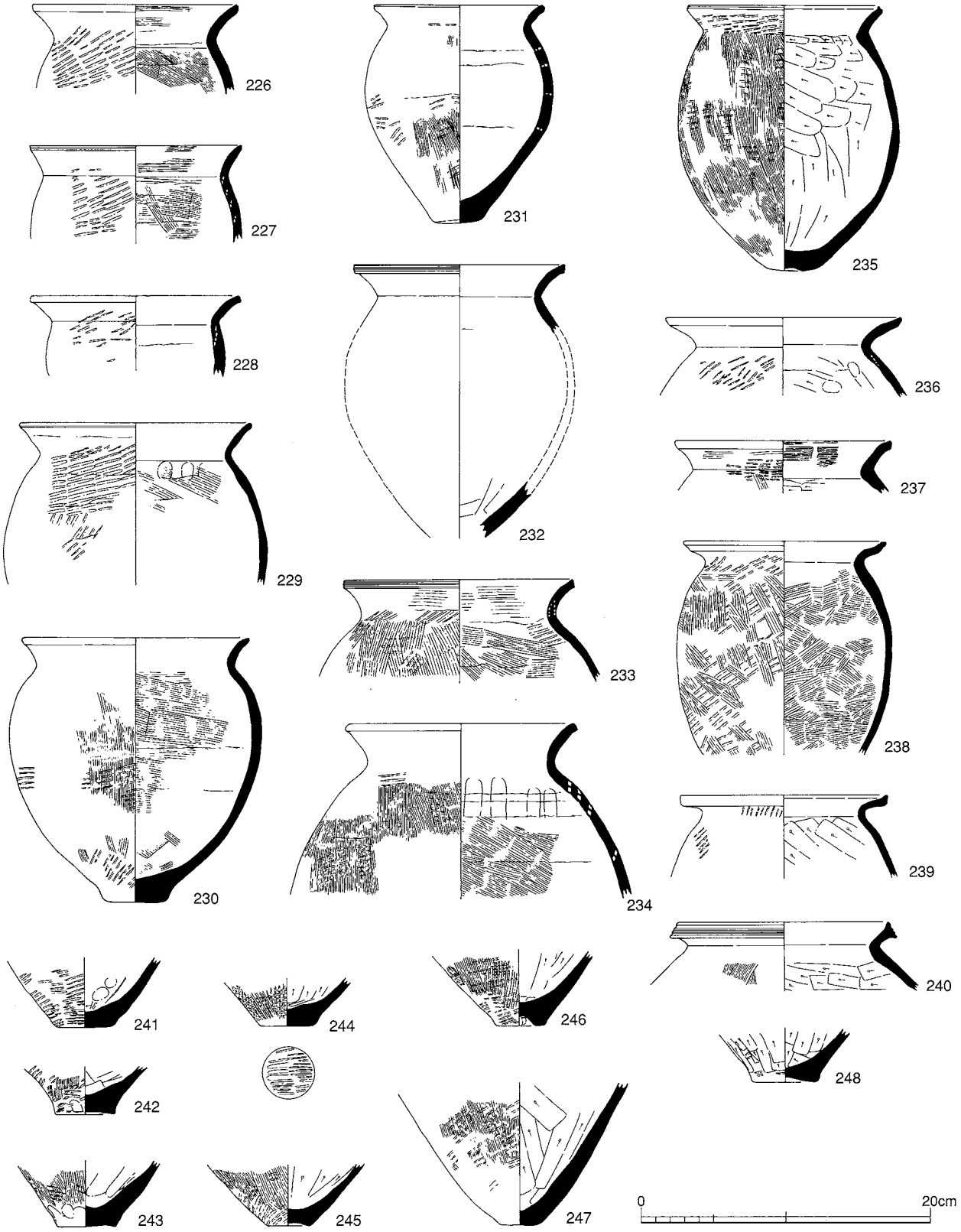
溝SD04出土　器台


186
187
188
189
190
191
192
200
193
194
195
196
197
198
199
201
202
203
204
205
206
207
0
20cm

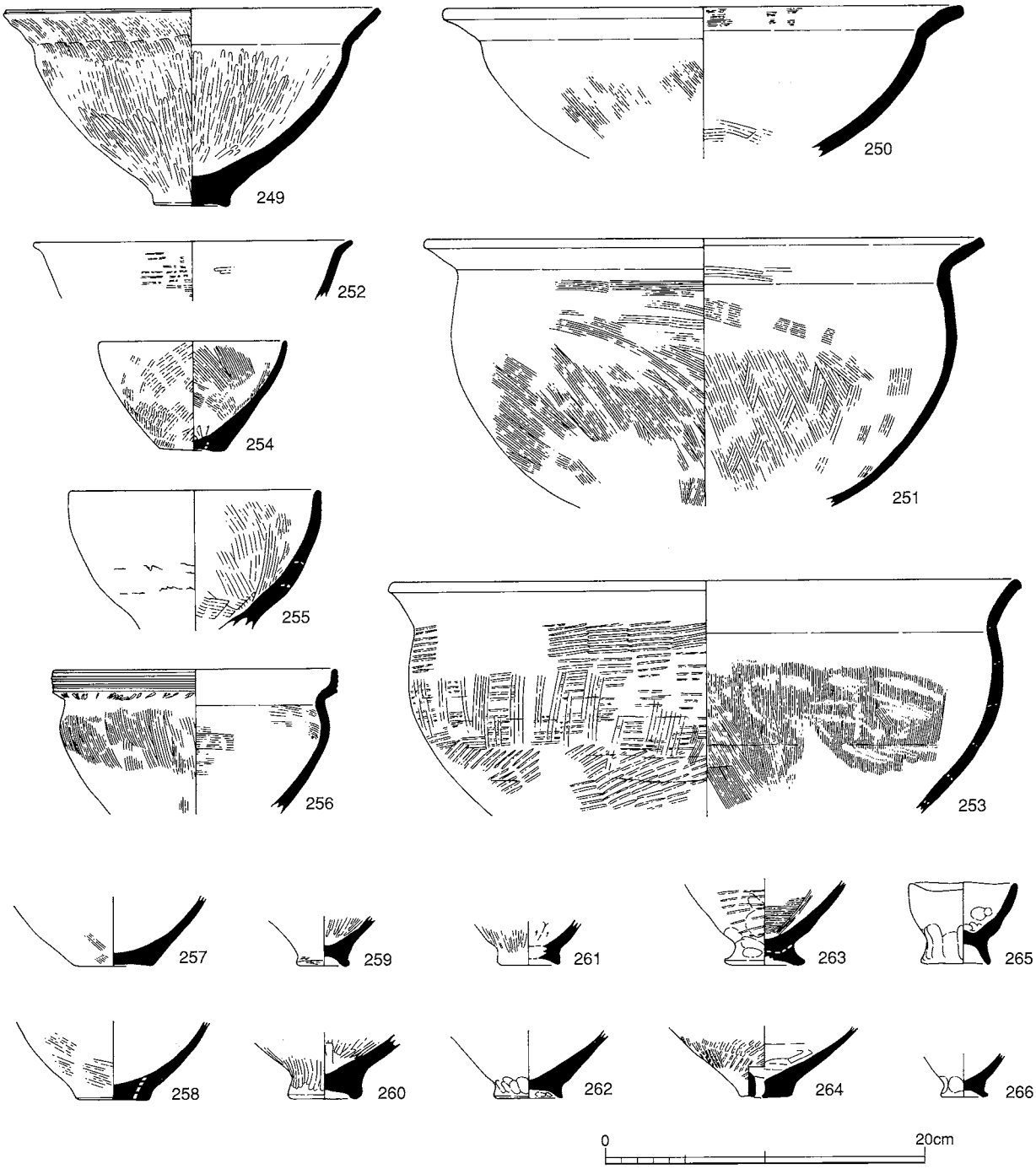
溝SD04出土　器台


208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
0
20cm

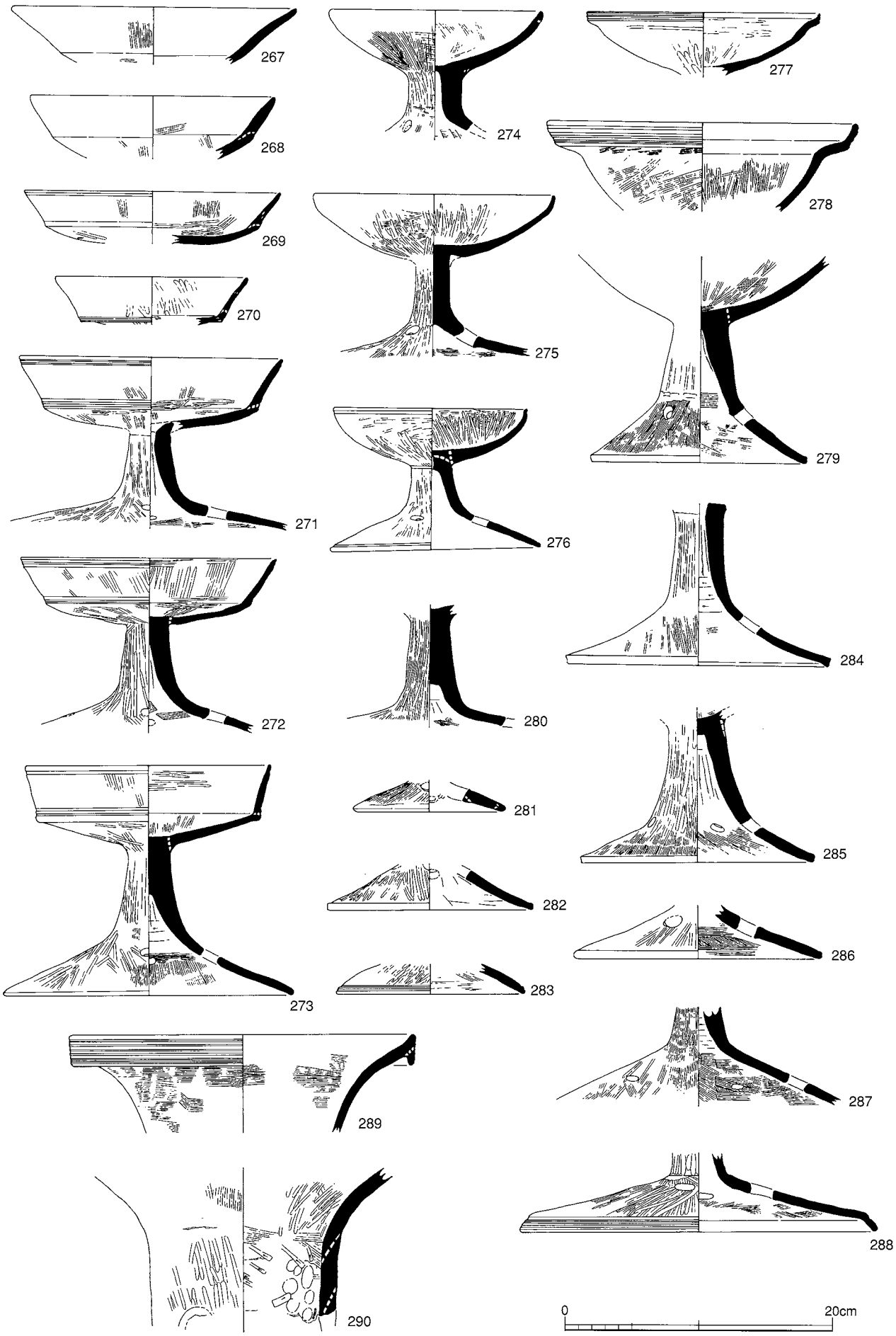
溝SD07出土　壺


226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
0
20cm

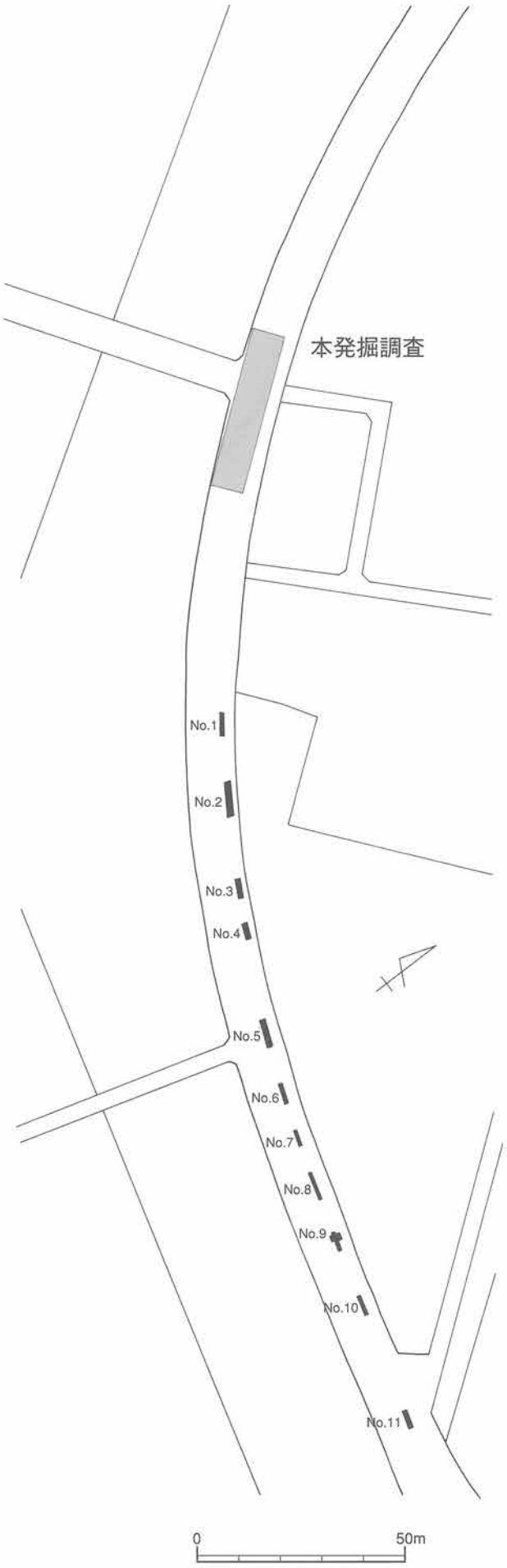
溝SD07出土　甕


249
250
252
254
251
255
256
253
257
259
261
263
265
258
260
262
264
266
0
20cm

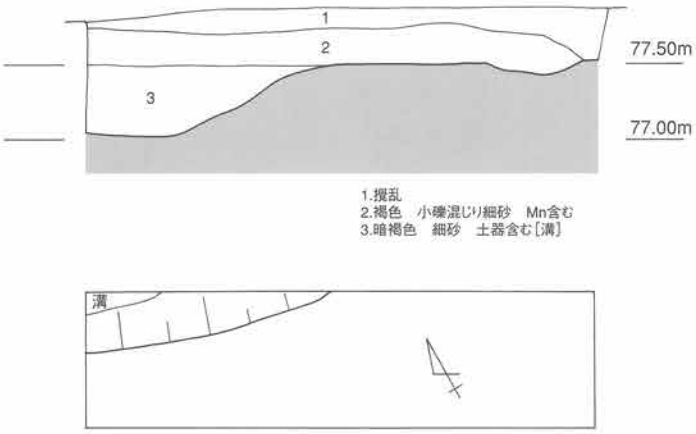
溝SD07出土　鉢



溝SD07出土　高坏・器台

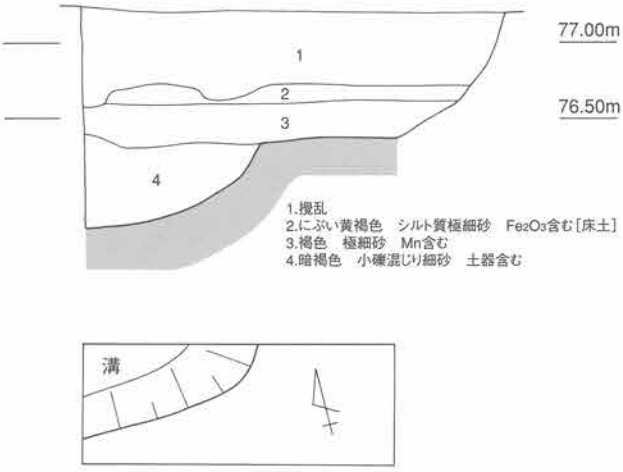


No.2



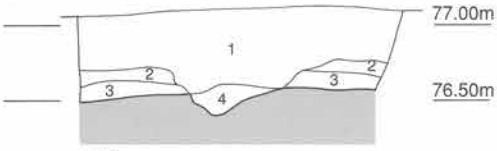
1.撹乱
2.褐色　小礫混じり細砂　Mn含む
3.暗褐色　細砂　土器含む［溝］

No.6

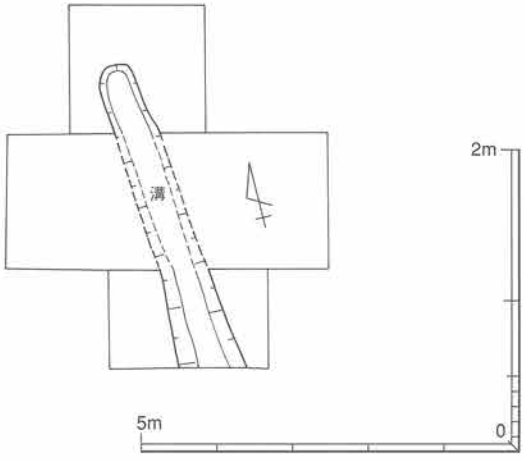


1.撹乱
2.にぶい黄褐色　シルト質極細砂　Fe_2O_3含む［床土］
3.褐色　極細砂　Mn含む
4.暗褐色　小礫混じり細砂　土器含む

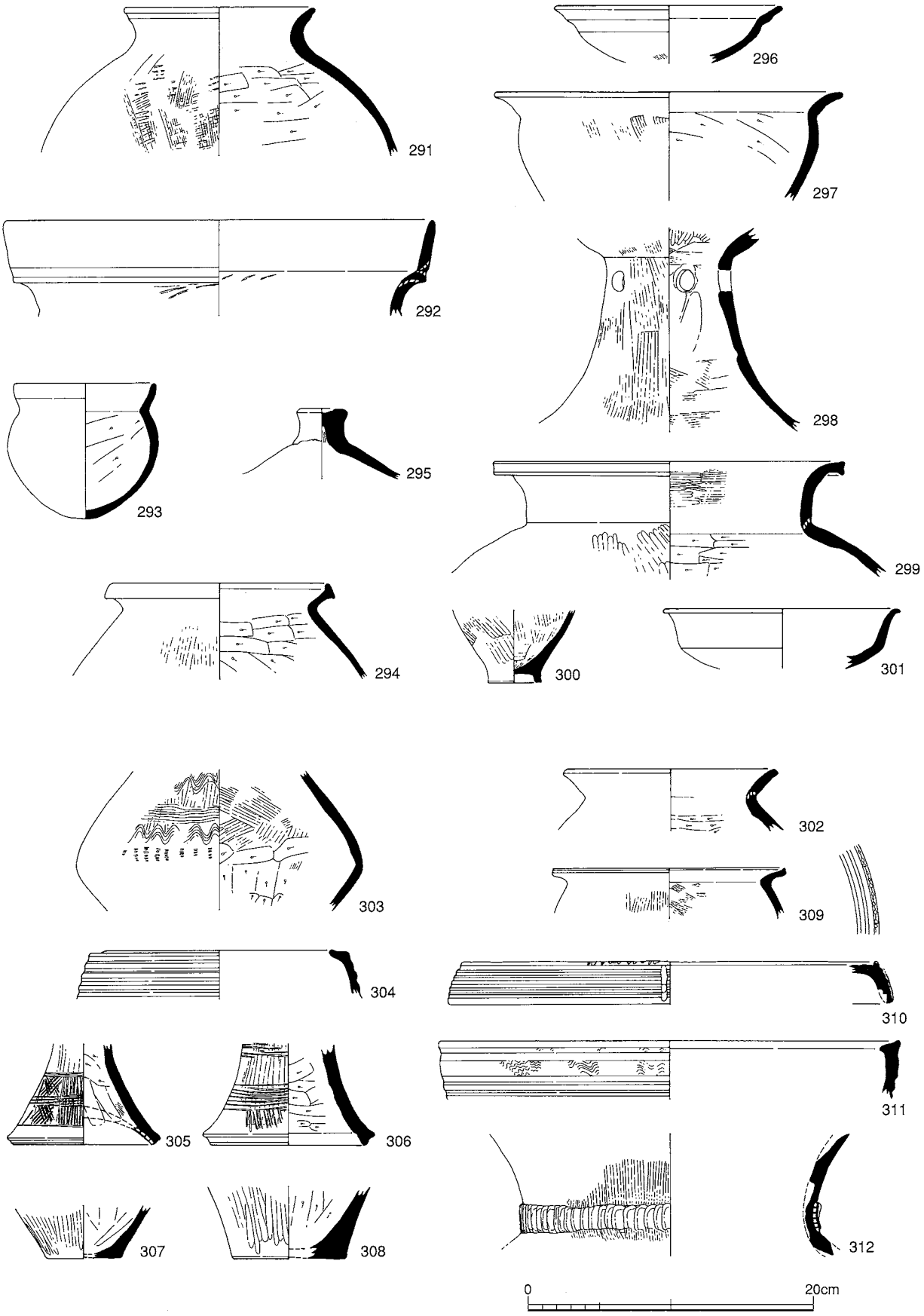
No.9



1.撹乱
2.にぶい黄褐色　シルト質極細砂　Fe_2O_3含む［床土］
3.褐色　シルト質極細砂　Fe_2O_3・Mn含む
4.暗褐色　極細砂　炭・土器多量に含む［溝］



試掘


291
296
297
292
298
293
295
299
294
300
301
303
302
309
304
310
305
306
311
307
308
312
0
20cm

試掘

写真図版

1　川戸遺跡 遠景（南西から）

2　川戸遺跡 遠景（東から）

3　川戸遺跡 近景（南東から）

4　川戸遺跡 近景（北東から）

5　第1面全景（南東から）

6　第2面全景（南東から）

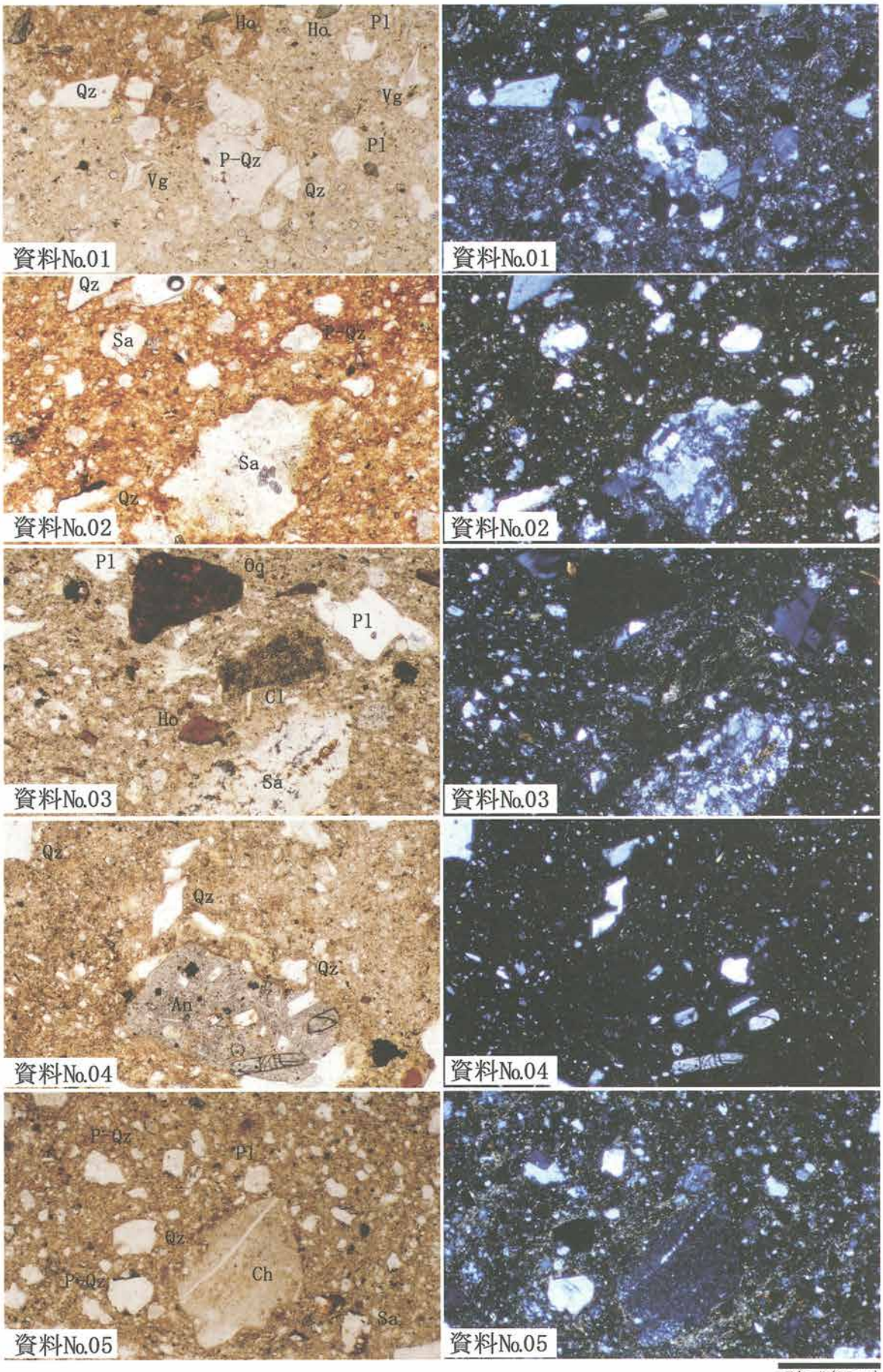
溝SD04出土主要土器

溝SD07出土主要土器

上:壺　中:甕　下:鉢

上:高坏　中:器台　下左:高坏2種の胎土　下右:同細部

写真図版7　分析　土器胎土の顕微鏡写真（1）

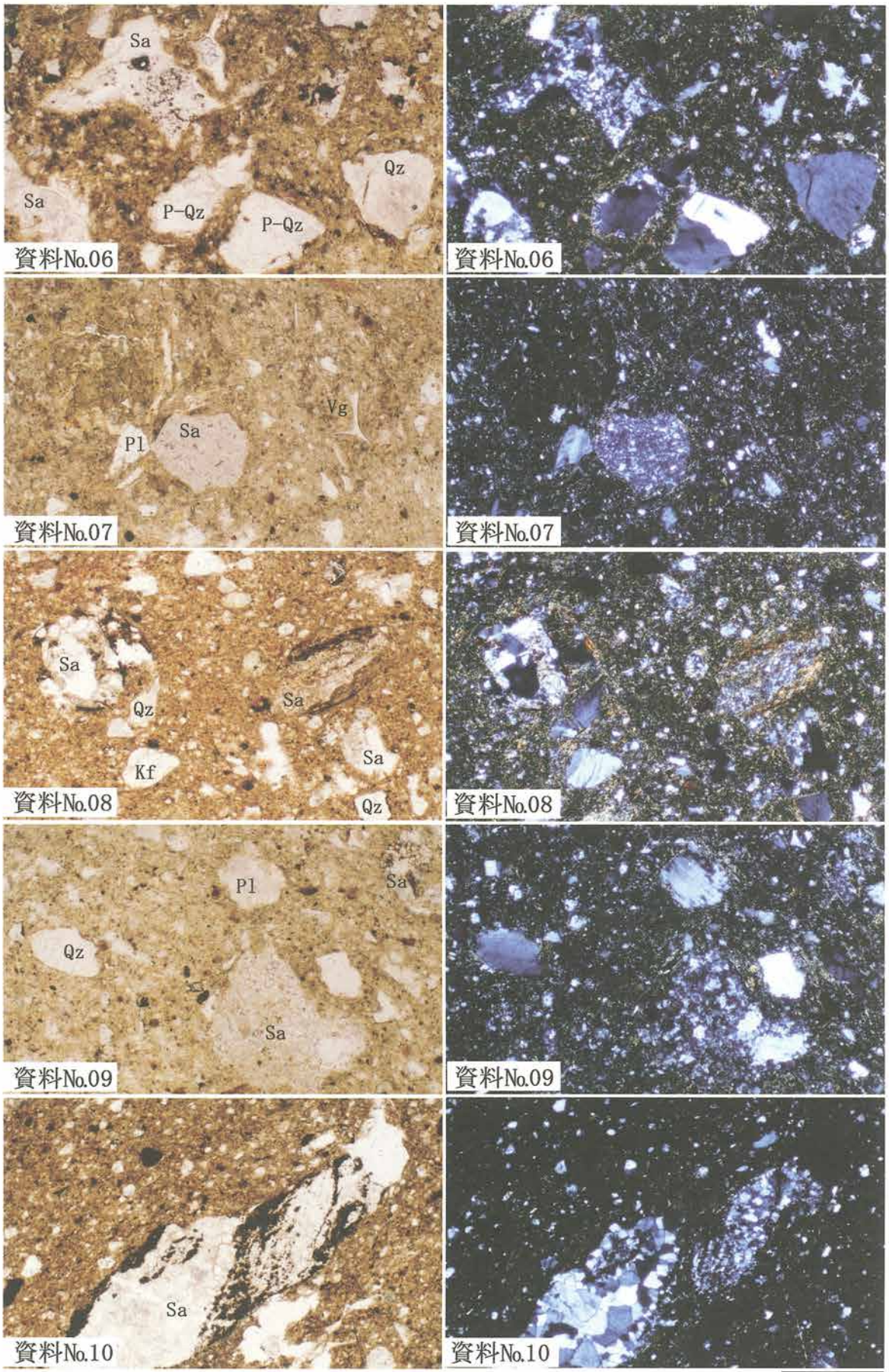


スケール（0.5mm）

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ho：角閃石　Gr：花崗岩　P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス　Sa：砂岩　Cl：粘土岩　Ch：チャート　An：安山岩　Oq：不透明鉱物　Po：植物珪酸体

写真左列は下方ポーラー、写真右列直交ポーラー

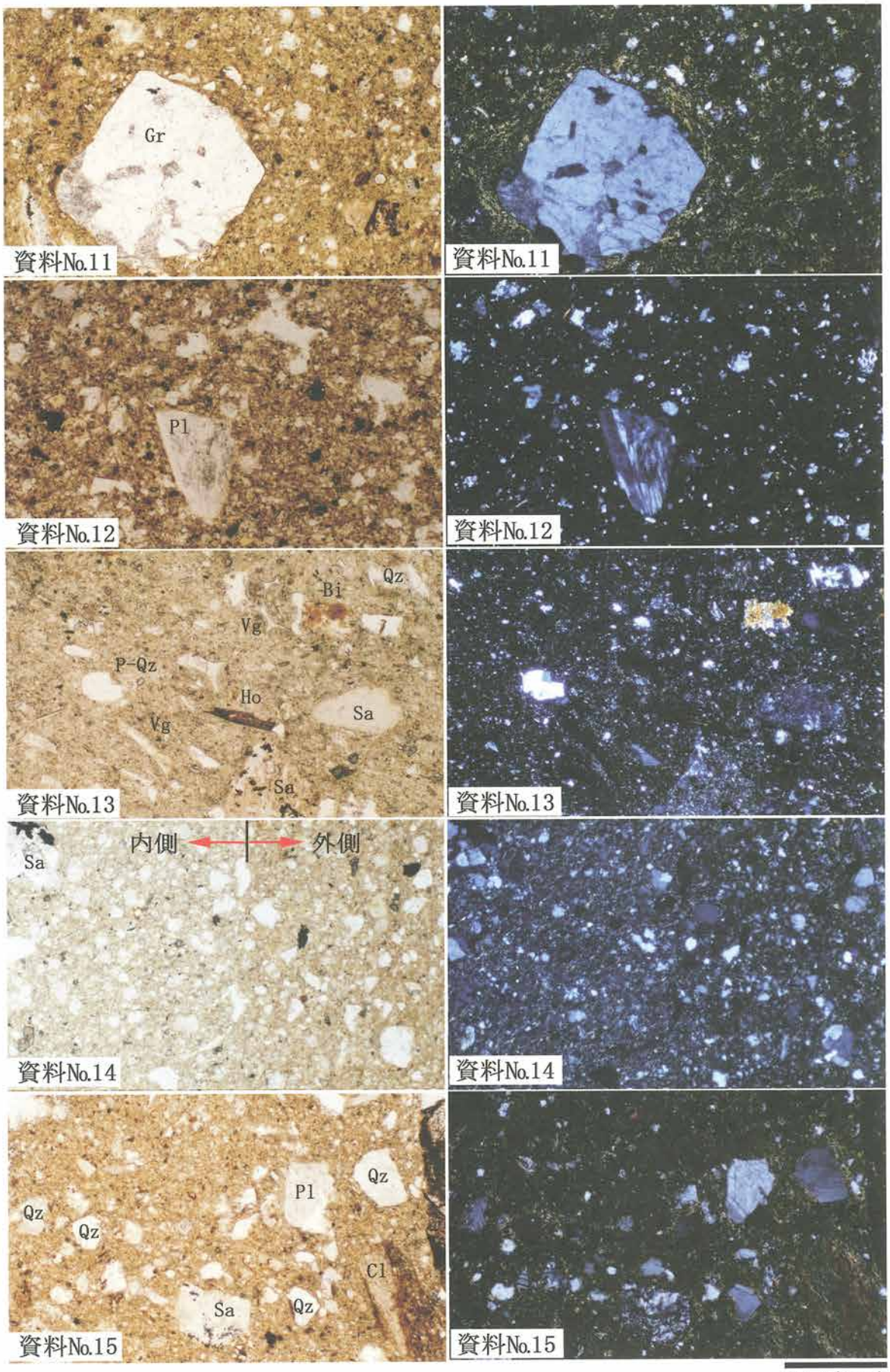
写真図版8　分析　土器胎土の顕微鏡写真(2)



スケール(0.5mm)

Qz:石英　Pl:斜長石　Kf:カリ長石　Ho:角閃石　Gr:花崗岩　P-Qz:多結晶石英　Vg:火山ガラス　Sa:砂岩　Cl:粘土岩　Ch:チャート　An:安山岩　Oq:不透明鉱物　Po:植物珪酸体

写真左列は下方ポーラー、写真右列直交ポーラー

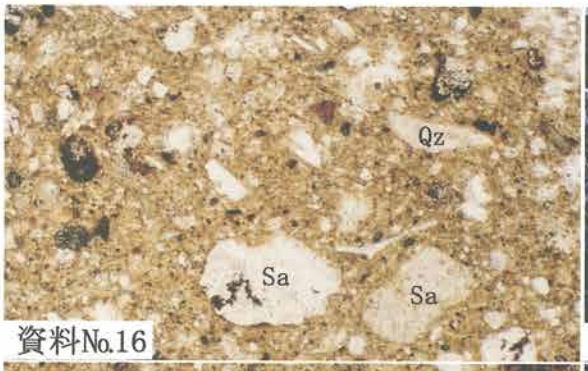


スケール（0.5mm）

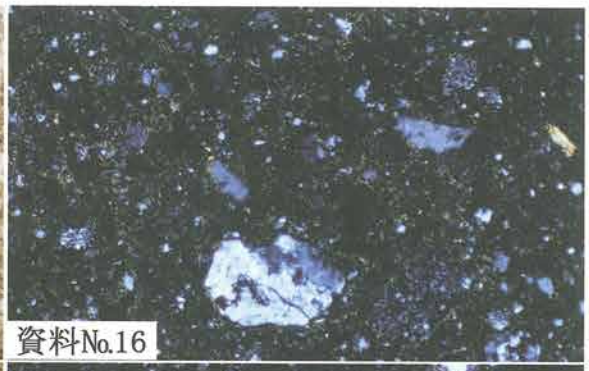
Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ho：角閃石　Gr：花崗岩　P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス　Sa：砂岩　Cl：粘土岩　Ch：チャート　An：安山岩　Oq：不透明鉱物　Po：植物珪酸体

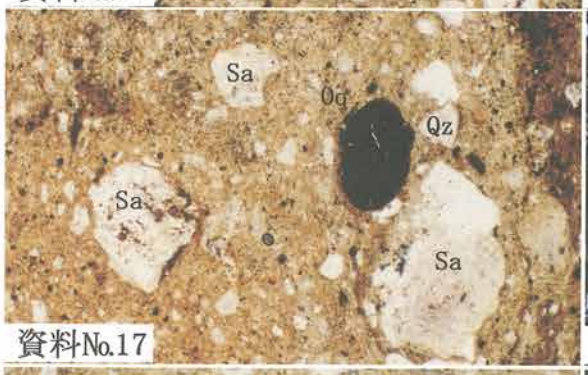
写真左列は下方ポーラー、写真右列直交ポーラー

写真図版10　分析　土器胎土の顕微鏡写真（4）

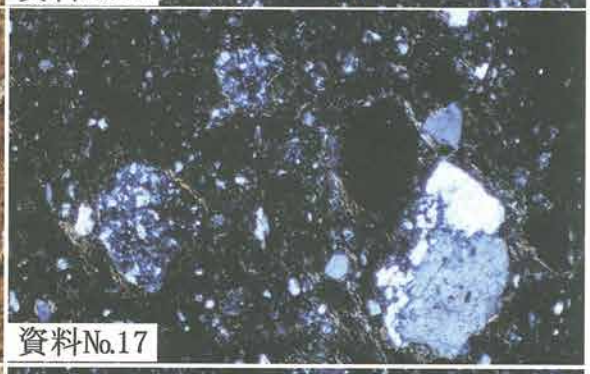


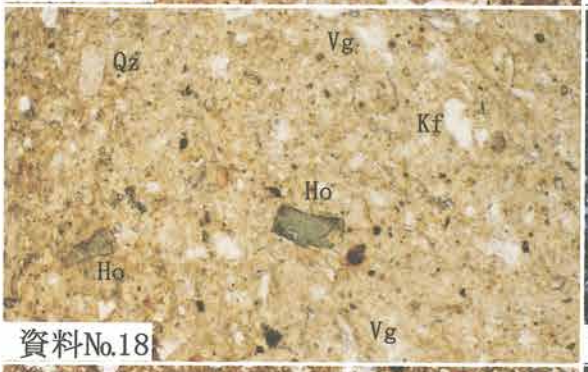
資料No.16


資料No.16

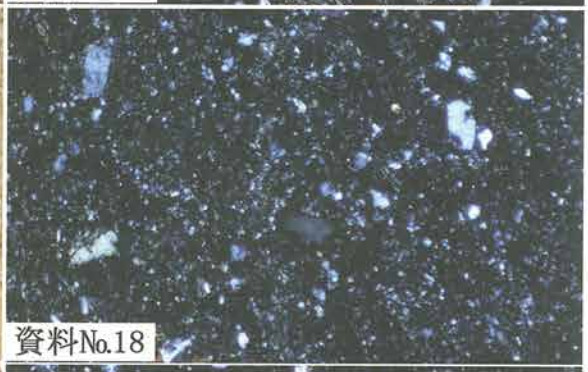


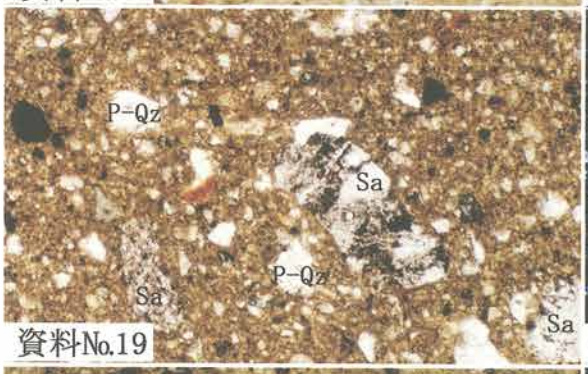
資料No.17


資料No.17

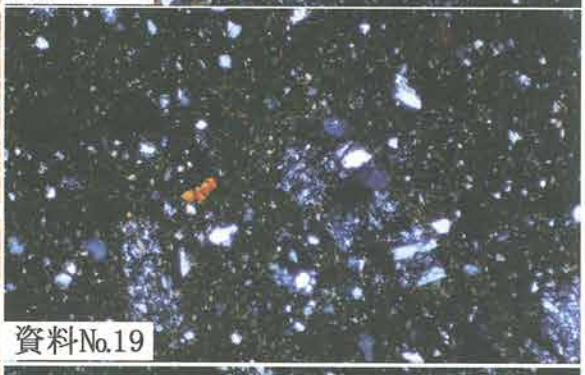


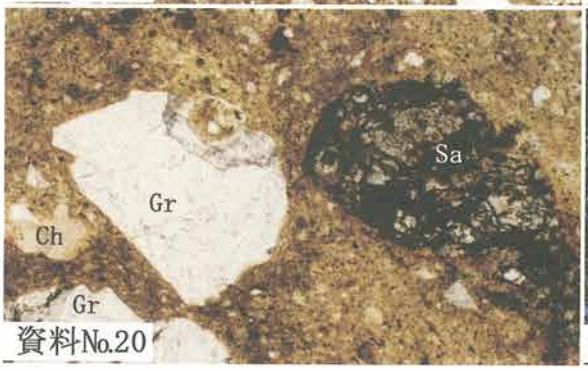
資料No.18


資料No.18

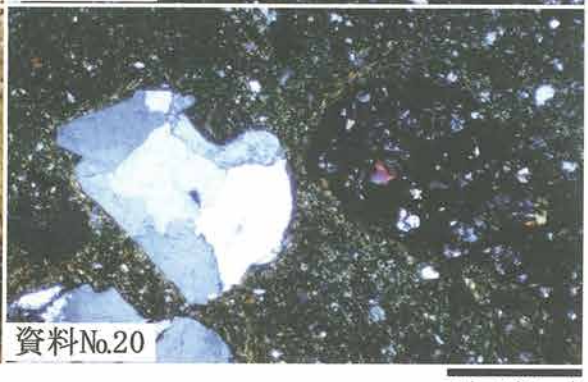


資料No.19


資料No.19



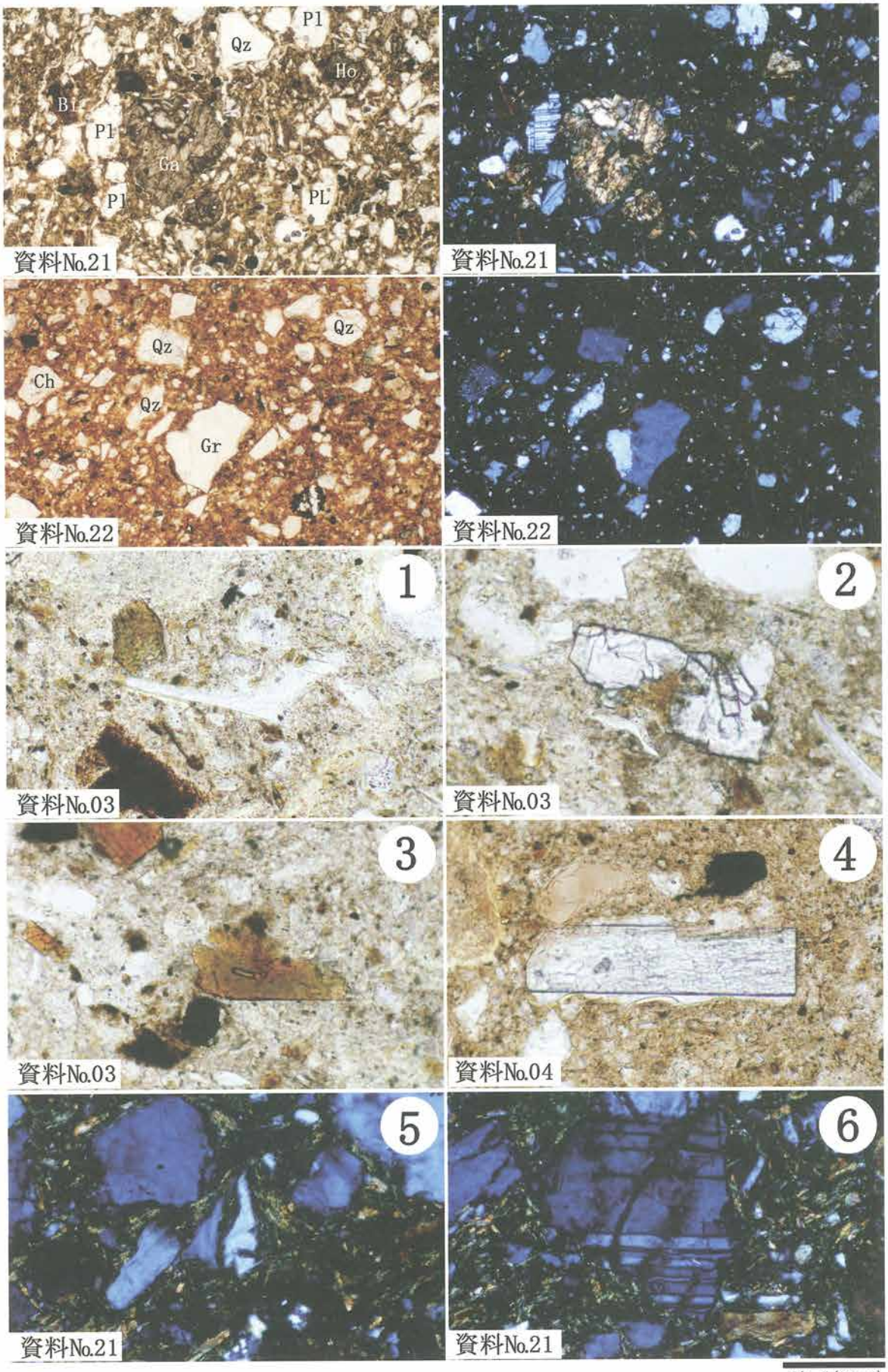
資料No.20


資料No.20

スケール（0.5mm）

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ho：角閃石　Gr：花崗岩　P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス Sa：砂岩　Cl：粘土岩　Ch：チャート　An：安山岩　Oq：不透明鉱物　Po：植物珪酸体
写真左列は下方ポーラー、写真右列直交ポーラー

写真図版11　分析　土器胎土の顕微鏡写真（5）

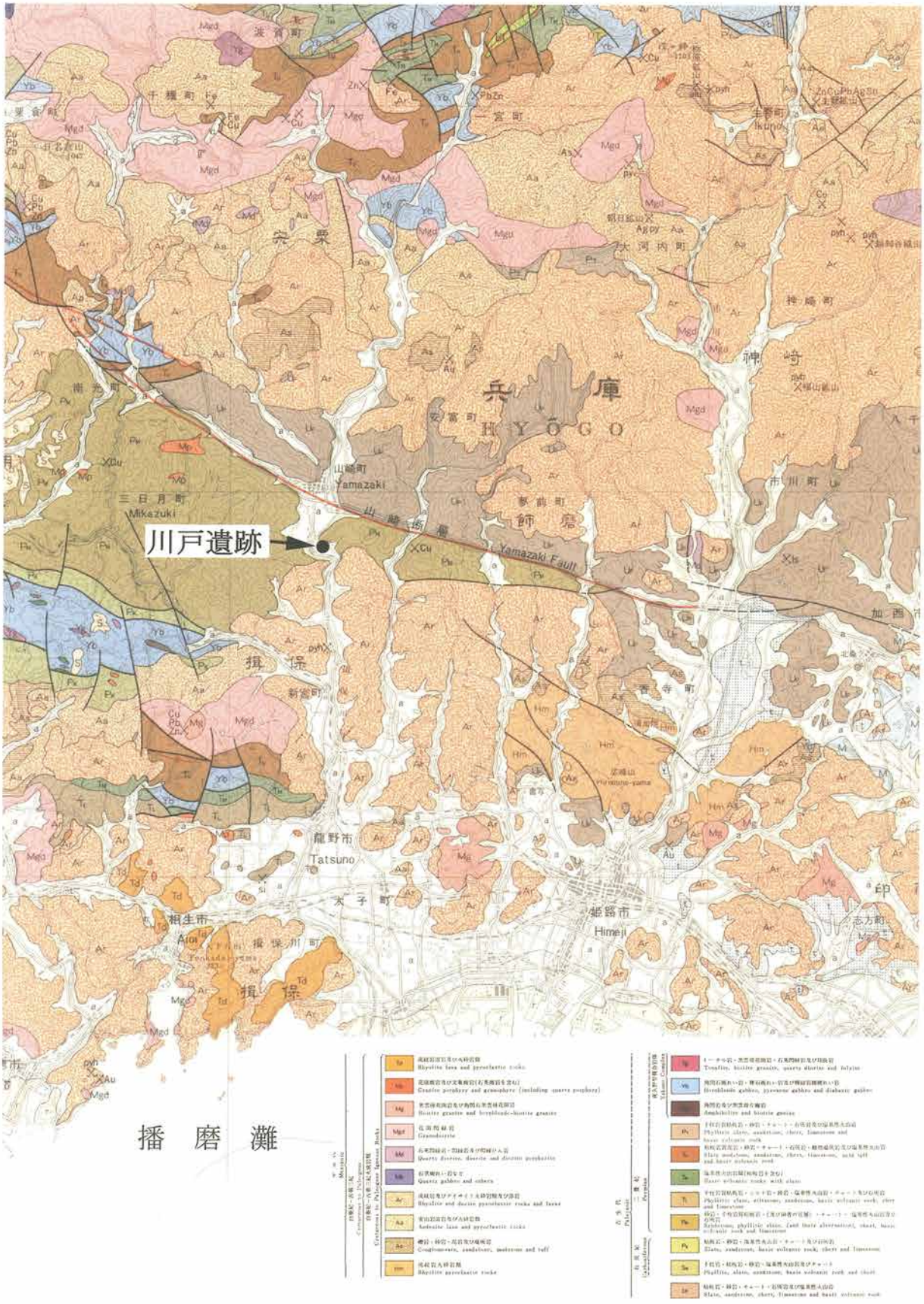


スケール（0.5mm）

Qz：石英　Pl：斜長石　Kf：カリ長石　Ho：角閃石　Gr：花崗岩　P-Qz：多結晶石英　Vg：火山ガラス　Sa：砂岩　Cl：粘土岩　Ch：チャート　An：安山岩　Oq：不透明鉱物　Po：植物珪酸体

写真左列は下方ポーラー、写真右列直交ポーラー

1. 火山ガラス（50μm）　2. 単斜輝石（50μm）　3. 角閃石（50μm）　4. ガラス付着斜方輝石（50μm）　5. 尖った粒子（50μm）　6. 斜長石双晶のたわみ（50μm）



遺跡周辺の地質図（地質調査所（1981）20万分の1地質図幅「姫路」を改変して使用）

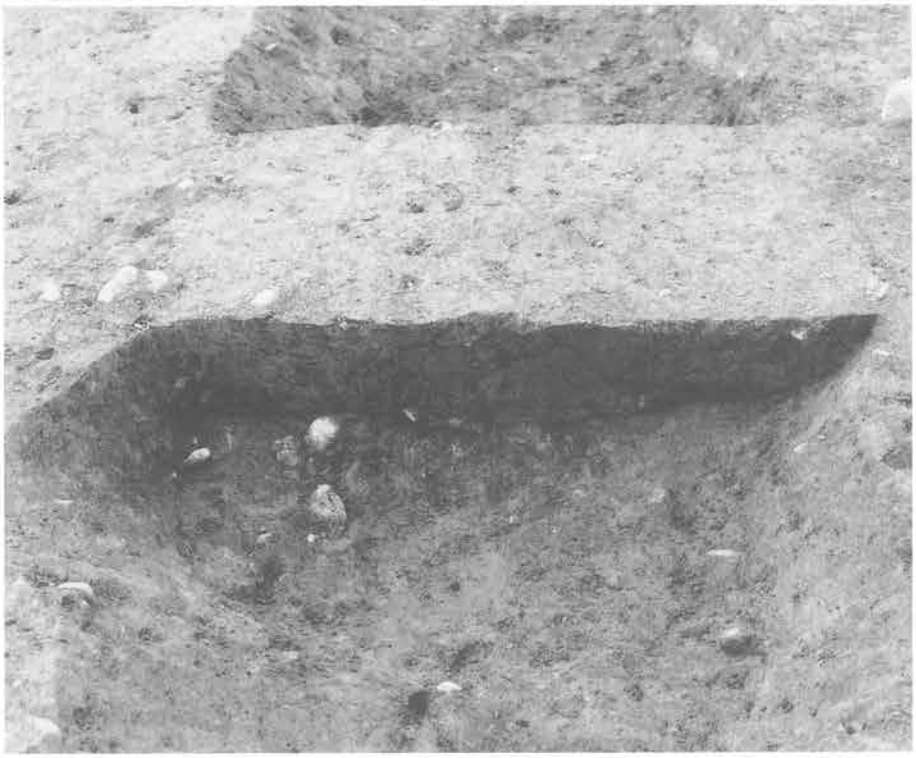
7　川戸遺跡 遠景（南から）

8　川戸遺跡 遠景（西から）

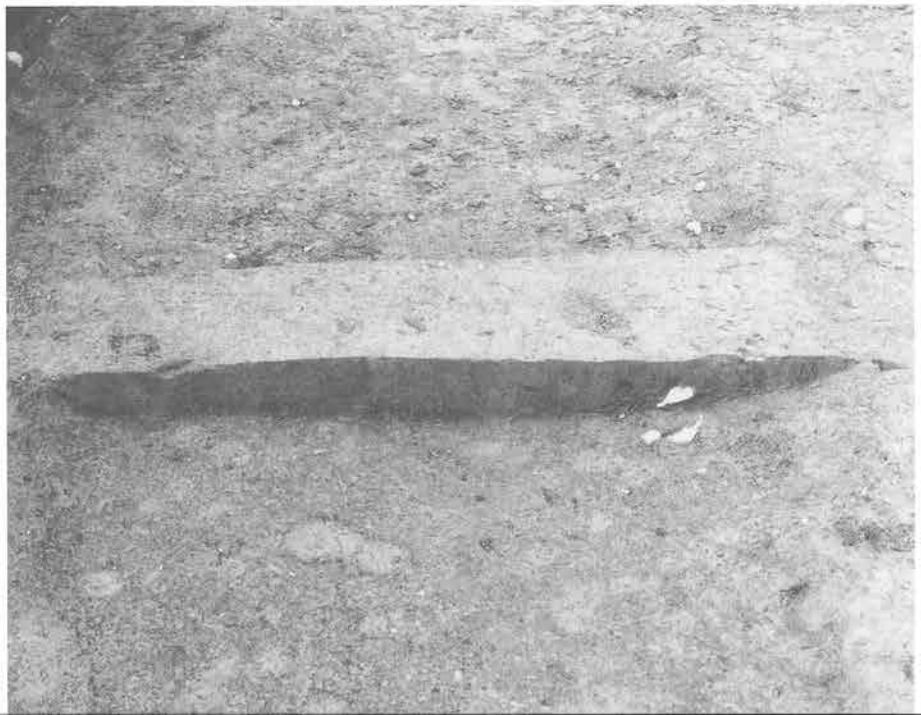
9　第1面全景（南から）

10　第1面全景（南から）

11　溝SD02（南西から）

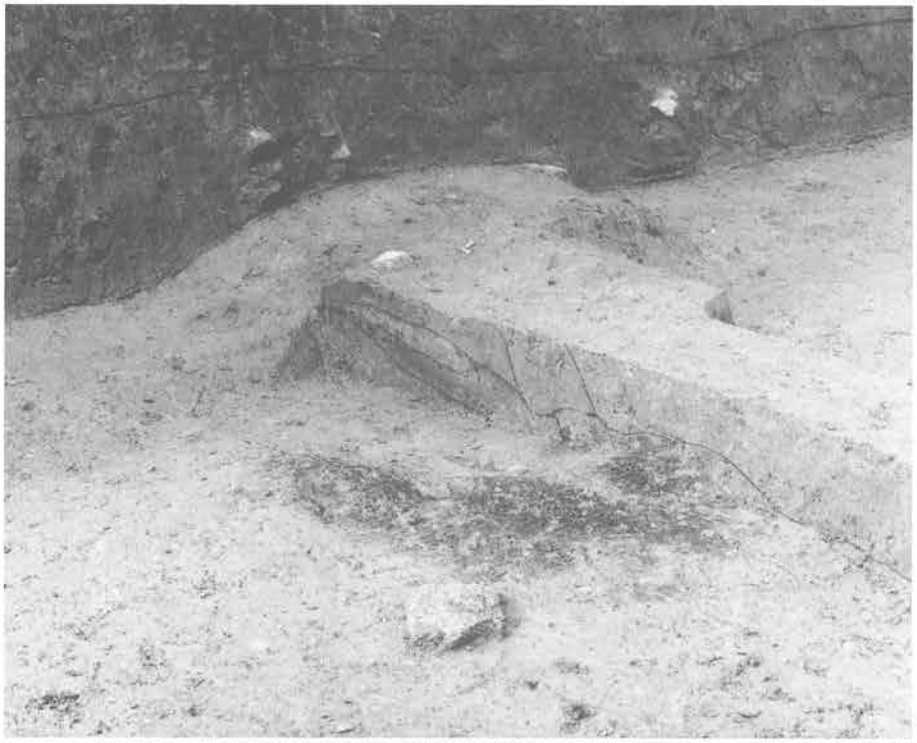


12　溝SD02断面（南西から）



13　溝SD01断面（南西から）

14　SX06竈



15　SX06竈断面

16　SX06周辺土器出土状況

17　第2面全景（北東から）

18　第2面全景（北東から）

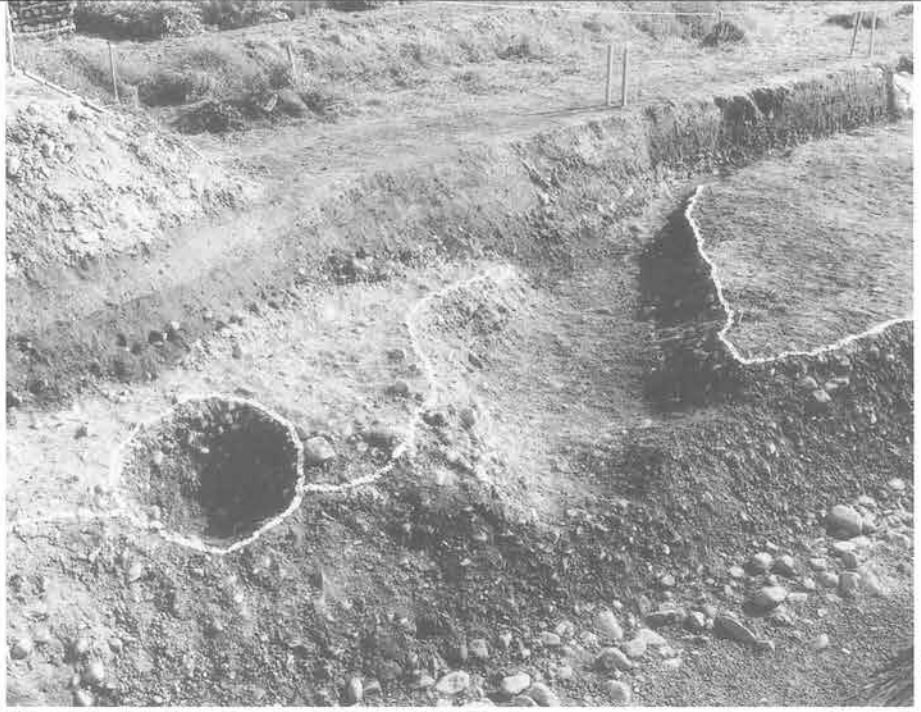
19　第2面全景（南西から）

20　第2面全景（南西から）

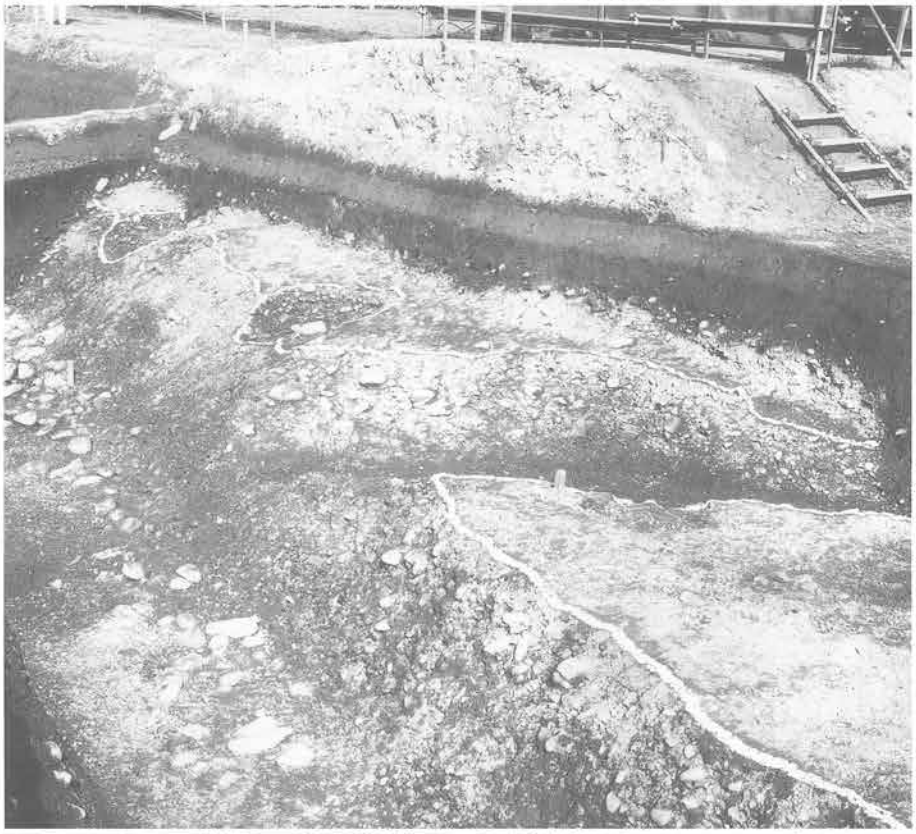
21　溝SD04断面（西から）

22　溝SD04断面（南西から）

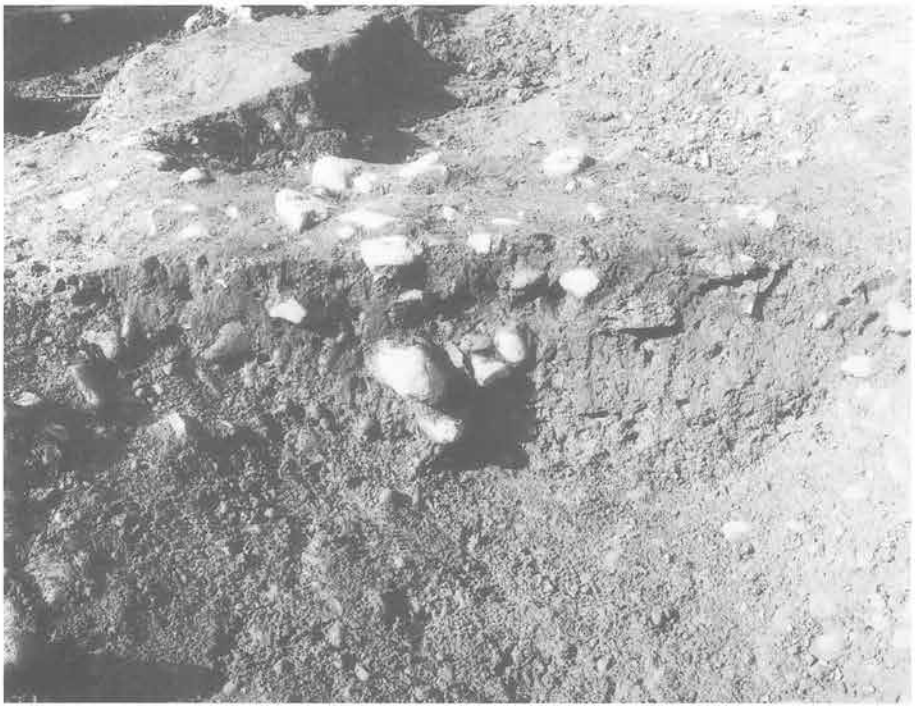
23　溝SD04器台出土状況



24　土坑SK08・溝SD07全景
（北から）



25　土坑SK09・土坑SK08・溝SD07全景
（西から）



26　溝SD07断面（南から）

27　竪穴住居SH05全景
（北西から）

28　竪穴住居SH05断面
（西から）

29　竪穴住居SH05柱穴断面
（北西から）

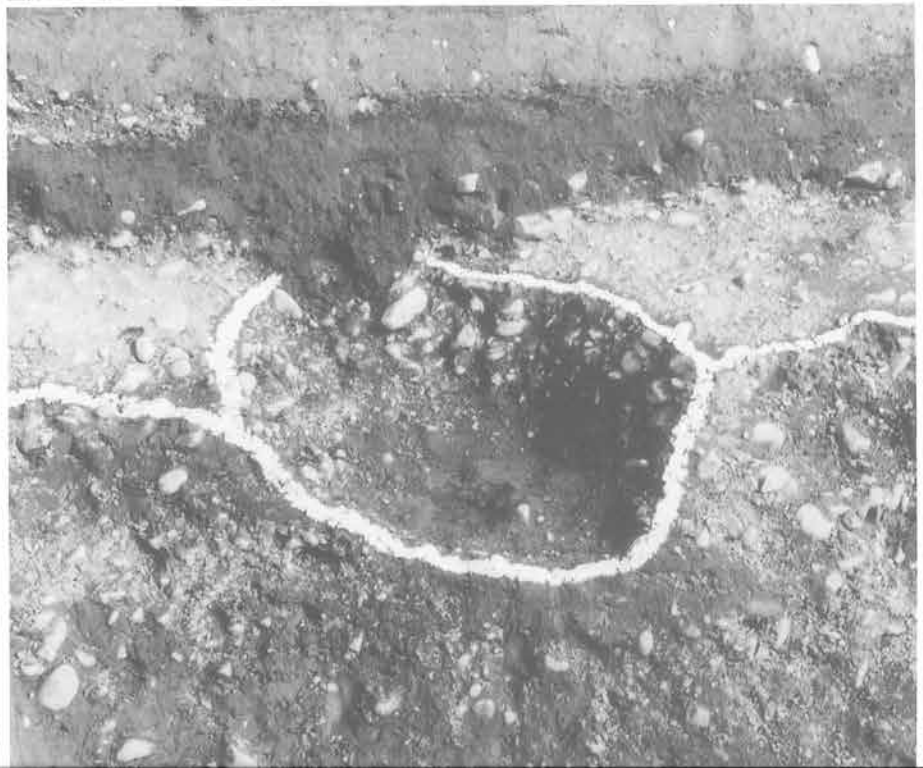
30　土坑SK08検出状況
（南西から）

31　土坑SK08断面（南西から）

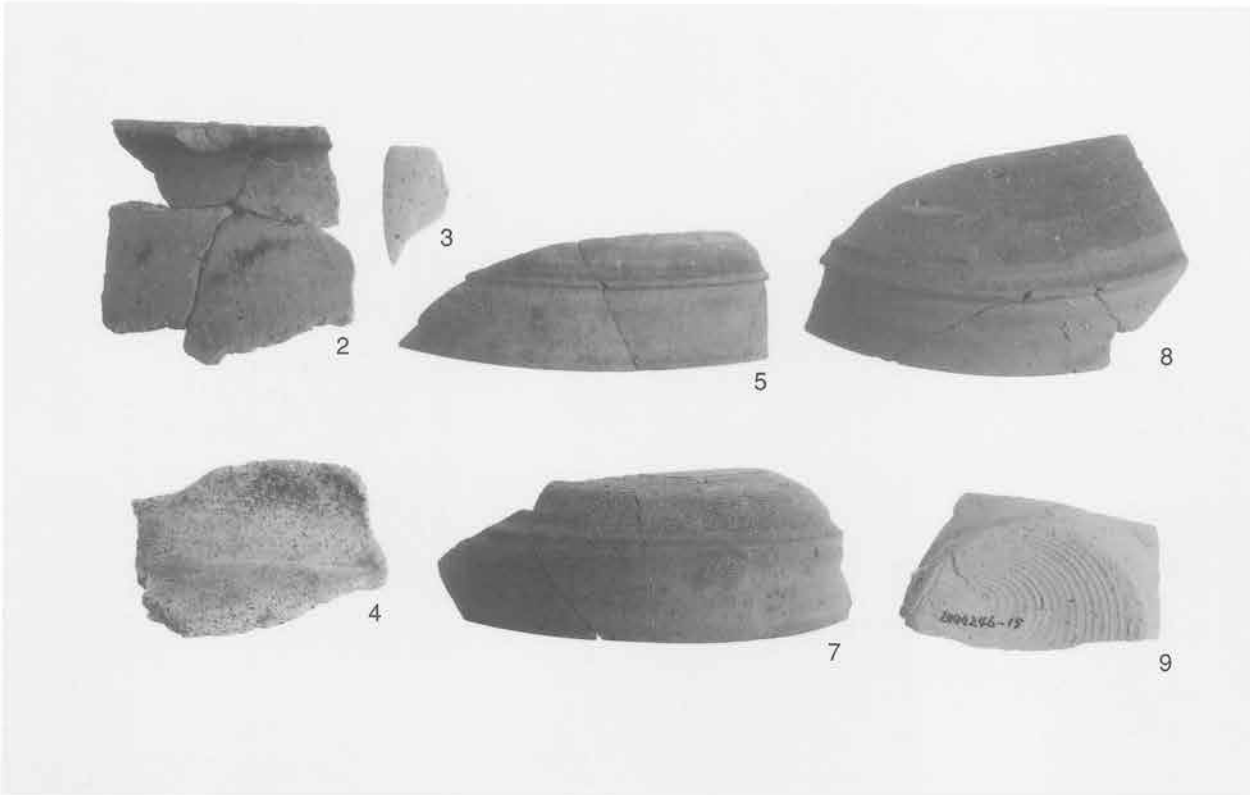
32　土坑SK08全景（北西から）

33　土坑SK09検出状況（南西から）

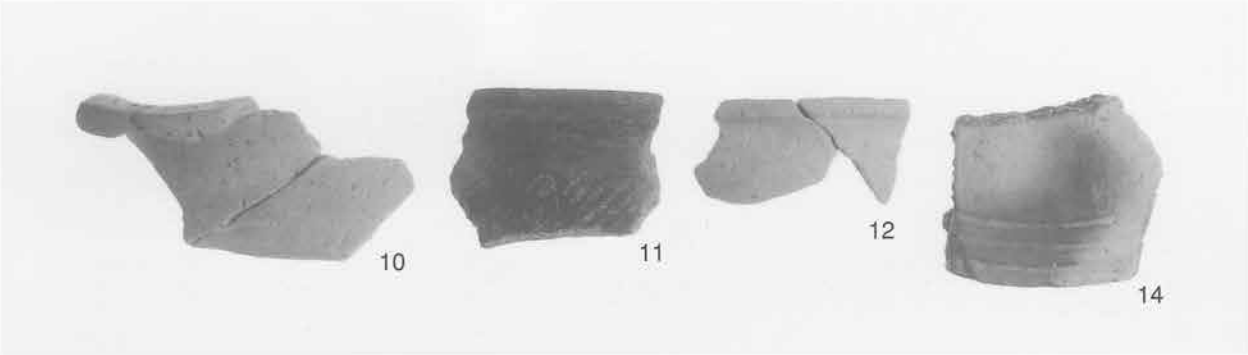
34　土坑SK09断面（南西から）

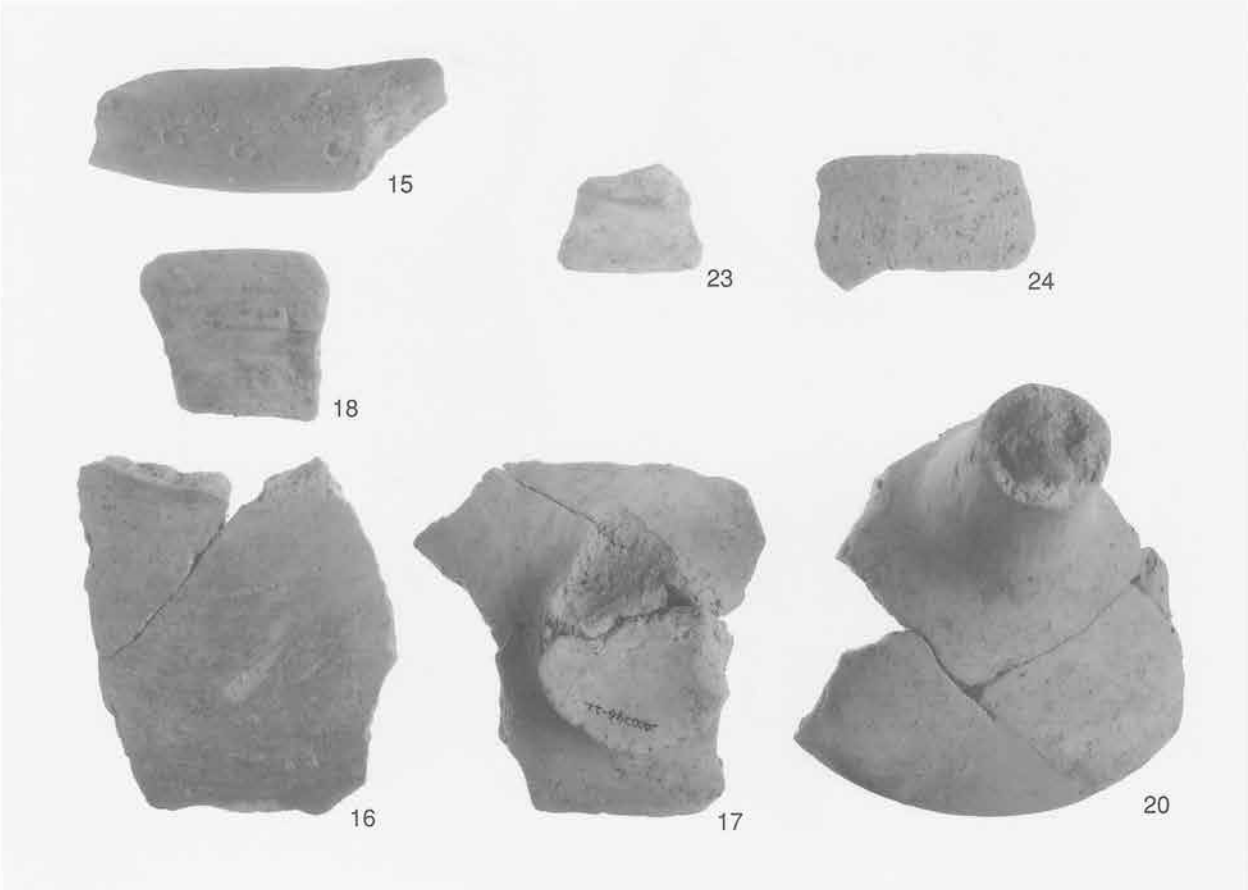


35　土坑SK09全景（北西から）

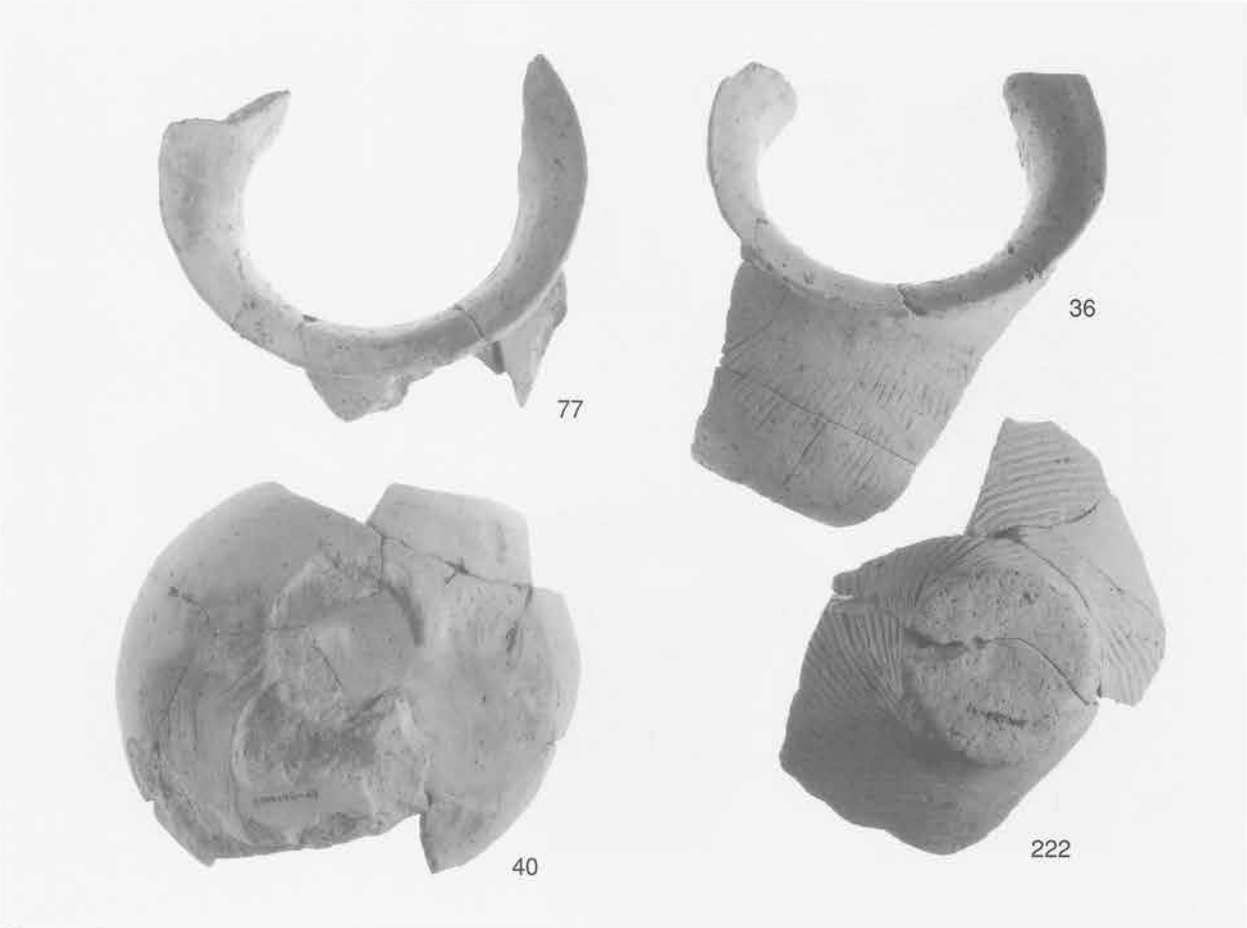


SX06遺物・第1面遺物

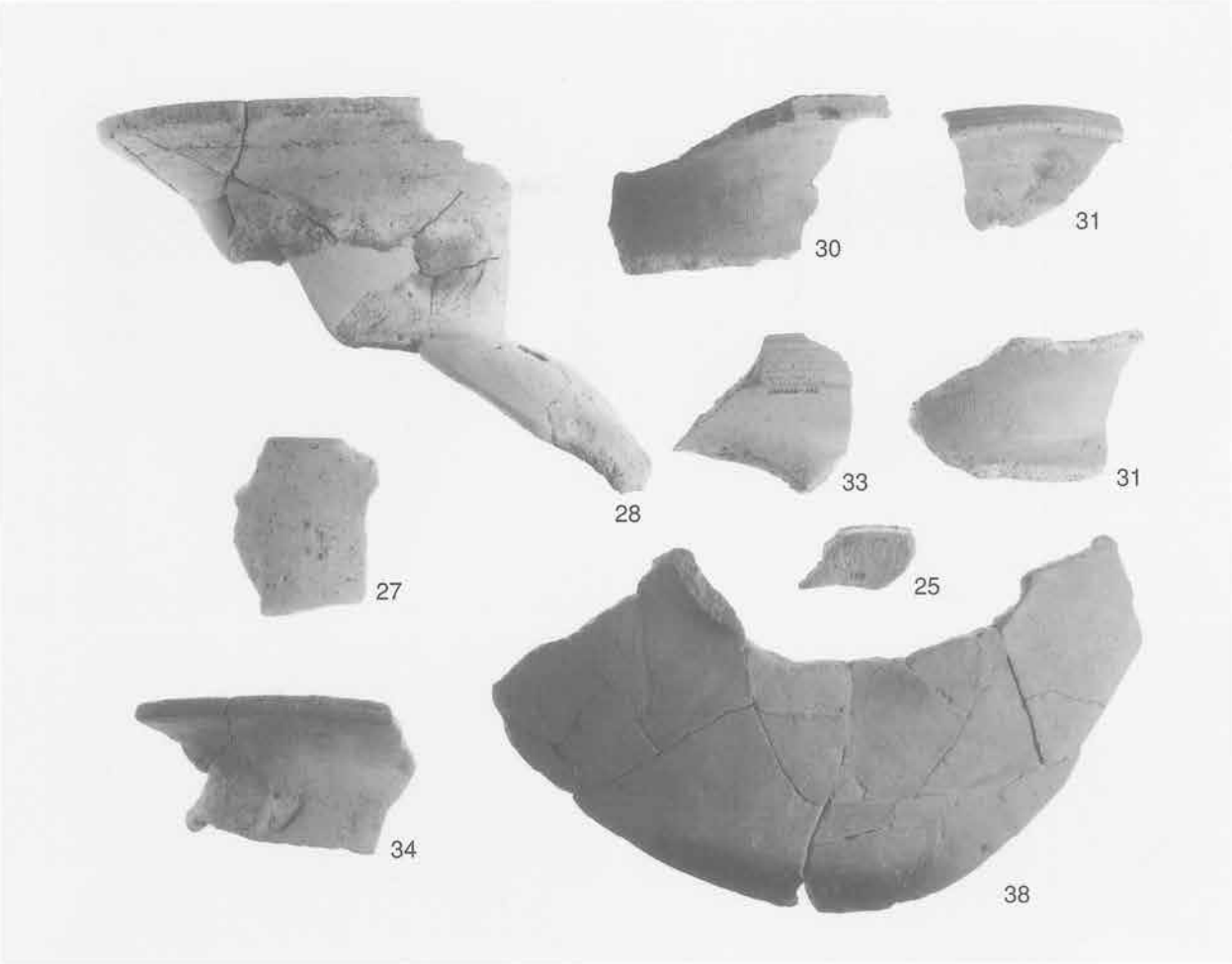


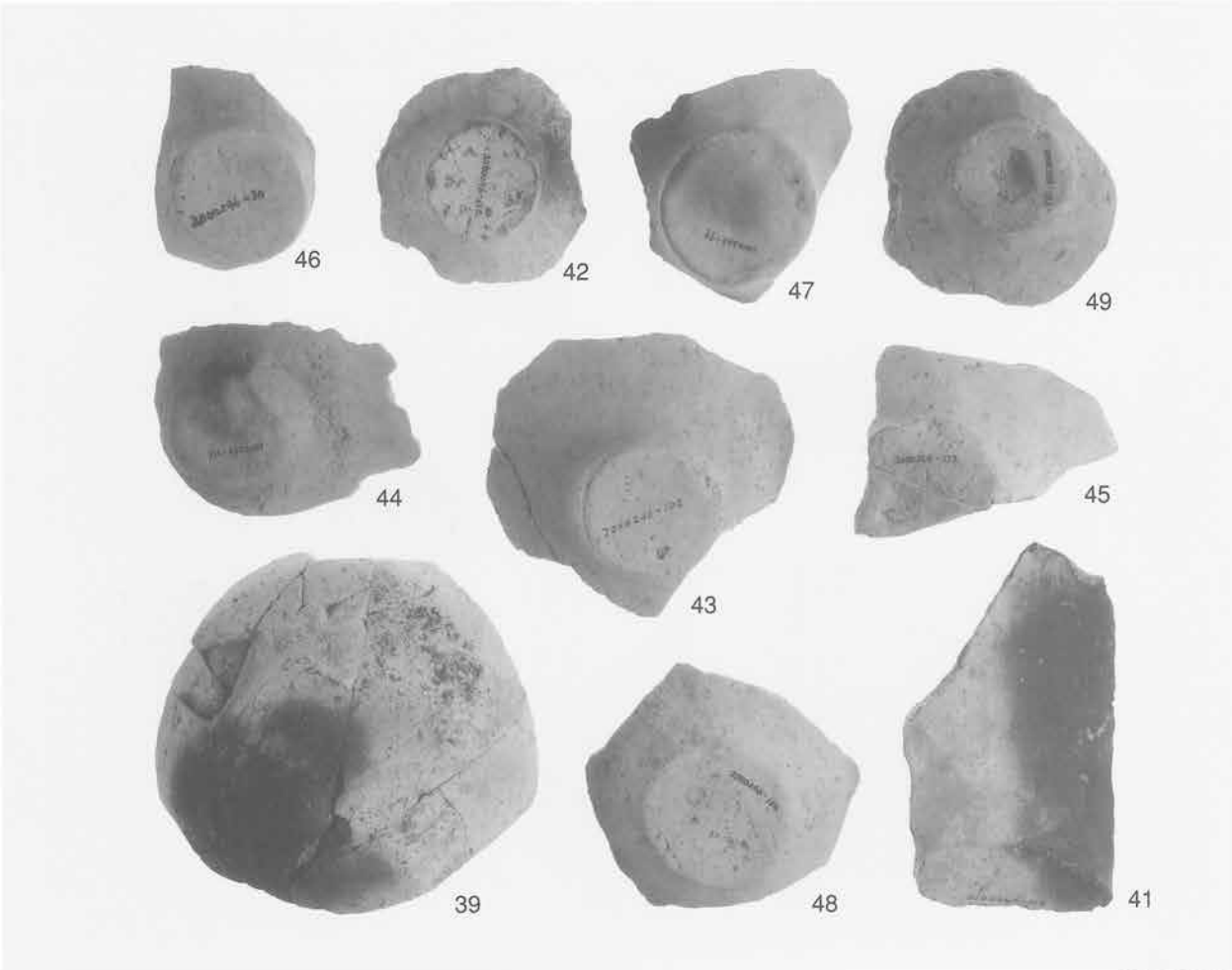


竪穴住居SH05土器・第2面包含層土器

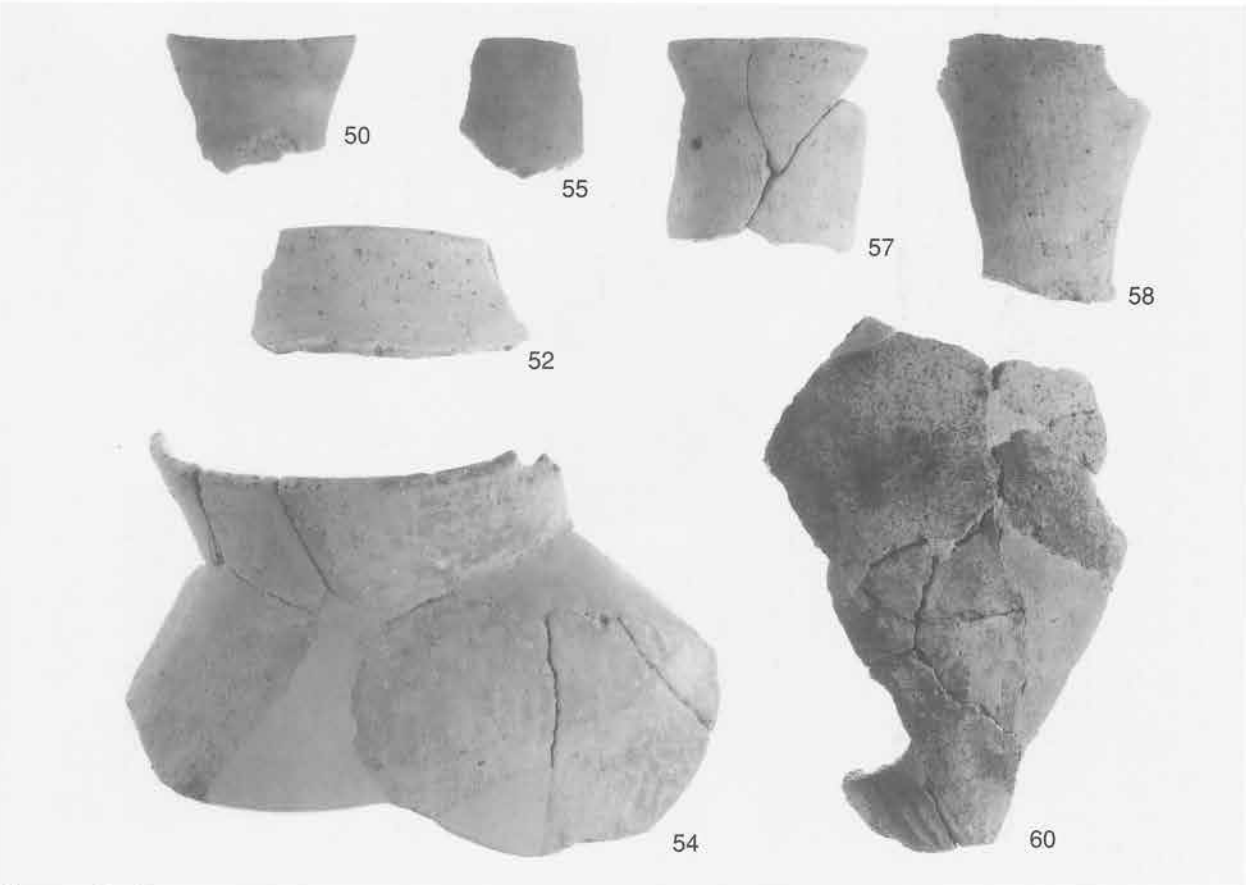


溝SD04 壺

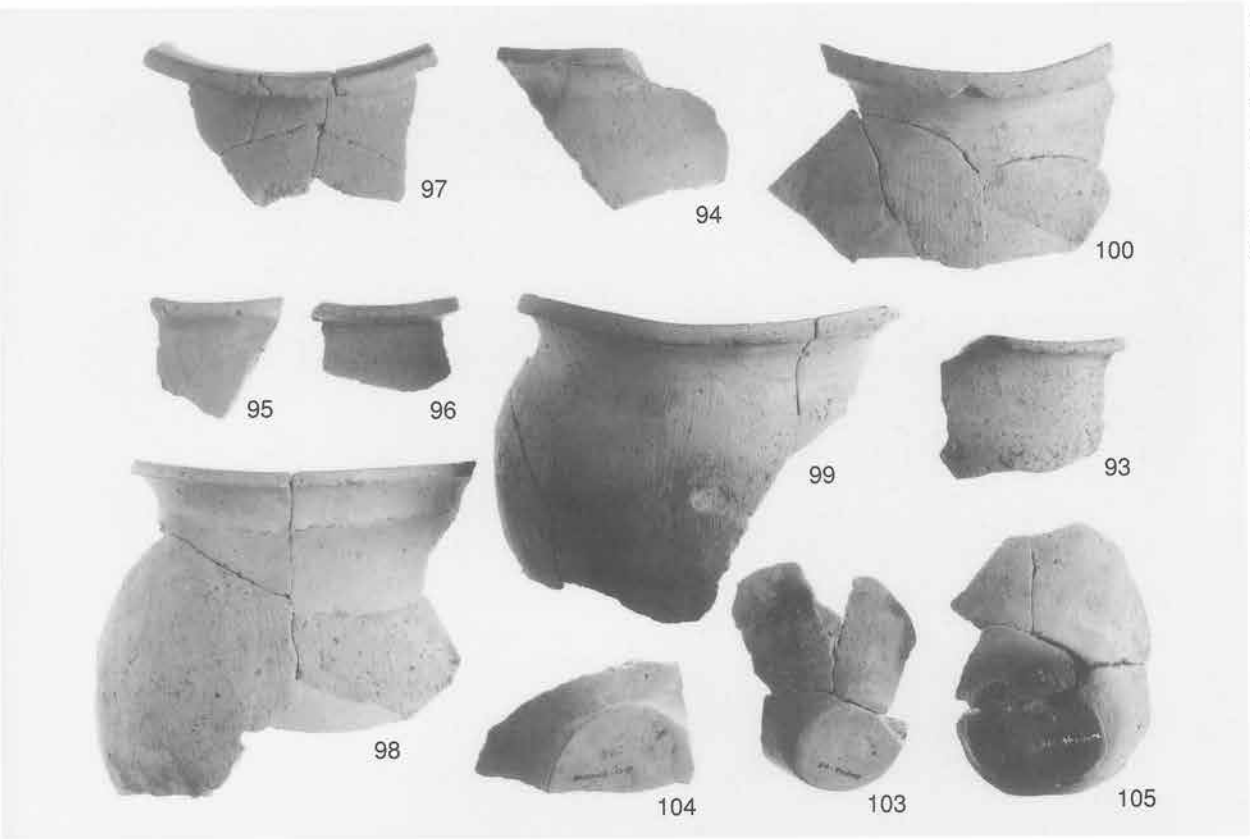


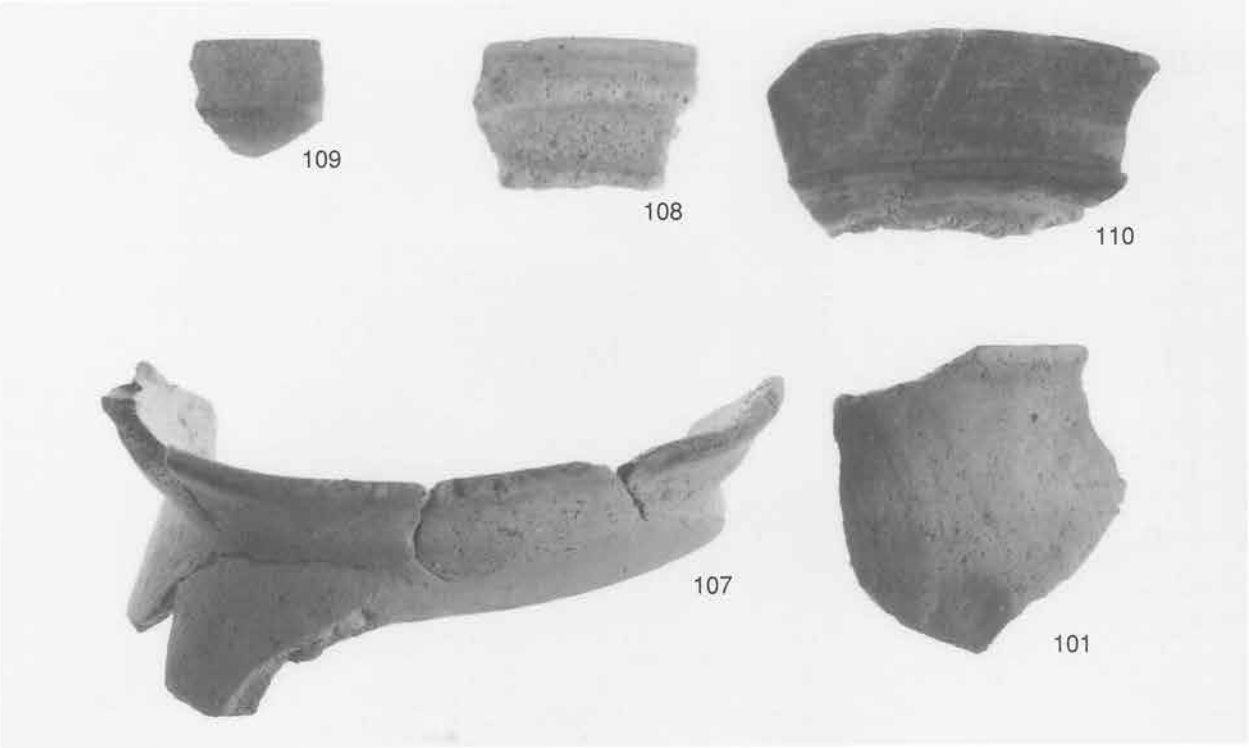


溝SD04 壺



溝SD04 壺・蓋





溝SD04 甕・蓋

106

102

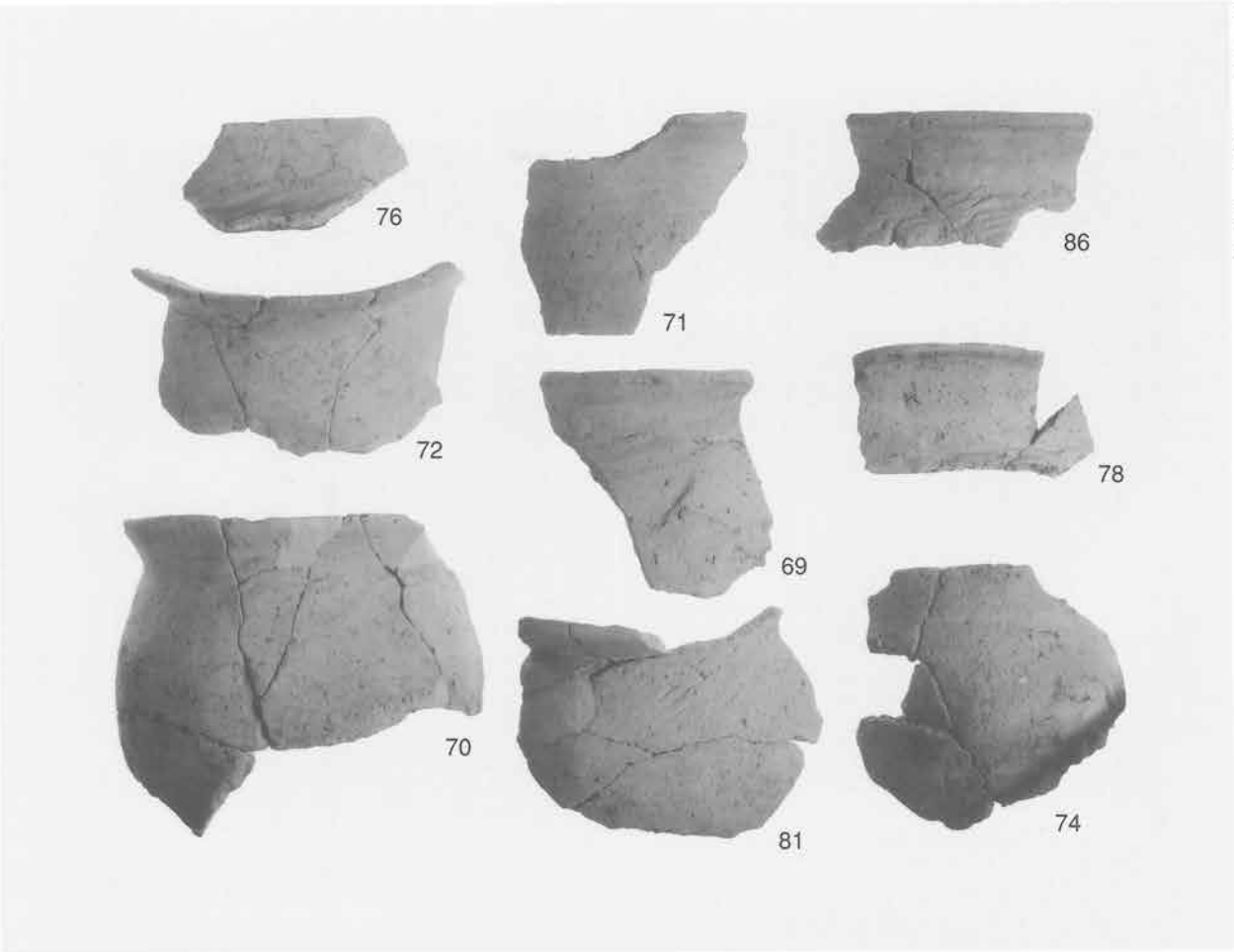
75

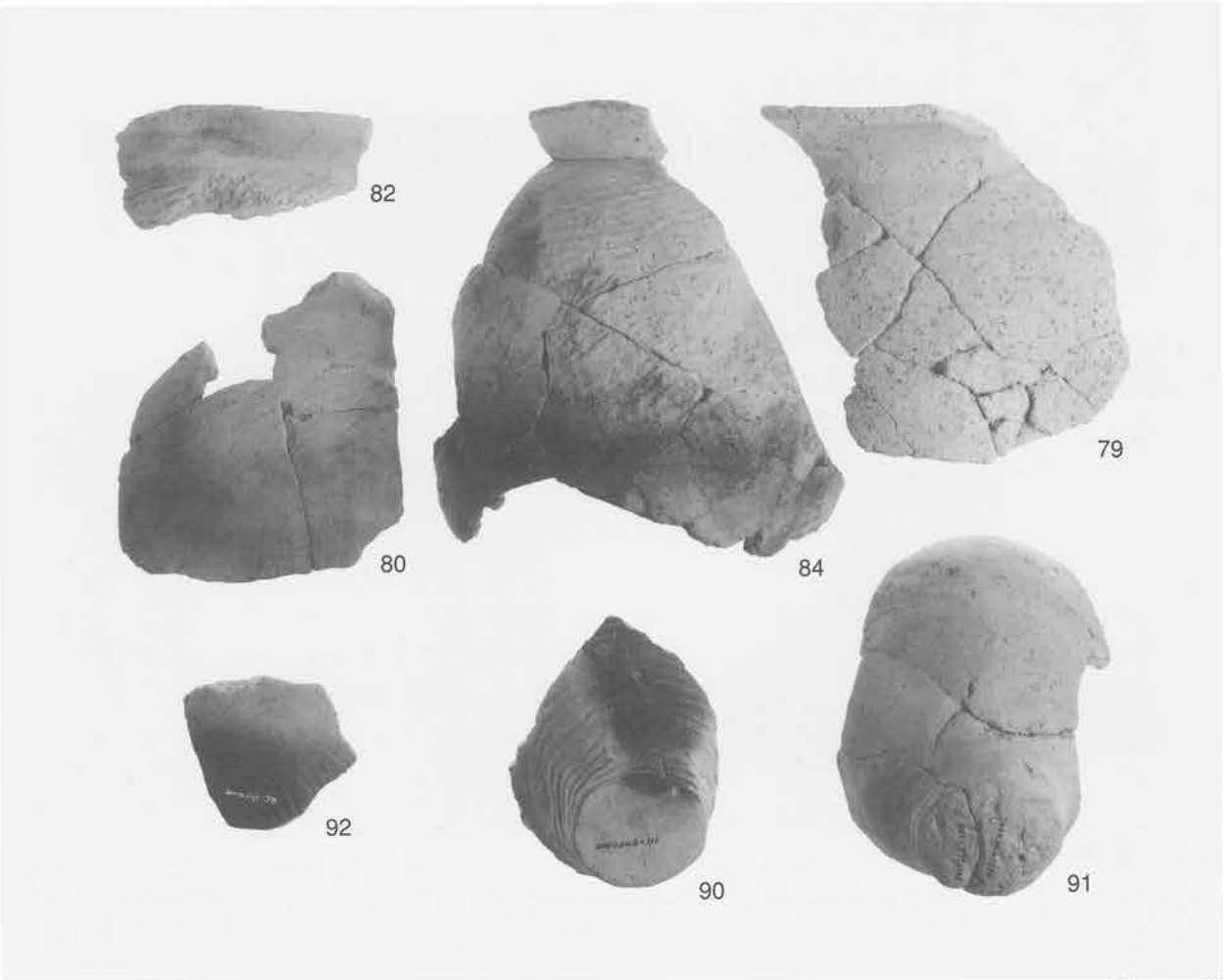
73

87

88

溝SD04 甕





溝SD04 甕

111

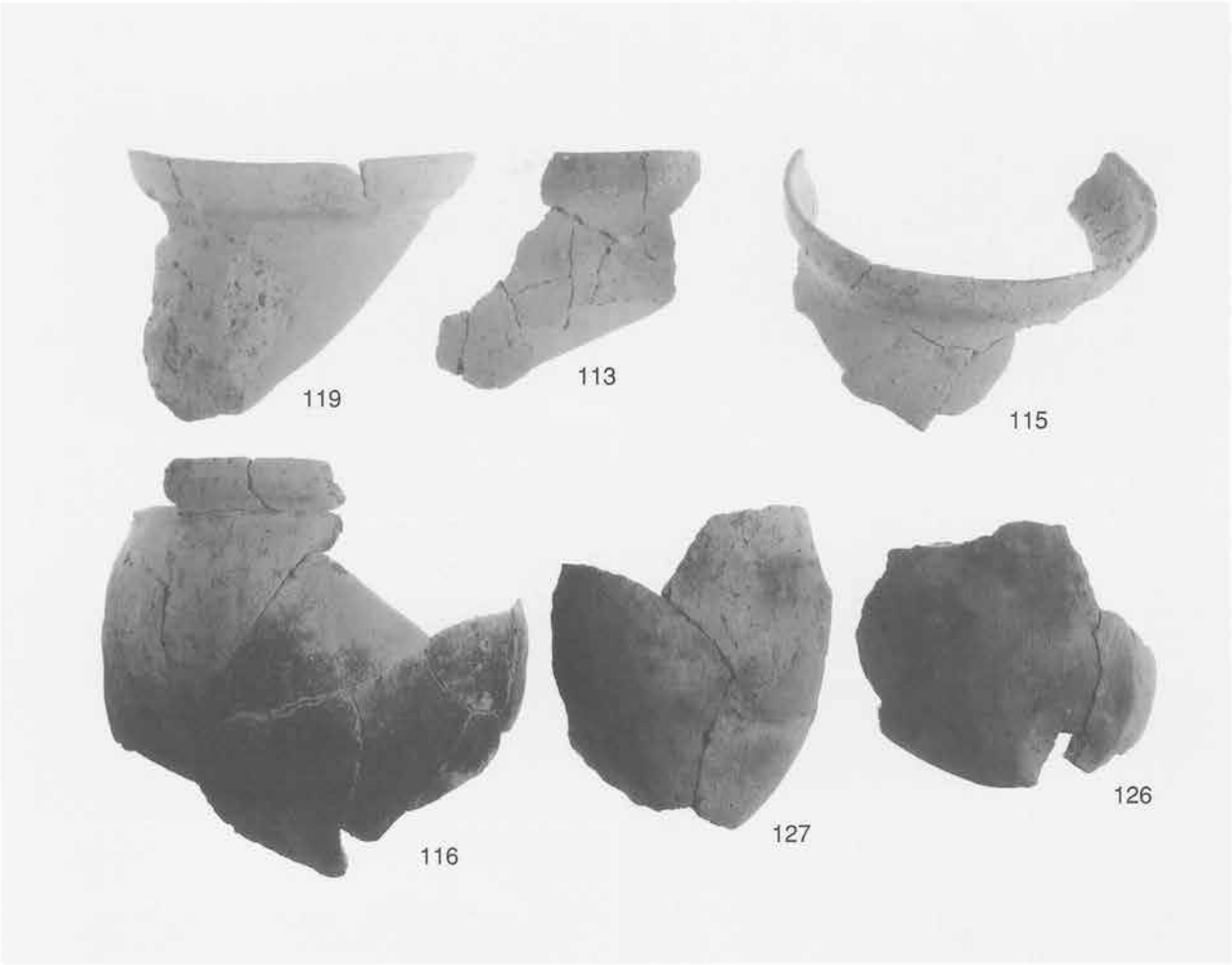
128

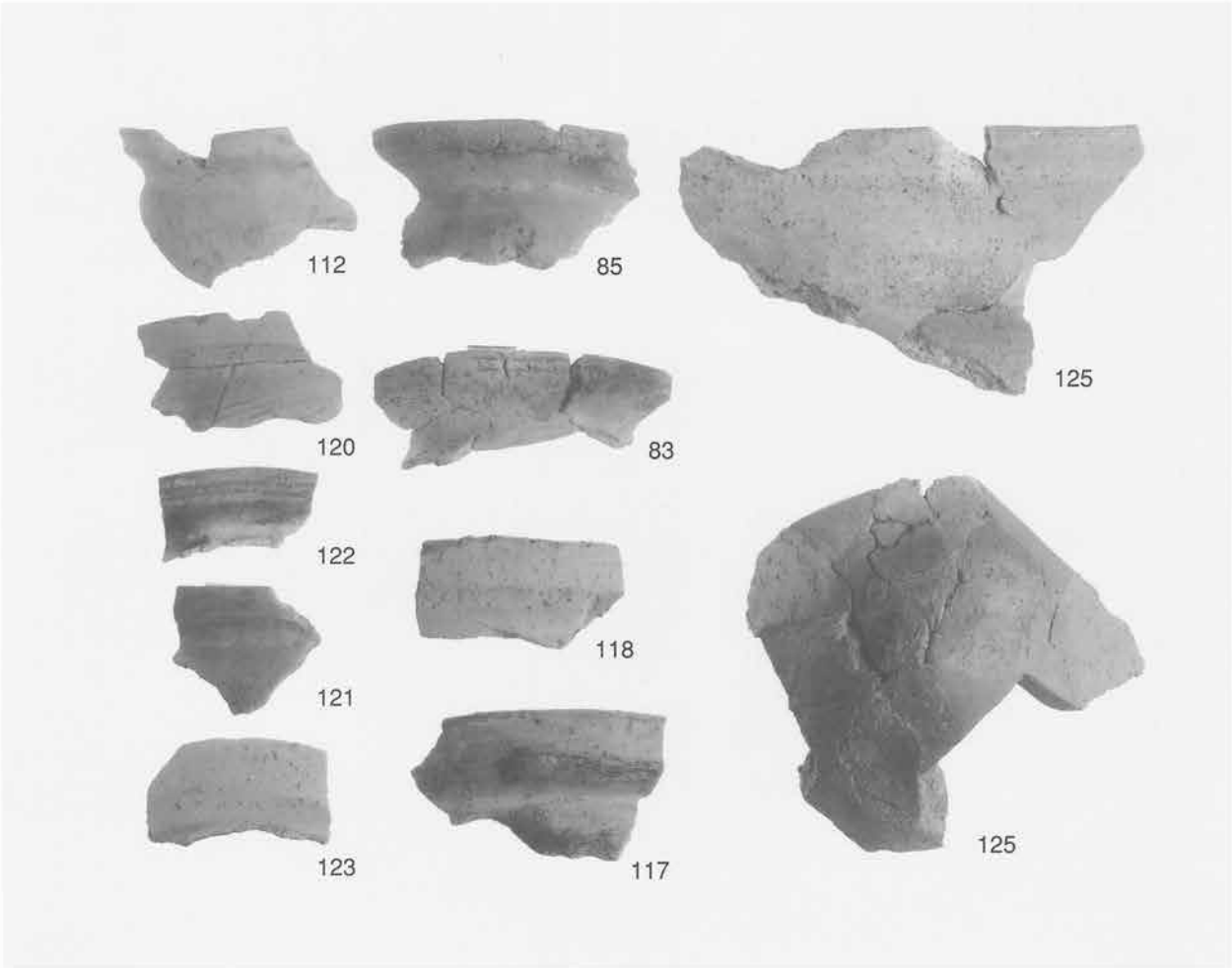
89

200

201

溝SD04 甕・器台

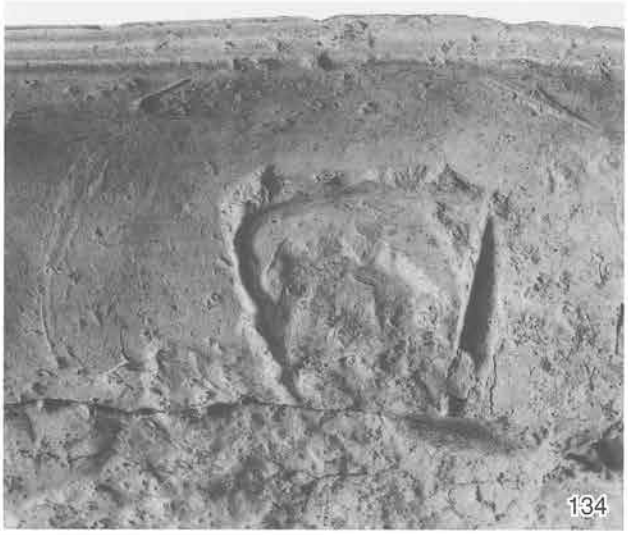




溝SD04 甕

137

138

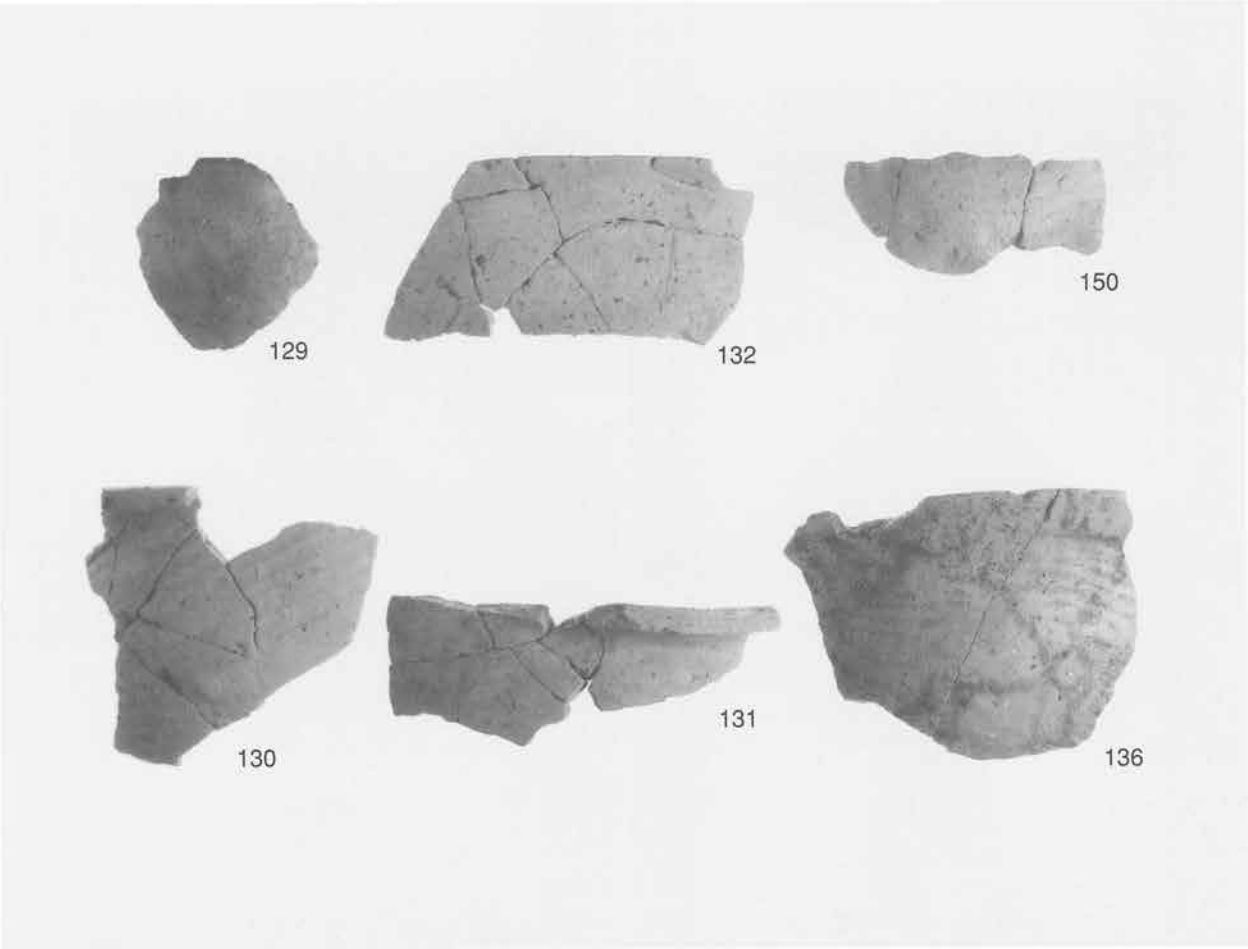

134

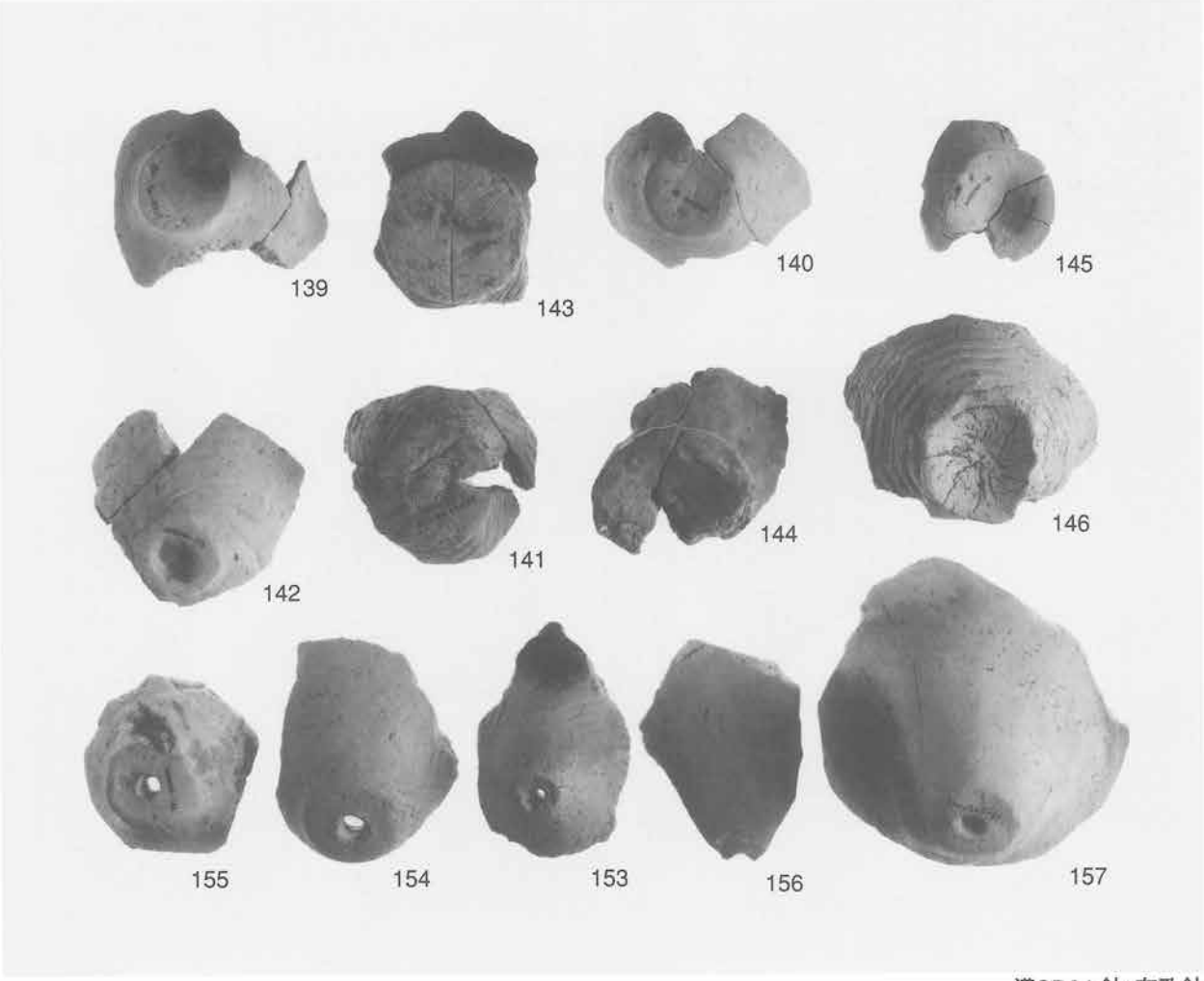
133

147

134

溝SD04 鉢


129
132
150
130
131
136


139
143
140
145
142
141
144
146
155
154
153
156
157

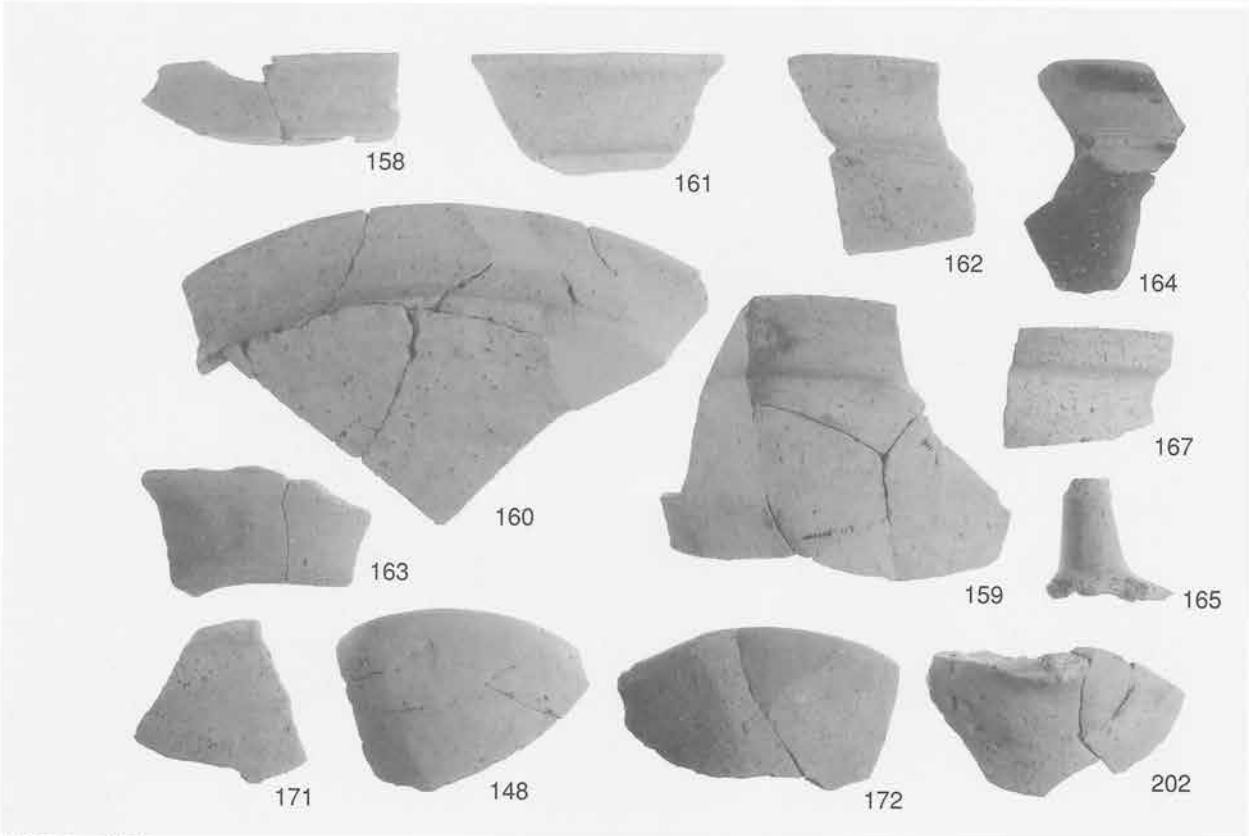
溝SD04 鉢・有孔鉢

168

169

166

170


158
161
162
164
160
167
163
159
165
171
148
172
202

溝SD04 高坏

192

195

190

198

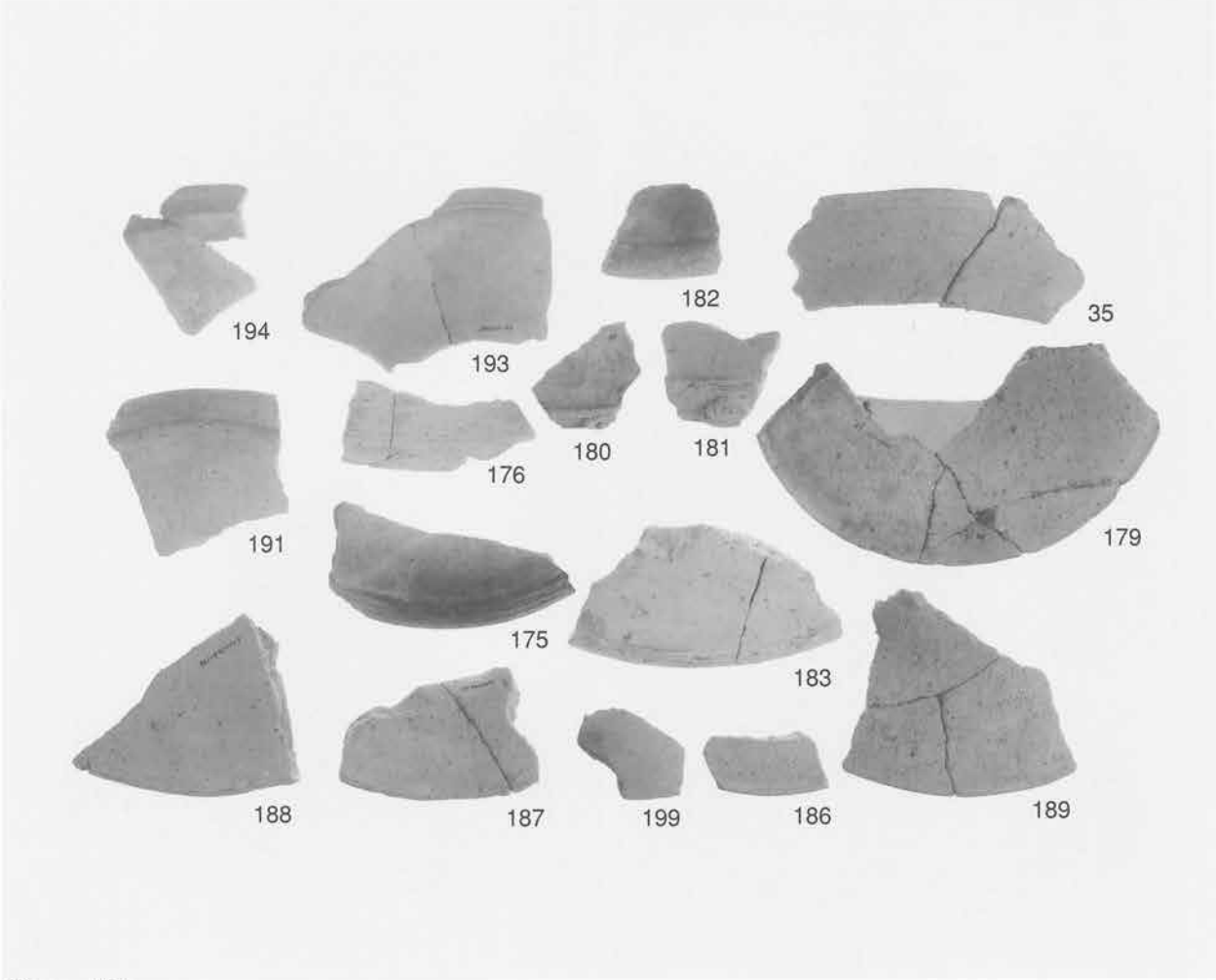
197

196

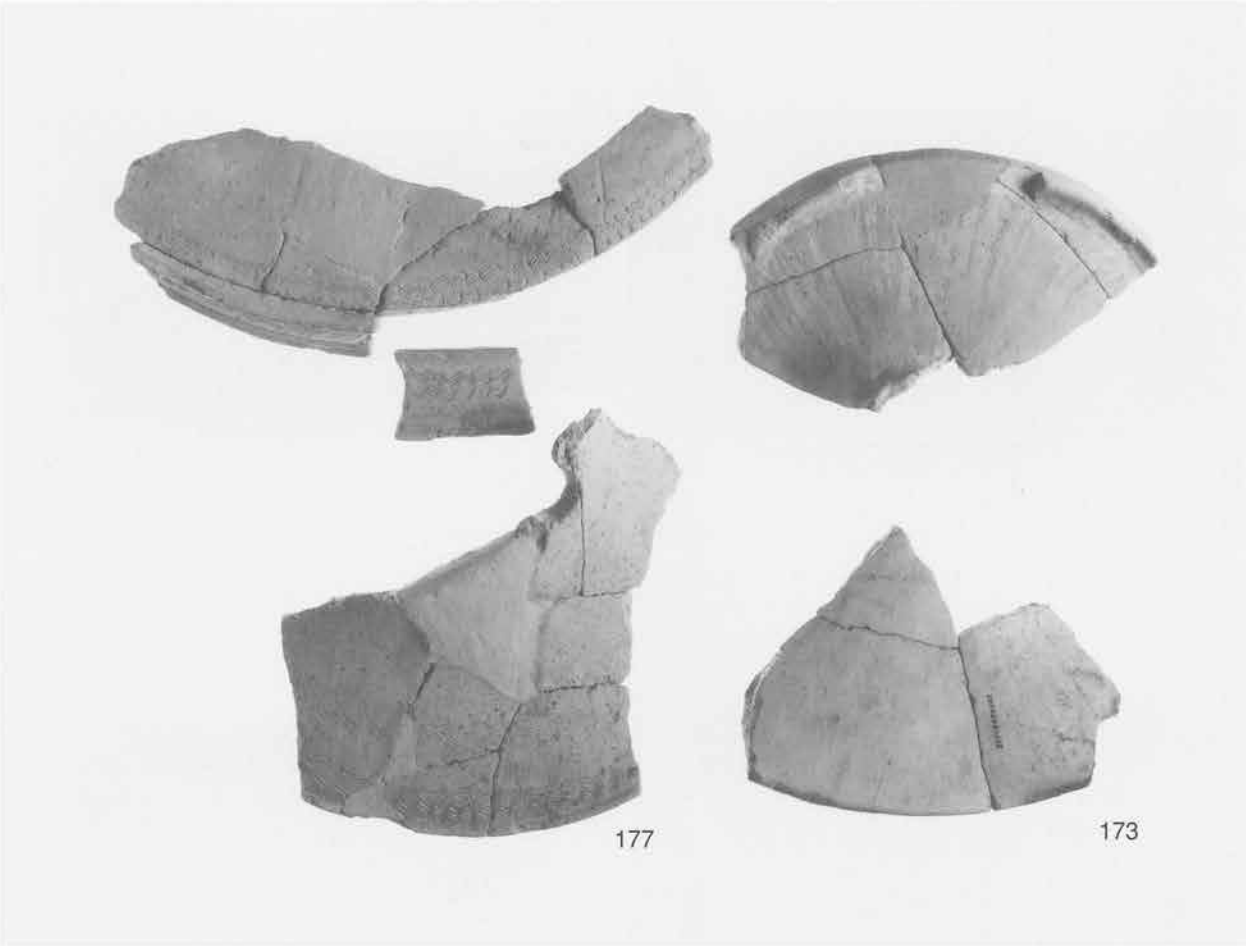
溝SD04 器台

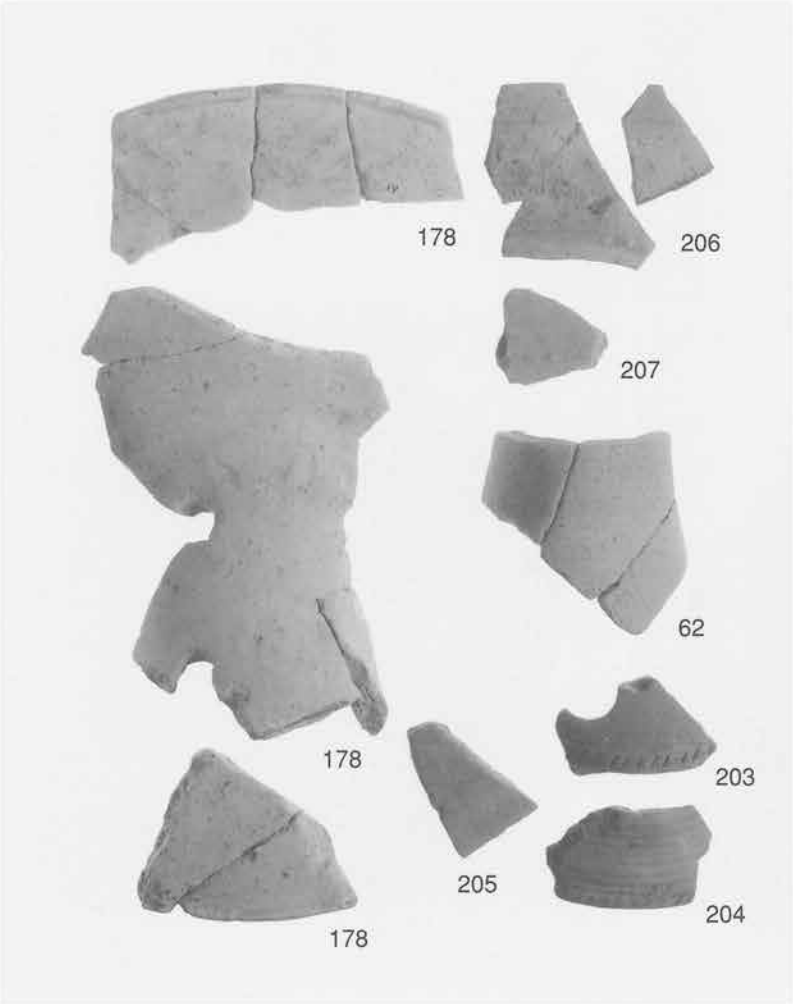
184

185


194
193
182
35
176
180
181
191
179
175
183
188
187
199
186
189

溝SD04 器台





溝SD04 器台

209

210

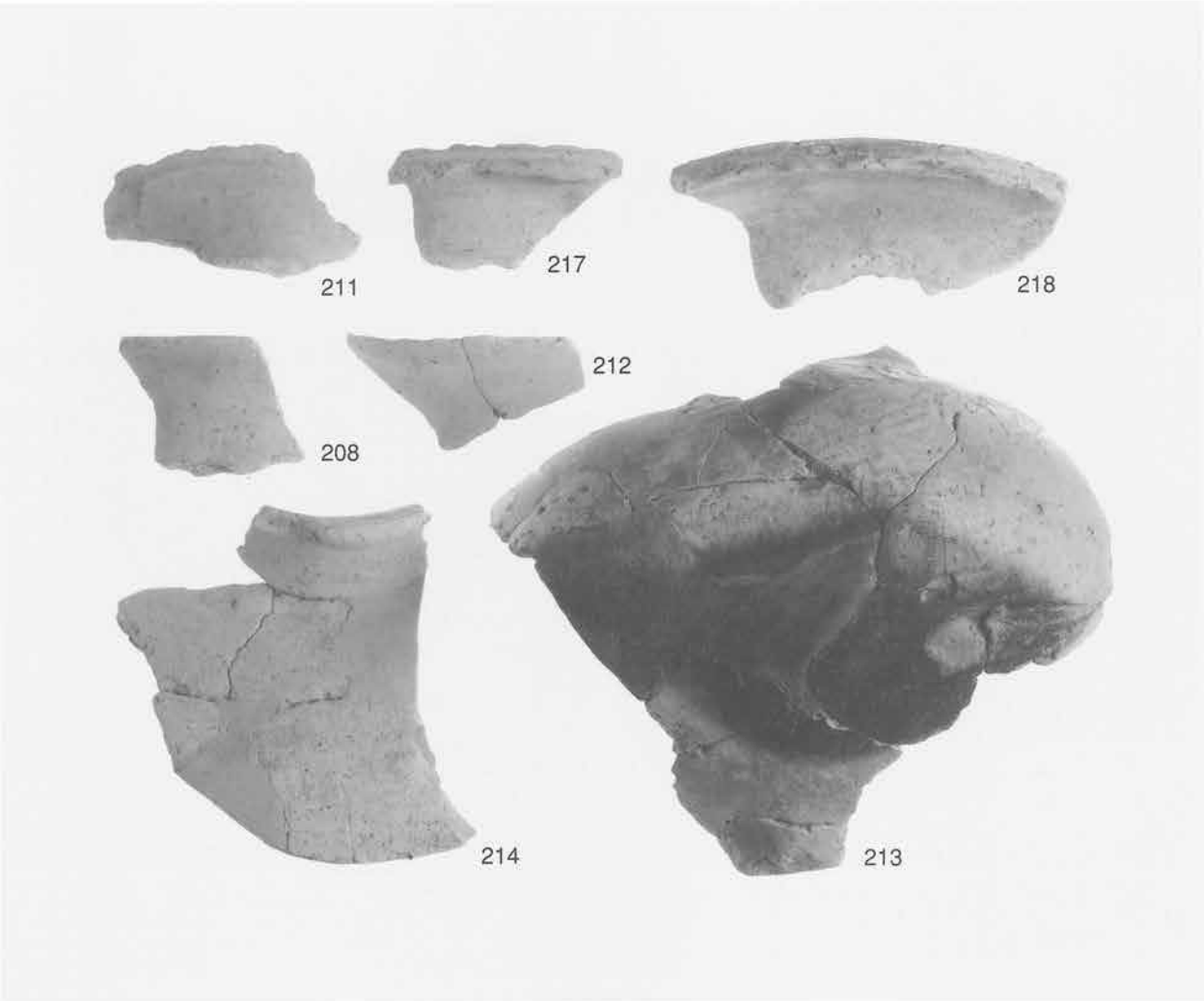
220

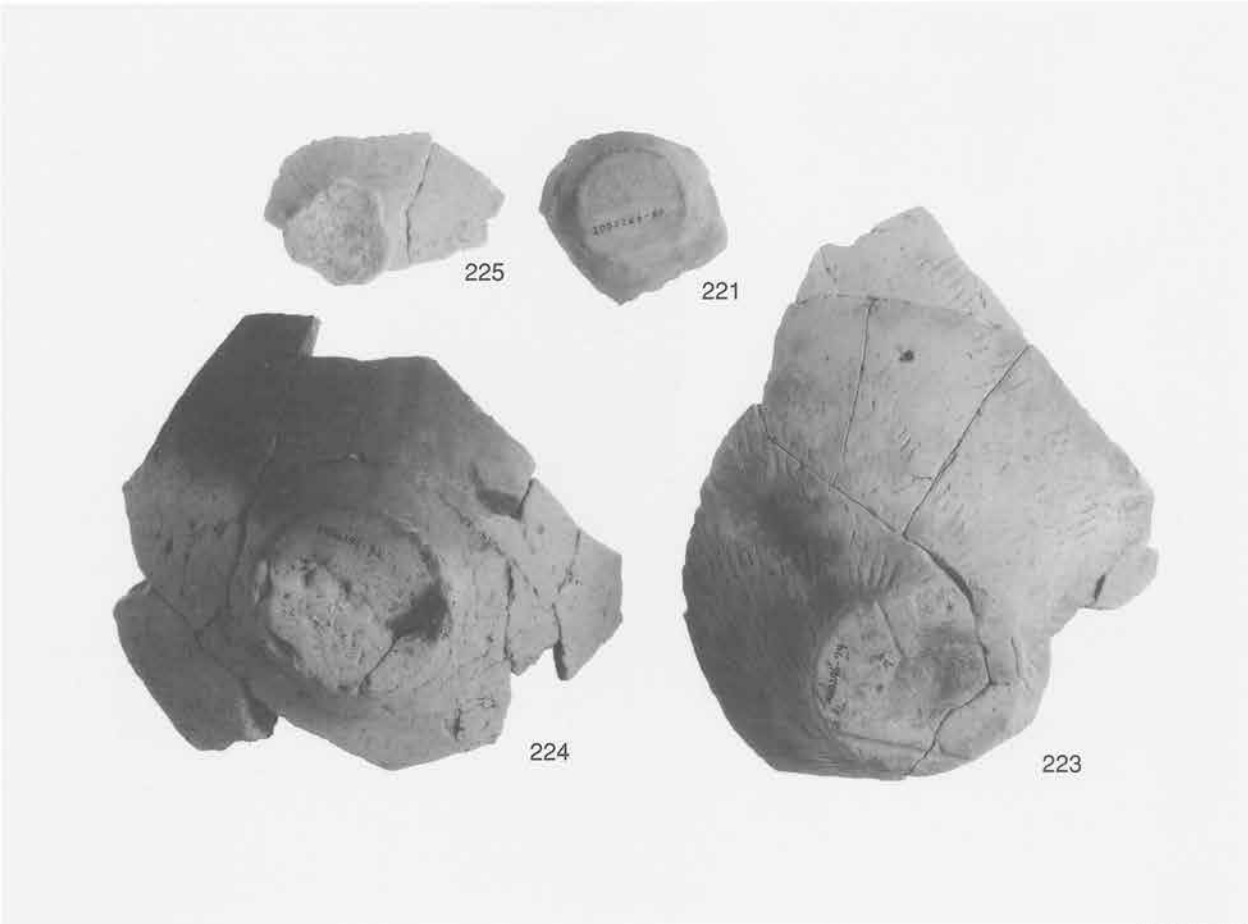
216

219

215

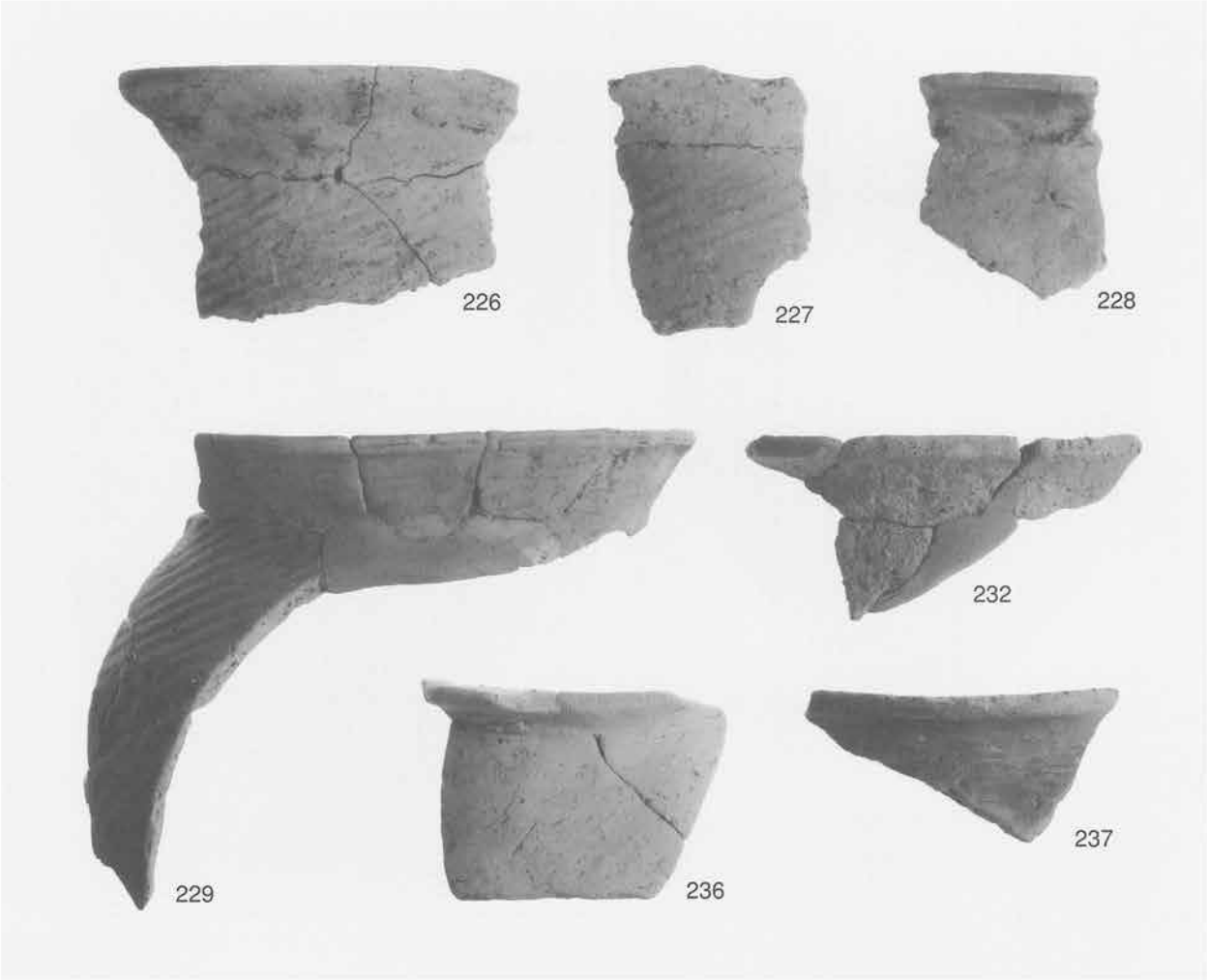
溝SD07 壺

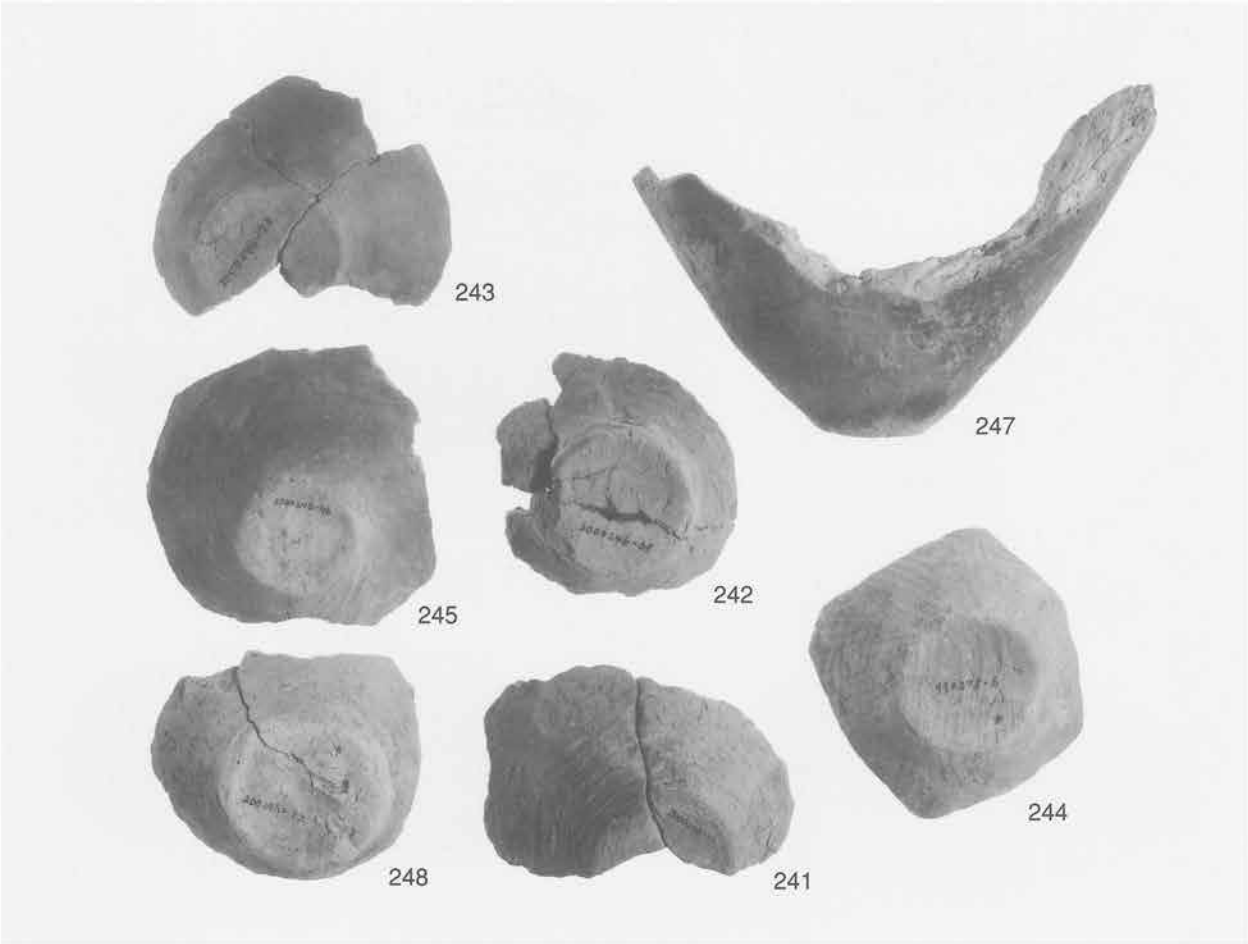




溝SD07 壺

溝SD07 甕





溝SD07 甕

235

249

254

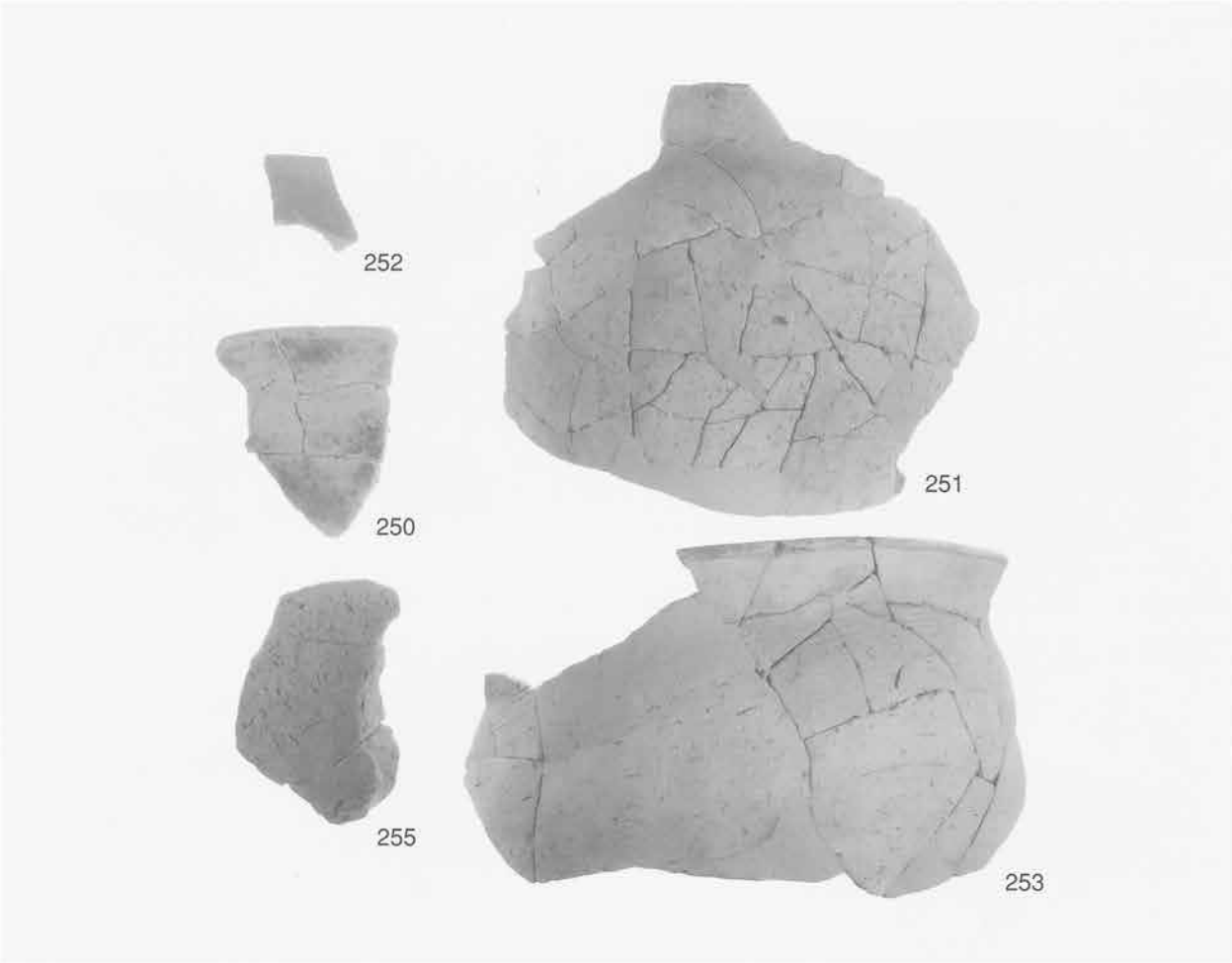
256

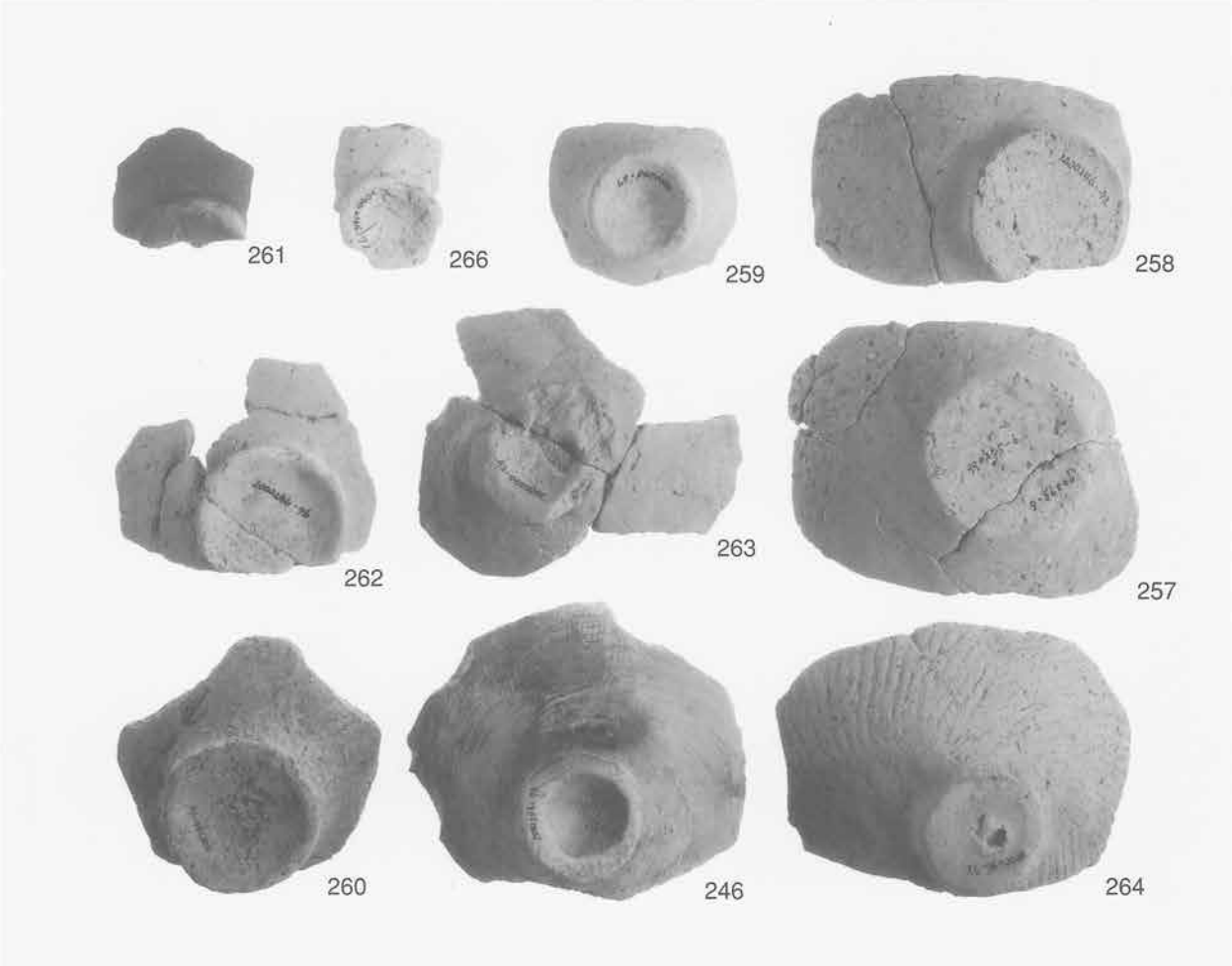
285

279

288

溝SD07 甕・鉢・高坏





溝SD07 鉢・有孔鉢

276

275

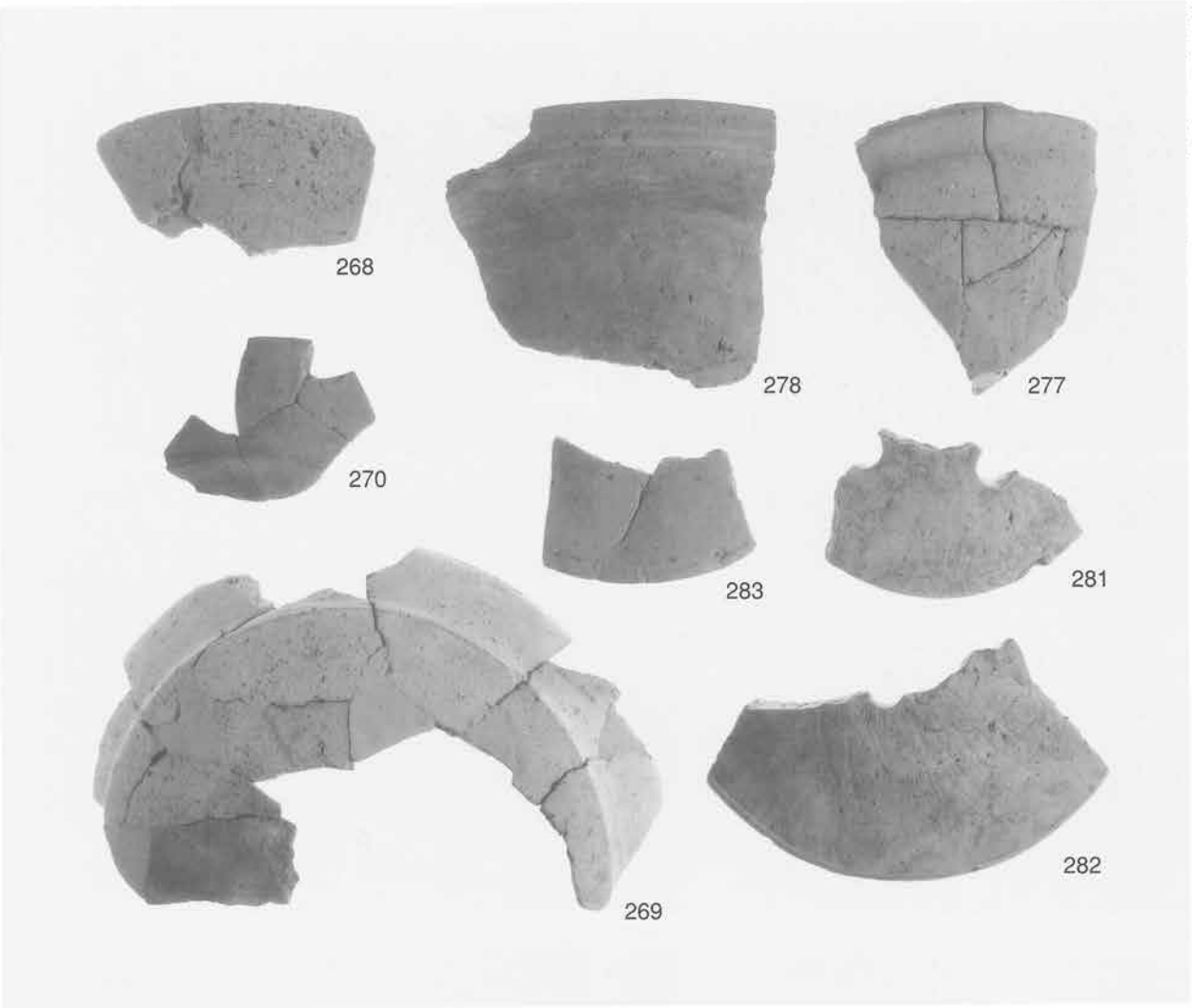
274

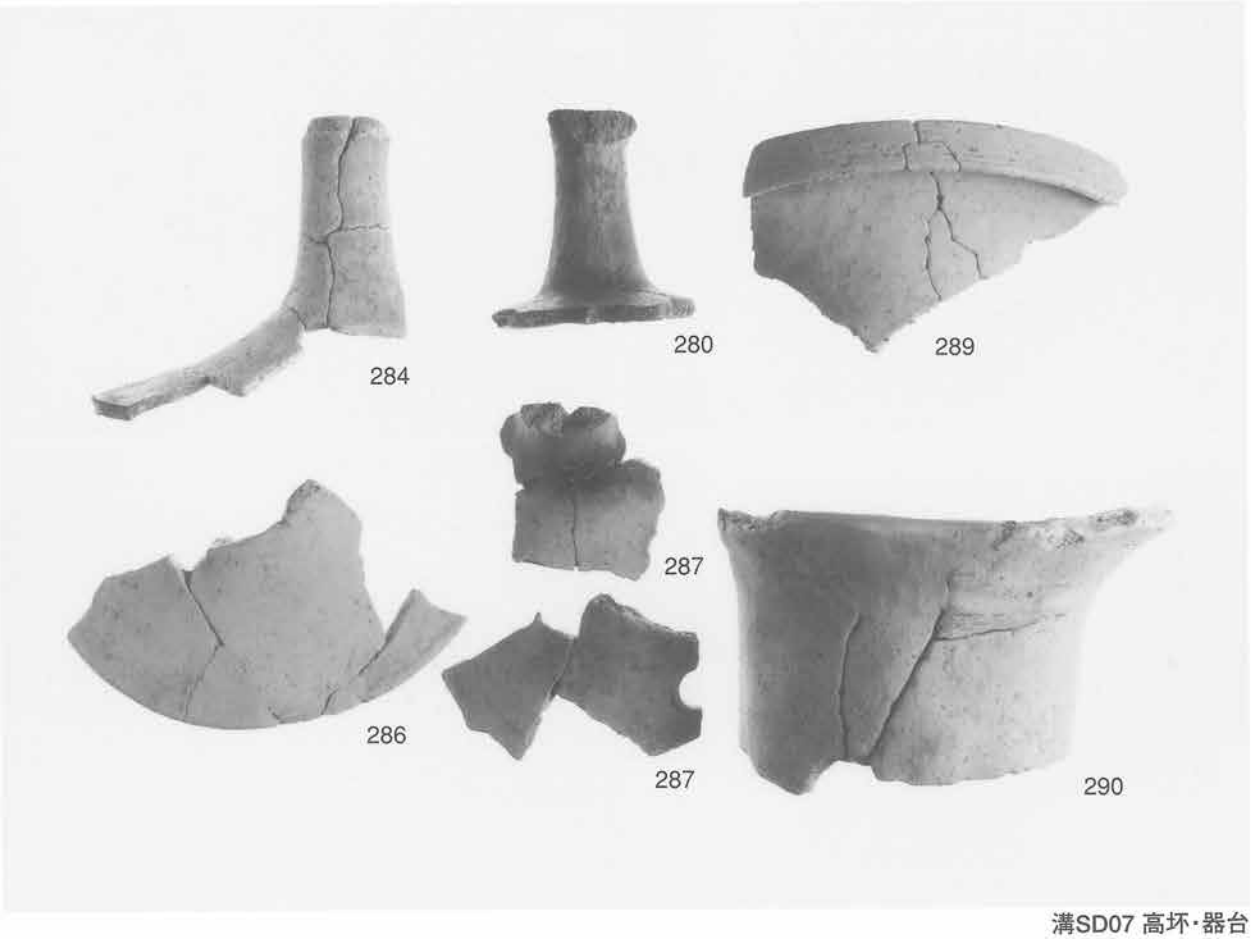
272

273

271

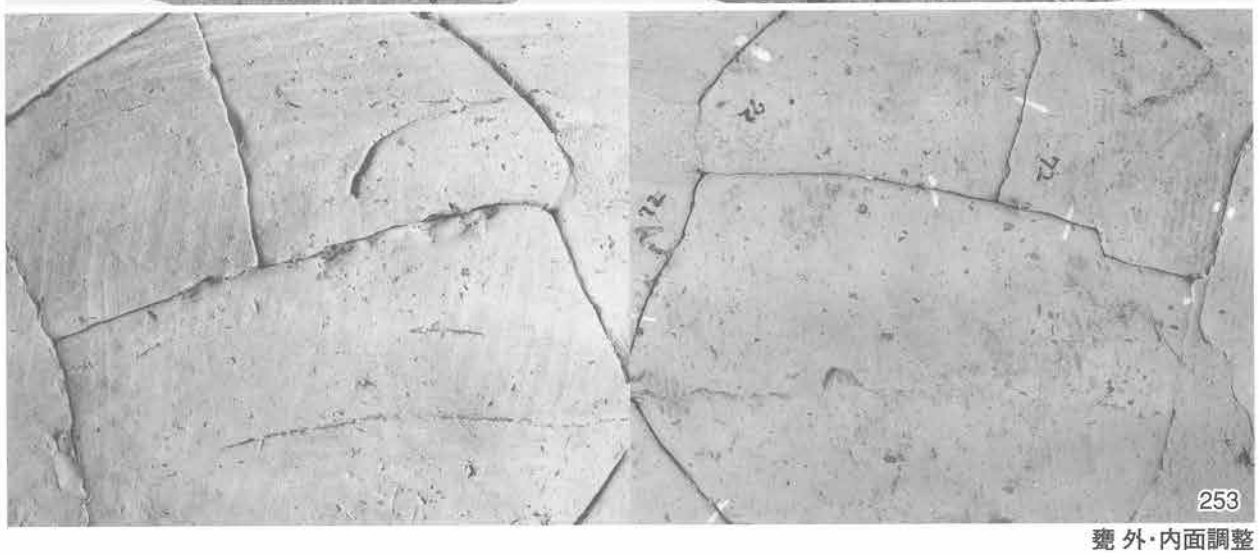
溝SD07 高坏



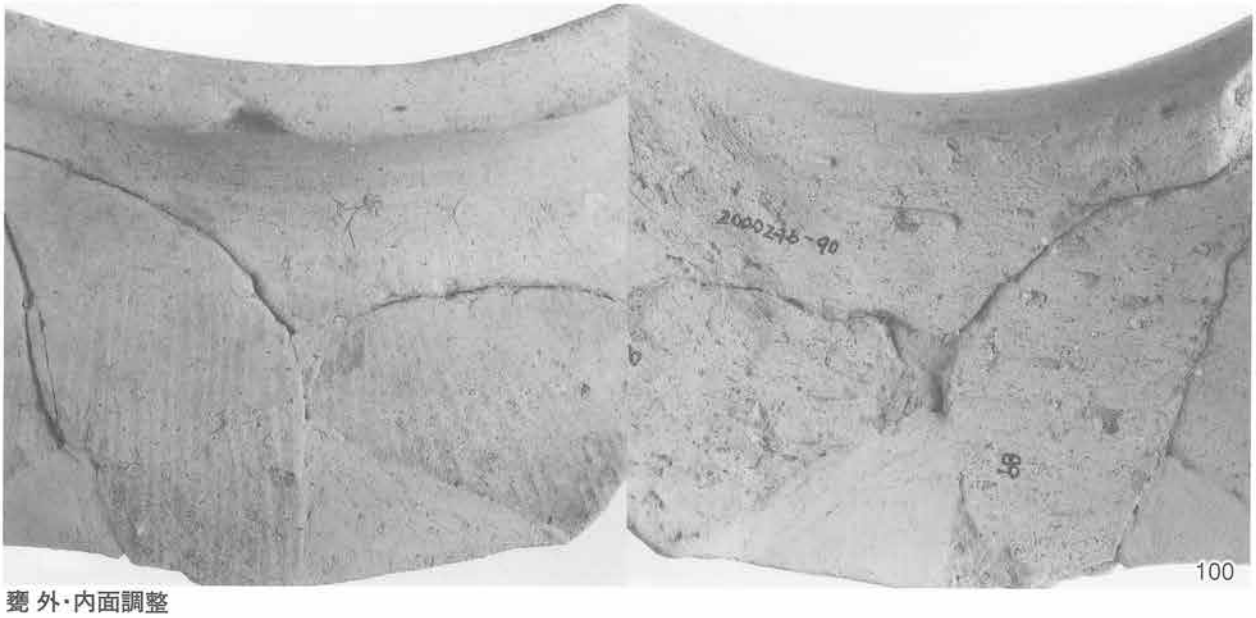


溝SD07 高坏・器台

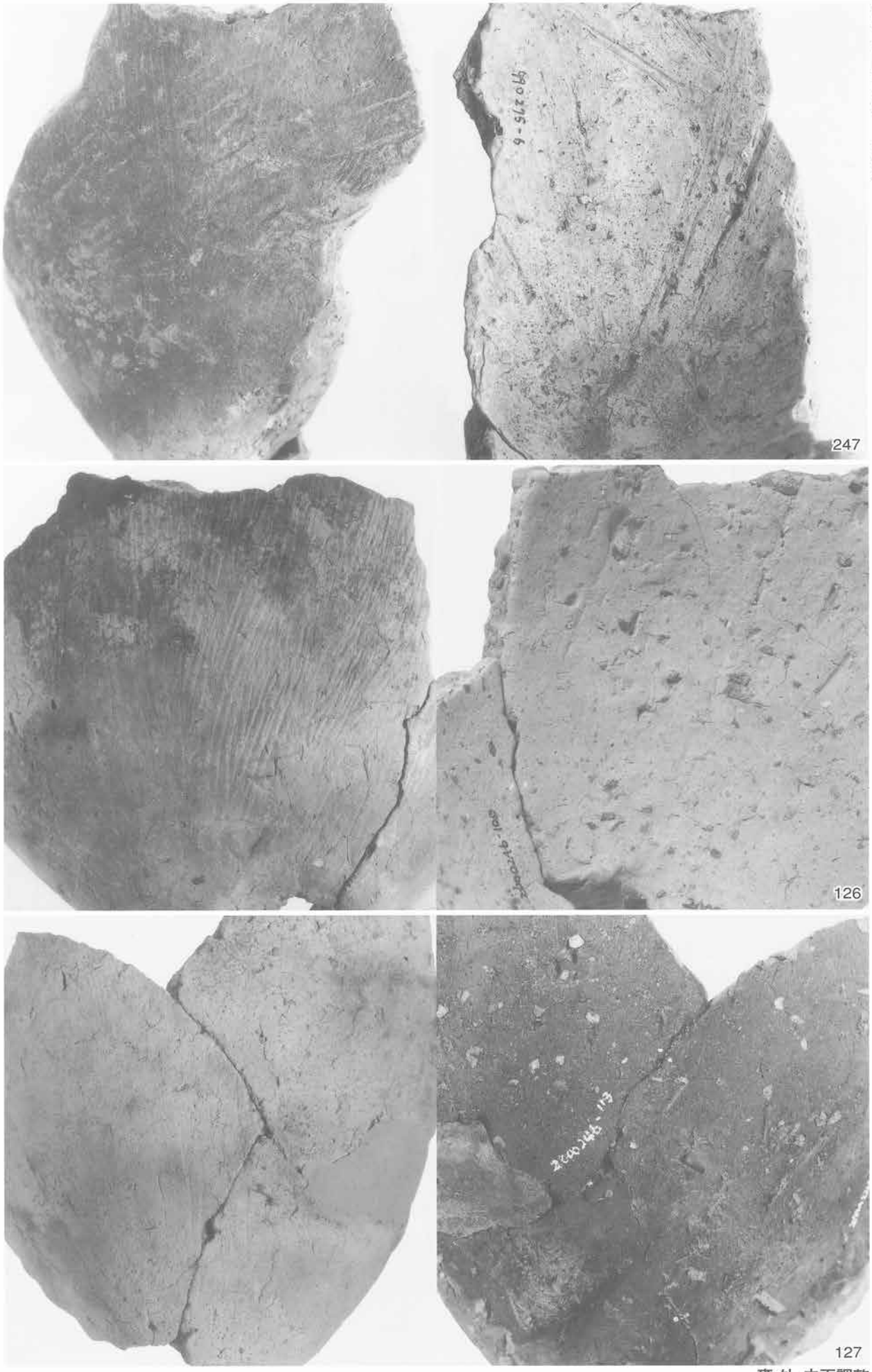
壺・甕・鉢・高坏 外面調整



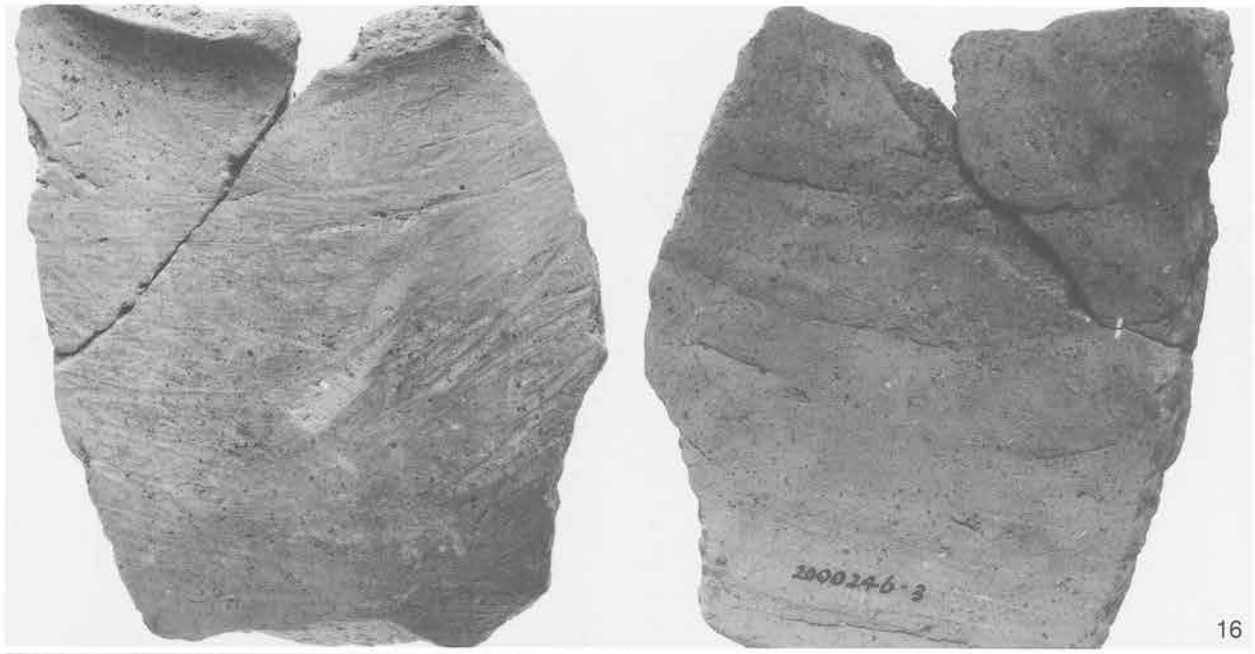
甕 外・内面調整

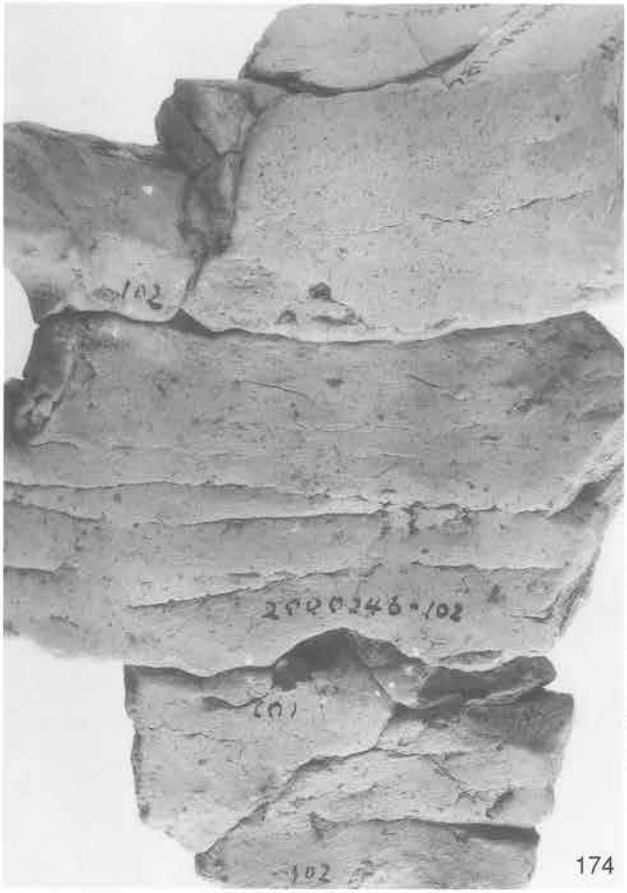


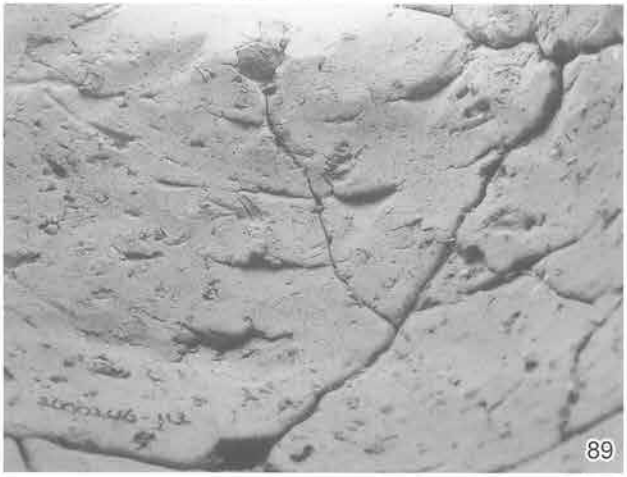
甕 外・内面調整

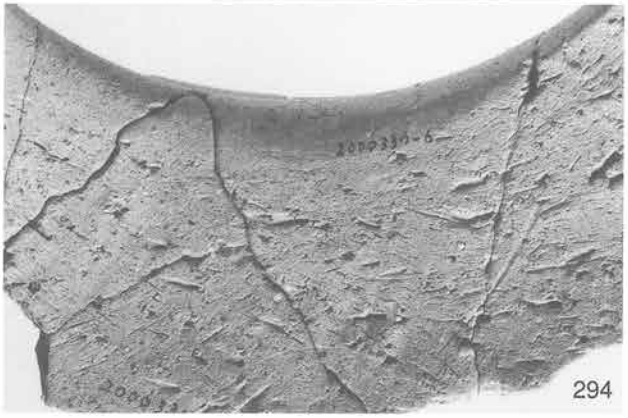


甕 外・内面調整

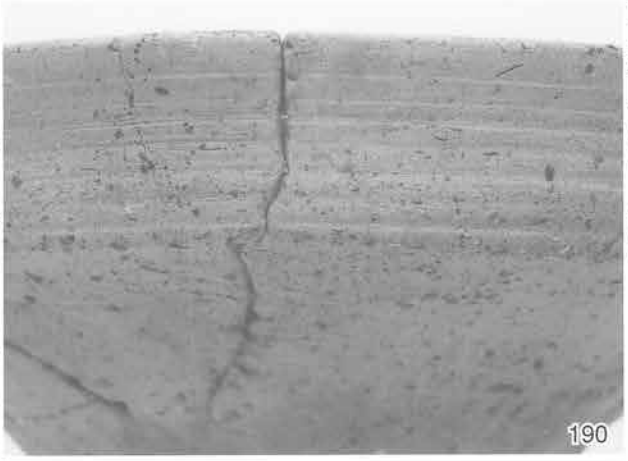


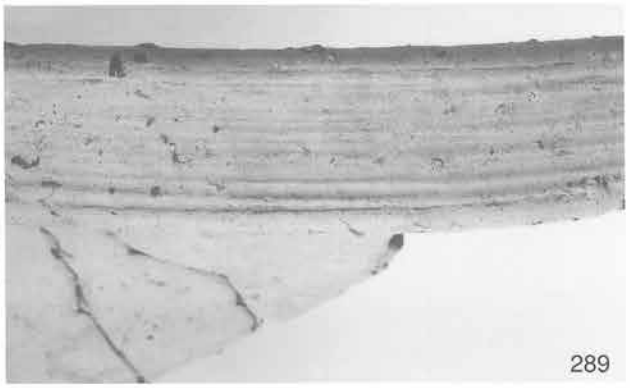






壺 外・内面調整　甕 内面調整

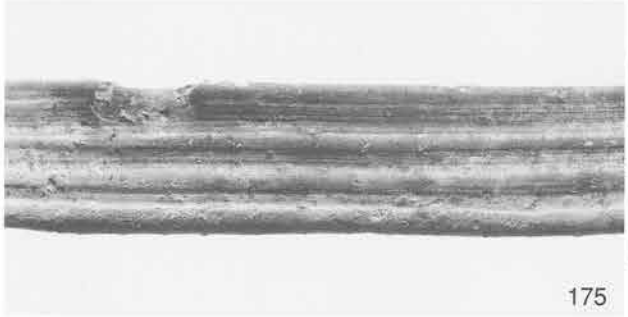


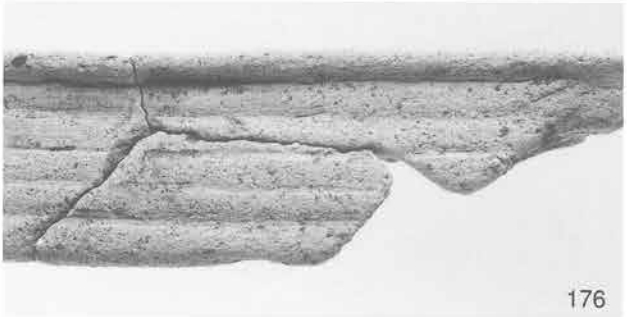


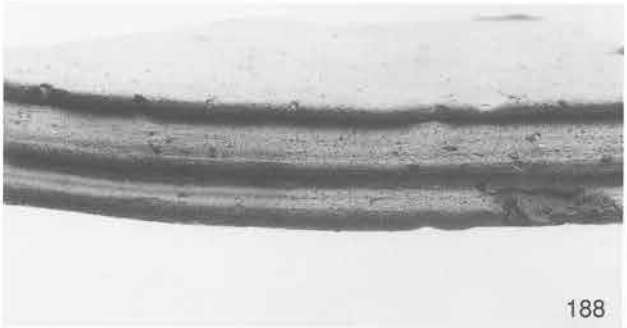
壺・甕・器台 口縁疑凹線文

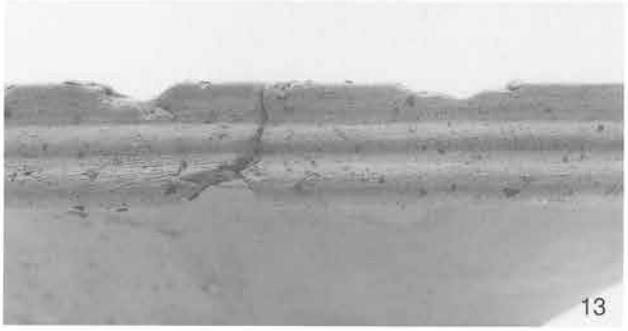
122

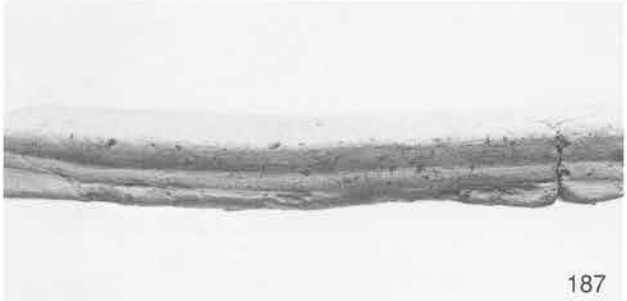
169


175


176

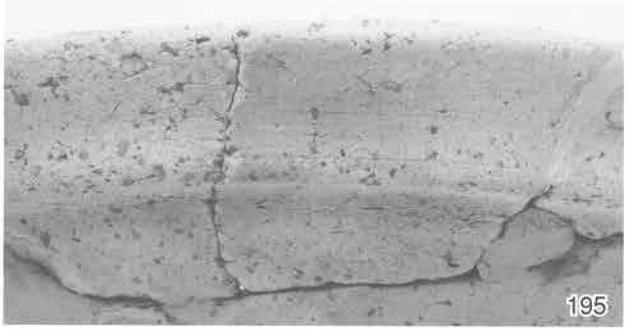

188


13


187

31

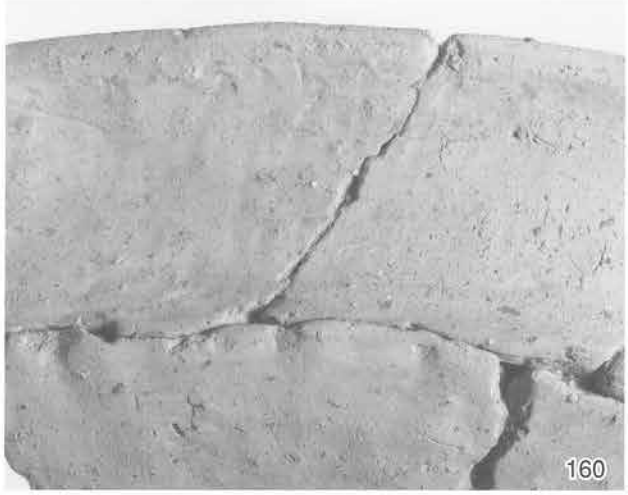
173

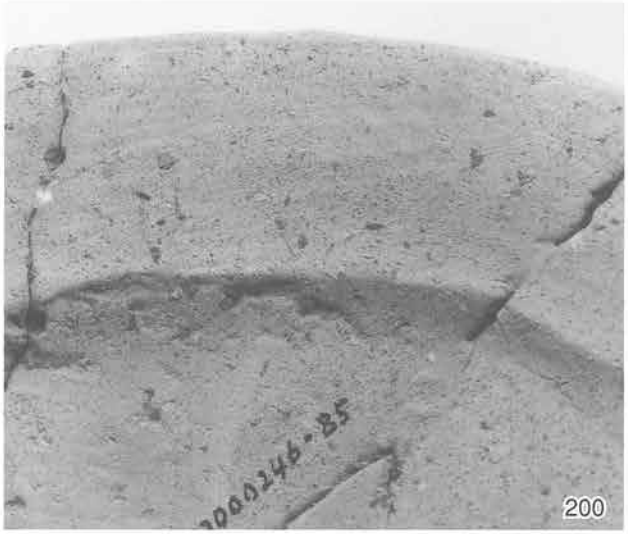

195

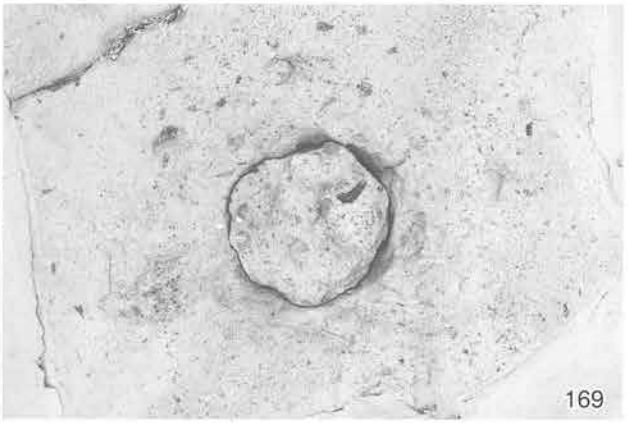
288

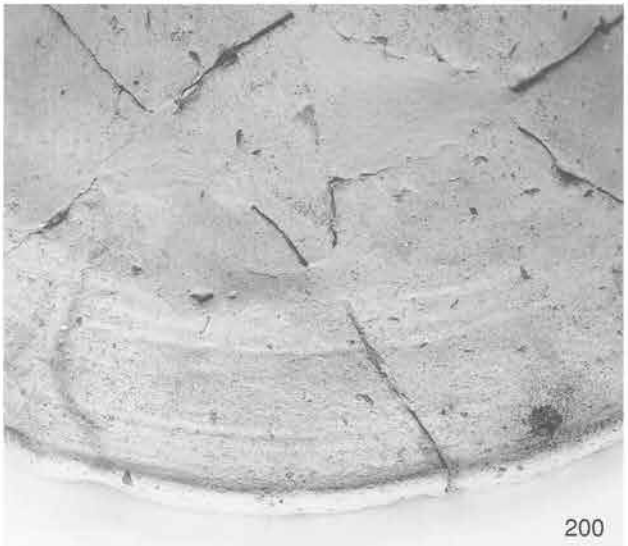
174

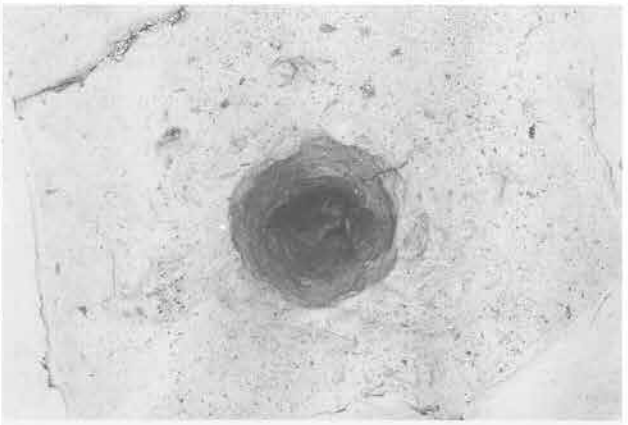
甕・器台 疑凹線文、ヨコナデ









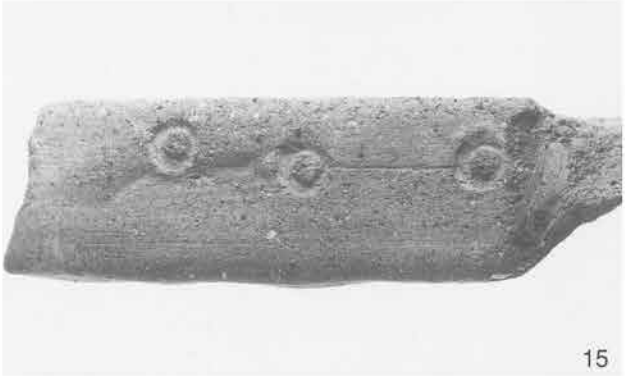


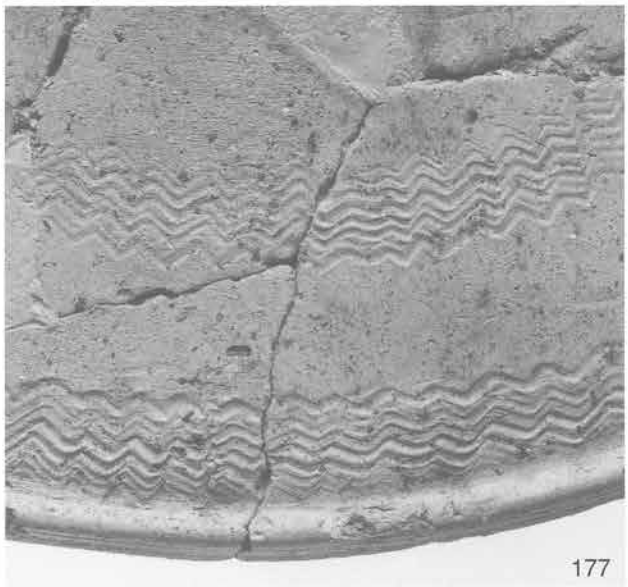
高坏 口縁部・脚部調整 坏部・脚部接合状況

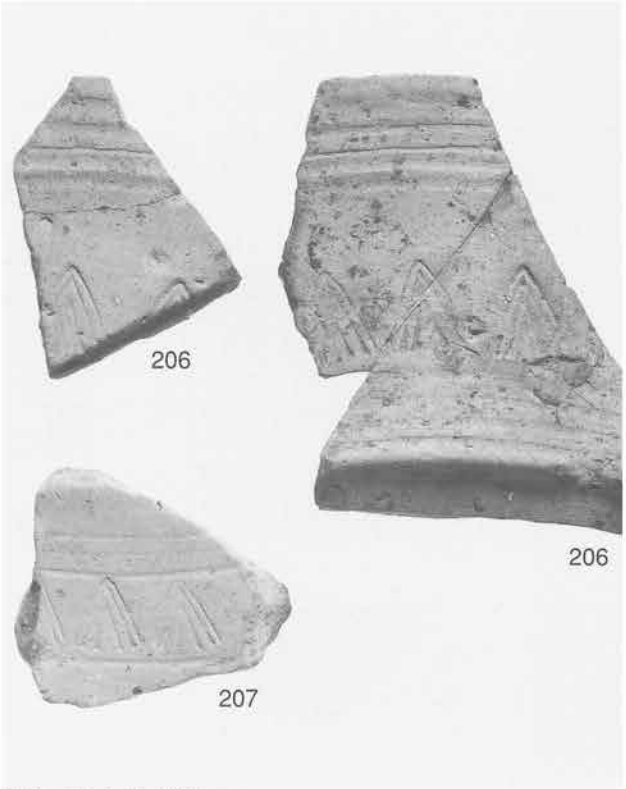
182

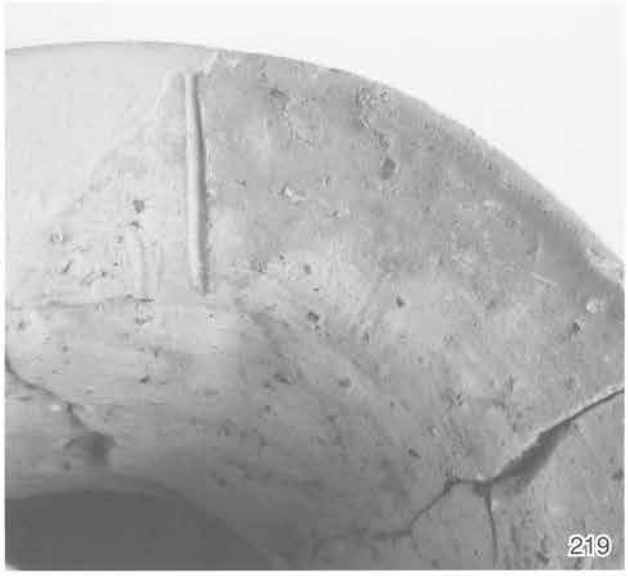
181

177


15


177


206
206
207


219

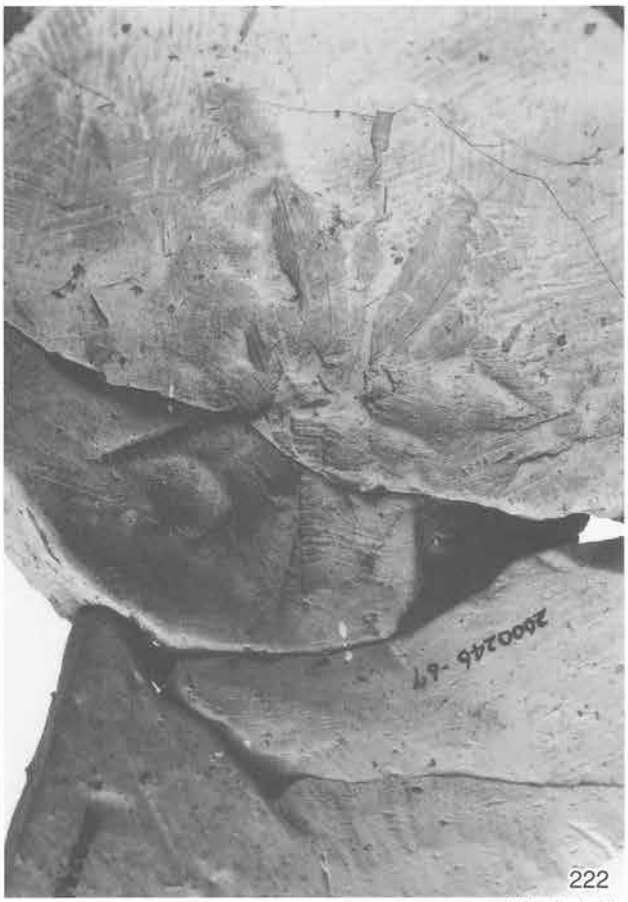
器台・壺 文様、記号

265

90

105

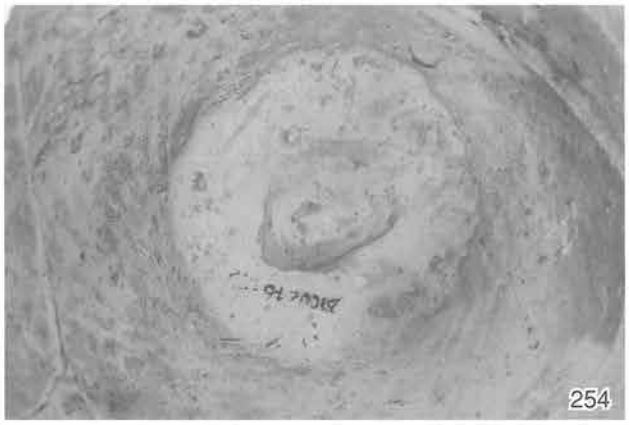
221


222

254

鉢・壺 調整

138


254

223

249

143

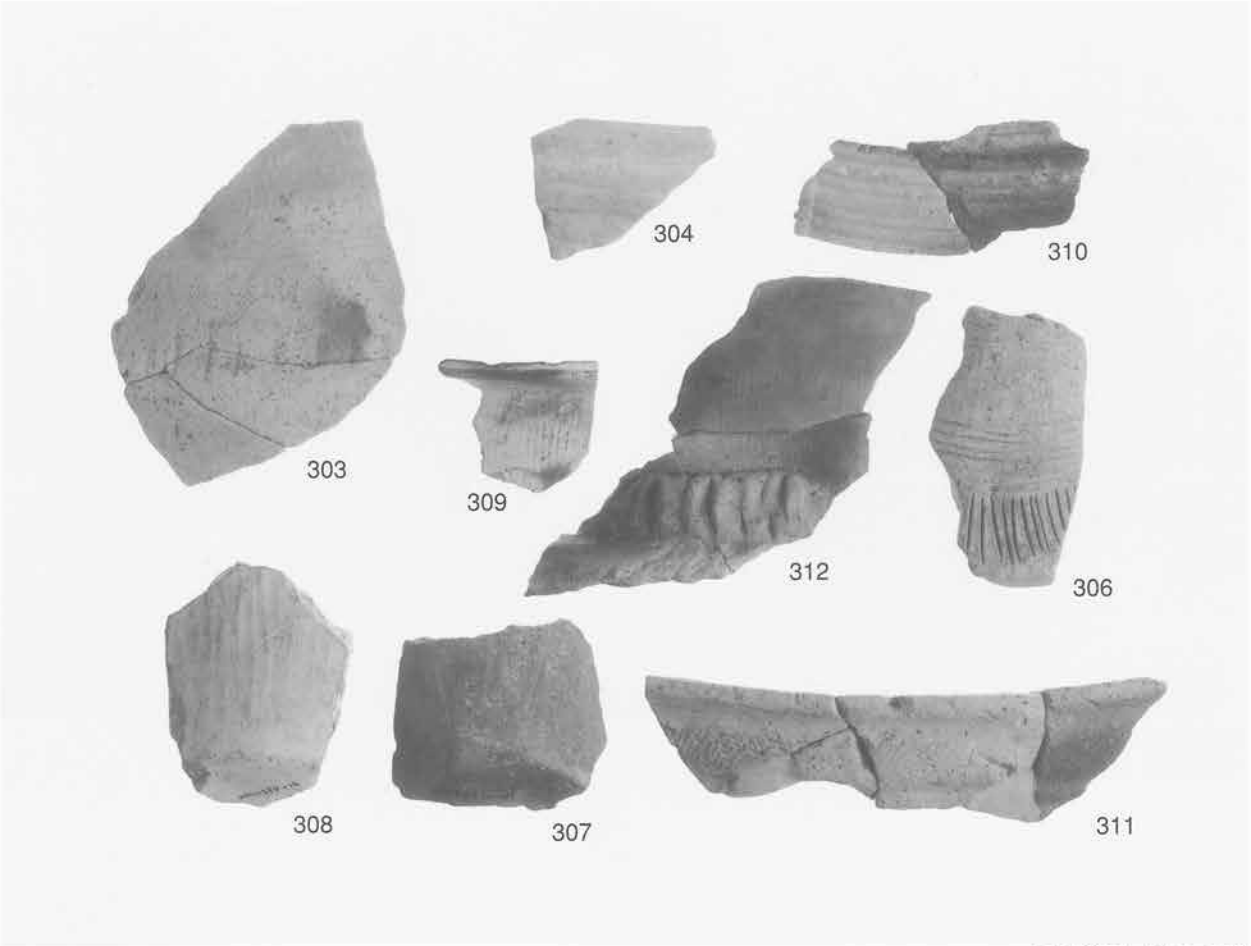
105

45

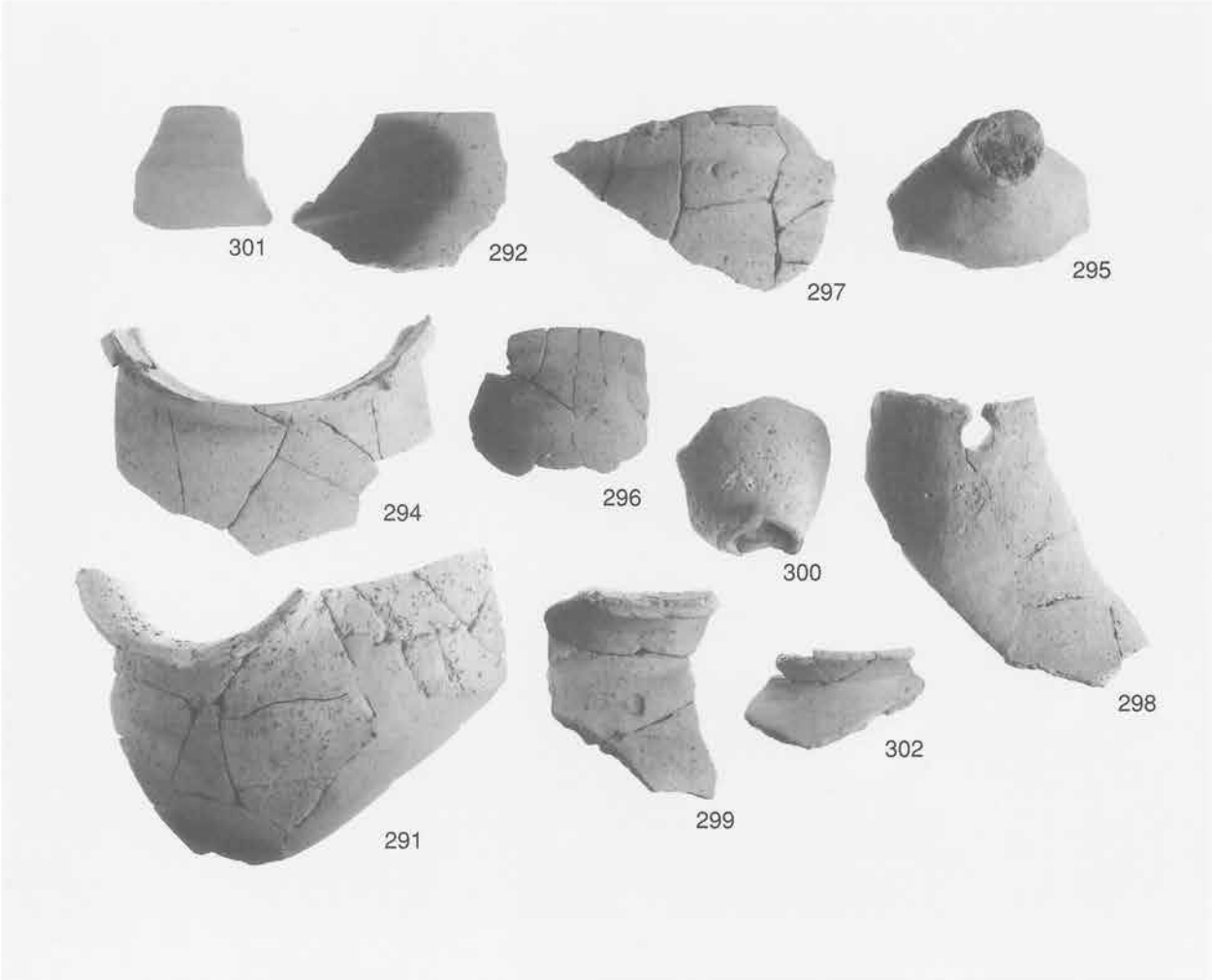
63

壺・甕・鉢 底部 外面調整

36　確認第9区 溝



確認第9区 出土土器



確認第1区、第2区、第6区、第8区
確認第9区 出土土器

兵庫県文化財調査報告　第314冊

川　戸　遺　跡

(主) 宍粟香寺線県単独道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年3月20日　発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
Tel.　078-531-7011

発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷　㈲アロエ印刷
〒650-0026　神戸市中央区古湊通1丁目1-5-301